財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告　第329集

下滝天水遺跡

主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

群　馬　県
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告　第329集

下 滝 天 水 遺 跡

（本　文　編）

主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

群　　馬　　県
財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

『下滝天水遺跡』は、主要地方道前橋・長瀞線地方特定道路整備事業に伴い発掘調査された、高崎市下滝町と上滝町に所在する遺跡の発掘調査報告書です。発掘調査は平成11年度から開始され、途中の中断をはさんで平成14年度まで行ないました。また、整理事業は平成14・15年度に実施しました。

発掘調査前、下滝天水遺跡に立つと、すぐ南に中世の武士の館「下滝館」が木々に囲まれ、森のように見えました。西には「お伊勢山古墳」が隣接し、井野川をはさんで南側に史跡「観音山古墳」が眺められます。この場所が、古来地域の中枢となる場所であったことが予想されました。発掘調査によって台地部分では古墳時代の豪族居館を囲む溝や下滝館の外郭溝など、予想どおりの重要な遺構が次々と発見されました。低地部分では古墳時代から営まれ続けた水田跡や耕作痕から、災害と闘い、私たちに田畑を守り残してくれた先人の努力の跡が明らかになりました。

これらの貴重な発見が、地域の歴史の解明に役立ち、成果が広く活用されることを願ってやみません。

最後になりますが、群馬県土木部、群馬県教育委員会文化課、高崎市教育委員会、地元関係者の皆様には発掘調査から本報告書の刊行まで終始ご協力を賜り感謝の意を表します。また、炎天下や空っ風の吹きぬける中での発掘調査、そして膨大な資料を扱い報告書作成に携わった皆さんの労をねぎらい、序といたします。

平成16年３月

財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長　小野　宇三郎

例　　言

1　本書は、主要地方道前橋長瀞線地方特定道路整備事業に伴い事前調査された『下滝天水遺跡』の埋蔵文化財発掘調査報告書である。なお、上滝榎町北遺跡の関越自動車道以南（上滝榎町北」遺跡）についても併せて収録した。

2　遺跡は高崎市下滝町字天水・字大門、上滝町字下滝界他に所在する。下滝天水の遺跡名は調査対象地域中央部分で最も広い地点にあたる大字名と小字名を組み合わせて付けている。

3　発掘調査事業に係わる概要は以下のとおりである。

事業主体　　群馬県土木部

調査主体　　財団法人　群馬県埋蔵文化財調査事業団

調査期間および担当

平成11年度　平成11年4月1日～平成12年3月31日

（上滝榎町北Ⅲ）大江正行・大木紳一郎・茂木　剛

（下滝天水）大木紳一郎・小島敦子・蜂須賀里佳・今井和久

平成12年度　平成12年4月1日～平成13年3月31日

飯田陽一・洞口正史・小林　徹・蜂須賀里佳・山村英二・茂木　剛・原　真

平成14年度

大江正行・水田福夫

4　整理事業の体制と概要は以下のとおりである。

整理期間　平成14年4月1日～平成15年10月30日

担当　飯田陽一　石関富美代　岩渕節子　高橋とし子　羽鳥望東子　堀米弘美　増田政子

遺物写真撮影　佐藤元彦

遺物保存処理　関　邦一　土橋まり子　小材浩一

5　本書の編集は飯田が行い、執筆は以下のスタッフで分担しておこなった。

Ⅲ章11－a　小島敦子　Ⅲ章11－b、14－3　大木紳一郎　Ⅲ章14－3・4、Ⅳ章　大江正行

Ⅲ章14－1b　麻生敏隆　Ⅲ章14－1a　山口逸広　その他　飯田

6　発掘調査および整理機関に業務委託した組織は以下のとおりである。

（発掘調査）遺構測量　株式会社 測研　技研測量設計株式会社

（整理作業）土器実測・トレースおよび観察表作成　埼玉県埋蔵文化財調査事業団（大谷 徹・赤熊浩一）

に住居、A・B区溝、方形周溝墓出土遺物等約900点を委託。

7　石材同定にあたっては、飯島静男氏（群馬県地質研究会）にご教示を得た。

8　発掘調査および本書の作成には下記の方々からご指導を得た。（敬称略）

梅沢重昭　能登 健　坂本和俊　慈眼寺　高崎市教育委員会

また、次の職員から助言を得ている。　佐藤明人　石坂 茂　原　雅信　杉山秀宏

9　本遺跡の出土品・写真・測量図面等は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に一括して保存してある。

10　校正作業では大江正行と整理班に負うところが大きい。

凡　　例

1　遺構図における座標値は国家座標第Ⅸ系による。また、挿図中の方位は座標北を示し、本文・一覧表中の軸方向は座標北から計測した値である。例えばN－15°－Wは座標北から15°西側に振れていることを示している。

2　遺構図の縮率は次のとおりである。

竪穴住居・掘立柱建物	…	1／60ただしカマド1／40、遺物出土状態・掘り方1／100
溝	…	1／100または1／200。　断面は1／50
井戸・土坑・ピット	…	1／40
水田	…	部分図1／200　詳細図1／50

例外的にこれらの縮率と異なる遺構は、スケールをつけて表した。

3　発掘調査現場で付けた遺構番号をそのまま本書で掲載した。そのため欠番を多数生じている。ただし、掘立柱建物となったピットについては、各建物ごとのピット番号を付け直している。

4　遺構図の位置を示すために記したグリッド名は5m×5mの範囲であるが、土坑やピットなどの小型遺構には1m×1mの範囲で示した。

5　遺構の面積は、原図上でプラニメーターにより3回計測した平均値である。

6　遺物図の縮率は次のとおりである。

土器・土製品　…　1／3　ただし手捏ね等の小型品は1／2、擂鉢・焙烙等の大形品1／5

石器・石製品　…　（古墳時代以降）玉類1／2　砥石・白類1／3

（縄文時代）打斧1／3　　鏃1／1

金属製品　…　古銭1／1、刀子等1／3

これらと異なる縮率となったものは、遺物番号の次に縮率を書き添えた。

7　挿図中に使用したスクリーントーンには、次のような区分けによる。

遺構図	焼土		炭化物・灰		撹乱		
遺物図	赤色塗彩		灰釉・長石釉		鉄釉		

8　遺物観察表・写真図版に関する凡例は第2分冊巻頭に記してある。

下滝天水遺跡　目次

序・抄録・例言・凡例

Ⅰ　調査にいたる経過と調査の方法

1　調査にいたる経緯 …… 1
2　調査の方法 …… 2
3　調査の経過 …… 3
4　整理作業の経過 …… 4
5　基本土層 …… 5

Ⅱ　遺跡の環境

1　遺跡の立地 …… 7
2　周辺の遺跡 …… 8

Ⅲ　調査された遺構と遺物（下滝天水遺跡）

1　遺跡の概要 …… 11
2　隔穴状土坑 …… 19
3　方形周溝墓 …… 21
4　竪穴住居　Ａ１区 …… 26
　　Ａ２区 …… 113
　　Ｂ区・Ｃ区・取付道Ｆ区 …… 173
5　古墳時代の方形区画と溝　Ａ１区１・２溝 …… 191
　　その他の古墳時代溝・111号土坑 …… 211
6　中世館と溝　Ａ１区４溝 …… 223
　　Ａ１区５溝 …… 246
　　その他の溝 …… 250
7　その他の溝 …… 256
8　掘立柱建物と柱穴 …… 351
9　井戸 …… 363
10　ａ墓坑・ｂ土坑・ｃ粘土採掘坑・ｄピット …… 373
11　本線部分の水田と耕作溝群 …… 428
12　取付道の水田と耕作溝群 …… 461
13　近世遺跡 …… 476
14　遺物　縄文土器と石器・弥生土器・埴輪・板碑・砥石・瓦 …… 479

Ⅳ　調査された遺構と遺物（上滝榎町北Ⅲ遺跡） …… 496

Ⅴ　分析等

Ⅰ　下滝天水遺跡のテフラ …… 506
Ⅱ　下滝天水遺跡における植物珪酸体分析 …… 514
Ⅲ　下滝天水遺跡における花粉分析 …… 521

Ⅵ　成果と問題点 …… 527

挿図目次

第1図　遺跡位置図 …… 1
第2図　調査範囲の概略 …… 2
第3図　調査区の呼称略図 …… 3
第4図　グリッドの呼称 …… 4
第5図　土層断面柱状図 …… 5
第6図　周辺の地形 …… 7
第7図　周辺の遺跡 …… 8
第8図　お伊勢山古墳平面図 …… 9
第9図　中世館の配置図 …… 10
第10図　A1区の主な遺構 …… 11
第11図　A2区の主な遺構 …… 12
第12図　B区・C区の主な遺構 …… 13
第13図　C区・取付道D区の主な遺構 …… 14
第14図　D区の主な遺構 …… 15
第15図　E区の主な遺構 …… 16
第16図　取付道E区の主な遺構 …… 17
第17図　陥穴状土坑配置・91号土坑 …… 19
第18図　47・48・82号土坑 …… 20
第19図　方形周溝墓配置図 …… 21
第20図　1号方形周溝墓 …… 22
第21図　1号方形周溝墓出土遺物 …… 23
第22図　2号方形周溝墓 …… 24
第23図　2号方形周溝墓出土遺物 …… 25

A1区の竪穴住居

第24図　1号住居およびカマド …… 27
第25図　1号住居出土遺物 …… 28
第26図　2号住居 …… 29
第27図　2号住居カマドおよび出土遺物 …… 30
第28図　3号住居 …… 31
第29図　3号住居カマドおよび出土遺物 …… 32
第30図　4号住居および出土遺物 …… 33
第31図　5号住居および出土遺物 …… 34
第32図　6号住居 …… 35
第33図　6号住居カマドおよび出土遺物 …… 36
第34図　7号住居 …… 37
第35図　7号住居断面およびカマド …… 38
第36図　7号住居出土遺物 (1) …… 39
第37図　7号住居出土遺物 (2) …… 40
第38図　8号住居 …… 41
第39図　8号住居ピット断面およびカマド …… 42
第40図　8号住居出土遺物 …… 43
第41図　9号住居 …… 44
第42図　9号住居ピット断面およびカマド …… 45
第43図　9号住居出土遺物 …… 46
第44図　10号住居 …… 47
第45図　10号住居断面 …… 48
第46図　10号住居出土遺物 …… 49
第47図　11号住居および出土遺物 …… 50
第48図　12号住居 …… 51
第49図　13号住居 …… 52
第50図　13号住居カマドおよび出土遺物 …… 53
第51図　14号住居 …… 54
第52図　14号住居カマドおよび出土遺物 …… 55
第53図　15号住居 …… 56
第54図　15号住居カマドおよび出土遺物 …… 57
第55図　16号住居および出土遺物 …… 58
第56図　17号住居 …… 59
第57図　17号住居カマドおよび出土遺物 …… 60
第58図　18号住居 …… 61
第59図　18号住居カマドおよび出土遺物 (1) …… 62
第60図　18号住居出土遺物 (2) …… 63
第61図　20号住居 …… 64
第62図　20号住居出土遺物 …… 65
第63図　21号住居 …… 66
第64図　22号住居および出土遺物 …… 67
第65図　23号住居および出土遺物 …… 68
第66図　24号住居 …… 69
第67図　24号住居カマド …… 70
第68図　24号住居出土遺物 …… 71
第69図　25号住居 …… 72
第70図　25号住居カマド …… 73
第71図　25号住居出土遺物 (1) …… 74
第72図　25号住居出土遺物 (2) …… 75
第73図　26号住居 …… 76
第74図　26号住居断面および出土遺物 …… 77
第75図　27号住居 …… 78
第76図　27号住居カマド …… 79
第77図　27号住居出土遺物 …… 80
第78図　28号住居および出土遺物 …… 81

第79図　29号住居 …… 82
第80図　29号住居カマドおよび出土遺物 …… 83
第81図　30号住居 …… 84
第82図　30号住居カマドおよび出土遺物 …… 85
第83図　31号住居 …… 86
第84図　31号住居ピット断面およびカマド …… 87
第85図　31号住居出土遺物 …… 88
第86図　32号住居および出土遺物 …… 89
第87図　33号住居および出土遺物 …… 90
第88図　34号住居 …… 91
第89図　34号住居カマドおよび出土遺物 …… 92
第90図　35号住居 …… 93
第91図　35号住居出土遺物 …… 94
第92図　36号住居 …… 94
第93図　36号住居カマドおよび出土遺物 …… 95
第94図　37号住居 …… 96
第95図　37号住居出土遺物 …… 97
第96図　38号住居・カマド・出土遺物 …… 98
第97図　39号住居 …… 99
第98図　39号住居出土遺物 …… 100
第99図　40号住居 …… 101
第100図　40号住居カマドおよび出土遺物 …… 102
第101図　41号住居 …… 103
第102図　42号住居 …… 104
第103図　42号住居カマドおよび出土遺物 …… 105
第104図　43号住居 …… 106
第105図　43号住居断面およびかまど断面 …… 107
第106図　43号住居出土遺物（1） …… 108
第107図　43号住居出土遺物（2） …… 109
第108図　44号住居 …… 110
第109図　44号住居出土遺物 …… 111
第110図　45号住居および出土遺物 …… 112

A２区の竪穴住居

第111図　１号住居 …… 113
第112図　１号住居出土遺物 …… 114
第113図　２号住居 …… 115
第114図　２号住居出土遺物 …… 116
第115図　３号住居 …… 117
第116図　３号住居カマドおよび出土遺物 …… 118
第117図　４号住居 …… 119
第118図　４号住居断面 …… 120
第119図　４号住居カマドおよび出土遺物（1） …… 121
第120図　４号住居出土遺物（2） …… 122
第121図　５号住居および出土遺物 …… 123
第122図　６号住居および出土遺物 …… 124
第123図　７号住居 …… 125
第124図　７号住居断面および出土遺物 …… 126
第125図　８号住居および出土遺物 …… 127
第126図　９号住居 …… 128
第127図　９号住居出土遺物 …… 129
第128図　10号住居 …… 130
第129図　10号住居出土遺物（1） …… 131
第130図　10号住居出土遺物（2） …… 132
第131図　11号住居 …… 133
第132図　12号住居 …… 134
第133図　12号住居カマド …… 135
第134図　12号住居出土遺物（1） …… 136
第135図　12号住居出土遺物（2） …… 137
第136図　13号住居および出土遺物 …… 138
第137図　14号住居 …… 139
第138図　14号住居断面および出土遺物 …… 140
第139図　15号住居および出土遺物 …… 141
第140図　16・17号住居 …… 142
第141図　17号住居出土遺物 …… 143
第142図　18号住居 …… 144
第143図　18号住居カマドおよび出土遺物（1） …… 145
第144図　18号住居出土遺物（2） …… 146
第145図　18号住居出土遺物（3） …… 147
第146図　19号住居 …… 148
第147図　19号住居出土遺物 …… 149
第148図　20号住居 …… 150
第149図　20号住居断面および出土遺物（1） …… 151
第150図　20号住居出土遺物（2） …… 152
第151図　21号住居 …… 153
第152図　21号住居ピット断面および出土遺物 …… 154
第153図　22号住居および出土遺物 …… 155
第154図　23号住居 …… 156
第155図　25号住居 …… 157
第156図　25号住居断面 …… 158
第157図　25号住居炉および出土遺物 …… 159
第158図　26号住居 …… 160
第159図　26号住居カマド …… 161
第160図　26号住居出土遺物（1） …… 162
第161図　26号住居出土遺物（2） …… 163
第162図　27号住居および出土遺物 …… 164
第163図　28号住居 …… 165
第164図　28号住居炉および出土遺物 …… 166

第165図　29号住居および出土遺物 …… 167
第166図　30号住居 …… 168
第167図　30号住居出土遺物 …… 169
第168図　31号住居および出土遺物 …… 170
第169図　32号住居および出土遺物 …… 171
第170図　33号住居 …… 172

B区の竪穴住居
第171図　1号住居 …… 173
第172図　1号住居断面および炉 …… 174
第173図　1号住居出土遺物 (1) …… 175
第174図　1号住居出土遺物 (2) …… 176

C区の竪穴住居
第175図　1号住居 …… 177
第176図　2号住居 …… 178
第177図　2号住居カマド …… 179
第178図　2号住居出土遺物 (1) …… 180
第179図　2号住居出土遺物 (2) …… 181
第180図　3・5号住居 …… 182
第181図　3号住居床下土坑断面およびカマド …… 183
第182図　3号住居出土遺物 …… 184
第183図　6号住居および出土遺物 …… 185
第184図　7号住居および出土遺物 …… 186
取付道F区の竪穴住居
第185図　1号住居および出土遺物 …… 187
第186図　2号住居 …… 188
第187図　2号住居カマドおよび出土遺物 …… 189
第188図　3号住居 …… 190

古墳時代の方形区画と溝
第189図　方形区画と溝の配置 …… 191
第190図　A1区1号溝 …… 192
第191図　A1区1号溝断面 …… 193
第192図　A1区1号溝出土遺物 (1) …… 195
第193図　A1区1号溝出土遺物 (2) …… 196
第194図　A1区1号溝出土遺物 (3) …… 197
第195図　A1区1号溝出土遺物 (4) …… 198
第196図　A1区2号溝 …… 201
第197図　A1区2号溝断面 …… 202
第198図　A1区2号溝出土遺物 (1) …… 203
第199図　A1区2号溝出土遺物 (2) …… 204
第200図　A1区2号溝出土遺物 (3) …… 205
第201図　A1区2号溝出土遺物 (4) …… 206
第202図　A1区2号溝出土遺物 (5) …… 207
第203図　A1区2号溝出土遺物 (6) …… 208
第204図　A1区2号溝出土遺物 (7) …… 209
第205図　A1区2号溝出土遺物 (8) …… 210
第206図　A1区10号溝・A2区13号溝 …… 211
第207図　A2区13号溝出土遺物 (1) …… 212
第208図　A2区13号溝出土遺物 (2) …… 213
第209図　A1区16号溝・A2区16号溝 …… 214
第210図　A1区16号溝出土遺物 …… 215
第211図　A2区16号溝出土遺物 (1) …… 216
第212図　A2区16号溝出土遺物 (2) …… 217
第213図　A2区1号溝 …… 218
第214図　A2区1号溝出土遺物 …… 219
第215図　A1区111号土坑 (1) …… 220
第216図　A1区111号土坑 (2) …… 221
第217図　A1区111号土坑出土遺物 …… 222

中世館と溝
第218図　方形館と溝の配置 …… 223
第219図　4号溝北側 …… 225
第220図　4号溝断面 …… 226
第221図　4号溝南側 …… 228
第222図　4号溝北側遺物出土状態 …… 229
第223図　4号溝南側遺物出土状態 …… 230
第224図　4号溝出土遺物 (1) …… 231
第225図　4号溝出土遺物 (2) …… 232
第226図　4号溝出土遺物 (3) …… 233
第227図　4号溝出土遺物 (4) …… 234
第228図　4号溝出土遺物 (5) …… 235
第229図　4号溝出土遺物 (6) …… 236
第230図　4号溝出土遺物 (7) …… 237
第231図　4号溝出土遺物 (8) …… 238
第232図　4号溝出土遺物 (9) …… 239
第233図　4号溝出土遺物 (10) …… 240
第234図　4号溝出土遺物 (11) …… 241
第235図　4号溝出土遺物 (12) …… 242
第236図　4号溝出土遺物 (13) …… 243
第237図　4号溝出土遺物 (14) …… 244
第238図　4号溝出土遺物 (15) …… 245
第239図　5号溝 …… 247
第240図　5号溝断面 …… 248
第241図　5号溝出土遺物 …… 249
第242図　9・14号溝 …… 251
第243図　出土板碑 …… 252

第244図　13号溝および出土遺物 …… 253
第245図　21号溝 …… 254
第246図　21号溝断面および出土遺物 …… 255

その他の溝Ａ１区
第247図　３・８号溝 …… 256
第248図　８号溝出土遺物 …… 257
第249図　６号溝 …… 258
第250図　７号溝 …… 259
第251図　11・12号溝 …… 260
第252図　15号溝 …… 261
第253図　15号溝出土遺物 …… 262
第254図　17号溝および出土遺物 …… 262
第255図　18・19号溝 …… 263
第256図　20号溝 …… 264

その他の溝Ａ２区
第257図　２号溝 …… 265
第258図　３号溝 …… 266
第259図　４・５号溝およびＢ１区24号溝 …… 267
第260図　Ｂ１区24号溝 …… 267
第261図　４・５号溝 …… 268
第262図　６・７号溝 …… 269
第263図　６・７号溝断面 …… 270
第264図　８・９号溝 …… 271
第265図　10・11・12号溝 …… 272

その他の溝Ｂ区
第266図　１号溝 …… 274
第267図　２・３・４・５号溝 …… 275
第268図　２・３・４・５号溝断面 …… 276
第269図　６・22号溝 …… 277
第270図　７・12・14・17・18・19号溝 …… 278
第271図　７・12・14・17・18・19号溝断面 …… 279
第272図　８～11・16・23号溝 …… 281
第273図　８～11・16・23号溝断面・出土遺物 …… 283
第274図　13・15号溝 …… 284
第275図　13号溝出土遺物 …… 285
第276図　20・21号溝 …… 286
第277図　25号溝 …… 286

その他の溝Ｃ区
第278図　１・２号溝 …… 287
第279図　１・２号溝断面および出土遺物 …… 288
第280図　４号溝 …… 289
第281図　５・６号溝 …… 290
第282図　５・６号溝断面および出土遺物 …… 291
第283図　７号溝 …… 292
第284図　11号溝 …… 292
第285図　14号溝 …… 293
第286図　15・16号溝 …… 294
第287図　17号溝 …… 295
第288図　19・34・35・36号溝 …… 296
第289図　19号溝出土遺物 …… 297
第290図　32号溝 …… 298
第291図　38号溝 …… 298
第292図　33号溝 …… 299
第293図　37号溝 …… 300
第294図　大溝模式図 …… 301
第295図　大溝（取付道Ｄ区付近）…… 302
第296図　大溝（Ｃ区）…… 303
第297図　大溝断面および出土遺物 …… 304
第298図　42～44・50～53号溝および出土遺物 …… 306
第299図　42・44・50号溝断面および出土遺物 …… 307
第300図　40・41号溝 …… 308
第301図　46・47号溝 …… 309

その他の溝Ｄ区
第302図　１・２・３号溝 …… 310
第303図　１・２・３号溝断面 …… 311
第304図　４・６号溝 …… 312
第305図　５号溝 …… 313
第306図　７・８号溝 …… 314
第307図　９・14号溝 …… 315
第308図　10・11号溝 …… 316
第309図　12・13・15～17・20・23号溝 …… 317
第310図　12・13・15～17・20・23号溝断面 …… 318
第311図　19号溝 …… 320
第312図　21・22号溝 …… 321
第313図　24号溝 …… 322
第314図　25号溝・26号溝 …… 323
第315図　27～30号溝 …… 324
第316図　31号溝 …… 325
第317図　32～35号溝 …… 327
第318図　36・37号溝 …… 328

その他の溝Ｅ区
第319図　54～57号溝および出土遺物 …… 329

第320図　58～61号溝 …… 331
第321図　62号溝・63号溝 …… 332
第322図　64・65号溝 …… 333

取付道A区の溝
第323図　1号溝 …… 334
第324図　2～6号溝 …… 336
第325図　7・9・10・14号溝 …… 337
第326図　11・12・13号溝 …… 338
第327図　17・18・19号溝 …… 339
第328図　23号溝 …… 340

取付道B区の溝
第329図　1号溝・2号溝 …… 341

取付道C区の溝
第330図　1・2号溝 …… 342
第331図　3・5～7号溝および出土遺物 …… 343
第332図　4号溝 …… 344

取付道E区の溝
第333図　3・7～14号溝 …… 345
第334図　3・7～14号溝断面および出土遺物 …… 346
第335図　5・6・19号溝および出土遺物 …… 348
第336図　4・15～18号溝 …… 350

掘立柱建物と柱列
第337図　A1区1号柱列 …… 351
第338図　A1区2号柱列 …… 352
第339図　A1区1号掘立柱建物 …… 353
第340図　A1区3号掘立柱建物 …… 354
第341図　A2区1号掘立柱建物 …… 355
第342図　A2区1号掘立柱建物断面 …… 356
第343図　A2区2号掘立柱建物 …… 357
第344図　B区1号掘立柱建物 …… 358
第345図　B区1号掘立柱建物断面(1) …… 359
第346図　B区1号掘立柱建物断面(2) …… 360
第347図　C区1号掘立柱建物および1号柱列 …… 361
第348図　C区2号掘立柱建物 …… 362

井戸
第349図　A1区1～4号井戸 …… 364
第350図　A1区5～7号・A2区1・2号井戸 …… 366
第351図　A2区4～8号井戸 …… 368
第352図　B区1～4号・取付道E区1号井戸 …… 370
第353図　井戸出土遺物(1) …… 371
第354図　井戸出土遺物(2) …… 372

墓坑
第355図　墓坑および出土遺物 …… 373

土坑
第356図　土坑(1) …… 375
第357図　土坑(2) …… 376
第358図　土坑(3) …… 377
第359図　土坑(4) …… 378
第360図　土坑(5) …… 379
第361図　土坑(6) …… 380
第362図　土坑(7) …… 381
第363図　土坑(8) …… 382
第364図　土坑(9) …… 383
第365図　土坑(10) …… 384
第366図　土坑(11) …… 385
第367図　土坑(12) …… 386
第368図　土坑(13) …… 387
第369図　土坑(14) …… 388
第370図　土坑(15) …… 389
第371図　土坑(16) …… 390
第372図　土坑(17) …… 391
第373図　A1区長方形・円形土坑配置図 …… 392
第374図　長方形・円形土坑(1) …… 393
第375図　円形土坑(2) …… 394
第376図　円形土坑(3) …… 395
第377図　土坑出土遺物(1) …… 396
第378図　土坑出土遺物(2) …… 397
第379図　土坑出土遺物(3) …… 398
第380図　土坑出土遺物(4) …… 399
第381図　土坑出土遺物(5) …… 400
第382図　土坑出土遺物(6) …… 401

粘土採掘坑
第383図　粘土採掘坑および出土遺物 …… 411

ピット
第384図　A1区ピット配置(1) …… 412
第385図　A1区ピット配置(2) …… 413
第386図　B1区ピット配置 …… 414
第387図　ピット(1) …… 415

第388図　ピット (2) …… 416
第389図　ピット (3) …… 417
第390図　ピット (4) …… 418
第391図　ピット (5) …… 419
第392図　ピット (6) …… 420
第393図　ピット (7) …… 421
第394図　ピット (8) …… 422
第395図　ピット (9) …… 423

水田
第396図　E区As-A泥流下面…… 430
第397図　D・E区As-B下水田全体図…… 431
第398図　D区As-B下水田…… 432
第399図　E区As-B下水田（南半）…… 434
第400図　D区As-B下水田に残るヒト足痕…… 435
第401図　Hr-F A下水田全体図…… 436
第402図　C区Hr-F A下水田（南半）…… 438
第403図　C区Hr-F A下水田（北半）…… 439
第404図　C区Hr-F A下水田区画名称…… 440
第405図　D区Hr-F A下水田（南半）…… 442
第406図　D区Hr-F A下水田（北半）…… 443
第407図　D区Hr-F A下水田区画名称…… 444
第408図　E区Hr-F A下水田（南半）…… 446
第409図　E区Hr-F A下水田（北半）…… 447
第410図　E区Hr-F A下水田区画名称…… 448
第411図　C区・取付道D区Hr-F A下水田区画名称… 449
第412図　C区Hr-F A下水田に残る足痕…… 450
第413図　C・取付道D区Hr-F A下水田断面と
土層断面 …… 451
第414図　D区As-C混土水田区画名称…… 452
第415図　D区As-C混土水田…… 453
第416図　B区耕作溝土層断面（西壁）…… 454
第417図　耕作溝群の分布 …… 455
第418図　C区耕作溝群 …… 456
第419図　単一期の耕作溝群の分布（復元）…… 457
第420図　C区耕作溝群第2区画および断面 …… 458
第421図　C区耕作溝群第1区画 …… 459
第422図　B 2区耕作溝群第3区画 …… 460

取付道
第423図　取付道C区As-A復旧痕跡全体図… 461・462
第424図　取付道C区As-A復旧痕跡
290－670Gの農具刃先痕 …… 462
第425図　取付道C区As-A復旧痕跡270－670G …… 463
第426図　取付道C区As-A復旧痕跡240－670G …… 464
第427図　取付道C区As-B下水田全体図…… 465
第428図　取付道A区Hr-F A下水田全体図 … 467・468
第429図　取付道B・C区Hr-F A下水田 … 469・470
第430図　取付道A区As-C混土下水田痕跡…… 471
第431図　取付道A～C区Hr-F A下水田
区画名称 …… 472
第432図　取付道A区洪水砂層下水田
および18号溝出土遺物 …… 473
第433図　取付道A区耕作溝群 …… 475
道跡
第434図　A区の道跡 …… 476
第435図　取付道F区の道跡および出土遺物 …… 478

その他の遺物
第436図　縄文時代の石器 (1) …… 480
第437図　縄文時代の石器 (2) …… 481
第438図　縄文時代の石器 (3) …… 482
第439図　縄文土器 …… 484
第440図　土製品 …… 485
第441図　弥生土器 …… 485
第442図　古代の瓦 …… 489
第443図　その他の遺物 (1) …… 490
第444図　その他の遺物 (2) …… 491
第445図　その他の遺物 (3) …… 492
第446図　その他の遺物 (4) …… 493
第447図　その他の遺物 (5) …… 494
第448図　その他の遺物 (6) …… 495

上滝榎町北Ⅲ
第449図　As-A下の遺構…… 496
第450図　As-B混土中の遺構…… 497
第451図　溝跡土層断面 …… 499
第452図　As-B下の水田…… 500
第453図　Hr-F A下の水田…… 501
第454図　Hr-F A下水田区画名称…… 502
第455図　15号溝 …… 503
第456図　上滝榎町北Ⅲ遺跡の遺物 …… 504
第457図　上滝榎町北Ⅲ東区 …… 505

第Ⅰ章　発掘調査の経過

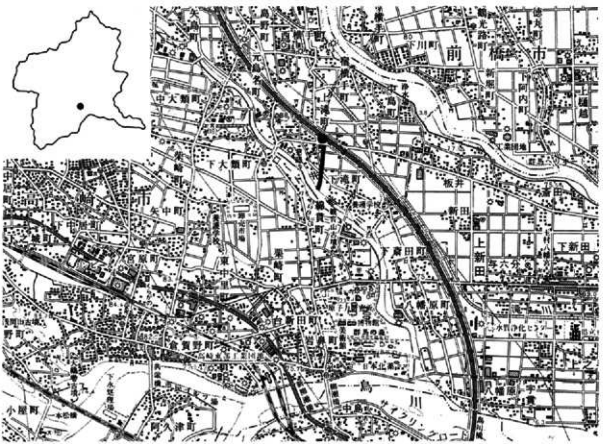
1　発掘調査に至る経緯

県道前橋・長瀞線は、前橋市石倉町から埼玉県秩父郡長瀞町へ至る延長42.5kmの幹線道路である。このうち高崎市綿貫町以北について利根川右岸の旧道を付け替え、前橋市街地南部の六供町までのバイパス建設が計画された。すなわち利根川左岸の前橋市六供町・柳島町境を起点とし前橋市公田町・横手町を経て利根川を渡り、高崎市西横手町・宿横手町・上滝町付近で北関東自動車道の西脇を並んで走行し、下滝町を経て井野川を渡り、綿貫町で既存の県道前橋・長瀞線に合流する6.05kmの区間である。

平成元年12月、群馬県土木部・群馬県教育委員会・財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で行なわれた協議を受け、平成２年３月に前橋市公田池尻遺跡の調査が着手された。県道高崎・駒形線までの区間の調査が平成７年度に終了した。さらに本遺跡の北側に隣接する県道高崎・伊勢崎線までの調査も平成11年に終了した。この間、順次供用が開始されていった。

県道高崎・伊勢崎線から県道前橋・長瀞線までの区間には井野川をはさんで下滝天水遺跡と綿貫小林前遺跡の２遺跡があった。群馬県教育委員会文化財保護課の試掘調査により、両遺跡とも遺構の密度の高い複合遺跡となることが予想されていた。

下滝天水遺跡は、平成11年より高崎・伊勢崎線以北の調査班がそのまま調査地点を移す形で調査が開始された。南北につながる総延長約570m・５地点からなる本線部分の他に、東西に６地点の取付道部分を含む範囲であった。本調査に先行して県教育委員会で本線部分の試掘調査が実施され、低地部分では重層する水田遺構が、微高地部分では密度の濃い集落の存在が確認されていた。



1：50,000「高崎」

第１図　遺跡位置図

本調査はB地点以北の調査では北側から順次表土を剥いで南側へ向かって調査を進めた。なお平成11年度には一部、用地の未収で着手できなかった上滝榎町北Ⅲ遺跡の調査を併行して実施している。平成12年度に用地が確保された地点の調査を終了したが、本線E区全域やC区の一部、取付道D区など用地の未解決地が残されており、一旦調査を中断した。

最終年度の調査は用地の解決を待って平成14年度、絶貫小林前遺跡の調査終了後、同遺跡の調査班によって、すべての調査が完了した。

同年度末に県道前橋高崎線と既存の県道前橋長瀞線間の全線が開通している。

2　調査の方法

調査地域は南北に約570mの長さがあり、調査地点を分けた名称を付けた。本線部分では高崎・伊勢崎線以北の遺跡調査例にならって道路や水路の区画など、調査不可能な施設によって画し、南側からA～E区に分けた。A・B区はさらに1・2区に分けた。取付道路部分は本線の東側については南から取付道A～C区、本線の西側では北から取付道D～F区の名称を付けた。

調査区には国家座標に基づいた方眼杭を打設した。集落部分のA・B区では5m、水田や畑主体のC区以北では10mメッシュの杭を基本杭として設定し、必要に応じて補助杭をこの間に付け足した。グリッドの呼称については、5mメッシュを基本としている。調査範囲が1000mに満たないので該当する方眼域の南東隅にあたる杭の下3桁を南北方向－東西方向の順とした（第4図参照）。この呼称は本報告でも踏襲して使用している。

低地部分の調査では鍵層となる火山灰層や洪水層下の水田・畠の確認を主眼として、試掘調査のデータをもとにAs-A層下、As-B混土層下、As-B層下、Hr-FA層下、As-C混土層下の5枚の層を調査した。特に、Hr-FA層上には洪水堆積層があり、この中にも耕作痕がみられたので、試掘を入れながら順次の掘り下げとなった。各層の厚い所では重機

第2図　調査範囲の概略

を使用して鍵層直上まで掘削し、人力で鍵層を剥いでいった。なお、本線D区と取付道A～C区を中心にテフラとプラントオパールの自然科学分析を実施している（第Ⅴ章参照）。

自然堤防状の微高地部分ではローム状土直上まで重機によって掘り下げる予定だったが、包含層遺物の出土が多く、ローム状土上の黒色土は人力で下げた部分が多かった。

遺構測量は竪穴住居や土坑・柱穴などの小規模な遺構は1／20縮小の平板測量、中世館に伴なう溝など大規模な遺構は1／40縮小の平板測量を行なった。水田や耕作溝群・復旧痕などは気球やラジコンヘリを使った航空測量で1／40と1／100の平面図を委託作成している。土層断面実測は1／20を基本としている。

遺構写真は6×7判と35㎜判カメラによって調査担当者が撮影した。水田や耕作痕の全景写真には気球やラジコンヘリによる撮影を業者委託した。

出土した遺物については調査事務所内において水洗と注記までを行なっている。

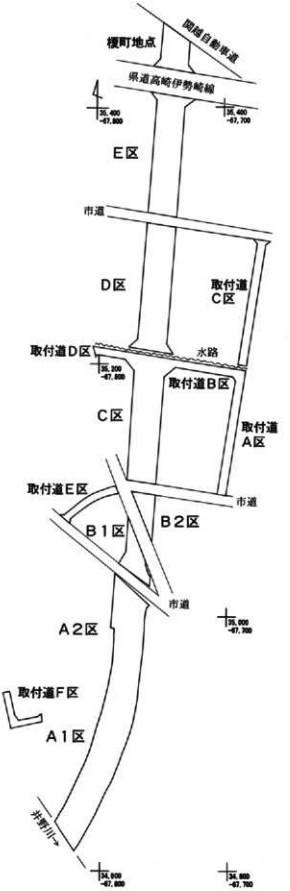
3　調査の経過

1999（平成11）年度

4月より県道前橋長瀞線三波川遺跡の調査班が、上滝榎町北Ⅲ遺跡を併行して調査開始した。6月に同遺跡の調査終了し、同じ県道前橋長瀞線の綿貫小林前遺跡へ調査を移動した。

下滝天水遺跡を10月より調査開始した。本線部分のC区・D区ならびに取付道A区・B区・C区を調査したが、すべての区で重層した調査面を対象とすることとなった。本線D区と取付道A～C区は古墳時代のHr-FA下小区画水田面までの調査を終了し、最終面の精査だけを残した。自然科学分析はこの地点で実施している。本線C区部分の調査は終了し、埋め戻しまで行なった。また、本線B1・B2区の表土剥ぎを行なった。

併せて上滝榎町北Ⅲ遺跡の北隅に残されていた用地解決地点を2月に調査し、県道高崎伊勢崎線以北



第3図　調査区の呼称略図

の全調査が終了している。

本線部分C区北側約500㎡分と取付道D区は用地買収が未了のため、この年度の調査から除外されている。

2000（平成12）年度

前年度より継続した最終面精査では、本線D区でAs-C混土層下の水田痕跡を確認している。縄文土器の出土した取付道A～C区では縄文時代の遺構確認に努めたが、発見できなかった。5月末に埋め戻しを完了した。

新たに本線B区の調査に着手した後、本線A区は南側より表土剥ぎを行なった。取付道はE区より着手し、追ってF区の調査を行った。

このうち本線A区の大半では1面調査だが、他の地点では2面以上の調査となった。調査の遅れを取り戻すため、12月以降、綿貫小林前遺跡調査班からの応援を受けて分散する地点に同時展開しての調査となった。ここまでの調査対象地は年度末で調査を終了し、埋め戻しまで完了させた。

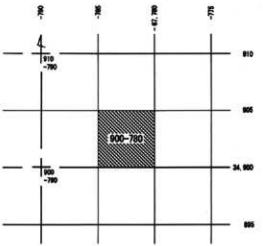
用地の解決していない本線C区北側と本線E区全域および取付道D区は、この年度にも調査できなかった。プレハブ等の施設を解体し、調査は中断することとなった。

なお、2000年12月17日には本線A区の遺構を対象に現地説明会を開催した。

2002（平成14）年度

平成13年度の調査中断後、綿貫小林前遺跡を終了させた調査班が、用地の解決した本線C区北隅と取付道D区、および本線E区の調査に移った。

6月より本線C区と取付道D区の調査から着手、両地点とも複数面の調査となった。7月にはE区南側にも展開した。8月下旬までにここまでの調査を終了・埋め戻ししてE区北側の調査に入る。9月末でE区北側の調査も終了して下滝天水遺跡の調査が完了するとともに、県道前橋・長瀞線関連遺跡の全発掘調査を完了させた。



第4図　グリッドの呼称

4　整理作業の経過

平成14年4月から平成15年10月までの期間に、群馬県埋蔵文化財調査事業団本部で実施した。遺物の接合・復元作業は平成13年度末に榎町北遺跡の整理班によって、一部、先行着手された。

平成14年度からの作業は、調査段階でできなかった遺構図修正作業と前年度から継続した遺物接合・復元作業を優先的に実施した。年度後半には先行して復元・写真撮影の終了した遺物約900点の実測・トレース・観察表作成作業を埼玉県埋蔵文化財調査事業団に委託した。それ以外の約500点の遺物実測作業は本事業団内で実施した。

平成15年度は遺構トレース・挿図や写真の版下作成作業を行なった後、11月に報告書印刷の入札を実施した。期間内に終了できなかった諸作業や校正作業については、下滝天水遺跡に後続して実施した綿貫小林前遺跡整理班に負うところが大きい。

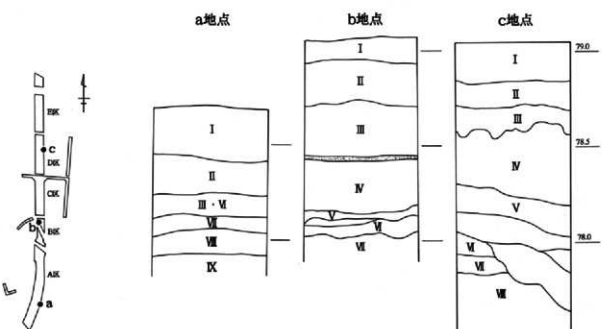
5　基本土層

発掘調査にあたっては、各調査区毎に基本土層を作成したが、遺跡全体が南北に600m近い範囲があるため、基準とした土層が調査区をまたいで完全に一致するものであるか確認できていない部分がある。また、中断をはさんで4年におよぶ調査期間と担当者の交換のため、土層の表現に差異を生じている部分もある。ここでは3地点から標準的な土層を選び、遺跡の土層の概要を紹介する。

a地点　A1区の北側東壁の土層である。井野川自然堤防状の高まりの東側にあたる。付近は古代の集落が拡がり、中世の館の区画内にもあたる。古代から近世にかけて、水田耕作を行った痕跡は確認できないが、第2次大戦後の食糧難の時期に一時水田を作っていたことが聞き取りで分かった。浅間山給源の第四紀のテフラや、榛名山二ツ岳の噴火に関連する洪水痕跡は純層では見られない。この地点は地表面が他の2地点より高いはずだが、現状では30cm前後低くなっている。後世に大規模な土取りが行われた可能性を示すものだが、新たな耕作の影響で、土取り作業の時期は不明である。

b地点　B2区北隅の西壁の土層である。付近は自然堤防状の微高地と低地との境にあたる。集落はあまり見られなくなる。As-B層下では水田耕作を行っている。B区以北で行なった洪水層に関連した調査では、上層で畠状の耕作溝群が確認されるが、下層の古墳時代の小区画水田は確認できない。B区以南で確認できる洪水層は、出土する遺物から8～9世紀頃に形成された可能性があり、C区以北と同一の層か確認できていない。

c地点　D区北側の東壁の土層である。低地部分にあたり、古墳時代以降、現代まで水田耕作が行われてきた地点である。本線部分のC～E区や、取付道のA～D区を代表する土層である。As-Bが純層で見られる地点があり、ごく部分的ではあるがAs-Cが純層に近い状態で見られる地点もある。榛名山二ツ岳に関連するラハール層は一般的に厚く見られ、上面には畠の耕作痕が見られる地点がある。また、下層にはHr-FA層がある。Hr-FA層直下からは古墳時代の小区画水田が確認できる場合が多い。また、As-C混土層下からも小区画水田の痕跡が見つかった地点がある。



第5図　土層断面柱状図

第５図で示した基本土層番号は本文中の遺構土層説明でも使用した。ローマ数字を使用したものは、次の基本土層に準拠したものである。

Ⅰ層　暗褐色10YR3/3が標準的な土色。表土。砂質土となる場合が多い。また、As-Aが混入する場合が多い。

Ⅱ層　黒褐色10YR3/2を中心とする土色。砂質土。As-Aの混入の多い層。低地部分ではこの土層の下側には部分的に斑鉄の見られる床土状の粘性土層があり、パミス下に水田痕跡が見られるはずだが、後世の耕作で壊されている。微高地部分ではⅠ層から漸移的に変化しているが、A区の溝や土坑にはAs-Aの密度の高い堆積が見られる場合もある。

この層の下からは、台地上では溝や土坑が、低地では溝や一部で耕作痕が見つかっている。

Ⅲ層　黒褐色10YR2/2　粒子の細かな腐植土質の土中にAs-Bを霜降り状に含んでいる。中世から近世にかけての指標となる層。微高地部分では不明瞭な場合が多い。低地部分ではこの層の下端に降下As-Bの純層（トーン部）が見られる地点があり、直下から条里期水田が見つかっている。

Ⅳ・Ⅴ層　ＦＡに関連する洪水堆積土、および水田や畠の耕作土層。粒子の極めて細かな粘性土層である。榛名山二ツ岳を給源とする米粒大のパミス粒が見られるが、Hr-ＦＡに伴うもので、Hr-ＦＰではないとの所見を得ている（第Ⅴ章参照）。各層ともさらに細分が可能だが、地点によって層相は一様でない。

Ａ２区ではⅣ層土により埋没したと考えられる溝内から奈良・平安時代の土器が出土しているが、Ｂ区以北でⅣ層土としたラハール層と同一の層であるかは確認できていない。Ⅳ層とⅤ層の境界は不明瞭である。Ⅳ層は灰色味をおび、Ⅲ層との境は黒色味をおびている。Ⅴ層は黄色味をおびていたり明度が低い場合が多い。

低地部分ではⅤ層下には純層に近い状態のHr-ＦＡが見られる地点があるが、この層下からは小区画水田や溝が広範囲で見つかっている。またⅣ層上には畠サク状の耕作溝群が見つかる地点がある。

Ⅵ層　黒褐色10YR3/1　しまりのある壌土。粒子の細かな黒色土中にAs-Cを霜降り状に含んでいる。調査担当者が「Ｃ混じり黒色土」と呼ぶ土層である。低地部分ではAs-Cの混入がより多くなっている。Ⅳ・Ⅴ層の見られない微高地上では、後世の耕作によりⅢ層土との区別が難しくなっている。古墳時代以降の指標となる層で、竪穴住居埋没土の多くがこの土である。Ｄ区などではこの層の途切れを目安として検出する水田畦畔痕跡が一部で確認できる。

Ⅶ層　黒褐色10YR2/1　粘性に富むシルト質土。色調はⅥ層に近いがAs-Cを含まない。層厚に差があり、ほとんど見られない地点もある。低地部分ではⅥ層との差は明瞭だが、微高地上ではⅥ層から漸移的に変化する場合が多い。この土の落ち込みを調査して確認できたのは倒木痕や自然の窪みなどで、Ａ１区で調査した陥穴状土坑以外の遺構の確認はできなかった。取付道Ｃ区ではこの土層内で縄文時代前期の土器が出土している。

Ⅷ層　ローム土の二次堆積土。微高地上では黄褐色を呈しプライマリーなローム土との区別は難しい。ローム土がブロック状になっている地点がある。また井野川に近づくと細礫の混入が多くなっている。低地部分ではグライ化して灰褐色気味の色調となっている地点が多い。

Ⅸ層　ローム土層。微高地上では、As-ＹＰ層が確認できる部分がある。この層の下では地下水の影響を受けている場合があり、粒径が粗くザラザラした感じになっている。黄褐色を呈した台地上のローム土層とは異なっている。

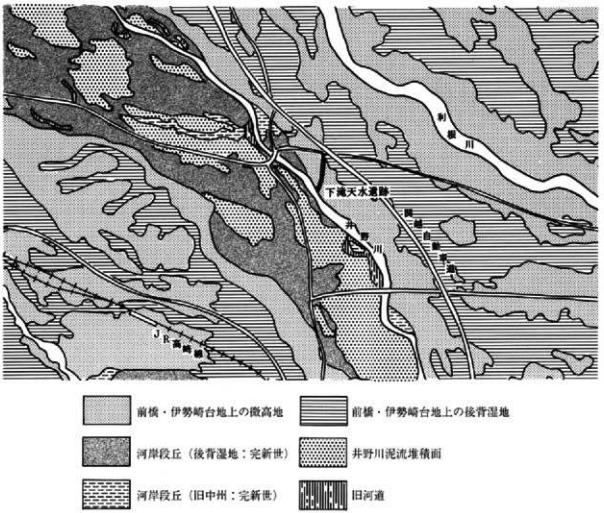
第Ⅱ章　遺跡の環境

1　遺跡の立地

下滝天水遺跡の南隅・井野川左岸の微高地付近に立つと、北側に赤城山・北西側に榛名山・西側に妙義山のいわゆる上毛三山が一望できる。さらに妙義山の右手に浅間山・左手に荒船山など関東平野北西部を取り囲む山並みがつながっている。そしてすぐ手前には高崎市の市街地とその背景に観音山丘陵、足元には井野川が流れ、高崎市街地との境に低地帯が広がっている。微高地ではあっても眺望は良く、古代・中世において遺跡占地にすぐれた地点であることが窺える。

下滝天水遺跡は高崎市の東側下滝町・上滝町にある。井野川は高崎市街地の東側を流れる河川で、本遺跡の南東約3㎞で利根川支流の烏川に合流している。井野川の東側は前橋・伊勢崎台地で、微高地と低地が交互に広がっている。西側では井野川低地帯と呼ばれる泥流堆積面と河岸段丘面となっている。遺跡は井野川左岸の前橋・伊勢崎台地上の微高地にあたる。対岸の低地との比高差は5mほどで、井野川右岸から眺めると、自然堤防状の高まりに見える。

この微高地は井野川左岸に沿って続き、上流側では古墳群、下流側では中世の城館跡が密集している。本遺跡の標高は全地点を通じて79m前後で起伏は少ないが、調査前は南半部が畑地、北半部が水田であり、古代からの土地利用を引き継いでいる。

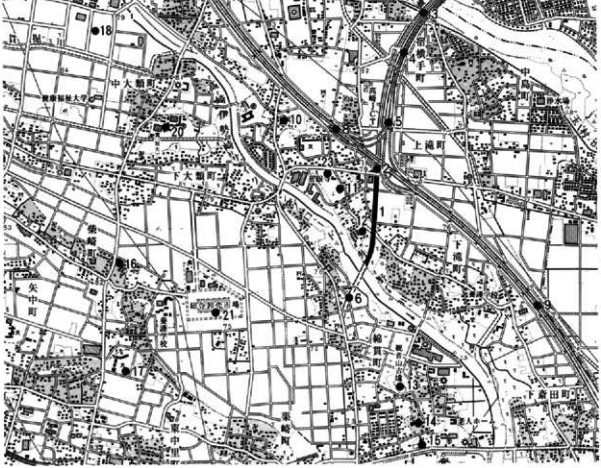


第6図　周辺の地形

2　周辺の遺跡

下滝天水遺跡周辺は昭和50年代の関越自動車道の建設に伴う発掘調査(7～9)以降、平成に入ってからの北関東自動車道や本遺跡と同じ県道前橋長瀞線の発掘調査(1～6)など、大規模発掘調査が数多く実施されている。高崎市教育委員会の調査を含め、付近の資料はきわめて豊富である。これらの報告書で当該地域の遺跡分布については繰り返し触れられているので、本書では今回の調査で主な遺構の該当する年代となる古墳時代初頭から中世までの遺跡を中心に概略したい。

古墳　本遺跡では古墳は見つからなかったが、B区西側にはお伊勢山古墳(12)が隣接している。この古墳は前方後円墳の前山古墳(11)と混同されているためか前方後円墳とも円墳とも紹介されているが、墳形（第8図）に前方後円墳を示唆する点はなさそう



周辺遺跡

1	下滝天水遺跡	2	上滝榎町北Ⅲ遺跡	3	西横手遺跡群	4	宿横手三波川遺跡	5	上滝榎町北遺跡	6	綿貫小林前遺跡
7	元島名B遺跡	8	上滝遺跡	9	滝川B遺跡	10	元島名将軍塚古墳	11	前山古墳	12	お伊勢山古墳
13	綿貫観音山古墳	14	普賢寺裏古墳	15	不動山古墳	16	柴崎蟹沢古墳	17	矢中村東遺跡	18	高崎情報団地遺跡
19	鈴ノ宮遺跡	20	中大類金井分遺跡	21	下大類遺跡	22	西横手遺跡群	23	慈願寺		

第7図　周辺の遺跡

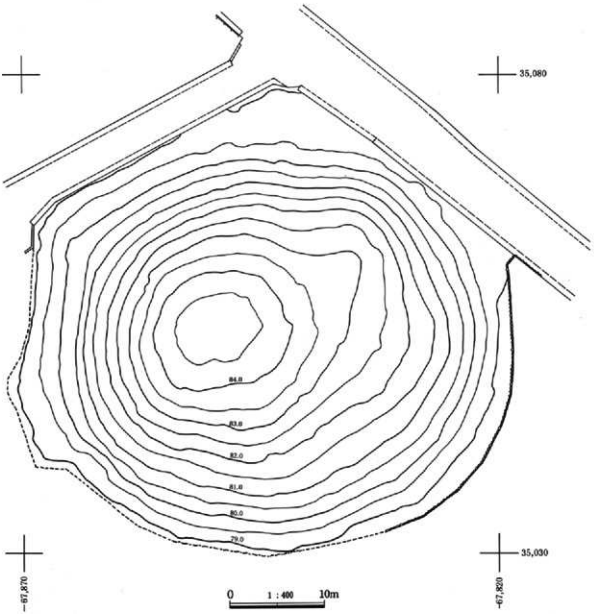
である。本遺跡北側約1㌔にある前方後方墳元島名将軍塚古墳(10)は4世紀前半、研究者によっては3世紀代にまで遡ると考えられている古墳で、当地域はもとより群馬県内にあっても最も古い古墳の一つである。ここからお伊勢山古墳までの井野川左岸は古墳群となっていて、慈眼寺境内(23)をはじめ、小円墳を中心に多数の古墳が現存している。

本遺跡西側2㌔にある柴崎蟹沢古墳(16)は井野川低地帯の対岸に位置し、正始元年銘の鏡など4面の銅鏡出土で有名である。

南側1キロの井野川右岸には綿貫観音山古墳(13)があり、さらにその南側に普賢寺裏古墳(14)・不動山古墳(15)と大型前方後円墳が連なっている。

その他に谷中村東遺跡(17)の3地点では古墳時代前期の周溝墓14基が調査されている。

古代集落　県道前橋長瀞線や北関東自動車の調査では前橋台地上の占地にもかかわらず低地部分の調査が多かったため、古代の竪穴住居の調査例は少ない。反面、井野川を挟んで本遺跡の南側に隣接する綿貫小林前遺跡(6)では、井野川低地帯上で古墳時代前

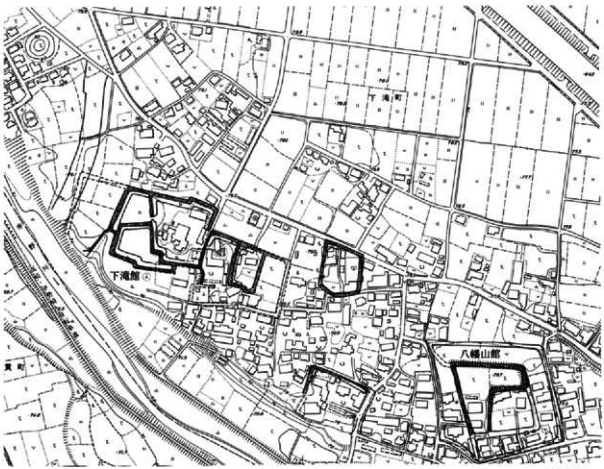


第8図　お伊勢山古墳平面図

期と奈良・平安時代を中心とした大集落が調査されている。集落遺跡は井野川右岸で多数調査されている。井野川左岸では本遺跡以南の台地上に集落が広がることが予想されよう。

水田・畠　北関東自動車道や県道前橋長瀞線の調査で本遺跡以北の利根川までの間（１～５）は、ほぼ全遺跡で古墳時代から平安時代にかけての水田跡が調査されている。本遺跡の北側に隣接する上滝榎町北遺跡(5)では江戸時代の耕作痕・平安時代As-B下と古墳時代Hr-FA下の水田などが調査され、本遺跡で確認されているこれらの遺構が広く続いていることがわかり、さらに北側へ1.5km離れた西横手遺跡群Ⅰや西横手遺跡群Ⅱ(3)でもAs-B下やFP、FA下の水田が調査されている。利根川右岸の低地部分一面に水田が広がる古代の景観が、復元されつつある。

中世城館　本遺跡南側の、井野川左岸の微高地上に展開する城館群を『新編 高崎市史』を元に第９図に示した。本遺跡A区に隣接する室町時代の下滝館は、堀割や土塁が現在でも見られる。周辺では最も残存状態の良い城館跡である。復元図で外郭堀が想定された部分はＡ１区５号溝に該当しよう。また慈眼寺境内(22)も中世方形館といわれている。本遺跡西側１㌔にある八幡山館跡とともに、井野川左岸の微高地に城館跡が並ぶ姿は、古墳時代の古墳群以来の威容であったであろう。



第９図　中世館の配置図　　1:5,000

Ⅲ章　調査された遺構と遺物

（下滝天水遺跡）

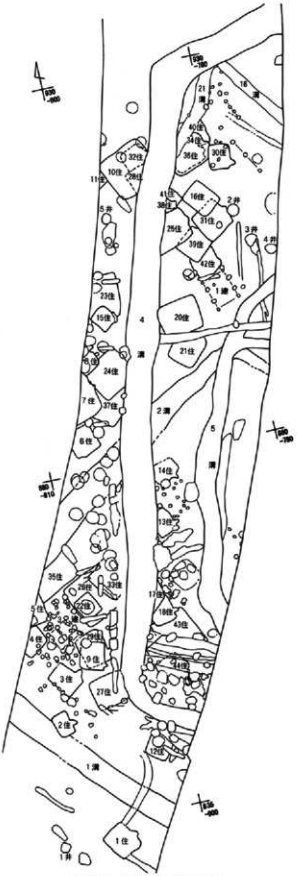
1　遺跡の概要

調査区域は南北に約570mの長さがあり、地山や埋没土の土質、調査された遺構の性格も地点毎に異なっている部分が多い。竪穴住居・土坑・溝などについては２節以降で個別の遺構種別の説明を加える前に、本節で各区の１／500概略図（第10～16図）を使って概観に触れてみる。なお、本線Ｂ区以北や取付道の水田や畠については重層的な調査となっているので、遺構概略図はこの項では扱わず、各項の遺構全体図の中に記した。

Ａ区　長さ約200mの本遺跡で最も長い調査区である。行政区分上では上滝町の飛び地になる。調査区の中央にある農道を境に南側をＡ１区・北側をＡ２区としたが、農道下も調査を行い、最終的には連続する調査区域となったが、各遺構にはＡ１区・Ａ２区それぞれの通し番号を付けている。

Ａ１区　ローム上面の１面のみの調査だが、本遺跡で最も遺構の密集した調査区となった。表土が浅いうえ、井野川にかかる橋梁工事の影響を受け残存状態は悪い地点である。重複も著しく、確認できなかった遺構も多数あったと思われるが、竪穴住居44軒、土坑136基などは全調査区での確認数の過半を超え、ピット96基も半数に近い。この他にも井戸７基・掘立柱建物２棟、柱列２棟などがある。陥穴状の土坑や墓坑などこの地点でのみ確認された遺構もある。さらに特筆すべきものとして、古墳時代の方形区画を作る溝、中世居館外郭の二重の堀などがあるが、区画内部の施設についてはどちらも不明瞭である。

古墳時代の方形区画をつくる１号溝の南側は井野川に向かって低く傾斜しており、遺構の数は極端に少なくなる。調査区中央東隅付近は戦中・戦後の時期に水田が作られたことがあり、この時期に深く削平されており、遺構の多くは消失しているようだ。



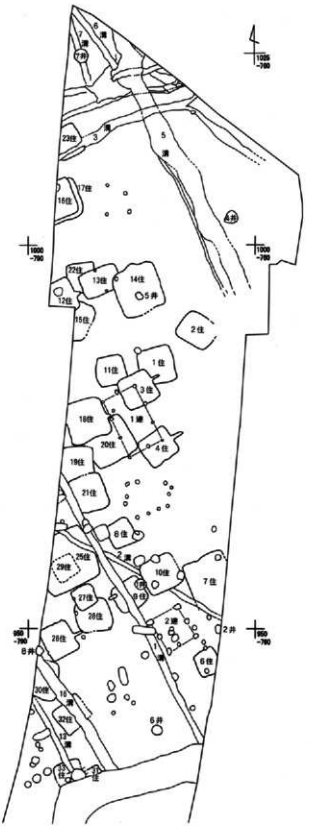
第10図　Ａ１区の主な遺構

Ａ２区　Ａ１区の北側に続く地点で、地形や遺構の種類もＡ１地点に類似している。南側から中央にかけてはＡ１区に連続する平坦な地形だが、北隅に浅い窪地がある。窪地は泥流によって埋没し、現状では平坦な地形となっている。この窪地を挟んで南北では遺構の性格は変化し、北側で竪穴住居などは途切れている。窪地南側では竪穴住居32軒、土坑38基、など遺構は多い。井戸は７基調査されたが、窪地内にも見られる。窪地内には軸方向を違えた溝が多く見られる。調査区南側の古墳時代の溝にＡ１区から続くものがある。当初Ａ１区とＡ２区を分けた農道は天明三(1783)年以前から使われていた道であることが確認されている。

Ｂ区　本線部分では最も狭い調査区で、調査前は畠地であった。舗装道路をはさんで南側のＢ１区と北側のＢ２区に分けた。Ａ区とＢ区を分ける道路は中世まで遡るものと思われ、本調査区から中世以降の道路脇の景観を復元できる可能性がある。

Ｂ１区　南隅を除く大半で２面の調査となった。上面では耕作溝群と水路状の溝が中心となる。特筆すべき遺構として、掘立柱穴内礎石据えで中世の施設と思われる１間×３間の総庇建物がある。３基の井戸には、この建物に伴うものがあると想定している。下面では古墳時代前期の竪穴住居が１軒だけ調査されている。この住居の西側では遺構の伴わない古式土師器の出土が多い。西隅はＡ２区北側から続く窪地となっている。

Ｂ２区　北隅にＡs-Ｂの純層が堆積していたが、水田畦畔は確認できなかった。泥流面がほぼ全域に見られ、この層をはさんで上下２面の調査となった。泥流上面の遺構は第12図に示したように、時期不明の井戸１基を調査したが、土坑やピットなどの遺構もきわめて少ない。泥流下からは耕作溝群が鮮明に表れている。両面とも竪穴住居や掘立柱建物などの遺構はない。

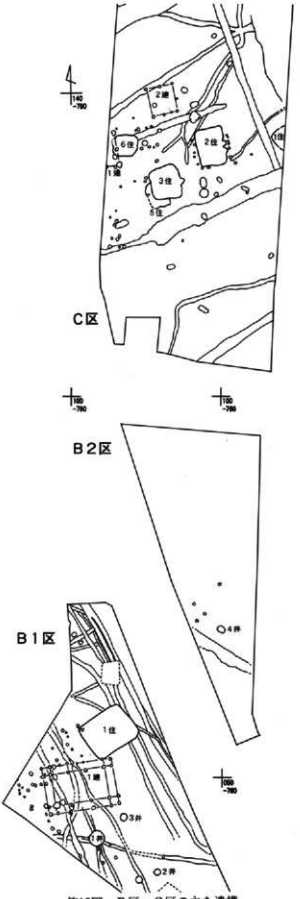


第11図　Ａ２区の主な遺構

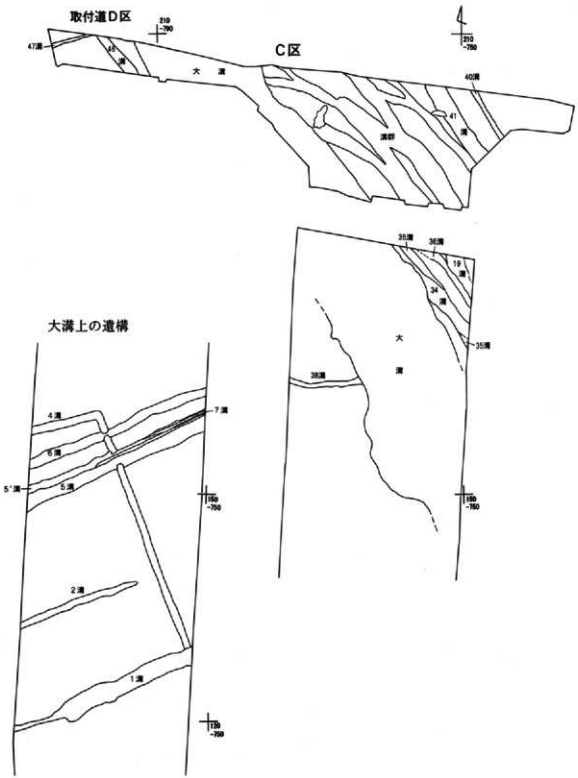
C区　B区の北側に市道をはさんで隣接している南北に長い地点で、長さは約100mある。調査前は畑地および水田で、一部家屋がかかっていた。用地の関係で中央以南と北隅では別年度の調査となった。C区北隅と取付道D区は同時に調査し、遺構番号も連続したものとなっている。

竪穴住居が6軒調査されている。時期は奈良時代以降の短期間に限定されている。掘立柱建物や柱列など、B２区で途切れた遺構もこの区の南側でまた見られるようになるが密度は高くない。本区北側から取付道D区にかけて見られる大溝が特筆される遺構である。上幅12m前後の直線的な流路で、立ち上がりの角度からも天然河川とは考えにくい。取付道A区南端まで続くと思われ、150m以上の長さがある。古墳時代の小区画水田と同じ軸方向に流下している。大溝北側も溝群になっている。その他に土坑27基、ピット42基が調査されている。また、泥流下の耕作溝群や、As-B下・Hr-F A下水田の残存状態が良好な地点である。

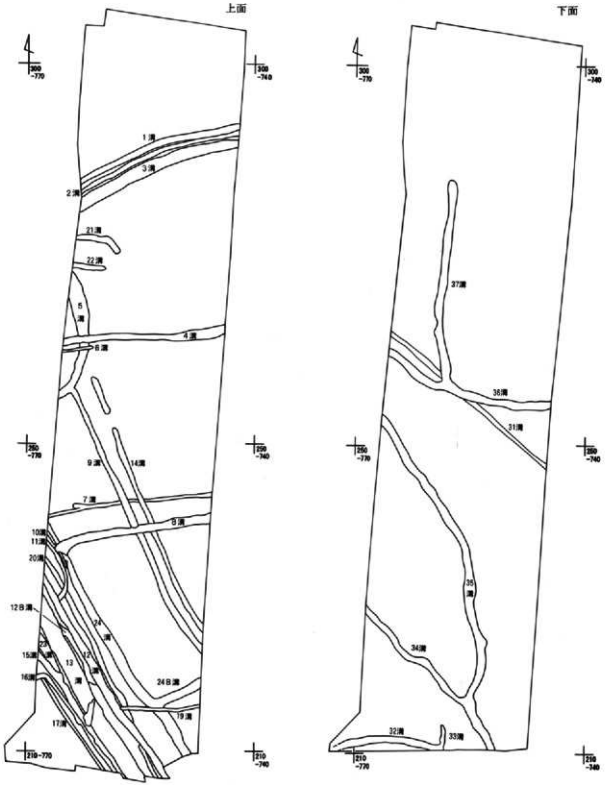
D区　農業用水路をはさんでC区の北側にある。調査前は水田であった。本区南西隅にC区北側で見られた溝群の続きがあり、北隅は微高地状になっている。微高地部分は地山の傾斜に直交するような角度で広がっていて、地形的に違和感がある。微高地の南側には水田が広がっている。As-B下やHr-F A下の水田は本遺跡で最も残存状態が良い。特にAs-Cの混じる耕作土下から水田の痕跡が見つかったのは、この地点と取付道C区のみである。古墳時代以降、現代まで水田耕作が続けられた地点であり、調査区全域に見られる溝の多くは、これら水田に係わるものと思われる。それ以外の遺構は極端に少ない地点で、土坑が１基だけ調査されているが、井戸・ピットなどの確認はない。



第12図　B区・C区の主な遺構



第13図　C区・取付道D区の主な遺構



第14図　D区の主な遺構

E区　D区とは市道をはさんだ北側にあり、全長約100mである。下滝天水遺跡の北隅にあたり、本調査区北側の県道高崎伊勢崎線以北は上滝榎町北Ⅱ遺跡となる。行政区分上では上滝町に含まれている。調査前は水田と仮設舗装道路部分であった。調査は南半と北半の２回にわけて行われた。特に北半部分は上面が削平されているうえ、攪乱も多く残存状態はきわめて悪かった。

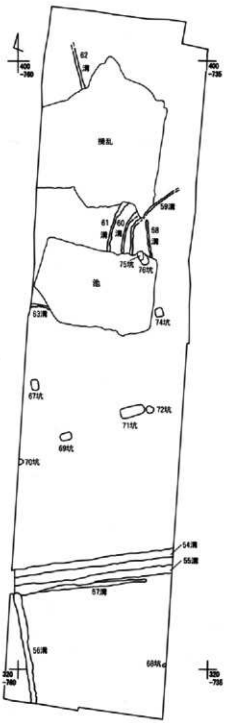
両側溝をもつ近世の道跡や、近世まで遡ると思われる池跡が調査されている。土坑が８基調査され、D区で途切れた遺構がこの地点でまた見られるようになる。近世以降に盛んに、水田以外の土地利用が行なわれたことが推測されよう。

他にHr-FA下の水田などが見つかっている。本調査区北西隅で見つかったAs-B混土層内の水田畦畔は他の地点には見られない。竪穴住居や掘立柱建物など古代から中世にかけての施設は確認されておらず、土師器などの古代遺物の出土も少ない調査区である。

取付道A～C区

本線の東側にあり調査前は全域が水田であった。地形は本線C・D区と概ね同じ低地部分にあたっている。各区とも三面以上の調査となっており、遺構配置は各区のそれぞれの面を参照されたい。

取付道A・C区は南北に長く、両区とも長さ約100mある。取付道C区では天明三（1783）年の浅間山噴出パミスを鋤き込んだ復旧痕が見つかっている。各区でHr-FA下の小区画水田が見つかっているが、残存状態はあまりよくない。取付道A区の南端では本線C区にある大溝の続きがわずかに確認でき、大溝北側の溝群も本線部分同様に見られる。取付道B区ではAs-C混土下の溝が２条確認されている。取付道C区北側は本線D区北隅から続くと思われる微高地部分の南辺にあたっている。ここでは縄文時代前期の遺物が出土しているが、遺構は見つかっていない。



第15図　E区の主な遺構

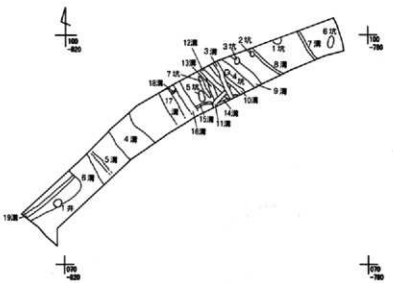
取付道Ｄ区　長さ25mの本遺跡内で最も狭い調査区である。発掘調査段階でも本線Ｃ区と同時に調査された。遺構配置は本線Ｃ区とともに第13図に示したが、本文中でも本区独自の項は設けず、本線Ｃ区と一括して扱った。

取付道Ｅ区　本線Ｂ区とＣ区の境にある市道を西側に延長するために設けられた、弧状に伸びる長さ約50mの区間である。調査前は畑地であった。

お伊勢山古墳とは東側の墳裾から幅員６ｍの道路を隔てた地点まで近接した位置にあたるため、同古墳の周堀確認を目的とした。周堀が想定された調査区西隅は中世以降の溝があったが、古墳周堀は見つからなかった。古墳周堀が中世以降に溝として新たに開削し直された可能性がある。北西側から南東側へ向って伸びる溝群が主な遺構で、本線Ｂ区まで続くものと思われる。その他に井戸１基、土坑５基などが調査されている。本線Ｂ区に類似した様相が看取され、古代の集落占地から外れた一画になるようである。

取付道Ｆ区　本線からやや離れた井野川左岸へりにある。鍵の手状になる変則的な調査区で、全域が非舗装の農道下で、周辺は畑地であった。地形は本線Ａ区から続く低台地上にあり、本線Ａ区同様に古代から近世までの遺構が確認されているが、一面の調査である。主な遺構配置は第19図に示した。

古墳時代前期の方形周溝墓２基はこの地点のみで見られる。また、本線以外で唯一古墳時代後期の竪穴住居３軒が見つかっている。墓域の変遷と集落の拡大を検討するうえで重要な一画となろう。他に近世まで確実に遡れる道跡を調査している。道跡は本線Ａ１区とＡ２区の境から続くものである。本調査区西隅にあたる坂道部分を切り通し状に掘り込んだ、規模の大きな施設であり、近世には「ちちぶ道」と呼ばれていたことが絵図などに記されている。



第16図　取付道Ｅ区の主な遺構

（上滝榎町北Ⅲ遺跡）

上滝榎町北Ⅲ遺跡は、既報告の上滝榎町北遺跡（『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002）とは関越自動車道新潟線を挟んで南接する遺跡で、高崎市上滝町698・699－1などにある。以南には県道高崎－伊勢崎線を挟んで下滝天水遺跡Ｅ区へと続く。調査地は、本線区と関越自動車道新潟線との取付道に伴う橋脚部の東区とに分かれるが、取付道部全体が調査対象とならなかったのは、盛土工法でないことに主因があった。東区は上滝町693－１・４にある。さらに本線区調査は用地の都合から北東隅部40㎡を別途調査した。本線区と東区の位置関係、調査範囲は第457図左下に示したとおりである。

調査地は、本線区で西半が水田、東半が自動車販売店とその用地が水田の盛土上に存在していた。特に第499・450図示の池跡理土の上方は、コンクリートブロックなど、近年の建築材などが含まれていたものの、下方以下には含まれておらず、だいぶ前から理まり込み、溜め池としての機能は失われていた。

用地の水田は、関越自動車道新潟線の通過以前の時点まで東方に広がる水田地帯の一角であり、西約50ｍを南北に走る高崎市道の以西が低台地となり、井野川段丘際までの間に旧集落が営まれていた。集落の展開は、現在でも10000㎡以上の寺域を構える真言宗慈眼寺が寺格のある古刹のため、南面構えでありながら低台地幅の制約から集落は東方に展開したとも見られる。

その台地形成は、以南の下滝天水遺跡Ａ区の調査結果から標準Ⅸ層であるローム土層上（第５図）に水性を素因とするローム層の二次堆積層で覆われることが判明しており、おそらくは、現井野川以西に広がる幅約２km弱の低地帯が開析される際に自然堤防状の高まりを核としてこの低台地が形成されたと推測されるが、さらに標準Ⅳ・Ⅴ層の榛名山起源の噴出物を多く含む泥流層が低台地際までおよんでいる。上滝榎町北Ⅲ遺跡で標準Ⅸ層は明瞭な認定はできず、還元・水性漂白化した標準Ⅶ層が存在し、榛名山起源の標準Ⅳ層も13cm前後の層厚であった。Hr-ＦＡの純層に近いとされる標準Ⅴ層は数cm内外の堆積であった。標準Ⅲ層は下部に浅間山を給源とするAs-Ｂ層の純層が入るが、本遺跡では最下部に堆積した灰色アッシュをわずかに認めたに過ぎず、層厚の主体は、As-Ｂ混土の土壌であった。標準Ⅱ層は、As-Ａを含む土壌を指して呼称されたが、本遺跡ではAs-Ａの純層は不明瞭であったが、それに近い土壌および灰の集積ヶ所、その降下堆積に伴う農耕の天地返しが認められた。

発掘調査は、本線区でAs-Ａ下面、As-Ｂ土中の１面、As-Ｂ混土下面もしくはAs-Ｂ下面、Hr-ＦＡ下面、As-Ｃ混土下面の５面の調査を行なった。東区は、たまたま調査地が池跡と推定される中で湧水量もあり、さらに既盛土が約１ｍあり、調査壁面崩落の危険性もあることから、深さ２ｍで調査を止めた。

本線区の調査面は、As-Ａ下面では、水田跡・溝跡・帯状の溝跡・池跡を認めた。As-Ｂ混土中の面では、前出の溝跡の掘り直し、それと関係しない別の溝跡、As-Ｂ下面もしくはAs-Ｂ混土下面では溝跡・水田跡が、Hr-ＦＡ下面とAs-Ｂ下面との間で土の色調差による畦跡が、Hr-ＦＡ下面では小区画水田跡と水路跡が認められた。

現在の地勢と調査結果とを比較すると、現地形が南東下がりであるのに対し、As-Ａ下面とAs-Ｂ下面の溝は、南西下がり、北東下がりであり、おおむね北西側が高い点は共通している。時期別で溝の下がり傾向が異なるのは、この場所が水利の切り替えを必要とする台地に近接したためと考えられる。

出土遺物は、各時期とも生活域から遠ざかっていたためか極めて少なく、各々の遺構に直結する資料も少なかった。ただ、Hr-ＦＡ下面の14号溝の先駆をなす15号溝から、漂白化、割れ口が消耗した土師器高杯１／２強個体が出土し、納置された近原位置の例として捉えておきたい。

2　陥穴状土坑

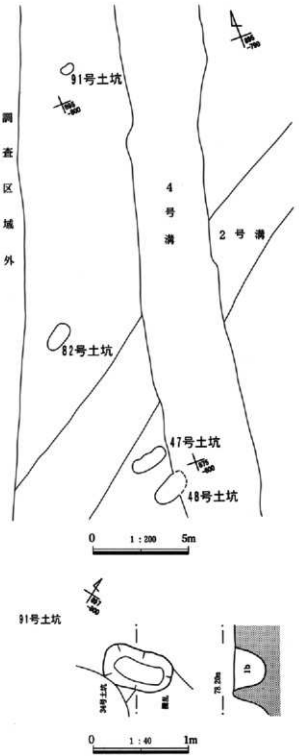
該当すると思われる遺構はＡ１区に４基確認できる。縄文時代の遺構と思われるが、時期を明確に判定する根拠を得たわけではない。

47・48号土坑の２基は近接しているが、82号土坑は47号土坑から北側へ８ｍ離れ、91号土坑はさらに82号土坑から14ｍ離れて単独で確認されている。周辺は２・４号溝など深くて規模の大きな遺構があり、類似する土坑が削平された可能性もある。

Ａ１区は古墳時代初頭以来、平安時代まで集落が継続的に営まれ、中世以降は館が作られ、畑地として現在に至るまで利用された地域である。陥穴状土坑は竪穴住居や溝、他の土坑などすべての遺構に先行している。埋没土の観察からも、As-Cの降下以前には埋もれていたと考えられる。また、A区の縄文時代遺物は、土器が少なく定形的な石器が多いことから、縄文時代には集落から離れた狩猟・採集の場であったと思われる。以上のことからこれらの遺構が縄文時代の陥穴となる可能性は高いと考える。

各土坑の土層註には、以下の共通記号を使用した。
１→黒褐10YR2/2　腐植土質の微粘性土。２→黒褐10YR2/3　雑多な混入物を含む非粘性土。３→灰黄褐10YR2/4　粒子の細かな粘性土。４→にぶい黄褐10YR5/2　１・２土とロームの混合土。５→暗灰黄2.5Y4/2　しまり強い粘性土。
ａ→大粒ロームブロック含む。ｂ→小粒のロームブロック含む。ｃ→ローム粒多量に含む。ｄ→ローム粒少量含む。ｅ→炭化物粒含む。ｆ→粘土小ブロックを含む。

91号土坑（第17図　ＰＬ－２）
位置　895－795Ｇ　　軸方向　Ｎ－79°－Ｅ
規模　長軸75×短軸50×深さ34cm
備考　縄文時代の定形石器である石鏃（第436図）が壁に突き刺さる状態で出土した土坑であるが、他の３基に比べて小規模で、位置も離れている。底面の施設もなく、陥穴とするには疑問点も多い。



第17図　陥穴状土坑配置および91号土坑

47号土坑（第18図　ＰＬ－２）

位置　875－800Ｇ

軸方向　Ｎ－80°－Ｅ

規模　長軸192×短軸80
×深さ100cm

備考　13号土坑に先出する。湧水が激しく、底面付近の観察は難しかったが、中央に径約40cm・深さ15cmのピットがあり、中に河原石状の礫があった。48号土坑と並んで確認されているが、埋没土は共通しない。西側壁は立ち上がり緩やかになっている。

48号土坑（第18図　ＰＬ－２）

位置　870－800Ｇ

軸方向　Ｎ－79°－Ｅ

規模　長軸〔195〕×短軸113
×深さ88cm

備考　４号溝・13号土坑に先出する。底面中央に小児の頭大の自然石による環状の石組みがあった。東隅の礫は底面から40cm以上浮いた状態で、礫群の中に剥片が１点混じっていた。

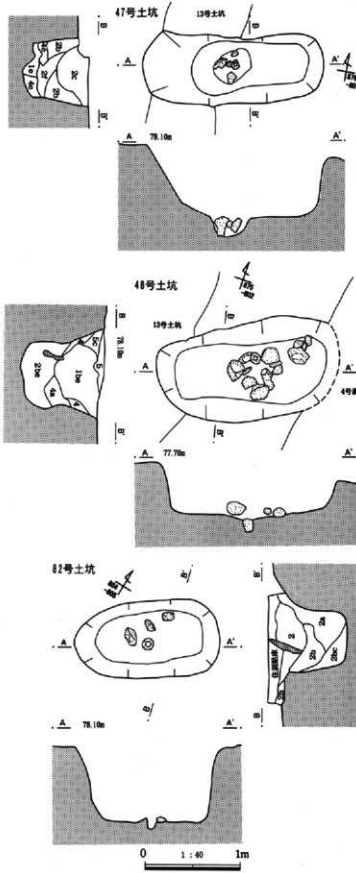
82号土坑（第18図　ＰＬ－２）

位置　880－800Ｇ

軸方向　Ｎ－56°－Ｅ

規模　長軸153×短軸84
×深さ70cm

備考　６号住居の床下から確認された。断面図最上段の土層は住居貼床である。底面中央には径10cm、深さ７cmの小ピットがあったが、埋没土は不明瞭なもので炭化物等はみられなかった。全体の横断面は漏斗状となる。自然石が底面から20cmほど浮いた状態で出土した。



第18図　47・48・82号土坑

3　方形周溝墓

取付道F区から、2基の方形周溝墓と思われる遺構を調査している。調査幅が狭いため両遺構とも一部が確認できただけだが、溝一辺分の規模は把握できている。2基の遺構は溝の上端で約13m離れていて、1号方形周溝墓の規模であればもう1基入る間隔がある。密集した周溝墓群にはならないであろう。両周溝墓の軸方向はほぼ同一になると思われるが、溝外側のプランや底面の形状など相違点も多い。

本遺跡内には、この2基以外に同様の遺構は認められない。

1号方形周溝墓（第19～21図　PL－3）

当初、溝を想定した遺構である。北側から重機で掘削する際、いきなり溝埋没土にあたったため、一部を掘り過ぎている。調査区東隅は攪乱坑によって深く壊されている。本周溝墓の大半は調査区域外となるが、西側の溝の規模は把握でき、大よその形状は復元できると考えられる。

位置　930－865G付近を中心としている。

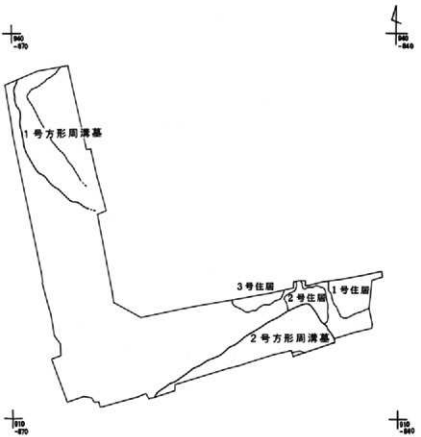
規模　溝の作る方形区画の内側で8.9mある。溝巾は不整で中央附近が幅太になり、最大2.3m、最小1.0mとなっている。壁の高さは外側で20～40cm、内側で40～50cm前後である。

形状　溝は確認できる範囲では隅付近で細くなっている。溝の途切れる箇所はないが、北西隅付近は著しく狭くなっている。溝内側は上端・下端とも平面直線的で、立ち上がりも均質のものとなっているが、外側はきわめて不整である。溝底面は中央付近が深くなり、最も底面の高い北西隅付近とは約40cmの比高差がある。

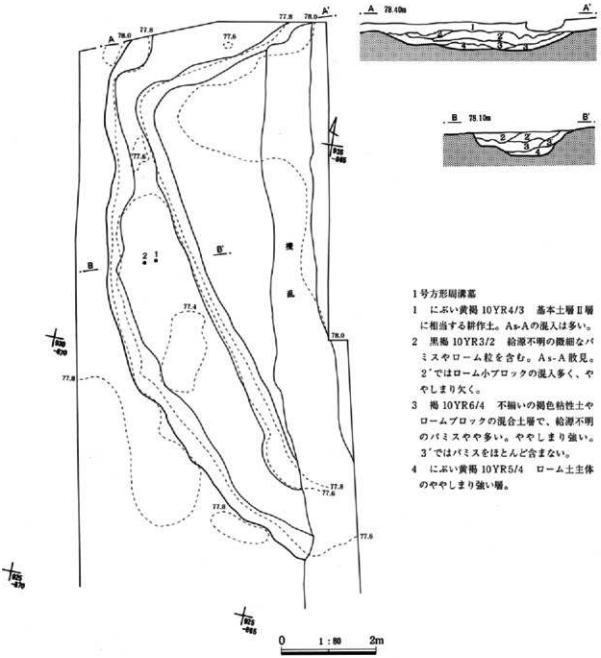
軸方向　N－33°－W前後（西溝内側で計測）

重複　1・2号土坑に後出している。

備考　東側マウンド部に相当する部分は農道脇の側溝にあたり有効な断面観察はできなかったが、明瞭



第19図　方形周溝墓配置図

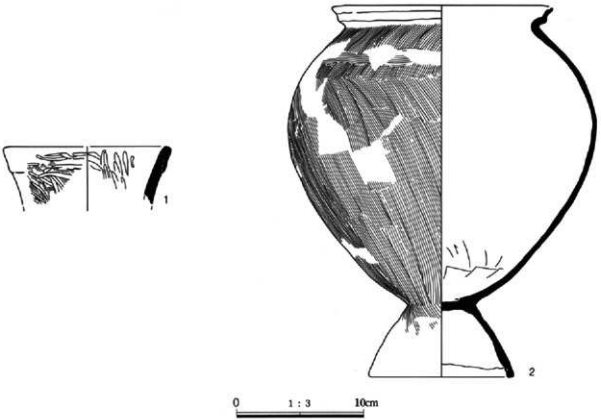


第20図　1号方形周溝墓

な盛土は認められないようである。少なくとも溝を掘り込んだローム状土を盛った痕跡は、調査範囲にはない。溝底面付近にはローム土の混入が多く、溝掘削時にローム土をきれいに取り除いたか疑問である。底面・マウンド部とも、あまりしまりのない不明瞭な面であった。

遺物　西溝北寄りの溝埋没土内出土の壺1と、溝底面直上から出土した台付甕2を図示した。台付甕は被熱痕があり、住居の炉で使われたものが持ち込まれと思われる土器である。

その他の遺物　出土量は少なく、小片のみ約50片である。古式土師器が80%を占め、他は模倣杯と近世の陶器片の混入品である。



第21図　1号方形周溝墓出土遺物

2号方形周溝墓（第22・23図　PL－3）

当初、重複する大型住居を想定した遺構である。東側付近を調査範囲限界まで掘り広げて、マウンド相当部につながると思われる北東隅付近の立ち上がり部分のみが、かろうじて確認できた。なお、土層観察は段差のある測量面を合成して1本の図としているため、変則的なものとなっている。

位置　925－850G付近を中心としている。

規模　北溝外側で14.0mの長さがある。溝の下幅は唯一確認できる北隅付近で2.85mある。直線的な溝外側の形状より、溝幅はほぼ一定していると思われる。壁高は20cm程度の部分が多いが、部分的に40cm近い残存部分もある。

形状　1号方形周溝墓に比べると溝底面は平坦で、多少踏み固められた竪穴住居の床面のような様相である。外側の壁は直線的な平面形状で、溝外側の壁も垂直に近い住居壁のような立ち上がりをしている。比較的平坦な底面だが、北西隅付近に掘り下げ時の段のような浅い窪みがある。

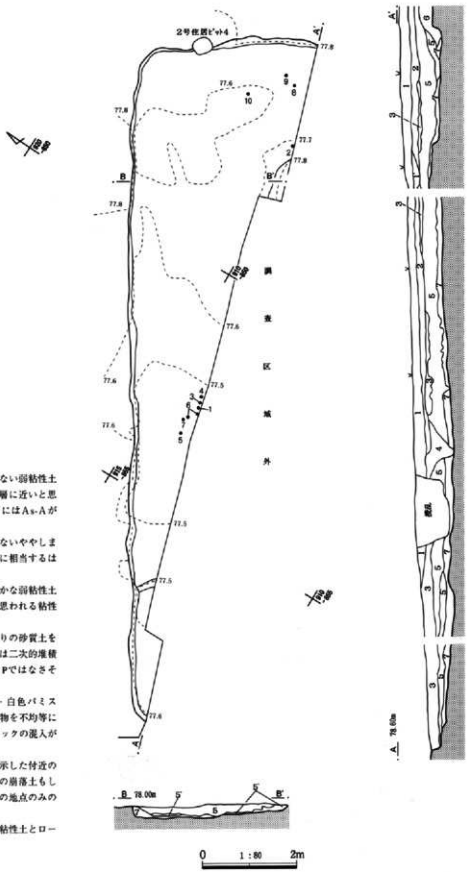
軸方向　N－32°－W（北溝外側に直交する値）

重複　2号住居に先出している。

備考　調査範囲内では盛土の有無は分からない。

遺物　土師器9点と鉄製品1点を図示した。北東隅付近と、北溝中央西寄りの2地点から集中的に出土している。全体的には赤彩土器が多いことが特筆されよう。加えて底部穿孔の壺5～7の3点が器台3・4とともに、いずれも北溝中央西寄りからまとまって出土しており、住居遺物のセットとは異なる要素が見られる。反面北東隅付近では台付甕9のような什器類の出土もある。刀子と思われる鉄製品は床直上に近いレベルの出土である。

その他の遺物　土器の破片総数は約110片で、図示できた遺物量に比べて少ない。模倣杯や古墳時代の須恵器が10%程度混じる以外は古式土師器である。厚手の壺類に大破片が目立つ。



2号方形周溝墓

1　黒褐色土層　混入物の少ない弱粘性土層。耕作土で基本土層のⅡ層に近いと思われるがAs-Aは不明。1'にはAs-Aが多量に混入する。

2　灰黒色土層　混入物の少ないややしまり強い層。基本土層のⅢ層に相当するはずだがAs-Bは見られない。

3　暗灰褐色土層　粒子の細かな弱粘性土中に小ブロック状のＦＡと思われる粘性土がまばらに混じる。

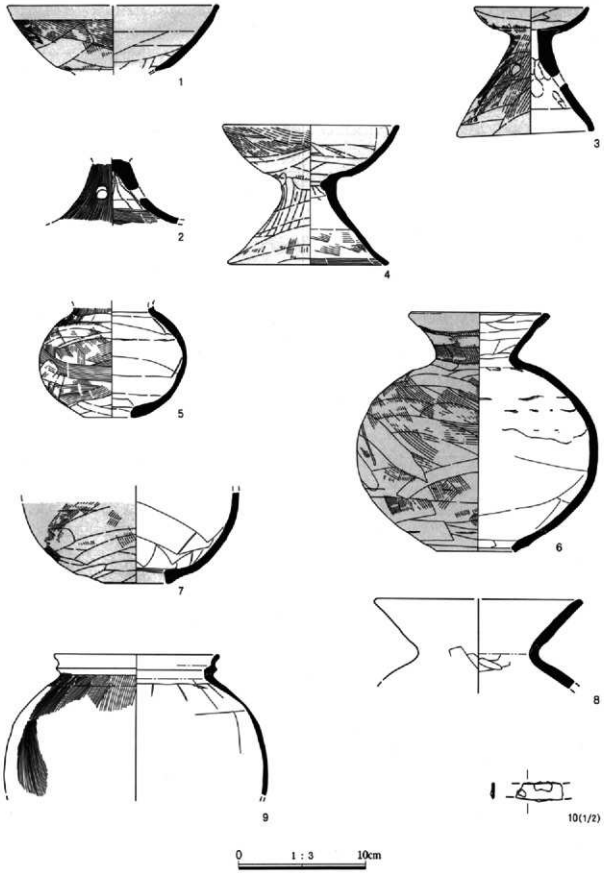
4　灰褐色土層　パミス混じりの砂質土をやや多量に含む層。パミスは二次的堆積したもので給源は不明。ＦＰではなさそうである。

5　黒褐色土層　ローム粒・白色パミス（As-Cか）など雑多な混入物を不均等に含む。5'ではローム小ブロックの混入が増える。

6　暗灰褐色土層　断面を図示した付近の地山は倒木痕にあたり、壁の崩落土もしまりのない土質となる。この地点のみの土層。

7　暗褐色土層　黒褐色の弱粘性土とローム小ブロックの混合土層。

第22図　2号方形周溝墓



第23図　2号方形周溝墓出土遺物

4　竪穴住居

本遺跡で調査した竪穴住居はＡ１区で44軒、Ａ２区で32軒、Ｂ１区で１軒、Ｃ区で６軒、取付道Ｆ区で３軒の合わせて86軒になる。

竪穴住居の大半がＡ区の出土である。特に重複や後世の削平・攪乱の激しいＡ１区ではさらに多くの住居があったはずである。Ａ１区855－795グリッド付近は地山が見えないほど全体が遺構埋没土に覆われていた。中世以降の溝や土坑が大半で多量の古代の土器がふくまれていた。その下に住居が多数存在していたと思われるが、最終的に住居と判断したのが43～45号住居の３軒のみである。Ｂ１区も１号住居西側に古式土師器が多量に出土し、住居検出に努めたが確認できなかった地点がある。Ｃ区は奈良時代以降の住居のみである。

竪穴住居の時代は古墳時代前期から平安時代までで、縄文時代や弥生時代の遺構はない。

井野川左岸の自然堤防状微高地にあたるＡ区や取付道Ｆ区では各時代の住居があるが、低地部分にあたるＣ区には奈良・平安時代の住居のみとなる。

次頁以降の個々の住居の説明は、発掘調査で付けた住居番号の順に区ごとに行う。調査地に付けた番号をそのまま使うので、Ａ１区19住、Ａ２区24住、Ｃ区４住は欠番となっている。

図示した遺物の出土状態詳細については遺物観察表に記してある。

２－１　Ａ１区の住居

古墳時代初頭から平安時代中頃までほぼ連続した時期の竪穴住居44軒が調査されている。竪穴住居群が築かれている間に１・２号溝などの古墳時代の遺構がある。中世以降には館の堀が調査区を縦断するように開削され、近世以降の攪乱も多い。西隅５号溝内側は戦中・戦後の昭和期に水田化された時期があり上面が削られ、南隅は橋梁工事の影響で残存状態は良くない。

１号住居　（第24・25図　ＰＬ－４）

位置　830－805・810Ｇ　本遺跡では最も南にあり、北隣の12号住居とは10m離れている。井野川へ向かって下がる傾斜変換点の下側に位置している。橋梁工事時の土圧で砕石混じりの耕作土がめりこみ、遺構プランは不明瞭な地点である。西隅も工事の際に大きく削られているが、床面は残存していた。

重複　６Ａ号溝・７号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－56°－Ｅ

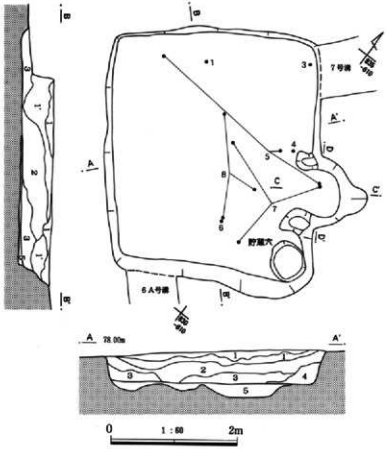
面積　10.78㎡

形態　長辺3.7m、短辺3.1mの横長長方形を呈している。東隅以外は直角に近い整ったコーナーになっているが、この隅は壁の崩落により旧状が変わっている可能性がある。

壁　ローム土の壁である。やや開き気味であるが全体に直線的に立ち上がっている。最大45cmの壁高がある。

カマド　北東壁の南寄りにある。袖にはローム土主体の構築材を使用していて、残存状態は悪い。焚き口部分が幅約60cmあるが、袖部分が崩落して間口がさらに広がったものと思われる。燃焼部は壁際から壁外にかけての位置にあり、煙道は壁外へ80cm張り出している。火床と推定される被熱硬化面が複数ある。最終面は煙道へ向かって若干高く傾斜している。火床上に長さ８cmの自然石が横位で出土しているが、目立った被熱痕はなく、支脚に使用したものかは判断できなかった。燃焼部の下には掘り方があり、掘り込み土中にもブロック状の焼土や灰が多量に混じっている。除湿目的の施設と思われるが、カマド自体に数次の作り直しが考えられよう。

内部施設　壁溝や柱穴は確認されない。カマド南脇の住居東隅に貯蔵穴状のピットがある。床面での径61×55cm、深さ15cmの浅いものだが、底面は平坦である。床面精査時に確認できたもので、ピット周辺の壁は崩落がすすんでおり、調査当初は住居に後出する遺構となることも想定していた。埋没土は他の床下土坑と同様である。上面に踏み固めは認められないが、住居廃絶時には埋没していて開口してい



１号住居

1　基本土層のⅡ層で焼土粒散見。1′ではAs－Aは不明瞭で、焼土やローム粒の混入やや多い。

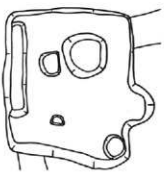
2　暗褐10YR3/4　小ブロック状のローム土・黒色土が不均等に混じる弱粘性土層。

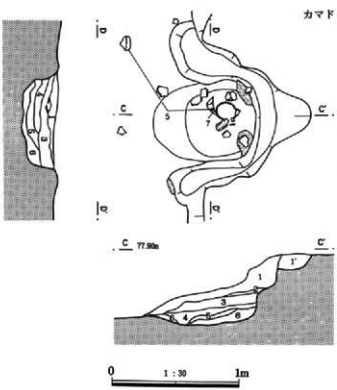
3　黒褐10YR2/2　ローム粒・焼土等の混入多い層。基本土層のⅥ層に近いか。

4　黒褐10YR3/2　基本土層のⅥ層にローム粒・焼土粒を少量含む。

5　掘り方

掘り方





カマド

1　暗褐10YR3/3　基本土層のⅥ層に近い。混入物の少ない砂質土。1′ではローム土と焼土粒の混入多い。

2　黒褐10YR2/2　黒色灰と黒土の混合土でしまり欠く。

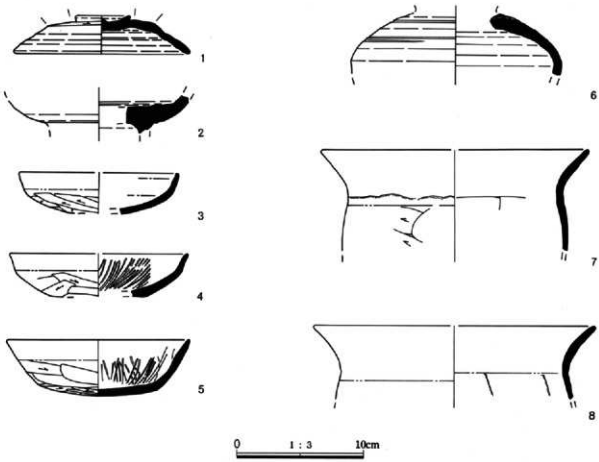
3　暗オリーブ褐2.5Y3/3　不揃いなローム、焼土、灰等のブロックが不均等に混じる。

4　黒褐10YR2/2　黒色灰のほぼ純層。

5　暗赤褐５YR3/3　焼土中心に灰等がブロック状に不均等に混じるしまりない層。

6　黒褐10YR3/2　黒色土やローム土の混土に焼土・灰等を不均等に含むややしまりの強い層。

第24図　１号住居およびカマド



第25図　１号住居出土遺物

なかったようである。配置から貯蔵穴の可能性があると判断したが不明瞭な施設である。

床　ローム面をそのまま踏み固めた比較的平坦な床面である。地山の傾斜に幻惑されることなく、ほぼ水平である。焼土や灰が直上に散在して、把握は容易であった。掘り方は住居掘り下げ時の窪みを埋める程度で、明瞭な貼り床は見られなかった。床下には底面が平坦な土坑状の掘り込みが数カ所ある。中央西寄りの円形の小土坑が深さ20cmあるが、他は深さ10cmほどの浅いものである。

出土遺物　住居のほぼ全域に散らばるようにして出土している。図示した遺物は８点で、完形品は１点もない。杯５と甕７がカマド内と住居中央付近の出土破片が接合し、甕８も床直上出土の破片が含まれている。カマド脇から出土した杯４と共に本住居に確実に伴う遺物であろう。須恵器蓋１と土師器杯３は下層の出土であるが、攪乱や溝の影響を受けた可能性のある地点の出土である。長頸壺６は埋没土中の出土である。埋没土上層出土の須恵器高杯２は混入品であろう。

その他の遺物　総数約350点出土している。カマド周辺からの出土が多い。薄手の土師器甕胴部破片が中心で、細片がほとんどである。土師器杯片も、図示した３点以外の個体小破片が数点ある。須恵器の破片は全体の５％ほどである。古墳時代土師器の混入品である刷毛目のある甕破片や厚手の甕破片も数点混じっている。

カマド内出土の薄手長胴甕には底部から胴部下半まで復元できるものがあるが、図示した７・８とは別個体である。

後出する遺構の重複が多いが、後世の遺物の混入は見られない。床下出土の遺物もほとんどない。

２号住居　（第26・27図　ＰＬ－４）

位置　850－815G

重複　古墳時代の方形区画を作っている１・２号溝に後出する唯一の住居である。１号溝との切り合いが南・北辺で部分的に確認できるが、西辺では不明瞭である。

主軸方向　Ｎ－75°－Ｅ

面積　5.76㎡

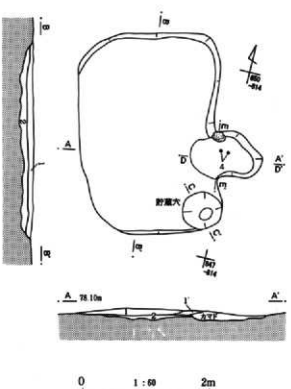
形態　西側は不明瞭であるが、長辺2.9m、短辺2.0mで南北に長く、隅の丸い歪んだ横長長方形を呈すと思われる。

壁　残存壁高は最大でも６㎝しかない。立ち上がり部分はローム土中にあるが、緩やかで、旧状はあまり留めていないようである。

カマド　東壁の南寄りにある。残存状態は良くない。燃焼部は壁外にあり、床面より５㎝ほど低くなっている。煙道は壁外へ75㎝張り出している。燃焼部の下には凹凸の多い不規則な掘り方がある。袖部分は確認できなかったが、北隅に16×10×10㎝の凝灰岩と思われる角礫が据えてあった。袖基部の構築材であった可能性がある。被熱により破損が著しいが、加工された石材と思われる。この石と対になる位置に掘り方からの深さ４㎝ほどの窪みも見つかっていて、袖石が据えられていた可能性がある。

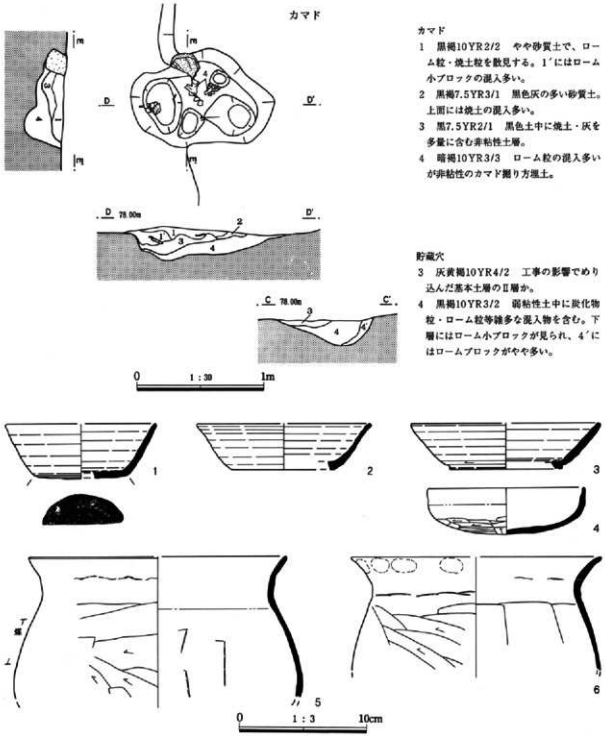
内部施設　南東隅に貯蔵穴と思われる落ち込みがある。平面円形で上面の径は60㎝前後あるが、底面は皿底状で狭く、床面からの深さ18㎝と浅い不明瞭な施設である。壁溝や柱穴は確認されていない。

床　住居東半ではカマド下を除いて地山をほとんどそのまま床面とし、住居中央付近にはロームブロック混じりの貼り床が見られる。西隅では１号溝埋没土と床下埋め戻し土との区別は不明瞭である。床面通有の汚れは少ない。細かな凹凸のあるほぼ水平な床面だが踏み固めは弱く、１号溝上では特に判りにくくなっている。



２号住居
1　黒褐10YR3/2　基本土層のⅥ層。パミスの混入は不均等。焼土等住居的な混入物は少ない。工事の影響で著しく硬化している。1'はカマド付近に見られるローム粒の多い層だが、焼土・灰等の混入は少ない。
2　にぶい黄褐10YR4/3　灰黄褐色シルト質土に黒色土・ローム土の混じる床下埋土。

第26図　２号住居



カマド

1　黒褐10YR2/2　やや砂質土で、ローム粒・焼土粒を散見する。1′にはローム小ブロックの混入多い。

2　黒褐7.5YR3/1　黒色灰の多い砂質土。上面には焼土の混入多い。

3　黒7.5YR2/1　黒色土中に焼土・灰を多量に含む非粘性土層。

4　暗褐10YR3/3　ローム粒の混入多いが非粘性のカマド掘り方埋土。

貯蔵穴

3　灰黄褐10YR4/2　工事の影響でめり込んだ基本土層のⅡ層か。

4　黒褐10YR3/2　弱粘性土中に炭化物粒・ローム粒等雑多な混入物を含む。下層にはローム小ブロックが見られ、4′にはロームブロックがやや多い。

第27図　2号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　6点を図示した。1/2個体以上にまで復元できた遺物はない。**甕5**はカマド火床上に散乱するような状態で出土した小破片が接合したもので、本住居に確実に伴う遺物である。須恵器杯は3点でいずれも埋没土出土の破片であるが、**甕**とは齟齬のない時期の遺物である。**4**の土師器杯と**6**の**甕**は本住居床下の1号溝埋没土出土であるが、本住居に近い時期の遺物であり、本住居に伴う可能性のある遺物と判断して掲載した。

その他の遺物　総数約120片で薄手土師器**甕**の微細片が半数を占めている。須恵器片は5％以下で、刷毛目のある**甕**類破片も若干混じっている。

３号住居　（第28・29図　ＰＬ－４）

位置　855－815G

重複　遺構確認段階では把握できず住居内土坑としたが、後出する土坑がある。

主軸方向　N－50°－E

面積　8.52㎡

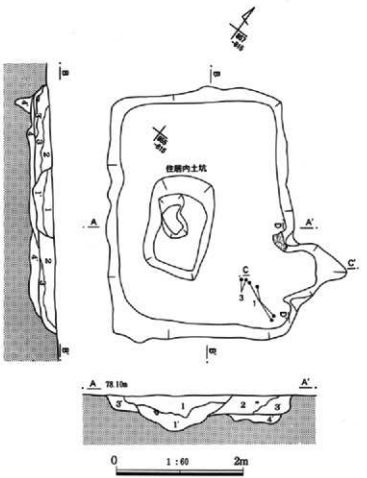
形態　長辺3.7m、短辺2.7mの、隅の整った南北に長い横長長方形を呈している。

壁　ほぼ全体に30cm近い残存壁高がある。北側に垂直に近い立ち上がりを留めている部分があるが、南東壁の崩落がすすんでいる。

カマド　北東壁の南隅にある。燃焼部は壁際から外にあり、煙道は壁外へ80cm張り出している。袖はローム土で築いているが、壁際しか残存していない。北袖には長さ20cmの扁平な礫が据えられており被熱していた。掘り込みは見られないが補強材の可能性がある。その他にも燃焼部から焚き口直前にかけて拳大の礫の出土は多かった。

内部施設　柱穴・壁溝・貯蔵穴のような施設は何も確認できなかった。

床　大きく波打つような凹凸のある床面である。中央から南西側にかけて掘り下げ面をそのまま床面としている部分があるが、他は細かな凹凸のある掘り方がある。底面は小ピット群のような観を呈しているが、掘り下げ工具痕ではないようである。柱穴状の窪みも底面が皿底状で浅い、不明瞭なものである。



掘り方

３号住居

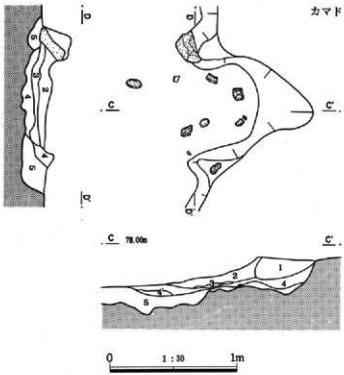
1　暗黄褐10YR4/2　土坑埋没土。基本土層のⅣ層に近い。ローム粒を少量含むしまり強い層。1′には混入物がほとんどない。

2　黒褐10YR2/2　粒径不揃いでややしまり欠く層。

3　黒褐10YR2/3　ローム粒・炭化物粒を霜降り状に含むややしまり強い層。

4　暗褐10YR3/3　床下埋土としてはしまり欠く非粘性土層。ローム小ブロック散見。4′にはローム土の混入多く、しまり強い。

第28図　３号住居



カマド

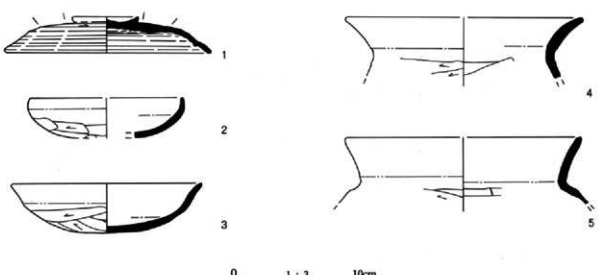
1　黒褐10YR3/1　基本土層Ⅲ層に近い土か。焼土等のカマドに関わる混入物なく、後世の別遺構の可能性もある。

2　暗褐10YR3/3　ローム土・焼土・灰等の雑多な混入物含む弱粘性土。

3　暗青灰5BG3/1　やや青色味がかった灰のほぼ純層。

4　黒褐10YR2/2　しまりある弱粘性土層。焼土・灰・ローム小ブロック等を含む。

5　ローム状土のブロック主体カマド基部構築材。



第29図　3号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　5点を図示した。カマド前付近から出土した須恵器壷1と、土師器杯3が本住居に確実に伴う遺物である。土師器甕5は掘り方中の出土で、その他は堆没土中の出土である。

その他の遺物　住居の全域に散らばるようにして総数約400片出土している。須恵器は十数片と少ない。土師器は甕・杯類ともやや大形の破片が混じっている。高杯・器台・内斜口縁や刷毛目のある台付甕など古墳時代前期遺物の混入がやや多く、1割以上を占めている。第29図に示した14のような大型破片も混じっている。内耳鍋の大破片など後世遺物の混入も僅かに見られる。擧大の礫の出土も多い。

４号住居　（第30図　ＰＬ－５）

位置　860－815G　西側半分は調査区域外で、北隅も壊されている。

重複　５号住居に先出している。

主軸方向　Ｎ－30°－Ｗ

面積　6.16㎡（残）

形態　西側・北側が不明で全容はつかめない。南壁は3.0mで、東壁は2.9m以上ある。正方形もしくは南北に長い長方形となろう。東壁は弧状に膨らみ、かなり歪んでいる。

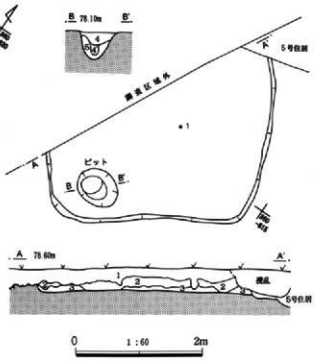
壁　残存壁高は最大８㎝で、３㎝前後の部分が多い。立ち上がりも不明瞭である。

内部施設　南隅に用途不明のピットがある。床面での規模は56×49㎝、深さは40㎝を測る。配置からは貯蔵穴が想定されるが、底面は狭く、断面は柱穴状で不明瞭である。壁溝やその他の柱穴は確認できず、カマドや炉等の痕跡も調査範囲には確認できない。少なくともカマドの存在は考えにくい。

床　掘り込み面であるローム面をそのまま床面としているが、踏み固めは弱い。床面通有の焼土や灰による汚れがあり、確認は容易であった。水平に近い床面だが、壁際やピット周辺が住居中央より２～３㎝低くなっている。

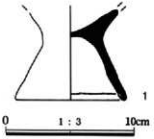
出土遺物　台付甕１が住居ほぼ中央の床直上から出土している。この他に須恵器有台杯も床面付近から出土していて、平安時代の遺構となる可能性もあろう。

その他の遺物　総数80片ほどで少ない。土師器は杯・甕とも小破片である。杯類は底部に丸みの残る古墳時代後期と思われる破片が多い。須恵器は細片１片のみである。本住居の時期と思われる古式土師器は全体の半分に満たない。拳大の礫が数点出土している。



４号住居
1　基本土層のⅠ層
2　基本土層のⅡ層
3　黒褐10YR2/2　しまり強い弱粘性土で、焼土・灰等の混入多い。

ピット
4　黒褐7.5YR3/1　しまりやや欠く赤粘性土。上面に焼類不明のパミスやや多い。4'では混入物少なく黒色味おびる。
5　黒褐５YR2/2　ロームブロック混じりの弱粘性土。



第30図　４号住居および出土遺物

５号住居　（第31図　ＰＬ－５）

位置　865－815G

重複　4・35号住居に後出し、36号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－8°－Ｗ

面積　4.21㎡（残）

形態　西側の大半が調査区域外で、隅も南東しか確認できない。全容は不明だが南辺は2.7m以上、東辺は3.5m以上になる。確認できたピットが柱穴であれば、比較的大型の住居となろう。

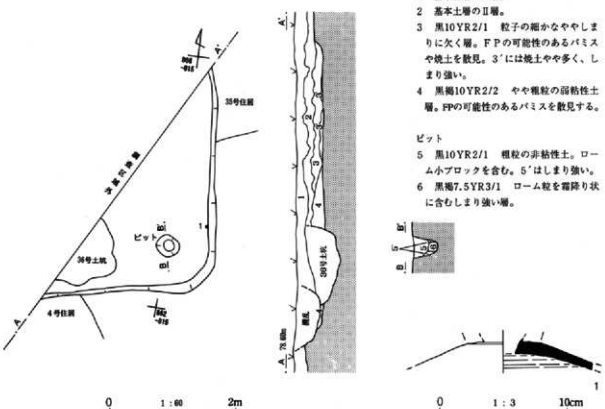
壁　残存壁高は15cm前後ある。やや緩やかな立ち上がりだが、壁の大きな崩れは見られない。

内部施設　南東隅に柱穴状のピットがあるが、断面観察からは柱穴と確認できない。平面は正方形に近く、径は37×35cm、深さ39cmである。カマド・炉等の施設は調査範囲では不明である。カマドの時期の住居と思われることから、本遺跡では少ない北カマドの住居となる可能性がある。

床　掘り方をほぼそのまま床面としている。踏み固めはあまり強くない。ほぼ水平な床面だが壁際が住居中央より２～３cm低くなっている。

出土遺物　東壁南寄りの壁際床直上で須恵器蓋１を出土しており、本住居に伴う土器と推定した。

その他の遺物　総数80片ほどで少なく、小破片が中心である。土師器甕にはコの字状口縁と見られるものがある。須恵器は５％ほどで杯類のみである。古式土師器が２割近くを占めていて、台付甕台部の出土がある。４号住居や35号住居からの混入品であろう。



５号住居
1　基本土層のⅠ層。
2　基本土層のⅡ層。
3　黒10YR2/1　粒子の細かなややしまりに欠く層。ＦＰの可能性のあるパミスや焼土を散見。3'には焼土やや多く、しまり強い。
4　黒褐10YR2/2　やや粗粒の弱粘性土層。FPの可能性のあるパミスを散見する。

ピット
5　黒10YR2/1　粗粒の非粘性土。ローム小ブロックを含む。5'はしまり強い。
6　黒褐7.5YR3/1　ローム粒を霜降り状に含むしまり強い層。

第31図　５号住居および出土遺物

６号住居　（第32・33図　ＰＬ－５）

位置　885－805Ｇ　西隅は調査区域外になる。

重複　19・21号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－72°－Ｅ

面積　9.49㎡（残）

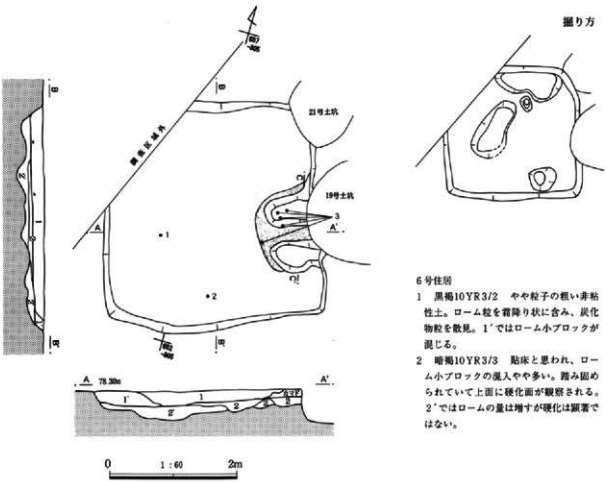
形態　西隅の他に北隅も重複遺構に壊されているが、一辺3.3m前後のほぼ正方形になろう。

壁　残存壁高は15cm前後で、全体が緩やかに立ち上がっている。

カマド　東壁の南寄りにある。煙道部分を重複する土坑に大きく壊されていて、壁外への張り出しは不明である。袖部分の残存状態はあまり良くないが、住居内に大きく張り出しており、燃焼部は住居内にあったと思われる。炭化物・灰等が袖の外側の床面にも見られ、カマドの作り直しが行われているようである。

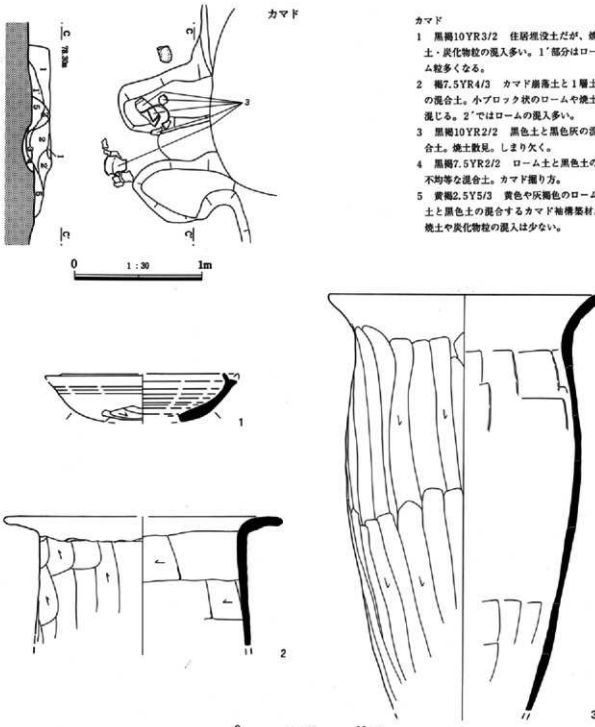
内部施設　柱穴・貯蔵穴・壁溝等の施設は何も確認できなかった。

床　全面に貼床があり、比較的強く踏み固められている。凹凸が多く、特に住居中央付近が窪んでいて５cm前後の高低差がある。掘り方には大型の土坑状のものがある。南東壁下東寄りにある平面不整楕円形の掘り方は底面が平坦で貯蔵穴の可能性のある施設だが、配置はやや不自然である。この掘り方上面にも貼り床を確認している。



６号住居
1　黒褐10YR3/2　やや粒子の粗い非粘性土。ローム粒を霜降り状に含み、炭化物粒を散見。1'ではローム小ブロックが混じる。
2　暗褐10YR3/3　貼床と思われ、ローム小ブロックの混入やや多い。踏み固められていて上面に硬化面が観察される。2'ではロームの量は増すが硬化は顕著ではない。

第32図　６号住居



第33図　6号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　3点を図示した。1の須恵器杯は住居中央付近の床直上、2の土師器甕は南壁際で、カマドから離れた住居内の出土遺物である。3の甕はカマド焚き口付近の大破片が北袖周辺に散乱していた破片と接合したものである。

その他の遺物　総数約350片が出土している。やや厚手の長胴甕胴部の大破片があり、他は小破片である。須恵器は5％以下である。古式土師器の混入は少ない。土師器杯には口縁は模倣杯類が多く、底部片からは大形品と推定できるものが多い。

７号住居　（第34～37図　ＰＬ－５）

位置　885・890－800Ｇ

重複　８・24号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－71°－Ｅ

面積　9.59㎡（残）

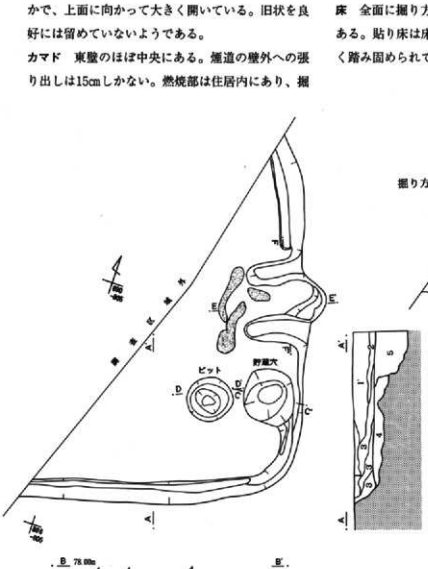
形態　西側の大半が調査区域外になり全容は不明である。東辺は5.4m以上、南辺は4.0m以上あり、大型住居になりそうである。

壁　残存壁高は30cm前後あるが、立ち上がりは緩やかで、上面に向かって大きく開いている。旧状を良好には留めていないようである。

カマド　東壁のほぼ中央にある。煙道の壁外への張り出しは15cmしかない。燃焼部は住居内にあり、掘り方内に黒色灰を敷いた防湿層を築いている。袖部はローム状土で構築してあるが残存は良好である。

内部施設　貯蔵穴と柱穴状のピット１基がある。貯蔵穴は浅く小規模である。ピットは床面からの深さが61cmあり４主柱穴を構成しよう。住居埋没時には開口していなかったようで、表層に見られる焼土等の混入物が中層以下には見られない。他に、調査範囲内では、幅・深さとも10cm前後の壁溝がカマド南脇を除き巡っている。

床　全面に掘り方があり、底面は土坑やピット状である。貼り床は床下土坑の上面で顕著に見られ、強く踏み固められている。



７号住居

1　黒褐10YR3/2　基本土層の覆層に近い。やや粒子の細かな弱粘性土。ローム粒・焼土粒を少量含む。1′は黒色味強い。

2　オリーブ褐2.5Y4/3　黒色土とローム状土の混合土でしまりあり。当初床面を想定した。カマド崩落土の流れ込みと思われ、焼土や灰の混入もやや多い。

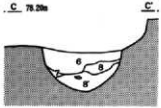
3　暗褐10YR3/3　弱粘性土中にローム粒を混入する。焼土は少ない。しまりあり。3′はややしまり欠き、炭化物粒を含む。

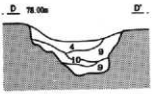
4　黒褐7.5YR2/2　黒褐色土とローム土が不均等に混じる床下埋め戻し土。表面に灰や焼土が見られ床面と確認できるが、踏み固めは強くない。

5　褐7.5YR4/3　弱粘性土に多量のローム粒を霜降り状に含む床下土坑埋没土。5′には焼土粒が混じる。

第34図　７号住居

A 1区の竪穴住居





0　1：30　1m

貯蔵穴

6　黒褐10YR2/3　ローム粒・焼土・炭化物粒を不均等に含む微粘性土。

7　黄褐10YR5/6　壁崩落土のローム状土。

8　黒褐10YR2/2　ローム粒を不均等に含む弱粘性土でしまり強い。焼土粒散見。8′はしまりやや欠き、粘性は強い。

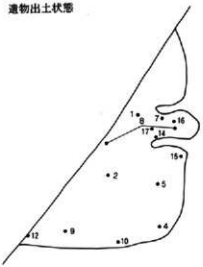
ピット

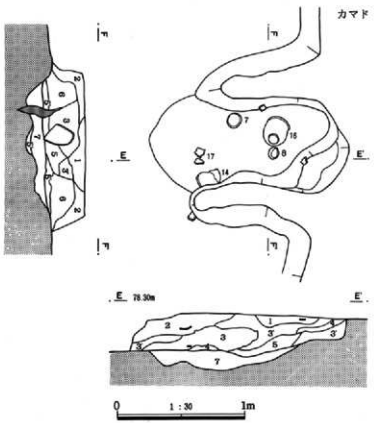
4　黒褐10YR3/2　ローム小ブロックを不均等に含むしまり強い層。焼土混じる。貼り床材の可能性。

9　灰黄褐10YR4/2　ローム小ブロックを少量含む弱粘性土。他の混入物少ない。

10　黄褐2.5Y5/3　地山と同じローム状土小ブロックと黒色土の混合土。他の混入物少ない。

遺物出土状態





0　1：30　1m

第35図　7号住居カマド

カマド

1　黒褐10YR2/2　混入物の少ない弱粘性土。後世の撹乱の可能性。

2　黒褐10YR2/3　住居堆積土の黒褐色土にカマド崩落土が不均等に混じる。

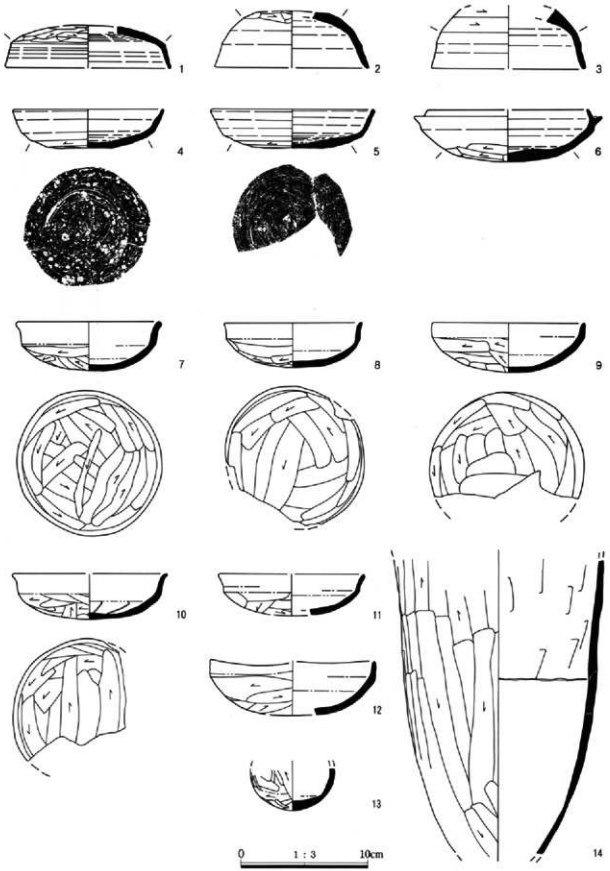
3　暗褐10YR3/3　カマド構築材の黄褐色粘性土の混入やや多い層。3′では焼土の混入やや多くなる。

4　焼土の混入の多い層

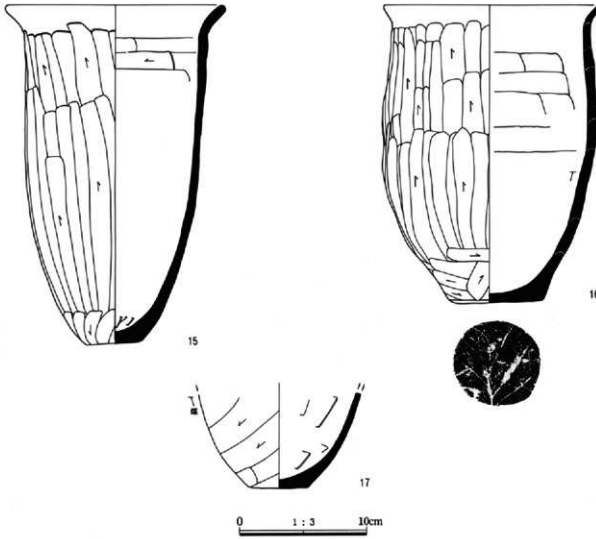
5　黒褐5YR2/2　黒色味の強い灰を主体とする層で、粘性土や焼土が混じる。5′には粘性土少なく、炭化物粒の混入多い。

6　にぶい黄2.5Y6/3　混入物の少ないローム状土によるカマド袖基部。

7　暗褐7.5YR3/3　ローム小ブロック・焼土ブロック・黒色土の混合土。カマド掘り方埋め戻し土。



第36図　７号住居出土遺物（１）



第37図　７号住居出土遺物（２）

出土遺物　調査範囲が狭いにもかかわらず多数の遺物を出土し、17点を図示した。器種は限られている。甑14はカマド内南袖脇の出土で、袖芯材として使われていた可能性がある。甕16は燃焼部内で倒置した状態であった。二次被熱の影響は極端ではなく、支脚に転用されたものではなさそうである。甕15は東壁際カマド南袖脇に、正位で壁に立てかけられるようにしてあった。杯類を中心に南壁際からの出土が多い。須恵器蓋杯類が目立つ。須恵器杯４のような完形品が含まれるが、床面から若干浮いた状態での出土である。カマド内からも土師器杯７・８のほぼ完形品が出土している。

その他の遺物　破片数は約500点あるが、小破片が大半である。土師器杯類は図示したものと同時期だが別個体のやや大形破片がある。甕類はやや厚手とやや薄手の両者がある。須恵器は細片のみで１％に満たない。叩きのある甕破片が混じる。古式土師器の混入は少ない。また、南壁際からは鷹編み石の可能性のある礫の出土がある。床面からは浮いた状態で、大きさは一定でないうえ、割れ石も多く、鷹編み石であるとの確認はできない。

８号住居　（第38～40図　ＰＬ－６）

位置　890・895－800G

重複　７号住居、23・68・74号土坑に先出する。

主軸方向　N－58°－E

面積　5.12㎡（残存推定）

形態　西側の大半が調査区域外となり、全容は不明である。東壁が3.0m、南壁が2.5m分確認できる。カマドの位置から推測して一辺が５m近い大型住居になる可能性がある。

壁　残存壁高は20cm前後で、垂直に近い立ち上がりをしている。

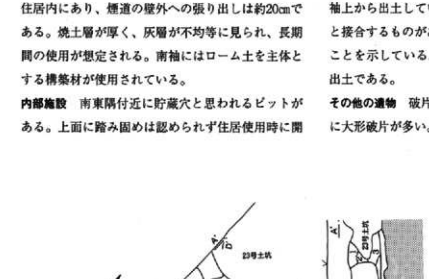
カマド　東壁にある。火床と北袖部を後出する土坑に大きく壊され残存状態は悪い。燃焼部は壁際から住居内にあり、煙道の壁外への張り出しは約20cmである。焼土層が厚く、灰層が不均等に見られ、長期間の使用が想定される。南袖にはローム土を主体とする構築材が使用されている。

内部施設　南東隅付近に貯蔵穴と思われるピットがある。上面に踏み固めは認められず住居使用時に開口していた施設で、平面は隅丸方形で長軸68×短軸55cm、床面からの深さ48cmの規模がある。底面は二段底状になり、断面も柱痕は確認できないが柱穴状になっていて、貯蔵穴とするには疑問点もある。壁溝は確認できない。

床　全面に掘り方があり、小ピット状の深さ10cm前後の窪みが不規則に見られる。明瞭な貼り床は認められず。掘削時の窪みを埋める程度の企画性の無いものである。

出土遺物　カマド内およびカマド前面を中心に出土した土器９点と勾玉１点を図示した。土器の構成は土師器杯と甕の２種のみである。カマド内からの出土が目立ち杯１と甕６～８が燃焼部から、杯２が南袖上から出土している。特に８は住居外出土の破片と接合するものがあり、カマドが攪乱を受けていることを示している。杯４・５、勾玉10は埋没土内の出土である。

その他の遺物　破片数約500点で、土師器杯類を中心に大形破片が多い。大形鉢底部は２個体分以上ある。

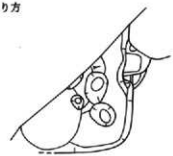


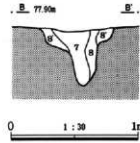
８号住居
1　基本土層のⅠ層。
2　暗褐10YR3/4　粒子の細かなしまり強い層。2′ではやや大粒の焼土少量含み、しまりやや弱い。
3　暗褐10YR3/3　2層土に近い。ローム小ブロックやや多く、焼土の混入は少ない。
4　黒色灰を主体にした層で焼土粒混じる。
5　褐10YR4/4　ローム状土を主体とし、焼土や灰の混入もやや多い。カマド崩落土と思われる。
6　暗褐　しまり強い床堆の灰し土。ローム土や焼土・灰を不均等に含む。

第38図　８号住居

A 1区の竪穴住居

掘り方





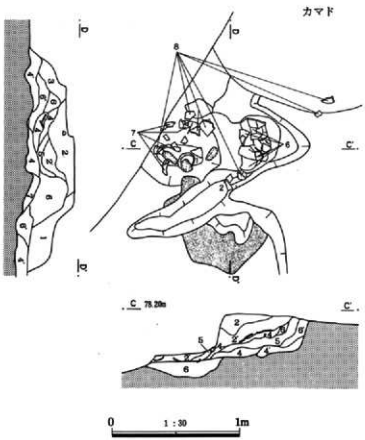
遺物出土状態

ピット

7　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土。ローム粒を少量含み、焼土・炭化物粒散見。ややしまり強い。

8　にぶい黄褐10YR5/4　ローム状土ブロック主体に黒色土をブロック状に含む。柱の根固め土と思われる。8′は黒色土の混入多く、ややしまり欠く。

カマド



カマド

1　暗褐10YR3/3　しまりあるやや砂質土。ロームブロック散見する。

2　褐10YR4/4　しまりある固粘性土。不揃いの焼土ブロックを不均等に含む。2′ではロームブロックや焼土の混入多い。

3　にぶい黄橙10YR6/4　しまり強い粘性土で崩れたカマド袖と思われる。焼土を不均等に含む。

4　黒褐10YR2/2　黒色灰を主体とし、ローム粒や焼土粒を散見する。4′は粘性土との混合土。

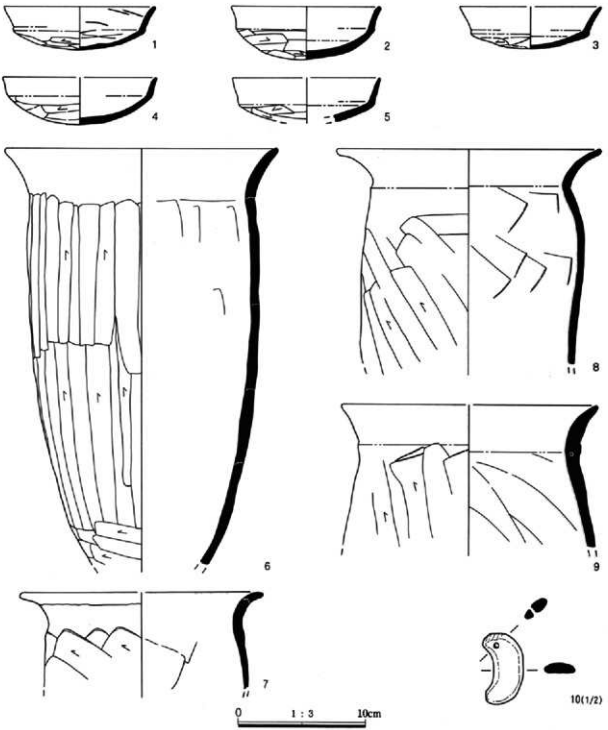
5　暗赤褐2.5YR5/8　被熱したローム土による焼土ブロックを主体とする層。色調やブロックの大きさは不均等。しまり欠く。

6　にぶい黄褐10YR5/3　黄色味をおびた粘性土でしまりの強いカマド構築材。6′ではロームや焼土のブロック、灰、黒色土が不均等に混じる。しまりやや欠く。

7　黄褐10YR5/6　カマド袖基部構築材のローム状土ブロック。

杯は模倣杯が中心となっている。甕は厚手とやや薄手の両者がある。須恵器は著しく少なく１％に満たない。古式土師器の混入も少ない。表層遺物に幕末以降の陶磁片や焙烙片を含み、重複土坑の年代にあたるものと思われる。

その他に薦編み石の可能性のある自然石がカマド内やカマド前の床面から７点出土している。半欠品の１点を除いた大きさは、長さ15～11cm、重さ460～190ｇで差が大きく、画一的なものではない。



第40図　８号住居出土遺物

９号住居　（第41～43図　ＰＬ－６）

位置　855－810Ｇ

重複　29号住居に後出か。

主軸方向　Ｎ－106°－Ｅ

面積　9.85㎡

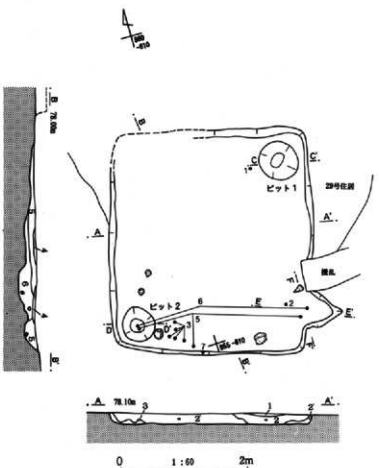
形態　29号住居と重複する北西隅が不明瞭であったが、長辺3.4ｍ、短辺2.9ｍの南北に長い横長長方形になる。隅は直角に近く比較的整ったプランを呈している。

壁　残存状態の良い部分では壁高15cm前後で、垂直に近い立ち上がりである。

カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は壁際から壁外にあり、煙道は壁外へ50cm張り出している。支脚に使用した礫が据えられたまま確認されている。袖はほとんど残存していないが、北袖基部に袖石と思われる礫が据えられている。ここから約30cm離れた対になる南袖基部に、礫の抜けたような窪みが確認されている。礫は焚き口部分とカマド前の２箇所から出土しており、どちらかが袖石であったと思われる。天井部構築材も断面観察からは明瞭にできていない。

内部施設　南西と北東隅の２カ所に性格不明のピットがある。２基とも平面プランは円形を呈している。ピット１は床面での径64×57cm、深さ28cmで底面はやや狭い。ピット２は径55×51cm、深さ20cmで底面は比較的平坦である。どちらも貯蔵穴的な様相である。柱穴や壁溝は確認できない。

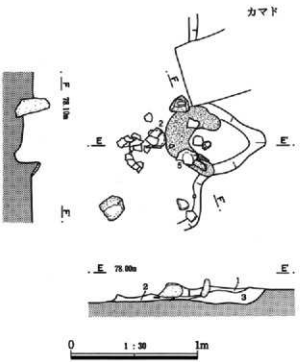
床　ほぼ水平な床だが、ピット１周辺が他に比べ２～３cm窪んでいる。また、壁際がやや高くなる傾向がある。カマド付近では深く、他の部分では浅い掘り方があるが、重複する29号住居の掘り方と区別の難しい部分が多かった。部分的に貼り床が見られる。



９号住居
1　基本土層のⅡ層か。著しくしまり強い。
2　黒褐10YR2/2　基本土層のⅦ層に近い。しまり強い。焼土・炭化物粒散見。2'は混入物多い。
3　暗褐10YR3/3　他層に比べしまり欠く。ローム小ブロック含み、炭化物粒やや多い。
4　灰黄褐10YR4/2　弱粘性の黒色土とローム状土の混合土で、焼土散見。貼り床。
5　黒褐10YR2/2　やや粒子粗い弱粘性土。ローム小ブロックや焼土を不均等に含む床下埋め戻し土。
6　29号住居床下埋め戻し土。

第41図　９号住居

ピット
7　黒褐10YR3/2　ローム粒・焼土等を霜降り状に含む弱粘性土で、ややしまり強い。7'は混入物多い。
8　黒10YR2/1　黒色灰を多量に含むしまり欠く層。不揃いのロームブロック混じる。
9　灰黄褐10YR5/2　不揃いのロームブロックと7'層土の混合土。しまりあり。

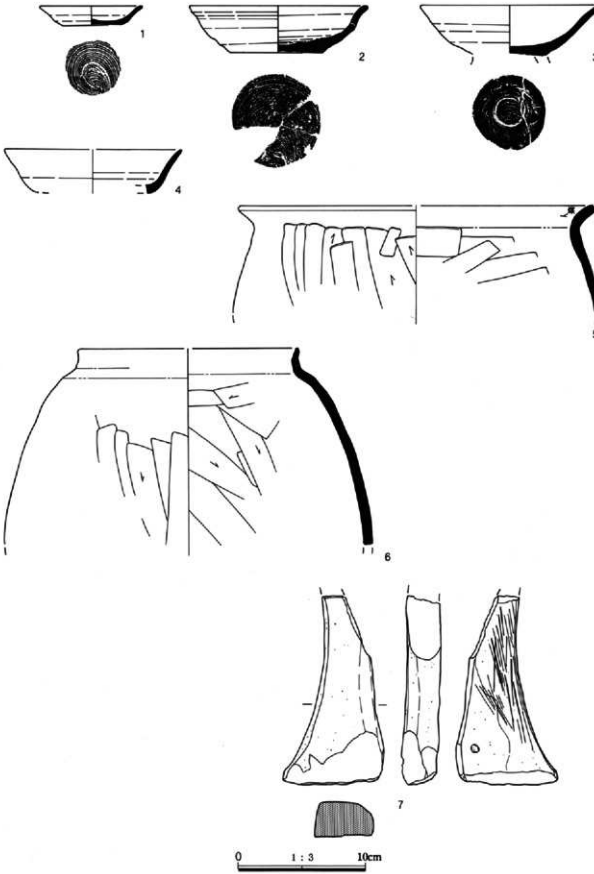


カマド
1　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土。黒色灰を少量含む。ややしまりあり。
2　黒褐10YR2/2　黒色灰中心のややしまり欠く層。焼土散見。
3　黒褐10YR3/2　1層土にローム粒を霜降り状に混入。灰の混入は少ない。

第42図　9号住居ピット断面およびカマド

出土遺物　土器６点と砥石１点を図示した。杯類は須恵器、甕類は土師器と分かれている。土師器甕５・６は、どちらもカマドの出土であるが、ピット２内の出土破片と接合するのが特徴的である。須恵器杯類は散乱した状態で、１がピット１際、２はカマド前、３はピット２際の床面から出土している。４は埋没土内の遺物である。砥石７は南壁に密着した状態で出土している。

その他の遺物　破片数は約1500片と多い。薄手・やや薄手の土師甕や須恵壺に大破片がある。須恵器は多く30％ほどあり、杯類が目立っている。図示した遺物の傾向とは逆に住居北半出土の破片が多く、南半出土の２倍以上になる。掘り方内の遺物は５％ほどで、図示遺物より古い時期（７Ｃ後半～８Ｃ前半）の土器が多い。ピット内からも細片が出土している。古墳時代遺物（後期）がわずかに混じっている。径10cmほどの礫が床面直上で住居内全域に散乱するようにして出土している。



第43図　9号住居出土遺物

10号住居　(第44～46図　P L－6)

位置　915－790G　東側を4号溝に切られ、西隅先端は調査区域外になっている。

重複　11・28号住居に後出し、4号溝、27号土坑に先出している。

主軸方向　N－22°－W

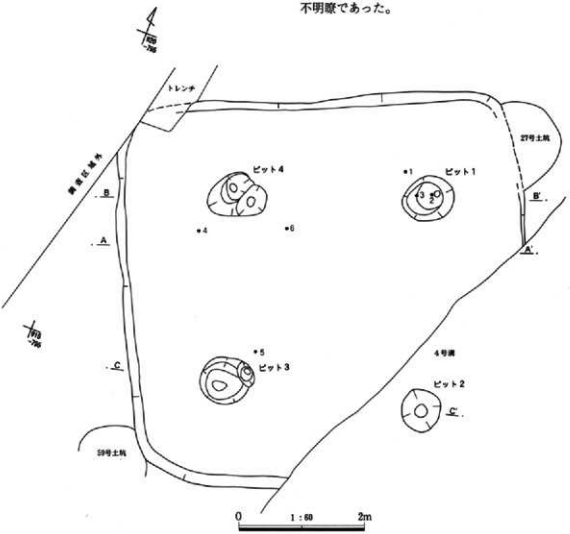
面積　25.42m²(残)

形態　北壁が推定5.9m、西壁が推定5.4mあり、本遺跡中では最も大型の竪穴住居の部類に入る。ピット2の位置から東壁は西壁より長くなり、台形気味のプランを呈す可能性がある。

壁　残存壁高は10～14cmで、やや緩やかに立ち上がっている。

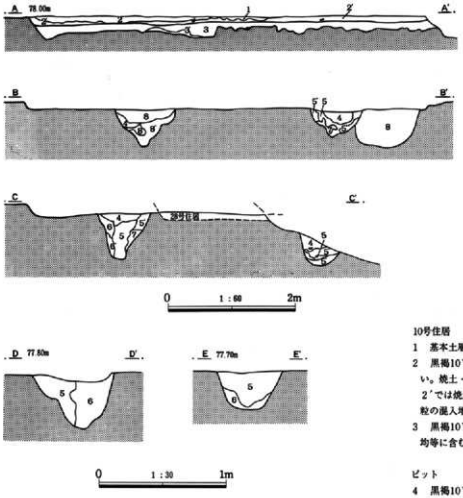
内部施設　カマドを持つ時期の住居であるが、痕跡は確認できなかった。東壁やや南寄りにあったものと思われる。4本の主柱穴を確認している。4主柱穴配置となるが、埋没土は一様でない。柱痕状の断面が観察されるのはピット1のみで、特にピット4は貼り床と同じ土が上面を覆っている。底面も不規則で、建て直しか抜柱があったと思われる。各ピットの床面での計測値→長軸×短軸×深さcm、は次のとおりである。ピット1→77×68×73、ピット2(確認面での計測値)→75×66×53、ピット3→85×76×73、ピット4→91×66×64。

床　凹凸があり東側がやや高く、西側と3cm前後の比高差がある。部分的に貼り床が見られ、踏み固めの強い明瞭な床が確認されている。ほぼ全面に掘り方があるが、壁際が深く、重複住居のある部分では不明瞭であった。



第44図　10号住居

A 1区の竪穴住居



10号住居

1　基本土層のⅡ層

2　黒褐10YR2/2　基本土層の切層に近い。焼土・炭化物粒を散見。しまり強い。2′では焼土やや大粒で量も多く、ローム粒の混入増える。

3　黒褐10YR3/2　ロームブロックを不均等に含む微粘性土。床下埋め戻し土。

ピット

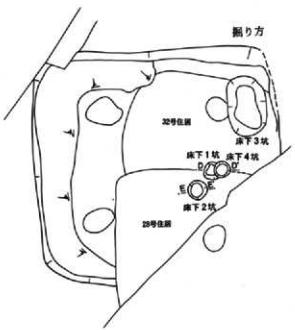
4　黒褐10YR3/2　住居埋没土に近似した土で、焼土・ローム粒を不均等に含む。

5　黒褐2.5Y3/2　4層土中に不揃いのロームブロックを含む。ややしまり欠き、5′は特にフカフカになっている。

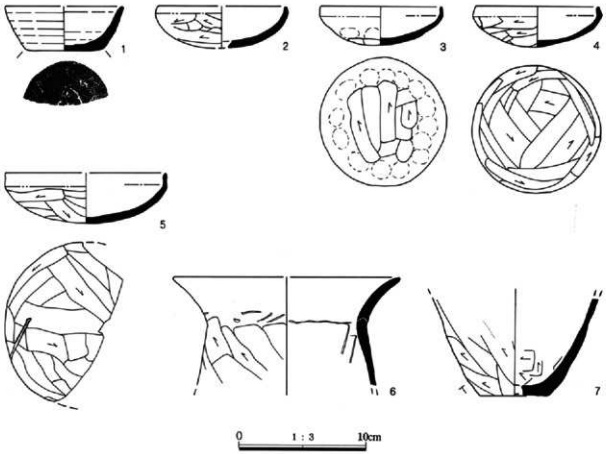
6　暗灰黄2.5Y4/2　褐色味をおびた粘性土に不揃いのロームブロックを不均等に、やや多量に含む。6′は混入物さらに多い。

7　黄褐2.5Y5/3　ロームブロック主体の層。

8　灰黄褐10YR4/2　白色味強い粘性土ブロック、焼土ブロック他の雑多な混合土。貼り床土にも近い。



第45図　10号住居断面



第46図　10号住居出土遺物

出土遺物　多量の破片数に比べ、図示できた遺物は杯類を中心に７点と少なかったが、完形の土師器杯２点が含まれている。出土状態は住居全域に散乱するような状態であった。須恵器杯１はピット１西脇の床直上、土師器杯２・３は、ピット１内の出土である。杯４と甕６はピット４周辺の床直上出土遺物である。杯５はピット３周辺精査時に出土したもので、掘り方内の出土遺物と思われる。甕７は埋没土内の遺物である。

その他の遺物　総破片数約1000片で、大形破片も多数混じっている。やや厚手で丸胴気味の甕が目立ち、口縁部破片も多いが接合できなかった。小型で丸底気味の土師器杯の破片も多い。模倣杯もわずかに混じっている。刷毛目のある甕類は１％に満たない。須恵器は２点のみである。床下出土の遺物が10％近くあり重複遺構の遺物が混入している可能性があるが、時間的に大きな差はないようである（多少、古手の古墳時代遺物が多くなっている）。重複遺構のない北西側床下の出土遺物は少ない。他に、床面レベルで住居内に散乱するようにして出土する礫も多かった。

11号住居　（第47図　ＰＬ－７）

位置　915－795G

重複　10号住居に先出している。

主軸方向　Ｎ－35°－Ｗ前後か

面積　1.43㎡（残存推定）

形態　西側の大半が調査区域外で、北側は10号住居に壊されている。10号住居の北側からは本住居の痕跡が認められないことから、調査できた範囲は住居東隅付近のみとなろう。

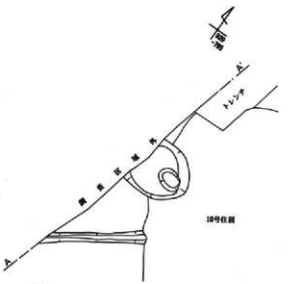
壁　遺構確認面と床面とは２㎝の高さしかない。

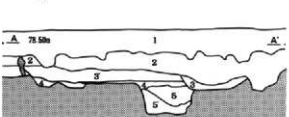
内部施設　調査範囲ではカマドや炉は確認できない。遺物の時期からカマドの存在が想定されるが、焼土や粘土等の痕跡も認められない。東壁下に床面からの深さが最大10㎝の壁溝が確認できるが、貼り床土と同じ土で埋もれている。南壁から40㎝離れた位置に床下土坑が見つかっている。床面からの深さが50㎝で、底面が平坦なしっかりした掘り込みの土坑で、配置からも貯蔵穴の可能性があろう。上面には明瞭な貼り床が施されており、住居廃絶時に開口していなかったことが分かる。

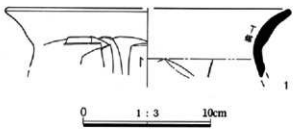
床　調査範囲のほぼ全域に不規則な掘り方があり、貼り床が部分的に確認できる。

出土遺物　図示できたのは土師器甕１点のみで、埋没土中出土の遺物である。

その他の遺物　破片総数は約100片だが、いずれも細片でボリュームはわずかである。やや厚手の土師器甕類の破片が大半で、模倣杯が少量混じっている。須恵器はなく、刷毛目のある土器の混入もほとんど見られない。







11号住居

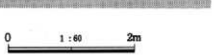
1　基本土層のⅠ層

2　基本土層のⅡ層

3　黒褐10YR2/2　粒子のやや細かな弱粘性土層。ローム粒・焼土粒を少量含む。10号住居の埋没土か。2′は基本土層Ⅵ層に近く、粒径やや粗くなり、しまり強くなる。焼土・炭化物粒を霜降り状に含む。11号住居の複汚土である。

4　にぶい黄褐10YR4/3　上面にロームブロックの多い貼り床。4′は大粒のロームブロックの多い床面覆め戻し土。

5　褐10YR4/4　ＹＰを多量に含む床下土坑埋め戻し土。5′には黒色土の混入多い。



第47図　11号住居および出土遺物

12号住居　（第48図　ＰＬ－７）

上面から黒色味をおびた落ち込みとして把握していた一画だが、重複する土坑を処理するうち、明瞭な壁の立ち上がりが見つからないまま床面まで達し、掘り方の様子から竪穴住居と分類した遺構である。埋没土内には焼土等の混入が見られたが、特に住居埋没土らしい土ではなかった。

位置　840－800G

重複　40・53・67号土坑と８号溝に先出し、73号土坑に後出している。

主軸方向　N－34°－E

面積　8.27㎡

形態　北東辺は不明だが、北西辺は北隅直前まで確認できている可能性がある。短辺2.9m、長辺3.0m以上の隅円方形を呈すと思われる。

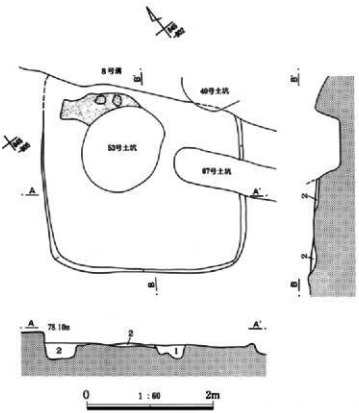
壁　残存壁高は最大でも７cm前後で、垂直に近い立ち上がりをしている。

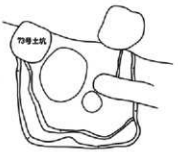
炉　住居北側の西方に偏って、床面に灰や焼土が集中して見られる。住居北寄りにあった炉が53号土坑に壊されたものと想定している。

内部施設　炉やカマドの他、柱穴・貯蔵穴・壁溝等の施設は確認されていない。

床　凹凸が多く踏みかためる弱い、不明瞭な床である。壁際を巡る幅太の壁溝ような掘り方がある。住居中央ではローム状土の地山をそのまま床面とし、掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度で、浅い貼り床が部分的に見られる。

出土遺物　極端に出土遺物の少ない遺構である。時期不明の薄手の土師器細片が数片出土したのみで、図示できる遺物はなかった。





12号住居

1　黒褐10YR3/2　しまり強い非粘性土層。ローム小ブロック・焼土等を不均等に含む。本住居に後出する別遺構の可能性あり。

2　暗褐10YR3/3　しまり強い弱粘性土層。ローム小ブロックやや多い。住居埋め戻し土。2´はローム土の混入多く、しまりやや欠く。

第48図　12号住居

13号住居　（第49・50図　ＰＬ－７）

位置　870－795G

重複　４号溝・63号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－68°－Ｅ

面積　6.36㎡（残）

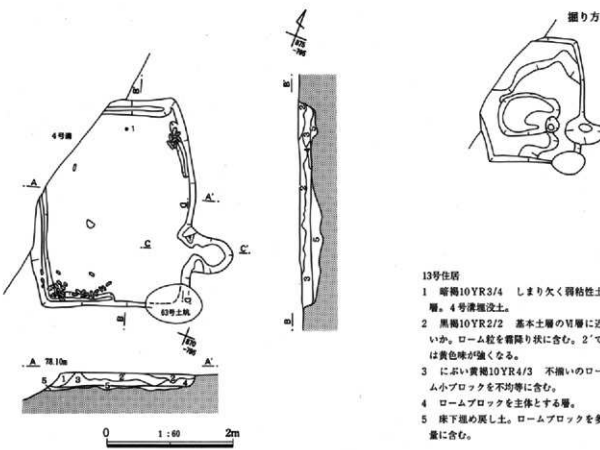
形態　西側および南東隅が壊されているが、短辺2.3m、長辺3.1mの、比較的整った横長長方形を呈すと思われる。

壁　ローム状土の壁である。残存壁高は10～21cmで、やや緩やかに立ち上がっている。

カマド　東壁の南寄りにある。燃焼部は壁際から壁外にあり、煙道は壁外60cm張り出す。火床は住居床面より３cmほど高くなっていて、そのまま煙道へ向かって緩やかに立ち上がっている。袖は残存状態が悪く、北袖にはローム土による基部が若干残るが、南袖はほとんど崩れている。火床下の掘り込み下部には灰が多量に敷かれており、除湿材として使用された可能性がある。

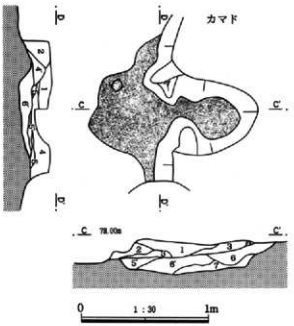
内部施設　カマド周辺や北隅で部分的に途切れる不規則な壁溝がある。床面からの深さは２～５cmだが、底面レベルはほぼ水平になっている。壁溝上の礫の出土状態から、住居廃絶時には埋没していたことが判る。柱穴や貯蔵穴は確認できない。

床　ローム土上にある凹凸の多い床面で、４cm前後の比高差がある。ほぼ全面に不規則で深い掘り方があり、西側の壁際が特に深くなっている。埋め戻し土の上面は貼り床状になっているが、踏み固めはあまり強くない。



13号住居
1　暗褐10YR3/4　しまり欠く弱粘性土層。４号溝埋没土。
2　黒褐10YR2/2　基本土層の Ⅶ層に近いが。ローム粒を霜降り状に含む。2′では黄色味が強くなる。
3　にぶい黄褐10YR4/3　不揃いのローム小ブロックを不均等に含む。
4　ロームブロックを主体とする層。
5　床下廻の焼し土。ロームブロックを多量に含む。

第49図　13号住居



カマド

1　褐10YR4/4　ローム状土を多く含む粘性土に、焼土が霜降り状に混じる。

2　暗褐10YR3/3　焼土・ローム粒等を含む住居埋没土とカマド崩落土の混合土。

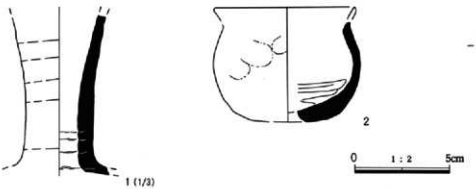
3　にぶい黄褐10YR5/4　ローム状土主体のカマド構築材。

4　暗褐10YR3/3　カマド南袖部分だが、構築材はほとんど崩落しており、焼土の多い１層土という状態である。4′では焼土粒の混入多い袖の再構築部分。

5　暗褐10YR3/3　黒色灰・焼土粒のやや多い粘性土層。5′部分は灰とローム状土がブロック状に混じる床下部分。

6　暗赤褐2.5YR3/2　不揃いの焼土・炭化物粒・灰・ローム状土がブロック状に混じる床下土。6′では焼土は少なく、炭化物粒が多い。

7　にぶい黄褐10YR4/3　ロームブロック中に多量の黒色灰をブロック状に含む。床下の除湿目的の埋め戻し土と思われる。



第50図　13号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　図示できたのは３点のみで、杯・甕等の土器類が含まれていない。須恵器長頸壺１は北壁下の床上７㎝の高さから出土した遺物で、土師器小型壺２・石製品３は埋没土中の出土である。

その他の遺物　破片数は300片弱で小破片が多い。土師器はやや薄手の甕破片が主体で壺類も混じっている。杯類は少なく、口縁破片は数片のみで、模倣杯は見られない。須恵器は小片２片のみで、刷毛目のある土器も全体の５％に満たない。床下出土遺物はほとんどない。その他に南隅付近の床直上～数㎝浮いた状態で、ならびに東壁下北隅ではすべて床直上から、合計41点の鳶編み石状の自然石がまとまって出土している。特に東壁下の８点は壁際にまとめて置いたように密集した状態であった。いずれも大きさの近似した礫群であり、鳶編みに使われたものと思われる。

14号住居　（第51・52図　ＰＬ－７）

位置　875－795Ｇ　西隅は４号溝に、南隅は72号土坑に、北隅は撹乱に壊されている。

重複　４号溝、72号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－143°－Ｅ

面積　7.20㎡（残）

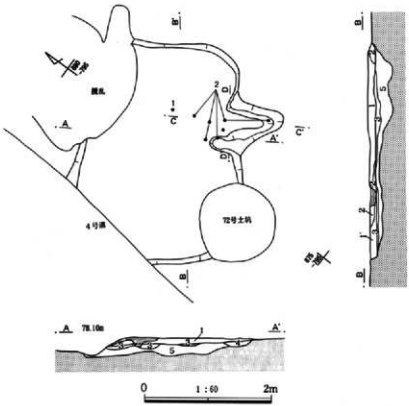
形態　重複遺構や撹乱などのため、隅は東側のみの残存となっている。長辺3.1m、短辺推定2.5mの北西辺のやや長い、台形気味に歪んだ横長長方形を呈している。

壁　開口部はローム状土上にあるが、立ち上がり部分は明瞭なローム土内にある。遺存状態は悪く、緩やかに立ち上がっている。残存壁高は10cm以下で、２cm前後の場所が多い。

カマド　南東辺の北寄りにある。燃焼部は住居床面と同レベルの壁際から壁外にかけてにあり、煙道は壁外へ55センチ張り出している。袖の残存状態は悪く、構築材は不明瞭である。西袖基部付近に自然石があるが、床面より浮いた状態で被熱痕もなく、芯材ではないと考えた。

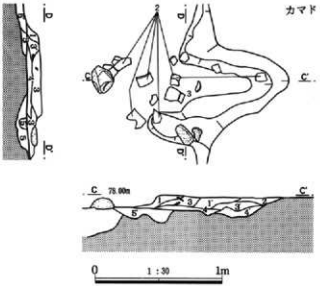
内部施設　貯蔵穴・柱穴・壁溝等の施設は確認できなかったが、重複遺構に壊された可能性もある。

床　ほぼ水平な床面だが、壁際が僅かに低く、住居中央と２cm前後の比高差がある。全面に厚い貼床がある。ほぼ全面に掘り方があり、底面は土坑状になっている。



14号住居
1　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土で、工事の影響で極めてしまり強い。ローム粒・焼土粒等を霜降り状に含む。1'は炭化物粒の混入目立つ。
2　にぶい黄褐10YR4/3　不揃いのロームブロックの混入多い弱粘性土。
3　黄褐2.5Y5/3　貼り床。暗褐色土とロームブロックの混合土で、上層ほどロームの比が高い。
4　暗褐10YR3/4　カマド下部分は貼り床層と異なり、ローム少なく粒状で、焼土の混入が多い。
5　暗褐10YR3/3　暗褐色土中に不揃いのロームブロックやローム粒を不均等に含む床下埋め戻し土。焼土や灰の混入はない。

第51図　14号住居



カマド

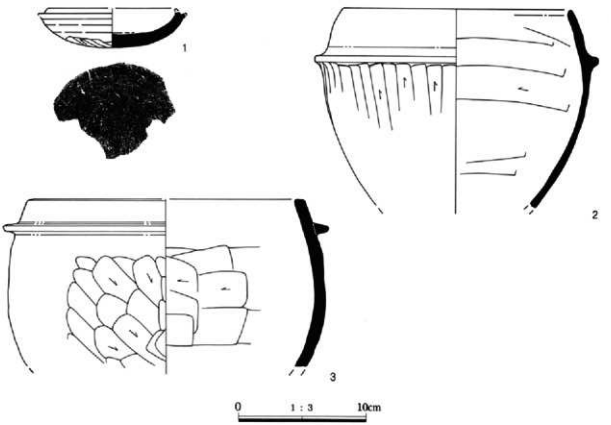
1 黒褐10YR3/2 粒子のやや粗い弱粘性土層。ローム粒・焼土を含むが1′では焼土は見られない。

2 にぶい黄褐10YR4/3 汚れたローム状土のほぼ純層。

3 灰褐7.5YR4/2 1層土中に多量のローム粒を霜降り状に含む。焼土粒も不均等に混じる。3′では黒色灰多く焼土少ない。

4 黒褐10YR2/3 袖かまど構材に相当する部分だが不明瞭である。弱粘性土中に黒色灰を含む。焼土散見。4′では焼土ブロックを不均等に含む。

5 暗黄褐 暗褐色土とローム状土の混合土による埋め戻し土で焼土や灰はほとんど含まない。5′部分はローム状土少ない。



第52図 14号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物 カマド内やカマド前面から出土している羽釜2・3が本住居の時期を決定する遺物であり、須恵器杯1はカマド前の出土だが混入品である。

その他の遺物 総数130片ほどで大形破片も多い。遺物の種類は雑多である。やや厚手の甕が多く、羽釜の胴部破片もかなり混じると思われる。古式土師器の時期は少量で、古墳時代後期の遺物が多く、平安の遺物は全体の半分に満たない。床面レベルでの自然礫の出土が目立つ。床下遺物は2割近くあり、古墳時代の遺物が多い。

15号住居　（第53図　ＰＬ－８）

位置　895・900－795G

重複　23号住居に後出か。

主軸方向　N－53°－E

面積　5.24㎡

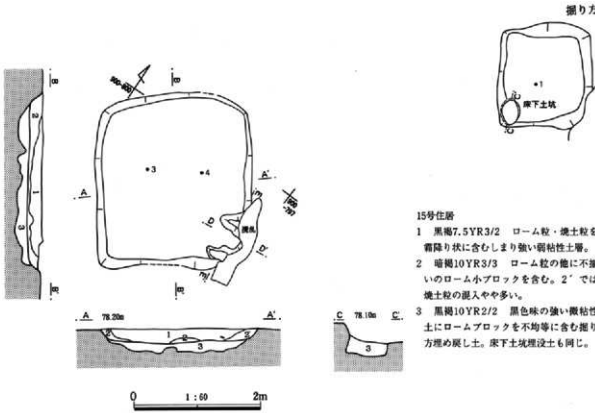
形態　長辺2.4m、短辺2.2mでやや横に長い長方形を呈した小型住居である。北東辺が丸みをもって外側へ膨らんでいる以外、整ったプランである。

壁　開口部は黒色土内だが、下半はローム土内にあり、明瞭な立ち上がりが確認できる。20cm前後の残存壁高で、立ち上がり部は緩やかになっている。

カマド　古墳時代の住居としては珍しく、東隅にあるが、燃焼部は住居内にあり、古い時期のカマドの様相は残している。火床は壁外へ向かって緩やかに上がっている。攪乱に大きく壊されているが、煙道の張り出しは小さいようである。袖はローム土で構築しているが、残存状態は比較的良好である。

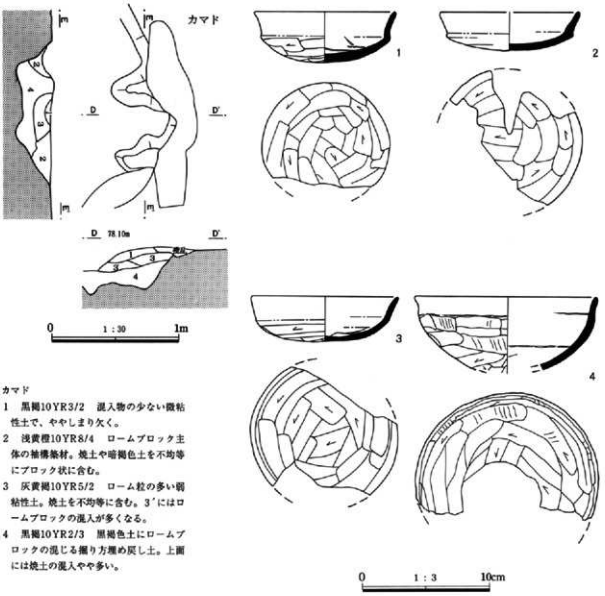
内部施設　貯蔵穴・柱穴・壁溝等の施設はいっさい確認できなかった。

床　顕著な踏み固めや住居通有の焼土・灰等の散布がなく、あまり明瞭な床ではない。南に向かって低く傾斜する傾向があり、北隅と５cm近い比高差を生じている。全面に掘り方があるが、壁際では浅い。住居中央付近では床面から最大18cmの深さがある。底面の凹凸は大きい。南隅壁際に垂直に近い立ち上がりと平坦な底面をもった土坑状の窪みがあるが、埋没土は床埋め戻し土と同じで、貯蔵穴にはならないと思われる。貼り床は築いていないようである。



15号住居
1　黒褐7.5YR3/2　ローム粒・焼土粒を斑状に含むしまり強い弱粘性土層。
2　暗褐10YR3/3　ローム粒の他に不揃いのローム小ブロックを含む。2′では焼土粒の混入やや多い。
3　黒褐10YR2/2　黒色味の強い微粘性土にロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。床下土坑埋没土も同じ。

第53図　15号住居



カマド
1　黒褐10YR3/2　混入物の少ない微粘性土で、ややしまり欠く。
2　浅黄橙10YR8/4　ロームブロック主体の袖構築材。焼土や暗褐色土を不均等にブロック状に含む。
3　灰黄褐10YR5/2　ローム粒の多い弱粘性土。焼土を不均等に含む。3'にはロームブロックの混入が多くなる。
4　黒褐10YR2/3　黒褐色土にロームブロックの混じる掘り方埋め戻し土。上面には焼土の混入やや多い。

第54図　15号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　土師器杯類のみ4点を図示した。3は床上5㎝、4は床上12㎝の高さの住居中央から出土し、2は埋没土内の出土である。1は住居中央付近の掘り方底面から出土している。図示した土器には完形品も床面直上の出土品もないが、おおよそ時期を同じにする遺物で、本住居の時期決定をしうる資料であろう。

その他の遺物　破片数は約120片ある。図示できた土器同様に模倣杯片の出土が目立ち、全体の20%で大破片も混じっている。本住居で使われた土師器甕類として器形を復元できるような破片はなかった。刷毛目のある土器の混入は10%近くを占め、やや大破片が少量混じっている。須恵器は2点のみである。カマド内出土の土器は少なく、床下出土の破片はほとんどない。その他に自然石が少量出土しているが、床面レベルのものから埋没土上層のものまであり、出土傾向は一様ではない。

16号住居　（第55図　ＰＬ－８）

位置　910－780G

主軸方向　Ｎ－52°－Ｅ

面積　11.18㎡

形態　長辺3.8m、短辺3.0mで、各隅が直角に近い比較的整った長方形を呈している。

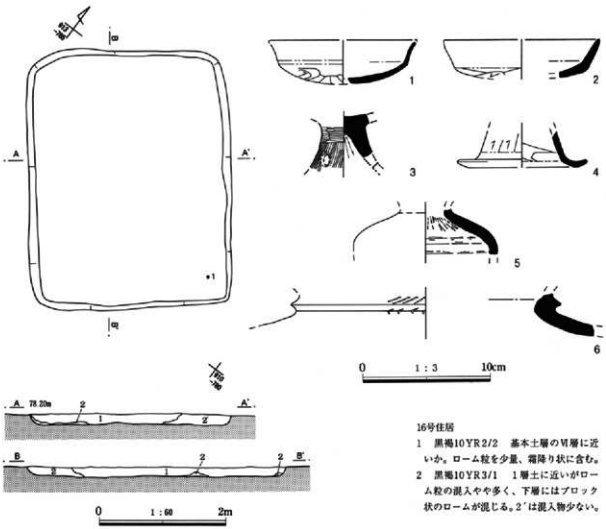
壁　壁はローム土内にあり不明瞭である。残存壁高は15～20cm程度で、やや緩やかに立ち上がっているが、比較的旧状を留めていると思われる。

内部施設　東壁の南寄りに焼土が多くみられ、カマドを想定してセクションを残して精査したが、焼土は上面のみで、袖や火床の痕跡・煙道の掘り込みもなく、カマドのない住居と考えた。炉も確認できない。また、柱穴等の内部施設もいっさい確認できず、竪穴住居とするには疑問もある。

床　ローム状土掘り下げ面をそのまま床面とし、埋め戻し土や貼り床は認められない。ほぼ水平な床面である。踏み固めは弱いが凹凸が多く、凸部と凹部では最大５cmの比高差がある。

出土遺物　６点を図示したがいずれも小破片からの復元である。土師器杯１は南隅のほぼ床直上の出土だが、他は埋没土内の遺物である。古墳時代前期と後期の２時期の遺物が混在している。

その他の遺物　遺物数約250片で小破片が多い。杯は平底気味が目立つが、模倣杯もわずかに混じっている。床下出土の破片が20％近くある。



16号住居
1　黒褐10YR2/2　基本土層の第Ⅳ層に近いか。ローム粒を少量、霜降り状に含む。
2　黒褐10YR3/1　1層土に近いがローム粒の混入やや多く、下層にはブロック状のロームが混じる。2'は混入物少ない。

第55図　16号住居および出土遺物

17号住居　（第56・57図　ＰＬ－８）

位置　860－800Ｇ

重複　18号住居に後出し、４号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－49°－Ｅ

面積　2.6㎡（残）

形態　４号溝に西側の大半を壊され、旧状は不明である。南辺は3.0m残存している。

壁　南側は重複住居の埋没土が崩れて壁の旧状はほとんど留めていない。カマド周辺では25cm前後の残存壁高がある。

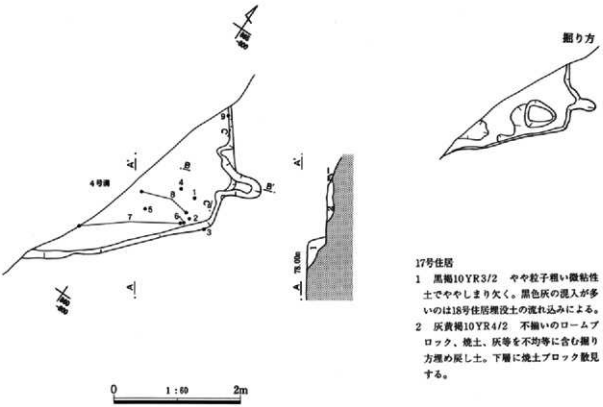
カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は壁際で床面より高いレベルにある。煙道は壁外に60cm張り出している。袖はローム土主体の構築材であるが、残存状態は悪く、南袖はほとんど残っていない。

内部施設　残存する範囲には柱穴や壁溝等は確認できない。

床　調査範囲ではほぼ水平で踏み固めの強い床である。土坑状の不規則な掘り方が確認できる。掘り方埋め戻し土内に焼土や粘土の混入が多く、床の作り直しの可能性もある。

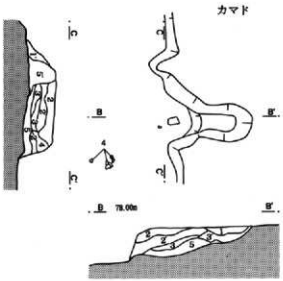
出土遺物　住居の狭い範囲のみの調査で、出土総量も少ないが、図示できた遺物は杯類を中心に10点と多かった。ただし、重複する18号住居と接する南壁際出土の遺物が多く、確実に本住居に伴うか問題が残る。須恵器蓋１、土師器杯４などがカマド前面の床面出土で、本住居の遺物と考えたい。甕９は東壁際の出土だが、付近は撹乱のある一画で、この遺物を確実に本住居に伴うものとは断定できない。

その他の遺物　破片総数は少なく100片ほどである。床下出土の遺物が過半となり、床面の把握に疑問がある。ただし、埋没土破片は８世紀頃の土師器が主体のようである。古式土師片が若干混じり、床下遺物では古式土師器の量が増し、８世紀頃の甕類胴部大形破片が少量見られる。



17号住居
1　黒褐10YR3/2　やや粒子粗い微粘性土でややしまり欠く。黒色灰の混入が多いのは18号住居埋没土の流れ込みによる。
2　灰黄褐10YR4/2　不揃いのロームブロック、焼土、灰等を不均等に含む掘り方埋め戻し土。下層に焼土ブロック散見する。

第56図　17号住居



カマド

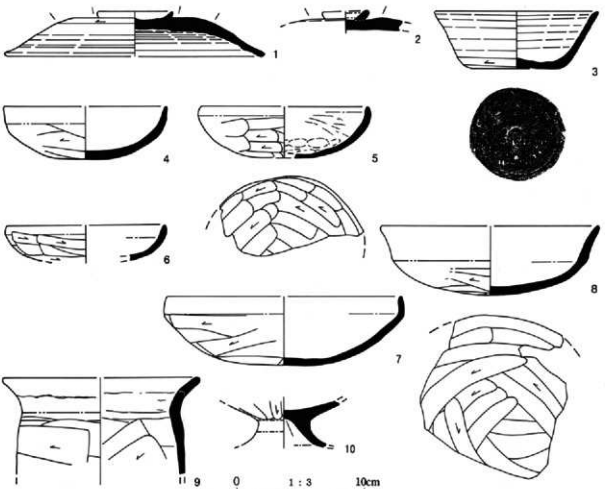
1　黒褐10ＹＲ2/2　粒子のやや細かな微粘性土。ローム粒・焼土粒散見。1′はローム粒やや多い。

2　暗褐10ＹＲ3/3　粒子の細かな弱粘性土。ローム小ブロックを不均等に含む。2′は焼土粒の混入多い。

3　黒褐2.5Ｙ3/2　粒子の細かな弱粘性土の黒色灰を多量に含む。焼土ブロックも混入。3′は灰の混入やや少ない。

4　褐7.5ＹＲ4/3　大粒の焼土ブロック・ロームブロック・灰が不均等に混じる層。

5　にぶい黄褐10ＹＲ4/3　ローム土と褐色土がブロック状に混合するカマド構築材。焼土散見。5′では混入物少なく、ローム地山に近い。



第57図　17号住居カマドおよび出土遺物

18号住居　（第58～60図　ＰＬ－８）

位置　860－800Ｇ

重複　17号住居・４号溝に先出し、43号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－77°－Ｅ

面積　6.34m²（残）

形態　北側を17号住居に大きく壊されているが、北西隅を除く三隅が残存している。短辺2.8m、長辺3.1m以上で、隅の円いやや横長の長方形プランがわかる。

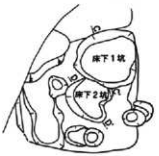
壁　カマド北脇では高さ30cmで、垂直に近い立ち上がりの壁が残存している。

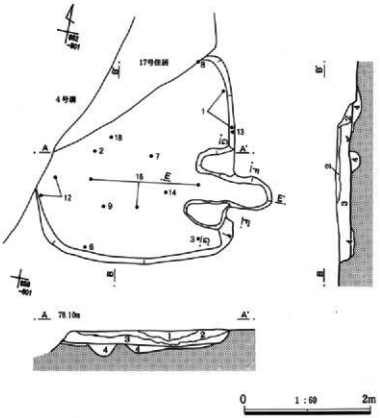
カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は住居内から壁際の住居床面と同レベルにある。煙道は壁外へ60cm張り出している。袖はローム土主体の構築材で築かれているが、残存状態は良い。焚き口付近で支脚状の礫が出土しているが、それとは別に、長さ23cmの自然石が燃焼部奥に据えられている。支脚としては不自然な位置にあり、カマド天井部の補強材の可能性もあろう。

内部施設　貯蔵穴、柱穴、壁溝等は確認できない。

床　凹凸のやや大きな床面で、凸部と凹部では最大６cmの比高差がある。掘り方は不規則で、底面の平坦な大型の土坑を重ねたような状態である。不明瞭な薄い貼り床を施しているようで、土坑状の掘り方上では観察しやすい。

掘り方





18号住居

1　黒褐10YR3/2　基本土層のⅥ層に近い。ローム粒を霜降り状に含む。

2　黒褐10YR2/2　１層土中にやや多量の黒色灰を含む。ローム小ブロックを散見する。

3　暗褐10YR3/2　しまりある弱粘性土。ローム小ブロックの混入やや多い。

4　灰黄褐10YR4/2　不揃いのローム ブロック・灰等を不均等に含む掘り方埋め戻し土。

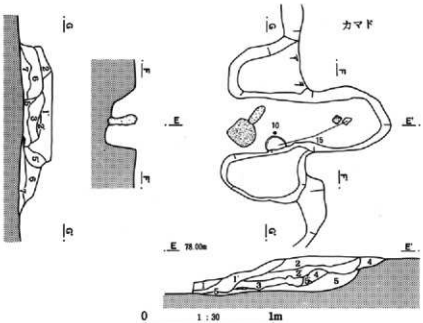
床下土坑

5　灰黄褐10YR4/2　ローム ブロックの多い弱粘性土。焼土や灰が不均等に混じる。5′層は貼り床に相当し、しまり強い。

第58図　18号住居

出土遺物　住居の全域に散らばるようにして出土した遺物の内、杯類を中心に18点を図示した。須恵器杯７がカマド前面の床直上、土師器杯10・長胴甕15はカマド内の出土で本住居に確実に伴う遺物である。土師器杯12も西壁下の床直上で出土している。砥石18は床面から７㎝浮いた状態の出土である。その他に須恵器長頸壺13・14ような床下遺物の出土も目立つ。

その他の遺物　破片総数約1500片で、ボリュームも多い。平底気味の土師器杯や、薄手の土師器甕に大破片が多い。須恵器は１％以下であろう。混入品は少ないが、床下の土坑状掘り方内に器台等の古式土師器破片が見られる。カマド内出土の遺物は少ない。鷹編み石状の自然礫９点が住居全域の床面レベルに散らばるように出土し、カマド内にも見られる。



カマド

1　暗褐10YR3/3　住居埋没土にロームブロックが混入した層。1′には焼土が混入。

2　にぶい黄褐10YR4/3　多量のローム小ブロックを不均等に含む。焼土散見。しまり強く天井部構築材と思われる。1′は灰や焼土の混入多い。

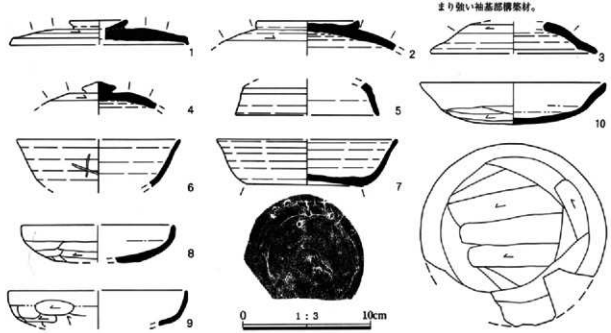
3　にぶい黄褐10YR5/4　崩落天井部と思われるローム土主体の層。被熱部分あり。

4　にぶい赤褐2.5YR4/3　焼土ブロック主体の層で、2′層土が多量に混じる。

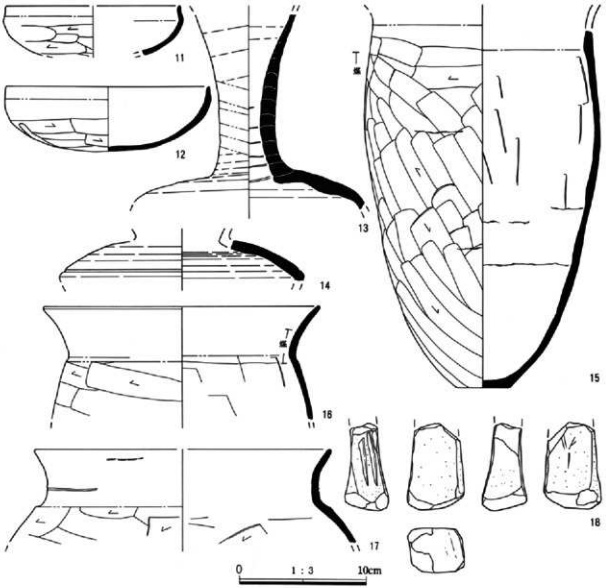
5　黒褐10YR3/2　粒子の細かな粘性土に多量の灰が混じる。焼土やローム土をブロック状に散見。5′では混入物やや少なく、しまり欠く。

6　黄褐2.5Y5/3　ロームブロック主体で黒色土と焼土をブロック状に混入。しまりの強い袖構築材。

7　暗褐10YR3/3　粒子の細かな弱粘性土で不揃いのロームブロック混じる。しまり強い袖基部構築材。



第59図　18号住居カマドおよび出土遺物（１）



第60図　18号住居出土遺物（２）

20号住居　（第61・62図　ＰＬ－９）

位置　895－790Ｇ

重複　４・13号溝に先出している。21号住居に後出すると思われるが、明確でない。

主軸方向　Ｎ－10°－Ｅ

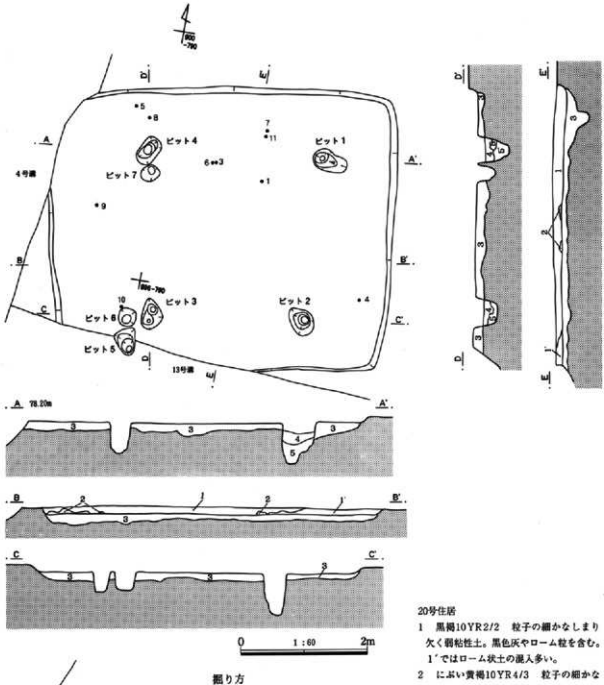
面積　20.9㎡

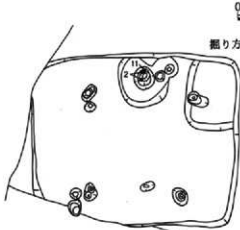
形態　西側の二隅を壊されているが規模の把握には問題ない。短辺4.2m、長辺5.3mで東西に長い、比較的整った長方形を呈した大型住居である。

壁　緩やかな立ち上がりで、最大でも15cmほどの残存壁高しかない。

内部施設　７本の柱穴状のピットがある。調査段階ではピット１からピット４を主柱穴とし、他の柱穴を建て直し時のものとなる可能性を考えたが、配置には歪みがあり不自然な所が多い。各ピットの床面からの深さ（cm）はピット１→67、ピット２→69ピット３→34、ピット４→51、ピット５→36、ピット６→48、ピット７→35である。壁溝のほか、カマドや炉は確認できない。

床　踏み固めの弱い、焼土や灰などによる汚れも少ない不明瞭な床である。ほぼ水平な床であるが、壁際が若干低く住居中央と３cm前後の比高差がある。





20号住居

1　黒褐10YR2/2　粒子の細かなしまり欠く弱粘性土。黒色灰やローム粒を含む。1′ではローム状土の混入多い。

2　にぶい黄褐10YR4/3　粒子の細かな粘性土。1層土と不均等に混じる。汚れなくしまり欠き、住居埋没土的でない。

3　黒褐10YR2/2　ロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。下層ほどロームは多い。床下土としてはしまり欠く。

4　黒褐10YR3/1　ローム粒をやや多量に含むピット上面の埋め戻し土。

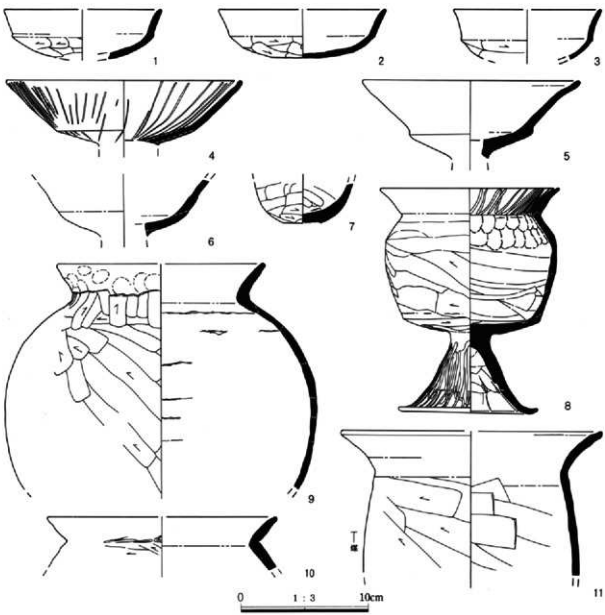
5　黄褐2.5Y5/3　ロームブロック主体のピット下層埋め戻し土。黒色土を小ブロック状に含む。2′はシルト質の不明瞭な粘性土が混じる。

第61図　20号住居

床面からの深さ10cm前後の掘り方が全面にあり、北東隅と北壁下にさらに10cm深い土坑状の掘り込みがある。特に北壁下中央はピット状に床面から80cm掘り下げられている。掘り方全体にロームブロック混じり土で埋め戻されるが、貼床は確認できない。

出土遺物　住居全域に散らばるようにして出土している。二時期の遺物が混在するが11点を図示した。残存状態の良い遺物は**4・5・8・9**など古手の土器が多いが床面から10cm前後浮いた状態である。反面、北壁下ピット内から**2・11**の新しい遺物を出土し、床面把握に問題を残した。

その他の遺物　破片数約400片である。やや厚手の土師器甕類が主体で、大形破片も混じっている。杯類は模倣杯が主体となる。須恵器はほとんど見られない。刷毛目のある甕類もわずかである。高杯など、やや古手の土器が少量混じる。床下遺物が全体の10％以上あるが、過半が深い掘り方のある北東側の出土である。



第62図　20号住居出土遺物

21号住居　（第63図　ＰＬ－９）

位置　890－790Ｇ

重複　13号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－41°－Ｅ

面積　13.05㎡（残）

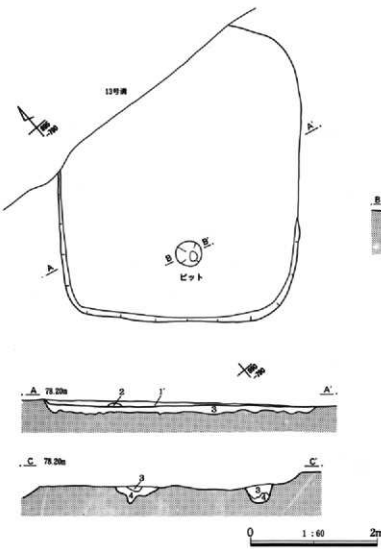
形態　短辺3.2m、長辺4.1m以上の南北に長い隅丸長方形を呈している。

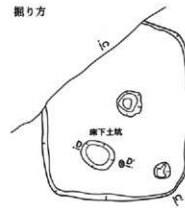
壁　北側・東側の壁は残存しない。全体がローム状土層の中にあり、立ち上がりは緩やかで、不明瞭である。最大残存壁高は西側の８㎝である。

内部施設　性格不明のピットが１基確認されている。床面での規模は41×39㎝、深さ18㎝である。壁溝等は見られず、カマドや炉の痕跡も確認できない。竪穴住居とするには疑問な部分もある。

床　ほぼ水平だが不規則な弱い凹凸がある。床面は踏み固めが弱く、不明瞭である。全体に浅い掘り方があり、底面には細かな凹凸が多く、土坑状のものも混じっている。貼り床は認められない。

出土遺物　図示できる遺物はなかった。破片数も40片ほどで少ないが、須恵器杯・土師器鉢（ともに古墳時代後期）などにやや大形の破片がある。他はやや薄手の土師器甕破片が中心だが、刷毛目のある甕類破片も20％ほど混入している。掘り方内の遺物はない。





1　黒褐10YR2/2　粒子の細かな弱粘性土でややしまり欠く。ローム粒やローム小ブロックを含む。

2　にぶい黄褐10YR4/3　黄褐色の粘性土と黒色土の混合土。ややしまり欠く。

3　黒褐10YR3/2　ロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。焼土・カーボン散見。床下土としてはしまり欠く。

4　にぶい黄褐10YR4/3　ローム粒やロームブロックの多いピット下層埋め戻し土。

床下土坑

5　黒褐10YR2/2　やや粒子の粗い微粘性土でややしまりあり。焼土・炭化物粒散見。5′はローム小ブロックを含む。

6　にぶい黄褐10YR4/3　汚れたローム小ブロックと1′層土の混合土。しまりあり。

第63図　21号住居

22号住居　（第64図　ＰＬ－９）

位置　860－810G　26号住居内にあり、同住居確認段階で明確なプランが確認されている。

重複　26号住居に後出し17・77号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－59°－Ｅ

面積　6.13㎡

形態　短辺2.1m、長辺2.7mで、やや台形状に歪む南北に長い長方形を呈している。

壁　緩やかな立ち上がり部分はローム土内にあって明瞭だが、上方は26号住居埋没土内にあり、分かりにくい。残存壁高は15cm前後ある。

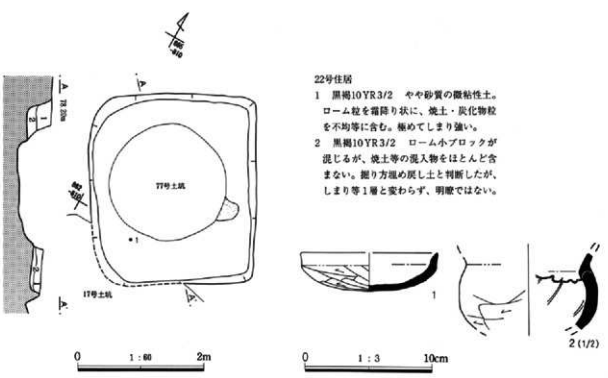
カマド　東壁南寄りには埋没土内に焼土の包含が多く、カマドを想定した調査を行ったが、煙道や袖等の施設は確認できなかった。ただし南寄り壁下床直上に灰の集中する地点があり、この付近にカマドはあったものと考えたい。壁外への張り出しのない、初現期のカマドを想定している。

内部施設　残存部分に柱穴・壁溝や貯蔵穴は認められない。

床　土坑に床面の大半を壊されている。残存部分では不規則な凹凸が多い。床面はローム土内にあり、掘り方面を若干埋め戻す程度で踏み固めていると判断したが、床面通有の汚れはない。埋没土もしまり強く、床面と明確に区別できていない。

出土遺物　土師器２点を図示した。杯１は床面より若干浮いた状態の出土であるが、床面把握に問題があり、床直上の遺物となる可能性もある。後出土坑の影響のない地点の出土と判断した。小型壺２は埋没土内の遺物である。

その他の遺物　古墳時代の土師器小片ばかり約80片出土している。薄手甕胴部片がほとんどで、刷毛目のある甕類や模倣杯などが少量混じっている。



22号住居
1　黒褐10YR3/2　やや砂質の微粘性土。ローム粒を霜降り状に、焼土・炭化物粒を不均等に含む。極めてしまり強い。
2　黒褐10YR3/2　ローム小ブロックが混じるが、焼土等の混入物をほとんど含まない。掘り方埋め戻し土と判断したが、しまり等１層と変わらず、明瞭ではない。

第64図　22号住居および出土遺物

23号住居　（第65図　ＰＬ－９）

位置　900－800Ｇ　西側は調査区域外となる。

重複　15号住居に先出か。60・61・78号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－２°－Ｅ　　**面積**　22.22㎡

形態　東辺の3.9m部分しか確認できず、南辺は掘り方の範囲から復元している。

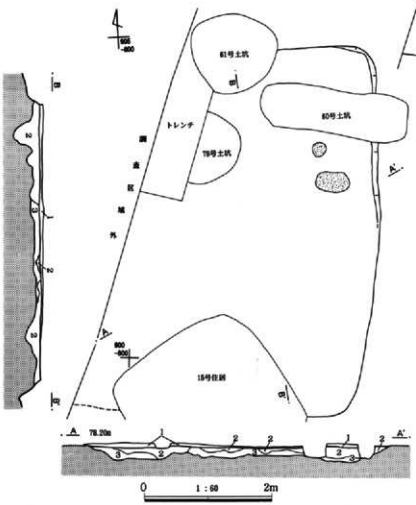
壁　浅い遺構で、わずかでも壁が残存するのは北東隅付近の一部のみで、全容は不明である。

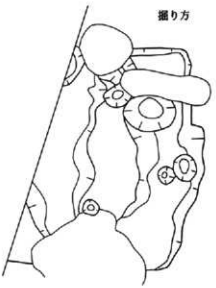
内部施設　柱穴や壁溝等は確認できない。東壁下北寄りに焼土がやや多く、カマドを想定した調査を行ったが、確認されていない。

床　遺構確認段階ですでに床面がなくなっている箇所が多い。全面に深さ10cm前後の掘り方があるが、壁際がさらに10～20cm深くなる傾向がある。

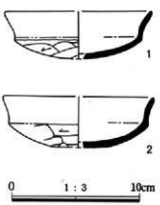
出土遺物　図示した土師器杯２点とも掘り方埋め戻し土内の遺物である。

その他の遺物　破片数約50片でいずれも小片で床下出土片が大半となる。刷毛目のある甕類が４割を占め、模倣杯が１割、他は時期不明のやや厚手壺甕類胴部片となる。須恵器はない。





23号住居
1　黒褐10YR3/1　ローム粒・焼土粒混じりの側帯性土。
2　黒褐10YR3/2　ローム小ブロック混じりの掘り方埋め戻し土。上面にローム多く貼り床の可能性。しまりやや欠く。
3　にぶい黄褐10YR4/3　ロームブロック主体に暗褐色土を不均等に含む。



第65図　23号住居および出土遺物

24号住居　（第66～68図　ＰＬ－９）

位置　890－800Ｇ

重複　７・８号住居、４号溝、34・37・87号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－60°－Ｅ

面積　21.95㎡（残）

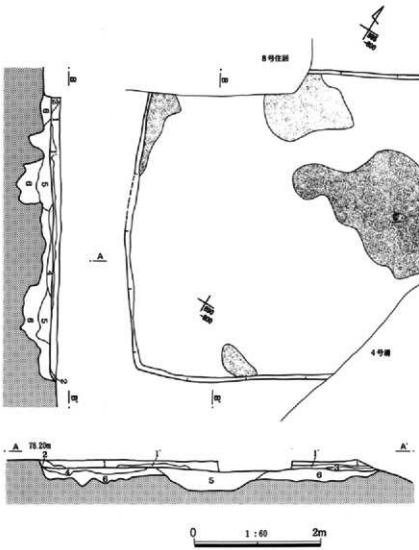
形態　四隅とも壊されているが、短辺4.7ｍ、長辺5.0ｍの、比較的整った長方形気味プランを呈すと思われる。

壁　残存壁高は最大でも西側の14㎝しかないが、垂直に近い立ち上がりになりそうである。

カマド　東壁のほぼ中央にある。残存状態はあまり良くない。燃焼部は住居内にあり、煙道の壁外張り出しは僅かである。ローム土混じりの構築材は不明瞭で、火床も確実なものではない。

内部施設　床面レベルでは貯蔵穴・柱穴・壁溝等の施設は確認できない。

床　壁際が若干高くなる傾向があり、住居中央と２～５㎝の比高差がある。踏み固めの弱い床面であったが、焼土や灰の散布があり、確認は容易であった。床面の確定には誤りないと思われるが、遺物の出土状態から二枚の床があったことも想定されよう。全面に掘り方があると想定したが、４層下に１次の床面があったと考えられよう。掘り方は土坑を多数重ねたような形状になっている。柱穴になる可能性のあるものも含まれており、掘り方図に床面か



24号住居

1　黒褐10YR2/3　砂質土でしまりやや弱い。焼土・炭化物粒・ローム小ブロックを散見する。1'では焼土増え、しまり強くなる。

2　にぶい黄褐10YR4/3　1層土中に多量のロームブロックが混じる。

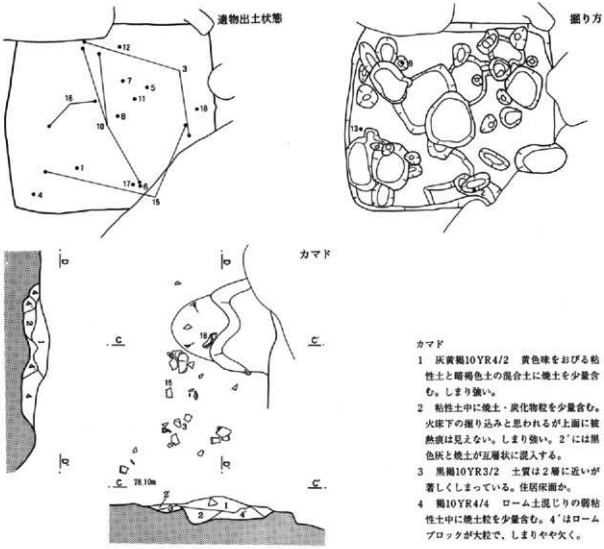
3　黒褐10YR2/3　ロームブロックの混じるしまり強い層。床面の可能性あり。

4　暗褐10YR3/3　3層土に類似。貼り床の可能性。

5　黒褐10YR3/2　ロームブロックと焼土の混入の目立つ掘り方埋め戻し土。

6　にぶい黄褐10YR4/3　不揃いのロームブロックを主体とし、焼土粒や炭化物粒を不均等に含む。

第66図　24号住居



カマド

1　灰黄褐10YR4/2　黄色味をおびる粘性土と暗褐色土の混合土に焼土を少量含む。しまり強い。

2　粘性土中に焼土・炭化物粒を少量含む。火床下の掘り込みと思われるが上面に被熱痕は見えない。しまり強い。2′には黒色灰と焼土が互層状に混入する。

3　黒褐10YR3/2　土質は２層に近いが著しくしまっている。住居床面か。

4　褐10YR4/4　ローム土混じりの褐粘性土中に焼土粒を少量含む。4′はロームブロックが大粒で、しまりやや欠く。

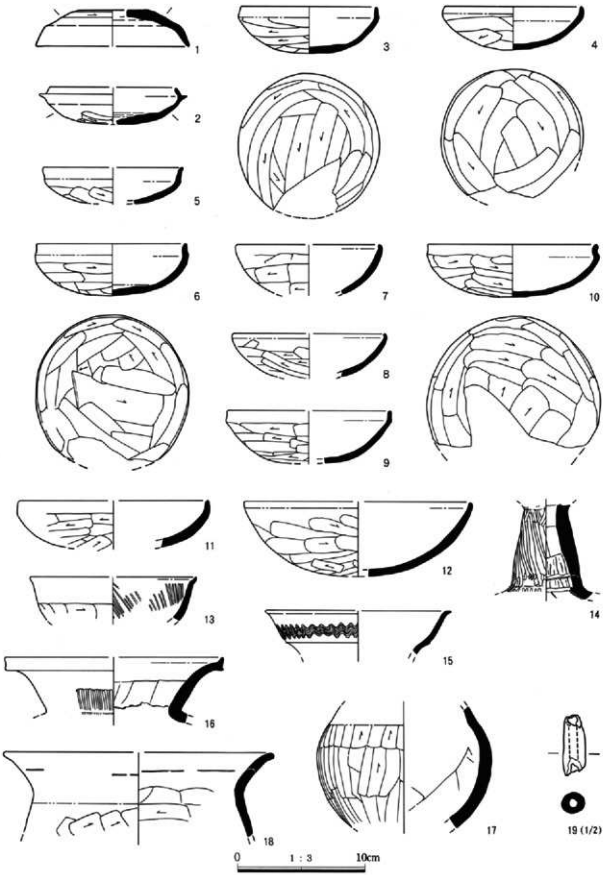
第67図　24号住居カマド

らの深さ40cm以上のピット状掘り方は太線で表わした。

出土遺物　住居ほぼ全域に散らばるようにして出土し、離れた位置で接合する資料が目立っている。杯類を中心に18点を図示した。土師器杯３・甕18がカマド内や周辺床直上の遺物である。

その他の遺物　浅い埋没土だが出土遺物は多く、破片数は1000点を超えている。土師器杯・甕ともに個体数豊富で大型破片も混じっている。石田川期の遺物は少ない。須恵器も１％ほどに過ぎない。鷹編み石になる可能性のある自然石が南側壁際を中心に散在しているが、床面からは５cm前後浮いた状態での出土である。

出土位置では北側四半部分が最多となり、東側四半部分は少ない。床下出土遺物が全体の30％以上あるが、埋没土出土遺物と時期差もない。床面の認定に問題を残している。



第68図　24号住居出土遺物

25号住居　（第69～72図　ＰＬ－10）

位置　905－785Ｇ

重複　38・39号住居に後出し、４号溝に先出する。

主軸方向　Ｎ－80°－Ｅ

面積　14.16㎡

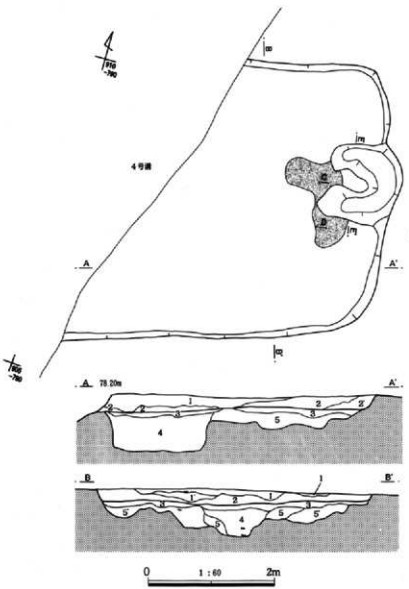
形態　東辺は4.0m、南辺は4.5m以上で、台形状にやや歪んだ縦長長方形を呈すと思われる。

壁　ローム土内にあり、確認は容易であった。やや緩やかに立ち上がり、10～20cmの残存壁高がある。

カマド　東壁のほぼ中央、僅かに北寄りにある。南に隣接してカマドの痕跡があり、作り直しを行ったものと思われる。燃焼部は住居内にあり、煙道は不明瞭で壁外への張り出しは30cm程しかない。袖や天井部の構築材には粘土を使用し、残存状態は比較的良い。南側に隣接する旧カマドの痕跡は煙道部が壁外に40cm張り出し、深さ20cmの掘り方が確認できるが、袖部の痕跡は残存していない。

内部施設　残存部分には貯蔵穴・柱穴・壁溝等の施設は調査範囲では確認できない。

床　南側に低く傾斜しており、５cm前後の比高差がある。全体に20cm以上の厚い埋め戻し土が見られ、底面は土坑状・ピット状の掘り込みを重ねたような状態になっている。



25号住居

1　黒褐10YR2/2　やや砂質の非粘性土。ローム粒や焼土を散見。1'はカマド崩落土の影響で焼土や炭化物粒の混入が増える。

2　黒褐10YR3/2　ローム小ブロックを散見する微粘性土。焼土粒・炭化物粒散見。2'はロームブロック大粒で、焼土もブロック状の混入になる。

3　黒褐10YR2/3　貼り床と思われしまり強いが、ローム土の混入少なく不均等。焼土散見。

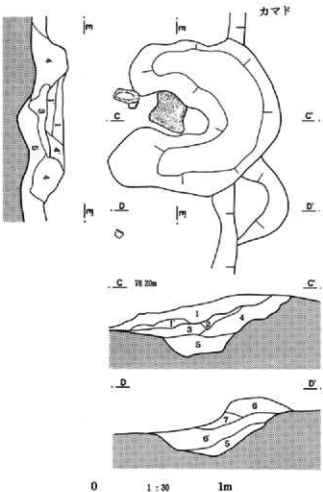
4　暗褐10YR3/3　主に床下土坑の埋没土に見られる。ローム土と黒色土をブロック状に不均等に含む。下層はしまりやや欠く。

5　灰黄褐10YR4/2　黄色みの強いローム状土のブロックをやや多量に含む粘性土。5'では混入物少ない。

第69図　25号住居

出土遺物　住居全域に散在している23点を図示した。杯類を中心に完形品が多いのも特徴である。多量の土器が39号住居より混入している可能性があり、土師器杯９は39号住居出土破片と接合している。杯２～５・12・13は39号住居に接している南壁際の出土である。甕類はカマド内から出土しない。

その他の遺物　破片総数は約1200片で、接合して大形破片となったものも多い。甕類の破片の多さが目立ち、長胴気味の甕底部の大破片だけで３個体ある。杯類は模倣杯消失以降の時期のものである。須恵器はほとんど見られない。刷毛目のある甕類も３％と少ない。床下遺物は５％ほどで、やや古手の遺物が増える。竈内出土遺物は１％と少ない。



カマド

1　にぶい黄褐10YR5/3　粘性土ブロック・焼土・炭化物等を少量含む、弱粘性のしまり弱い層。1'は灰色味をおびる粘土混じる。

2　暗赤褐2.5YR3/6　焼土ブロックを主体に、灰の混入の多い層。崩落天井被熱部分か。

3　青黒5PB2/1　灰主体に焼土小ブロック混入。しまり欠く。

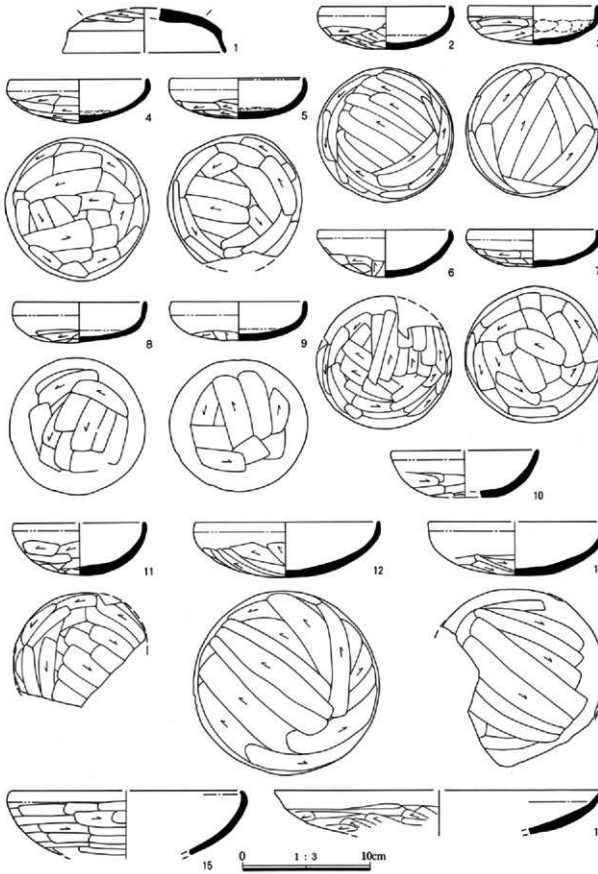
4　にぶい黄橙10YR7/4　粘土主体に焼土小ブロックの混じるしまり強い層。構築材。

5　暗褐10YR3/4　粘性土で焼土・灰白色粘土を不均等に含む。

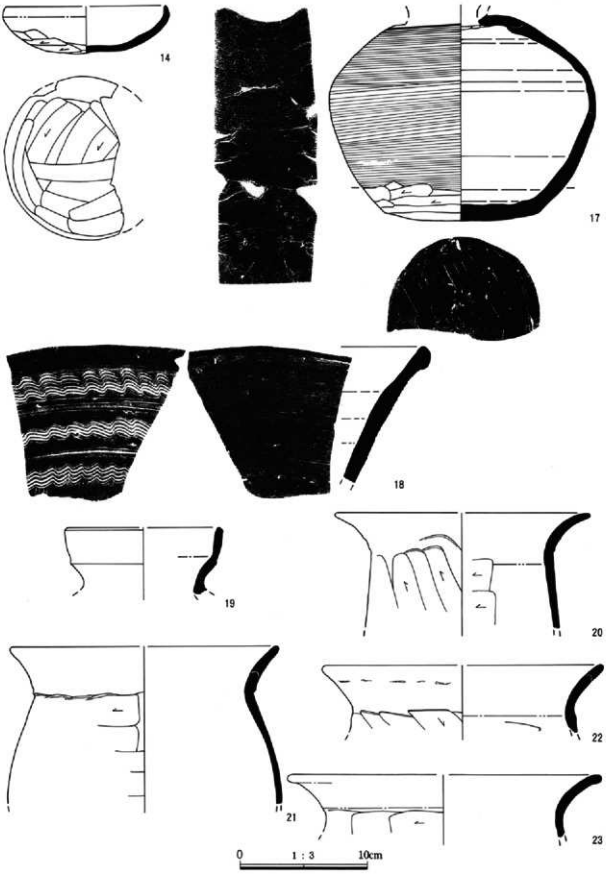
6　橙5YR6/8　鮮やかな色調の焼土ブロック主体に黄色味をおびた粘土の混じるザクザクした層。6'では粘土の他に炭や灰の混入多く、褐色味が強くなる。

7　暗褐10YR3/3　粘性土中に焼土・炭化物粒を不均等に含むしまり強い層。

第70図　25号住居カマド



第71図　25号住居出土遺物（１）



第72図　25号住居出土遺物（2）

26号住居　（第73・74図　ＰＬ－10）

位置　865－805G

重複　22号住居、12・17・42・84号土坑等に先出している。33号住居には後出か。

主軸方向　N－23°－E

面積　31.85㎡

形態　東側が不明で全容は明確にできなかったが、西辺5.8m、北辺は5.9m以上ある。正方形に近いプランの大型住居と思われる。

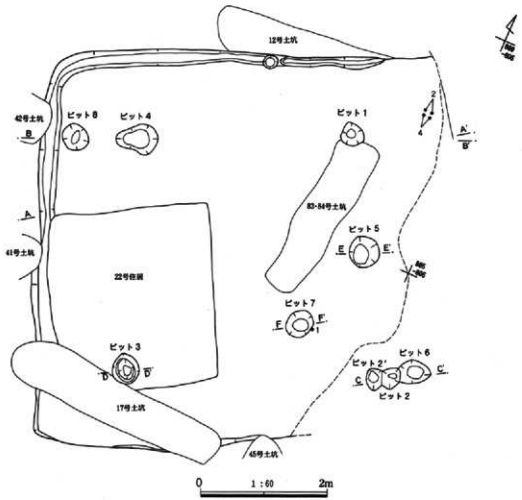
壁　壁高は部分的に20cm近く残存するが、5cm前後の箇所が多い。壁溝からの立ち上がりには垂直に近い部分がある。

内部施設　ピット１～４が４主柱穴と想定できるが配置はやや歪み、ピット１と４は深さ20cmと浅い。ピット２は立て替えの可能性がある。その他にもピットは多いが、本住居に確実に伴うか不明である。壁溝は西壁下の北半と、北壁下で確認できる。幅太の明瞭なものである。炉の時期の住居と思われるが痕跡は確認されない。

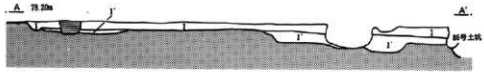
床　掘り下げ地の窪みを埋める程度で、ほとんど地山をそのまま踏み固めている。

出土遺物　土師器６点を図示した。椀１がピット７の脇、椀２と高杯４が住居北東隅のそれぞれ床直上から出土している。

その他の遺物　破片数約550片が出土している。床下遺物が10%近くあるが何れも古式土師器である。埋没土内の遺物は雑多で、平安時代前期の土器が40%ほど混じり、該期の遺構が重複していた可能性がある。その他は古墳時代中～後期10%、古式土師器50%ほどの割合で、中近世遺物も混じる。平安時代の遺物には10%以上の須恵器が混じり、杯・壺口縁などがある。



第73図　26号住居



0　1：60　2m

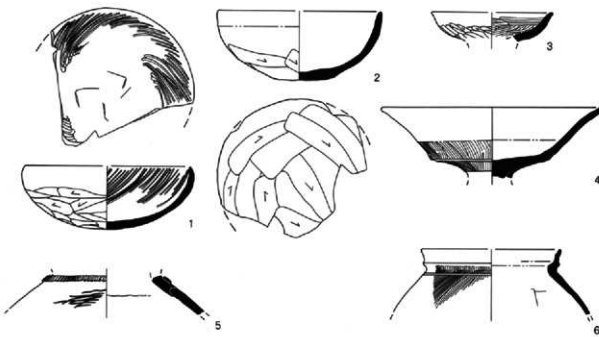
26号住居

1　黒褐10YR3/2　工事の影響で著しくしまり強い。やや粒子の粗い非粘性土。基本土層のⅥ層に近い。不撹いのロームブロック・焼土等散見。1′は1層に酷似する。表面に踏み固められた層厚数ミリの灰があり床面とわかった。調査時は埋め戻し土と考えた33号住居埋没土。

2　黒褐10YR2/2　基本土層のⅥ層。ローム粒散見し、しまりやや欠く微粘性土層。2′ではローム粒多くなるが他の混入物少ない。

3　灰黄褐10YR4/2　1層土と多量のロームブロックの混合土。

4　黒褐10YR3/2　やや腐植土質の微粘性土。混入物少ない。



0　1：3　10cm

第74図　26号住居出土遺物

27号住居　（第75～77図　ＰＬ－10）

位置　850－810Ｇ　地山レベルの最も高い一画にある。耕作土は浅く、橋梁工事による転圧の影響を強く受けた住居の１軒である。埋没土は地山以上に硬化し、上面の遺物が埋没土内に混入していた。

重複　4・7・17号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－76°－Ｅ

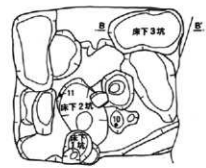
面積　13.79㎡

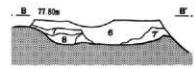
形態　四隅がいずれも不明瞭で、特に東壁は全く残存していないが、一辺3.6m前後のほぼ正方形を呈していると想定した。

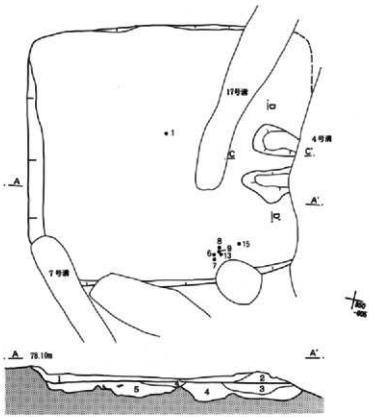
壁　ローム土内にある。残存壁高が最も高い西壁で20cmあるが、大きく崩れていて現状では緩やかな立ち上がりしか確認できない。

カマド　東壁のほぼ中央、僅かに南寄りにある。燃焼部は住居内にあり、煙道部分は壊されていて全く残存していない。袖部はローム状土で葺かれ不明瞭であるが、火床は床面レベルにあり、直上には黒色灰が観察されている。燃焼部下には焼土混じりの掘り方があり、カマドが作り直された可能性がある。

掘り方







第75図　27号住居

27号住居

1　黒褐10YR3/2　工事の影響で著しくしまり強い。基本土層のⅦ層に近いやや砂質土層。ローム粒・焼土を不均等に散見。

2　暗褐10YR3/3　カマド崩落土の混入した層。焼土や灰が帯状に混じる。

3　にぶい赤褐5YR4/3　焼土混じりのカマド下塊め戻し土。

4　褐7.5YR4/3　不揃いのローム土や焼土のブロックを含む埋め戻し土。4'部分はローム土の多い貼り床部分。

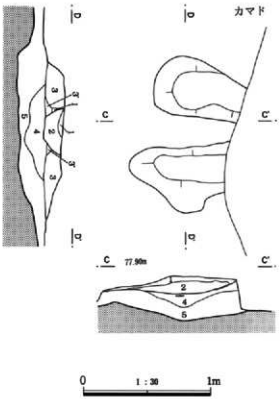
5　黒褐10YR3/2　塊め戻し土も東と西で大きく異なり、この部分は混入物のやや少なく、粘性も弱い。

床下土坑

6　黒褐10YR3/2　基本土層のⅦ層に近いしまり強い土層。ローム粒・焼土を含み、下層ほどローム小ブロック増える。

7　暗褐10YR3/3　粘性土中にロームブロックを含み、7'では多量に含む。

8　灰黄褐10YR4/2　粘性土と6層土の混合土。焼土等の混入物少ない。



カマド

1　暗赤褐5YR3/2　焼土ブロック中心の層。火床のような状態だが、位置より被熱した天井部及び壁の一部と思われる。

2　暗褐7.5YR3/3　焼土・炭化物粒・ローム小ブロックを含むしまり強い層。最下層に黒色灰の混入多い。

3　褐10YR4/4　不明瞭なローム状土の焼土小ブロックを散見する袖構築材。3′では黒色灰多い。

4　暗褐10YR3/3　焼土粒を霜降り状に含む非粘性土。カマド掘り方。

5　暗褐10YR3/3　粒子細かな弱粘性土でしまりやや強い。ロームブロックを不均等に含むが焼土等の混入少ない。住居掘り方。

第76図　27号住居カマド

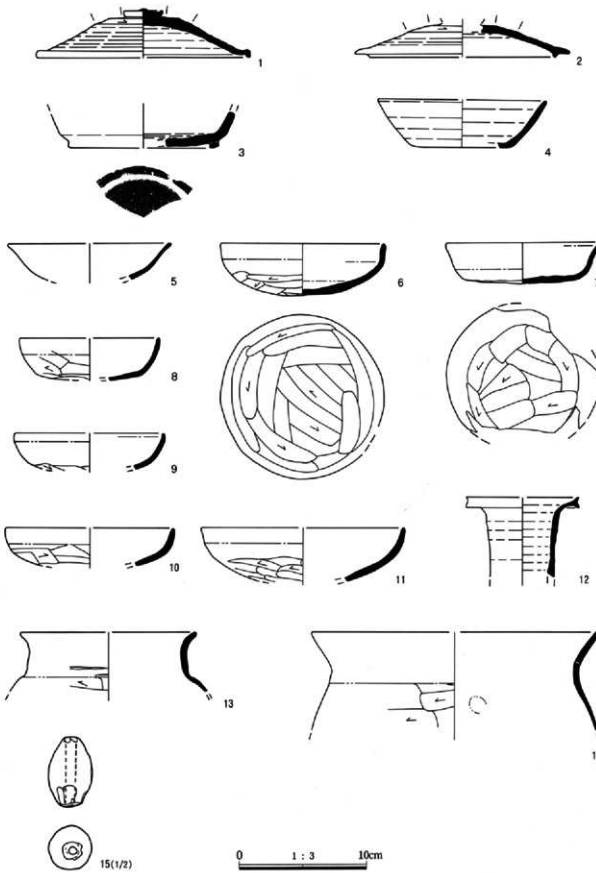
内部施設　壁溝・柱穴・貯蔵穴等の施設は想定した床面では確認できない。

床　カマド前面に焼土や灰で汚れた明瞭な床を確認しているが、他では不明確な部分が多い。住居北側が若干低くなる傾向があり、カマド周辺や南壁下と3～5㎝の比高差がある。全面に掘り方が観察できる。凹凸は多いが、土坑やピットを重ねたような底面の状況で規則性はない。埋没土には焼土や炭化物粒が混じっている。柱穴や貯蔵穴が想定できる施設は配置の上からはなさそうである。埋没土レベルから著しく硬化しているため床面の確認は不明確なものとなったが、土質の違いからは貼床は観察できない。

出土遺物　南壁下東側からの出土が多い。杯類を中心に15点を図示した。須恵器蓋1は住居中央の床直上出土である。土師器杯6～9と土師器甕13および土錘15が、南壁下のほぼ床面レベルでまとまって出土している。土師器杯10・11は掘り方内の出土である。その他の遺物は埋没土中の出土で、須恵器杯5は混入品であろう。

その他の遺物　総破片数は1300片以上になる。8世紀頃の遺物が大半で、大形扁平の土師器杯や、鉢などの破片が多い。大形破片が多いのが特徴でもある。該期の須恵器は2～3％ほどで、カエリのある蓋や薄手甕類の破片が目立つ。カマド内の遺物は少ないが掘り方内の遺物は多かった。床下土坑とした施設には住居床面との前後関係把握に疑問な点があったが、遺物の出土状況からも、同じ疑問が残る。

刷毛目整形のある甕や古墳時代後期の土師器杯や高杯、平安時代の須恵器有台杯などの雑多な混入品も見られる。



第77図　27号住居出土遺物

28号住居　（第78図　ＰＬ－10）

位置　915－790Ｇ　10号住居の床下精査時に確認された住居である。

重複　10号住居、４号溝に先出し、32号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－22°－Ｗ

面積　4.53㎡（残）

形態　北辺2.8m、西辺3.0m以上が確認でき、比較的大型の住居となる可能性がある。各辺は直線的で北西隅は直角に近く、整ったプランが想定できる。

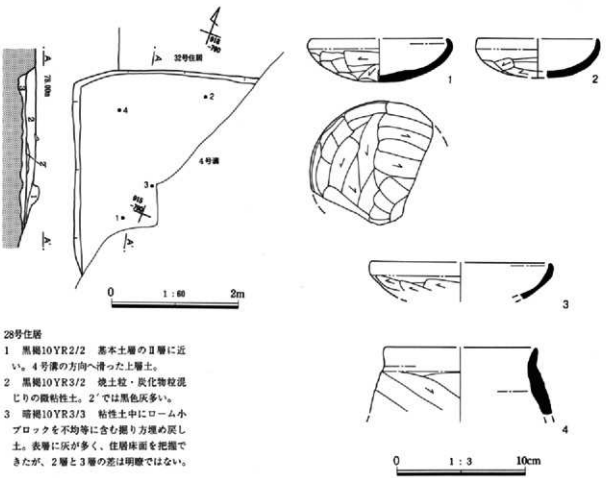
壁　図上では10cm前後の残存壁高があるが、重複する住居掘り方埋め戻し土と区別できない部分が多く、明確な壁ははとんど確認できていない。

内部施設　カマドや炉および柱穴や壁溝等の施設は調査範囲では一切確認できない。

床　10号住居の掘り方と同レベルに床面があり、不明瞭な部分があるが、本住居床直上には灰による汚れが見られ把握には問題ない。西側に低く傾斜していて北隅と５cm近い比高差を生じている。ほぼ全面にやや浅い掘り方が見られるが、明瞭な貼り床は確認できない。

出土遺物　調査範囲全域に散在する土師器４点を図示した。杯１・３は南側、杯２と甕４は北壁際の出土である。２以外は床面よりやや浮いた状態での出土である。

その他の遺物　総数で約160片しかない。丸底気味でやや小型の土師器杯破片が３割近くを占めている。模倣杯片もわずかに混じりやや大形の破片も多い。他はやや厚手の土師器甕破片となる。重複する10号住居とあまり差のない時期の遺物であり、帰属を明瞭にできない。



28号住居
1　黒褐10YR2/2　基本土層のⅡ層に近い。４号溝の方向へ滑った上層土。
2　黒褐10YR3/2　焼土粒・炭化物粒混じりの微粘性土。2′では黒色灰多い。
3　暗褐10YR3/3　粘性土中にローム小ブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。表層に灰が多く、住居床面を把握できたが、２層と３層の差は明瞭ではない。

第78図　28号住居および出土遺物

29号住居　(第79・80図　ＰＬ－11)

位置　855－810G　27号住居同様に、把握の難しい位置にある。

重複　9号住居、9・85号土坑等に先出している。

主軸方向　N－68°－E

面積　12.27㎡

形態　南西隅は掘り方から住居の範囲を復元している。短辺3.2m、長辺3.7mで比較的隅の整った横長長方形が想定される。

壁　ローム土の壁で開き気味に立ち上がっている。北・東壁で20cm前後の残存壁高がある。

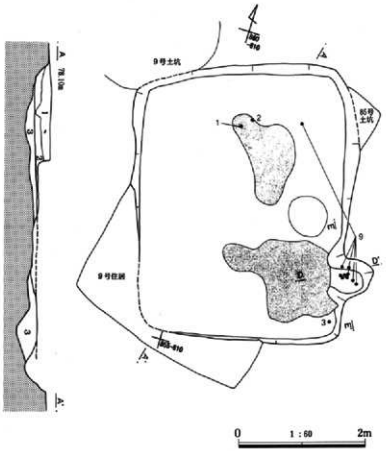
カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面より高いレベルにあり、煙道方向へ向かって緩やかに立ち上がっている。煙道は不明瞭だが壁外に50cm張り出している。

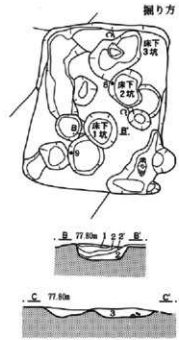
内部施設　貯蔵穴・柱穴・壁溝等はいっさい確認できない。

床　カマド前を中心に灰や炭化物粒が広く散らばっている。床下には土坑を重ねたような掘り方があり、焼土混じりの埋め戻し土が見られる。壁際で深くなる傾向がある。

出土遺物　調査範囲が限られていたが9点を図示した。土師器壺9はカマド内で本住居に確実に伴う遺物であるが、床下や9号住居出土片とも接合していて、後世の攪乱の影響が看取される。須恵器杯2・3も床直上出土の遺物である。

その他の遺物　破片数は約300片ある。土師器杯壺ともやや大きめの破片含む。須恵器は5％ほどで少ない。古式土師器の混入もごく少ない。





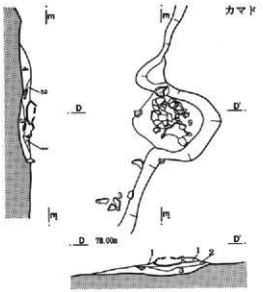
29号住居

1　黒褐10YR2/2　しまり強い非粘性土。基本土層の VI 層に近い。焼土粒・炭化物粒を不均等に含む。

2　黒褐10YR3/2　不揃いのローム粒を不均等に含む。焼土等の混入は少ない。2′には、黒色灰が混じる。

3　黒褐10YR3/2　不揃いのロームブロックの混じる掘り方埋め戻し土。焼土等の混入物やや多い。

第79図　29号住居



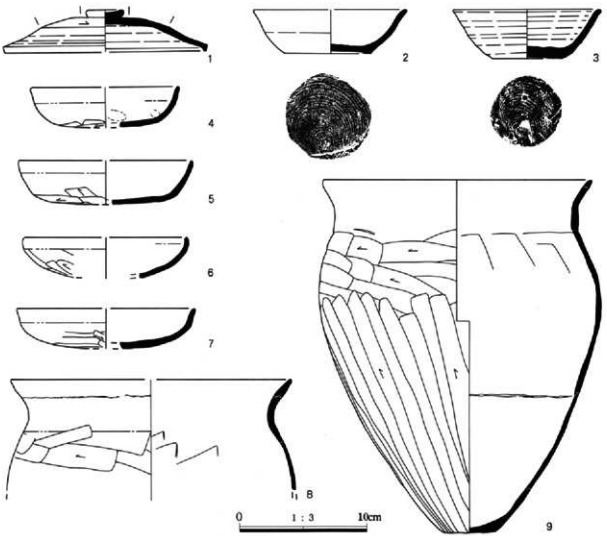
カマド

1　灰黄褐10YR4/2　粒子の細かな非粘性土。焼土・白色灰を含む。

2　灰黄褐10YR4/2　土質は１層土に近いが、混入物は少なくしまり欠く。

3　黒褐10YR2/2　黒色灰・炭化物粒を多量に含む、しまり強い層。煙道側ほどローム小ブロック多くなる。

4　黄褐2.5Y5/3　ローム土主体に黒色土をブロック状に含む袖構築材。焼土散見。しまり強い。



第80図　29号住居カマドおよび出土遺物

30号住居　（第81・82図　ＰＬ－11）

遺構確認段階で床面まで露出していた。そのため、重複遺構が本住居に伴うか後出するか確定できない部分がある。

位置　915－780Ｇ

重複　154・155号土坑、119号ピットに先出すると思われるが、明確ではない。34号住居には後出している。

主軸方向　Ｎ－97°－Ｅ

面積　7.69㎡

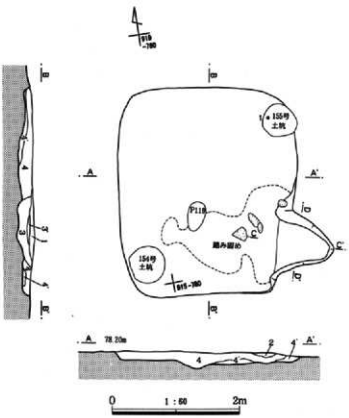
形態　床面の残存が悪く、掘り方の範囲から復元した部分が大きい。南辺2.1m、北辺2.4m、長辺3.0mの台形気味に歪んだ隅丸横長長方形を呈していると思われる。

壁　ローム土中にあるが、カマド周辺の一部を除いてほとんど残存していない。

カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面より若干掘り下げられている。煙道は壁外に70cm張り出している。袖部はほとんど残存していない。焚き口部分が極端に広がっていて、壊されている可能性がある。

内部施設　154・155号土坑は本住居に伴う可能性もある。その場合、配置からは貯蔵穴的な性格も考えられる。柱穴や壁溝は確認できない。

床　確認できたのはカマド前面付近のみである。凹凸のある床面であるが、残存部分では踏み固めが見られ、貼床が施されているようである。全域に深さ10cm前後の掘り方があると想定した。住居中央部分ではやや深くなっている。



30号住居

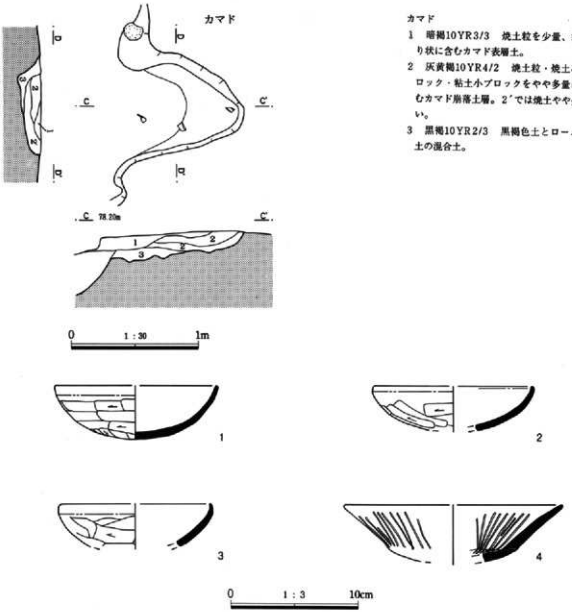
1　黒10YR2/1　混入物の少ないやや砂質土。しまりあり。最下層の住居埋没土。

2　暗褐10YR3/3　焼土小ブロックが不揃いに混じるカマド埋没土。

3　黒褐10YR2/2　混入物の少ない床下土坑埋没土。3′にはローム粒が縞状に見られしまり強い。貼り床の可能性あり。

4　黒褐10YR2/2　しまりの強い微粘性土。焼土粒を散見する掘り方埋め戻し土。4′ではローム状土の混入多い。

第81図　30号住居



第82図　30号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　土師器杯類のみ４点を図示したが本住居に確実に伴う土器は不明である。杯１は重複土坑上の出土で、他は掘り方内の出土となる。高杯４は混入品であろう。

その他の遺物　埋没土がほとんどないにもかかわらず破片総数で600点近く出土している。床下の遺物と混在している部分もあるが、床面の残存していた住居南半出土の遺物が圧倒的に多く、本来遺物の豊富な住居であったと思われる。甕類は小破片が多く時期不明のものが多い。羽釜（酸化焔）・扁平大形杯・高杯・刷毛目のある甕など雑多な遺物が見られるが、図示した３点の土師器杯類と同時期と思われる土器が過半を占めている。床下出土品は土坑状の窪み内の遺物が多い。竈内出土遺物は２～３％と少ない。カマド基部および焚き口に想定される位置からは礫の出土がある。被熱痕は確認されていないが、袖石や芯材であった可能性がある。

31号住居　（第83～85図　ＰＬ－11）

位置　905－780G

重複　39号住居に後出し、16号住居・２号井戸・107号土坑に先出している。

主軸方向　N－60°－E

面積　14.57㎡

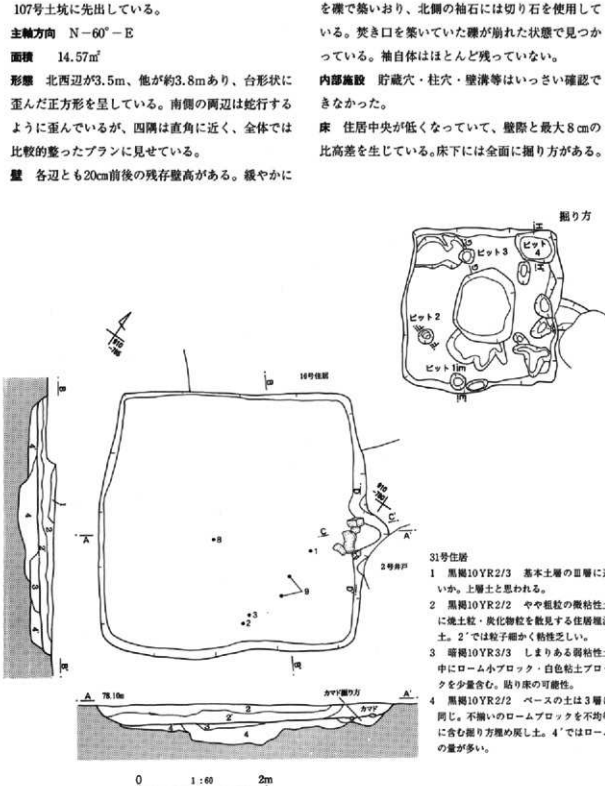
形態　北西辺が3.5m、他が約3.8mあり、台形状に歪んだ正方形を呈している。南側の両辺は蛇行するように歪んでいるが、四隅は直角に近く、全体では比較的整ったプランに見せている。

壁　各辺とも20cm前後の残存壁高がある。緩やかに立ち上がっている。

カマド　東壁のほぼ中央にある。燃焼部は壁際にあり、煙道は壁外に40cm張り出している。焚き口部分を礫で築いおり、北側の袖石には切り石を使用している。焚き口を築いていた礫が崩れた状態で見つかっている。袖自体はほとんど残っていない。

内部施設　貯蔵穴・柱穴・壁溝等はいっさい確認できなかった。

床　住居中央が低くなっていて、壁際と最大８cmの比高差を生じている。床下には全面に掘り方がある。



31号住居

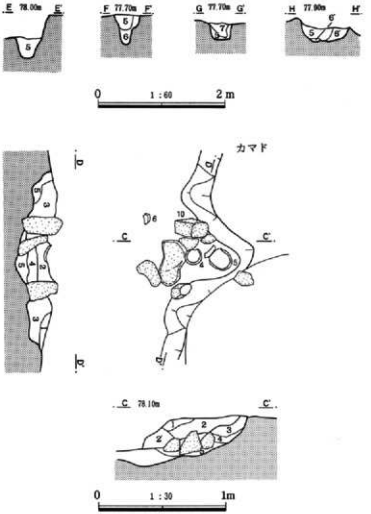
1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅢ層に近いか。上層土と思われる。

2　黒褐10YR2/2　やや粗粒の微粘性土に焼土粒・炭化物粒を散見する住居堆積土。2′では粒子細かく粘性乏しい。

3　暗褐10YR3/3　しまりある弱粘性土中にローム小ブロック・白色粘土ブロックを少量含む。貼り床の可能性。

4　黒褐10YR2/2　ベースの土は３層に同じ。不揃いのロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。4′ではロームの量が多い。

第83図　31号住居



ピット

5　黒褐10YR3/2　しまり強い弱粘性土。ローム小ブロックや焼土を少量含む。

6　褐10YR4/4　灰白色の粘土小ブロックをやや多量に含むしまり強い層。6′では粘土ブロック大粒で量も多い。

7　黒褐10YR2/2　やや腐植土質の土層。混入物ほとんどなし。

カマド

1　黒褐10YR3/2　ややしまりある住居埋没土。カマド材の混入はほとんどない。

2　灰黄褐10YR5/2　灰白色の粘土粒・粘土小ブロックが不均等に混じる弱粘性土。2′は住居埋没土との混合土。

3　にぶい黄橙10YR7/2　粘性土主体のカマド構築材。袖部分には焼土混じる。

4　褐灰10YR4/1　焼土・灰・粘土を多量に不均等に含む燃焼部埋没土。火床を特定する層は把握できない。

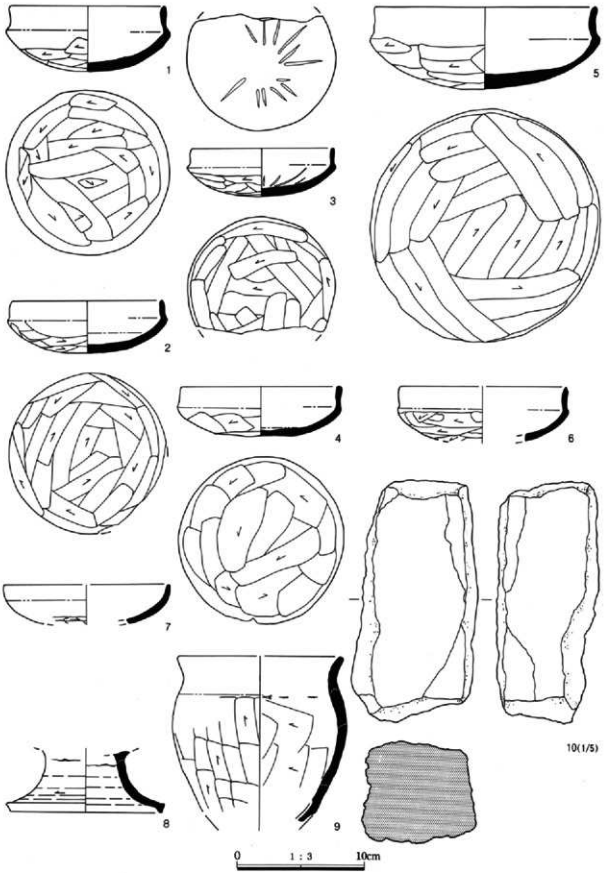
5　褐灰10YR5/1　3層に類似した粘性土中に焼土や炭化物粒を不均等に含む火床下埋め戻し土。

第84図　31号住居カマド

住居中央に住居の軸方向に沿うような長方形の土坑状の掘り方がある。その他にもピット状の窪みが8箇所見られるが、配置から主柱穴と想定できるものはない。

出土遺物　土師器杯類を中心に土器9点と袖石1点を図示した。土師器杯**1**・**6**はカマド前、**2**・**3**は南東壁下の床直上出土である。カマド内の遺物は杯類のみで、**4**・**5**が火床から若干浮いた状態で出土している。**7**は埋没土中の遺物である。唯一甕類で図示できた**9**はカマド前南側の床から10cm浮いた状態で、須恵器脚付き盤**8**は住居中央のほぼ床直上で出土している。袖石**10**はカマド北袖に据えられていた切り石である。被熱しカマド粘土の付着が顕著である。

その他の遺物　破片総数約450片で、薄手の甕類が主体である。杯類は扁平と深いものの両者あるが、模倣杯以降のものであった。やや大形の破片もあるが接合するものが少なかった。須恵器はほとんどない。刷毛目のある甕類が1割近く混入していた。床下遺物は5％ほどで、古墳時代前・中期のものが目立った。その他に長さ20cm前後の礫が床直上レベルで6点、散在するように出土している。鷹栖み石には丸すぎる一群である。



第85図　31号住居出土遺物

32号住居　（第86図　ＰＬ－11）

10号住居の床下精査時に、方形の掘り方を想定した遺構である。部分的に床面らしい踏み固め面が方形の区画内にのみ見られ、隅が比較的整った方形プランとなるので、別の住居として扱った。

位置　920－790Ｇ　10号住居の内側に収まる。

重複　10・28号住居に先出する。

主軸方向　Ｎ－67°－Ｅ

面積　8.70㎡（残）　9.5㎡（推）

形態　掘り方範囲から推定される北辺は2.8ｍで、大型住居にはならないと思われる。

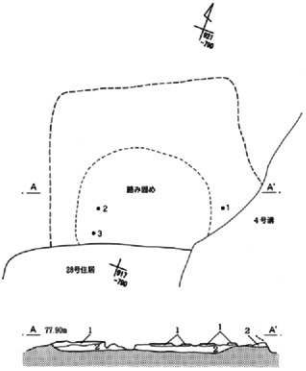
壁　残存していない。

床　住居中央から南寄りにかけて、床面が残存している範囲内では、強い踏み固めや焼土・灰による表面の汚れが観察できる。床下にはほぼ全面に深さ15cm前後の掘り方が確認できる。

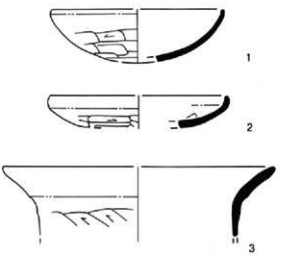
内部施設　カマドの時期の住居と思われるが、痕跡は確認できない。東壁南寄りの想定床が東側に膨らんでおり、カマド前面の踏み固め部分にあたる可能性があるが、焼土・灰等による想定の補強はできない。貯蔵穴や柱穴等の内部施設の痕跡もいっさい確認できない。

出土遺物　出土遺物総量はきわめて少ないが、破片３点を図示した。いずれも住居中央南側の床面より若干浮いた状態で出土した土師器であり、本住居に伴うか10号住居掘り方内の遺物であるか、確定できない。

その他の遺物　14片だけだが、大形破片主体となっている。図示したものとは別個体の長胴気味の土師器甕胴部片などがある。



32号住居
1　にぶい黄褐7.5YR5/3　ローム土や白色味をおびる粘性土を主体とした貼り床。表層に焼土や炭化物粒を含むしまり強い層。
2　黒褐10YR2/2　黒色味の強い微粘性土中にロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土。



第86図　32号住居および出土遺物

33号住居　（第87図　ＰＬ－11）

26号住居の床下精査時に、別住居の存在に気付いた遺構である。そのため調査段階では26号住居に先出すると想定していたが、床面の切り合いが不明瞭で、新旧を確定する根拠はない。

位置　865－805Ｇ

重複　４号溝、84・108号土坑に先出している。26号住居に重複。

主軸方向　Ｎ－38°－Ｗ

面積　8.19㎡（残）

形態　掘り方からの推定範囲は南西辺4.4ｍ、北西辺2.7ｍ以上である。残存している隅は直角に近い。

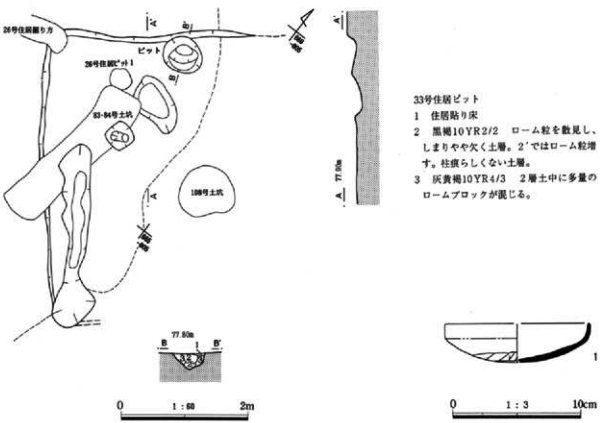
壁　残存していない。

内部施設　カマドや炉の痕跡は確認できなかった。ピット状の掘り込みが確認されているが、主柱穴状の配置上にはない。ピット１は本住居に伴うか判断できなかったが、北西壁の中央直下と推定される位置にある、断面に柱痕の認められる施設である。その他の内部施設は確認できない。

床　明瞭な床面は確認できなかった。遺構確認段階ですでに床面は削られ、掘り方を調査したものと想定している。掘り方は深さ12cm前後あるようで、一部で土坑状の窪みがある。また、壁際が若干深くなる傾向がある。

出土遺物　掘り方から出土した古墳時代後期の土師器杯１を図示した。本住居に確実に伴う遺物であれば、本住居が26号住居に後出する証左となろう。

その他の遺物　約100点を出土しているが大半が当初想定した床面より低い位置で出土した掘り方内扱いの土器である。刷毛目のある甕類小破片が目立つ。その他の破片も古墳時代のものだが、中世焼き締め陶器片が１片混じっている。



第87図　33号住居および出土遺物

34号住居　（第88・89図　ＰＬ－12）

位置　915－780Ｇ

重複　36号住居に後出し、30・40号住居・21号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－72°－Ｅ

面積　13.89㎡（残）

形態　推定で短辺3.4ｍ、長辺4.6ｍの縦長隅丸長方形となろう。

壁　残存壁高は３～７㎝しかない。

カマド　東壁の中央わずかに南寄りにある。燃焼部は壁際から住居内にあり、煙道は壁外に50㎝張り出している。袖部は比較的良く残存している。

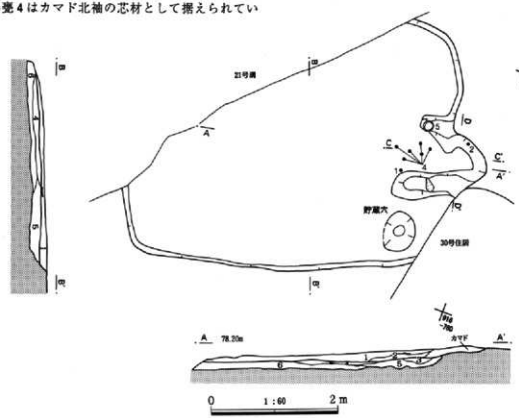
内部施設　貯蔵穴状のピットが南東隅付近にある。床面からの深さ23㎝で底面が丸い不明瞭なものである。柱穴・壁溝等は確認できない。

床　踏み固めの弱い不明瞭な床である。住居中央が窪む傾向があり、壁際から５㎝前後の比高差を生じている。床下全面に平坦な掘り方が見られる。

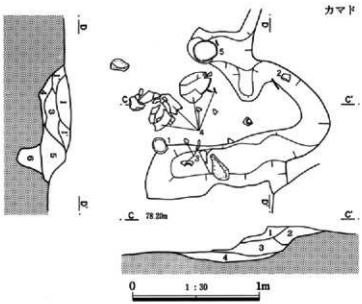
出土遺物　カマド内で出土した５点を図示した。土師器甕４はカマド北袖の芯材として据えられていて、５は火床からカマド前面にかけて散乱していた破片を接合したもので、本住居で使用されていた遺物である。１～３の杯類もカマド内出土である。

その他の遺物　破片総数は約350片ある。小破片中心だが40％近い掘り方出土があり、床面把握に問題が生じる。土師器薄手甕が主体で、杯類は小型で丸底気味になる。須恵器片はない。刷毛目のある甕類片も５％ほど混じり、特に台部片は３個体以上ある。

34号住居
1　黒褐10YR2/2　しまり強い微粘性土で焼土粒・褐色土ブロックを散見する。
2　灰黄褐10YR4/2　１層土中に焼土粒・粘土粒の混じるカマド崩落土混入土層。
3　黒10YR2/1　黒色灰・炭化物粒を主体とするカマド下埋め戻し土層。
4　にぶい黄橙10YR6/3　黄色味をおびた粘性土と暗褐色土の混合土で、しまりの強い貼り床層。黒色灰を多く含む部分があり、36号住居の床面も含まれる。
5　黒褐10YR2/2　ローム小ブロック・ローム粒を少量含む掘り方埋め戻し土でややしまり欠く。
6　36号住居掘り方埋め戻し土。



第88図　34号住居



カマド

1　にぶい橙7.5YR7/4　暗褐色土と黄色味の強い粘性土の混合土に多量の焼土小ブロックを含む。1′にはローム状土混入。

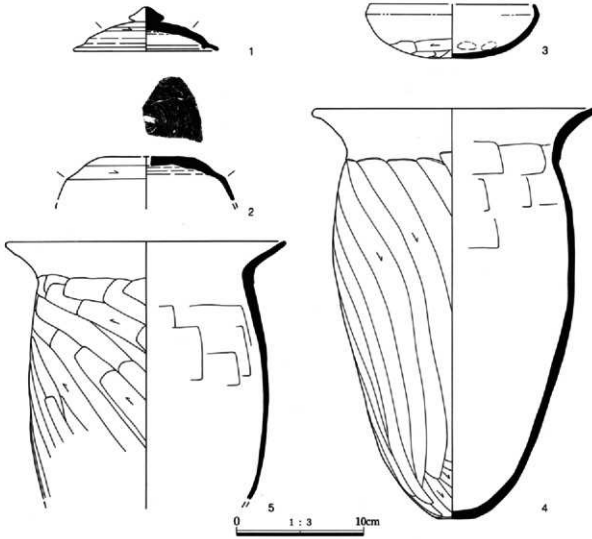
2　にぶい黄橙10YR6/3　ローム状土主体に、焼土粒・粘土粒を少量含む。

3　黒褐10YR2/3　ブロック状の粘性土主体に焼土が少量混じる。天井部構築材の可能性があるが、この層下に焼土や灰は少ない。

4　暗褐10YR3/3　混入物の少ない粘性土。掘り方埋め戻し土か。

5　浅黄橙10YR8/3　粘性の強いローム状土。袖構築材。

6　暗褐色土と黄橙色軽石ブロックの混土層。本住居に伴うか不明。



第89図　34号住居カマドおよび出土遺物

35号住居　(第90・91図　ＰＬ－12)

位置　865－810G

重複　5号住居、2号溝、6・12号土坑に先出している。古墳時代の方形区画を築く溝に唯一先出する住居であるが、２Ｂ溝との先後関係の把握のみで、２Ａ溝部分との新旧は確認できていない。

主軸方向　N－25°－W

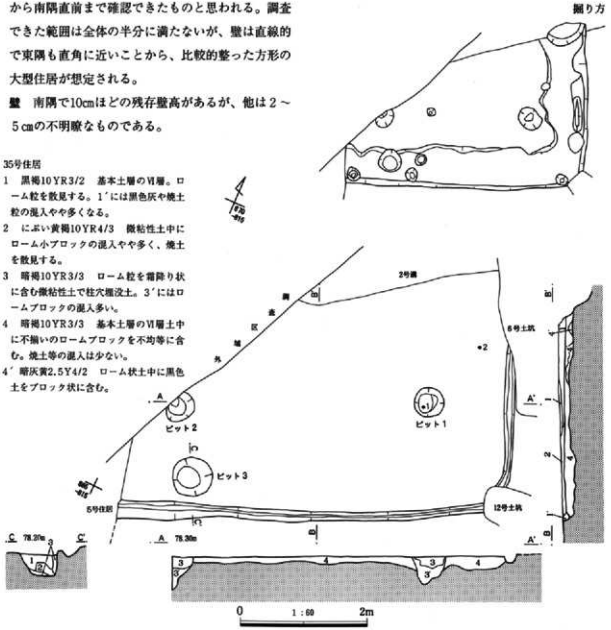
面積　16.69m²（残）

形態　北側は２号溝に壊され、西側は調査区域外になる。南東辺は約6.0m残存している。柱穴の位置から南隅直前まで確認できたものと思われる。調査できた範囲は全体の半分に満たないが、壁は直線的で東隅も直角に近いことから、比較的整った方形の大型住居が想定される。

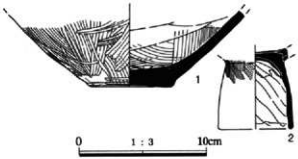
壁　南隅で10cmほどの残存壁高があるが、他は２～５cmの不明瞭なものである。

内部施設　２本の柱穴が調査されている。４主柱穴の南側２本と思われるが柱痕は確認できない。Ｐ３は深さ40cmで柱穴と同規模だが、底面は平坦で、入り口施設脇の貯蔵穴となる可能性がある。深さ10cm前後の壁溝が調査範囲の全域で確認されている。炉の時期の遺構であるが、痕跡は確認されない。

床　弱い凹凸のある床で、５cm前後の比高差がある。掘り方が全面にみられ、壁際が深くなっている。貼り床の痕跡は見られない。



第90図　35号住居



第91図　35号住居出土遺物

出土遺物　土師器２点を図示した。壺１がＰ１内、台付甕台部２が北東壁下の床直上出土しており、本住居の時期を決定できる遺物と考えられる。

その他の遺物　古墳時代後期の土師が小破片を中心に約100片出土している。丸胴気味の土師器甕胴部片にやや大型破片が見られる。須恵器はほとんどなく、掘り方内の出土遺物もない。刷毛目のある甕類が数点混じっている。

36号住居　（第92・93図　ＰＬ－12）

位置　915－780Ｇ　34号住居の中にあり、同住居の床下精査段階まで把握できなかった遺構である。

重複　34号住居、４・21号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－71°－Ｅ

面積　10.17㎡（残）

形態　北側が21号溝に壊されているが、柱穴の位置

36号住居

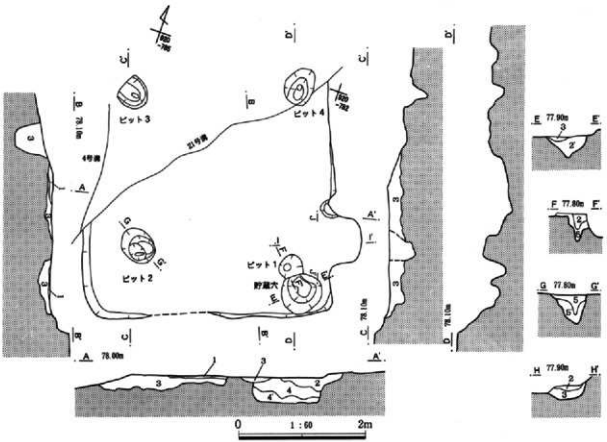
1　黒褐10YR2/3　微粘性土中にローム粒や灰白色粘土を含む層。しまり強い貼り床層。

2　暗褐10YR3/3　焼土や炭化物粒を不均等に含む層。カマド下や柱穴内に見られる。

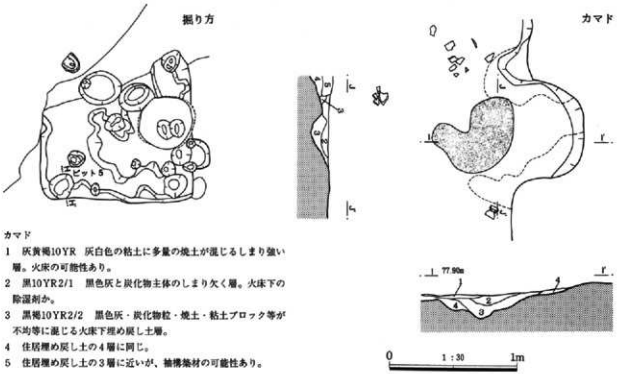
3　黒褐10YR2/3　主体の土地は１層土に同じ。大粒の灰白色粘土・ローム状土ブロックの混じる掘り方埋め戻し土層。

4　黒褐10YR2/2　床下土坑状の掘り方埋め戻し土。焼土や炭化物粒が混じり、4′では粘土ブロックやや多い。

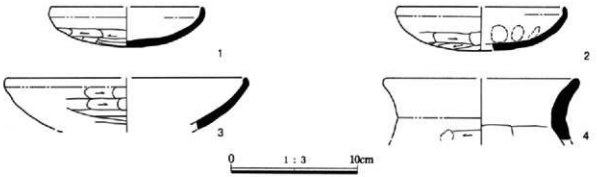
5　暗褐10YR3/3　Ｐ１・２埋め戻し土。しまり強く、柱痕は特定できない。5′ではローム土や粘土の小ブロックやや多い。



第92図　36号住居



カマド
1　灰黄褐10YR　灰白色の粘土に多量の焼土が混じるしまり強い層。火床の可能性あり。
2　黒10YR2/1　黒色灰と炭化物主体のしまり欠く層。火床下の除湿剤か。
3　黒褐10YR2/2　黒色灰・炭化物粒・焼土・粘土ブロック等が不均等に混じる火床下埋め戻し土層。
4　住居埋め戻し土の４層に同じ。
5　住居埋め戻し土の３層に近いが、袖構築材の可能性あり。



第93図　36号住居カマドおよび出土遺物

から横長長方形の住居であったと想定される。

壁　ほとんど残存していない。

カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は壁際にあり、火床は床面と同レベルにある。粘土を構築材に使用しているが、袖部の残存状態は悪い。

内部施設　21号溝内にあったピットを配置から本住居に伴うものと推定しＰ３・Ｐ４とした。４主柱穴となるが、南東側のＰ１はカマド前面に当たるため、規則的な配置から外れている。南東隅に貯蔵穴と思われる深さ39cm施設があるが、底面は不整で、Ｐ１と上面で重複するほど近接している。

床　ほとんど残存していない。ほぼ全面に掘り方があるが、底面は壁際が深くなっている。また、土坑状の凹凸が多い。

出土遺物　掘り方内出土の土師器４点を図示したが、明らかに床下と確認できない位置の出土で、重複する34号住居との帰属が明瞭でない遺物である。

その他の遺物　土師器のみ破片総数約200片で、薄手甕に接合して大破片となるものが混じっている。杯類は模倣杯が主体となっている。刷毛目のある甕類破片もほとんど含まれていない。

37号住居　（第94・95図　ＰＬ－12）

位置　885－800G

重複　7・24号住居、4号溝、88・89号土坑に先出している。

主軸方向　N－42°－E　　**面積**　11.54㎡（残）

形態　残存部分は少ないが、掘り方の範囲から一辺4.7m前後の正方形に近い住居と思われる。

壁　南西壁で最大7㎝の壁高がある。

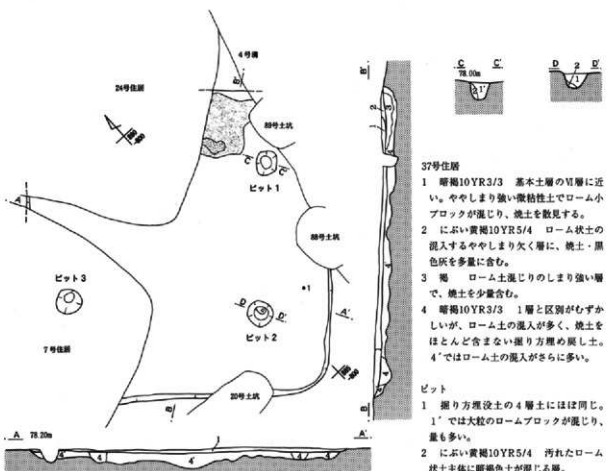
炉　北東壁下と想定できる部分の床面に焼土や炭化物粒が見られ、焼土の混じる掘り方が確認されている。炉として扱ったが壁に近すぎており、初現期のカマドの痕跡となる可能性もある。

内部施設　3本の柱穴が確認できる。北側の柱穴が24号住居に壊されているが4主柱穴配置になると思われる。

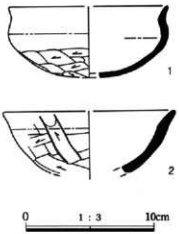
床　凹凸の多い床面で住居中央付近が深くなる傾向があり、壁際と5㎝前後比高差がある。全面に深さ10㎝以上の掘り方があり、不規則な凹凸が多い。貼り床は確認できない。

出土遺物　土師器杯類2点を図示した。1は南寄りの床面直上、2は埋没土中の遺物である。

その他の遺物　破片数は約400点だが、40％近くが床下出土の遺物であり、床面把握には疑問が残る。土師器杯類の多さがやや目立ち、図示した土器と同時期の遺物が主体である。刷毛目のある甕類も10％近く見られる。須恵器は返りのある蓋1点のみで、後世の混入品も少ない。



第94図　37号住居



第95図　37号住居出土遺物

38号住居　（第96図　ＰＬ－13）

位置　912－788G

重複　25号住居・４号溝に先出し、41号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－53°－Ｅ前後か。

面積　1.50m²（残）

形態　確認できたのがカマド周辺の北東辺のみで、全体の様子は不明である。

壁　重複住居埋没土が壁面となり、確認は難しかった。残存壁高は10cm前後で、緩やかに立ち上がっているのは崩落のためと思われる。

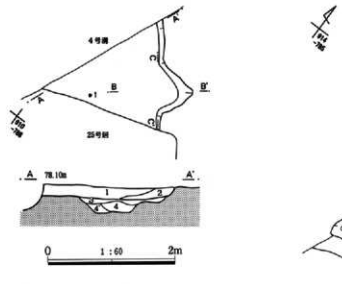
カマド　北東辺にある。燃焼部は住居内から壁際周辺にある。火床は住居床レベルにあり、被熱痕は顕著で、埋没土や掘り方にも焼土や灰が比較的多く見られる。煙道は壁外へ40cm張り出している。構築材には粘土を使用しておらず、天井部の崩落土は不明瞭であり、袖部も残存していない。

内部施設　調査できた範囲では柱穴・壁溝等の施設は何も確認されていない。

床　ローム面に築かれている上、調査範囲では焼土や灰による汚れがあり、比較的明瞭な床面である。床下には土坑状の掘り方があるが、大半は掘り下げ面をそのまま床面としている。

出土遺物　５点を図示した。須恵器蓋１はカマド前面・土師器鉢４はカマド内の床面直上の出土である。他の３点は掘り方内の出土で、２・５はカマド西側の土坑状掘り方内の出土である。

その他の遺物　破片数は約100片ある。土師器甕類は細片がほとんどで、杯類にやや大形破片が見られる。扁平大形の杯が主体だが、模倣杯片も混じっている。須恵器は１片のみで、刷毛目のある甕類もわずかである。図示した個体に多かった床下遺物も、その他の破片中には少なく、床面把握には問題ないと思われる。



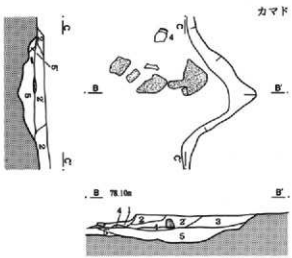
38号住居

1　黒褐10YR3/1　基本土層の Ⅵ層に近い。焼土粒・炭化物粒を不均等に含む。

2　黒褐10YR3/2　ローム状土ブロックや焼土粒の混じるカマド崩落土層。

3　褐灰10YR4/1　灰白色粘土混じりのしまり強い層。ローム小ブロック・焼土粒を散見する。貼り床か。

4　にぶい黄褐10YR4/3　ロームブロックを多量に含む掘り方埋め戻し土層。4′ではローム土少なく、灰白色粘土が混じる。



カマド

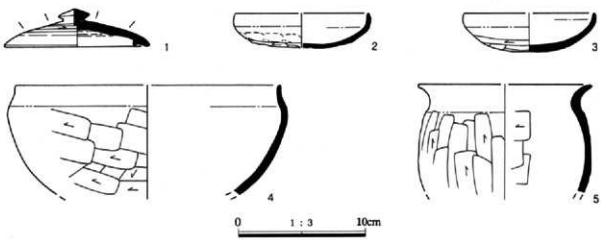
1　住居堆浸土の１層に同じ。

2　暗褐10YR3/3　焼土粒が少量混じる。弱粘性土層。2′では焼土がブロック状で、黒色灰の混入も多い。

3　黒褐10YR2/3　褐色粘性土が少量混じり、焼土粒を散見する。

4　黒褐10YR2/2　黒色灰や炭化物粒主体で焼土の混入も多い。火床直上に相当する層。住居側では焼土中心となる。

5　黒褐10YR3/1　焼土粒や粘土粒が少量混じる掘り方埋め戻し土。5′ではロームブロックが混じる。



第96図　38号住居・カマド・出土遺物

39号住居　（第97・98図　ＰＬ－13）

住居の明瞭なプラン確認ができないまま、サブトレンチを設定して床面を把握した段階で、後出する別遺構のあることがわかった。住居には多量の粘土が床面上で確認されていて、放置できなかったので、調査の手順を変えて先出する住居を先に掘り下げた。別遺構は白色粘土層を掘り込んでおり、住居廃絶直後、まだ床面が埋もれていない段階で粘土採掘坑として穿たれ、その後、井戸として使い続けたものと判断した。なお、粘土採掘坑については本文429頁で扱っている。

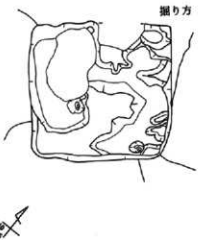
位置　905－785Ｇ

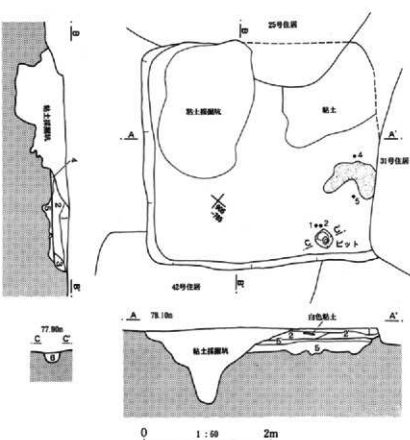
重複　25・31号住居に先出し、42号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－52°－Ｅ

面積　11.50㎡（残）

形態　南西辺が全容を把握できる。北東辺と東側両隅は不明瞭だが、一辺約3.4ｍの正方形に近いプランになると思われる。





39号住居

1　黒褐10YR2/2　基本土層Ⅵ層に近いややしまり欠く層。焼土粒散見。

2　黒褐10YR3/2　ロームや白色粘土小ブロックを若干含むしまりある粘性土層。2′には焼土混じる。

3　黒褐10YR2/2　不均等なロームブロックを含むしまりやや弱い層。

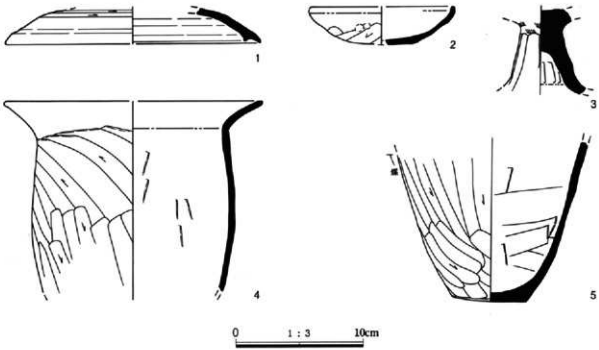
4　灰白5Y7/1　粘土ブロックのほぼ純層。踏み固められている。

5　黒褐10YR2/2　ロームブロックを多量に含む住居復り方埋め戻し土。5′層は踏み固め強い部分。

ピット

6　黒10YR2/1　混入物の少ないややしまり欠く粘性土層。

第97図　39号住居



第98図　39号住居出土遺物

壁　南側で15cm前後の残存壁高が計れる。上半は黒色土内にあるが、下端はローム土内にあり、直線的な立ち上がりの残る部分が多い。

カマド　北東辺の東寄り床面に灰が多く見られ、カマド確認のための調査を行った。焼土が多く、甕類の出土もこの一画に集中しており、31号住居にカマドを壊されていると想定した。しかし残存するべき位置に袖部および燃焼部や掘り方の痕跡も確認できず、不確実なものである。

内部施設　南東壁下に性格不明の小ピットがある。床面での規模は39×36cm、深さ26cmで、底面は柱痕状に２段底になっている。壁溝や貯蔵穴等は確認できない。

床　ローム面に築かれていて踏み固めの強い床である。不規則な凹凸があり、住居内でも５cm近い比高差を生じている。壁際が深くなる傾向の不規則な掘り方がある。また、底面には小ピット状の窪みが多い。埋め戻し土の上面に不明確な貼り床がある。

出土遺物　住居東隅を中心に出土した５点を図示した。須恵器蓋１と土師器杯２はＰ１脇の床面より少し浮いた状態の出土である。土師器甕４・５はカマド推定位置の灰層周辺の出土である。土師器高杯３は埋没土内の遺物で混入品であろう。

その他の遺物　破片総数は約400片ある。土師器甕類の小破片中心である。接合して大破片となったものが薄手長胴気味の甕に多い。杯類には小型の模倣杯がやや目立つ。須恵器はきわめて少ない。古式土師器は10％近く混入している。床下遺物は５％ほどで、この中には特に古式土師器が多い。

40号住居　（第99・100図　ＰＬ－13）

位置　920－780G

重複　34・36号住居、4・21号溝に先出している。

主軸方向　Ｎ－78°－Ｅ

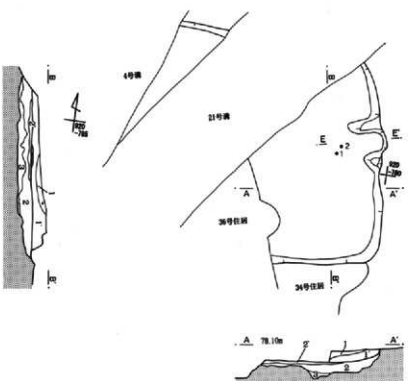
面積　4.99㎡

形態　後出の遺構に大半を壊され、確実な部分は東側が残存するのみである。4号溝と21号溝に挟まれた一画に本住居床面とほぼ同レベルで、住居床面の可能性のある平坦面が見つかっている。本住居の床面であれば、短辺3.0m、長辺3.7m以上の縦長長方形となる。

壁　東辺では13cm前後の残存壁高がある。壁面の下半はローム土内にあり、垂直に近い立ち上がりの部分もある。

カマド　東壁のほぼ中央にある。燃焼部は住居内にあり、煙道の張り出しは僅かである。火床は住居床面より低い位置にあったと思われ、崩落天井らしい粘性土が床面レベルに見られる。

内部施設　床下精査時に柱穴になる可能性のあるＰ１を調査した。確認面での規模は44×41cm、住居床面からの深さは25cmで柱痕は認められない。主柱穴配置上にあるピットだが、対になるべき柱穴は確認



40号住居

1　黒褐10ＹＲ 2/2　基本土層の第Ⅲ層に近い住居埋没土で、混入物少ない。1'にはロームや灰白色粘土の小ブロック混じる。

2　黒褐10YR　ローム土中の軽石の混入多い住居掘り方埋め戻し土で、2'は踏み固めの極めて強い部分。

3　暗褐10YR3/3　ローム状土やローム土中の軽石の混入多いしまり強い層。

ピット・床下土坑

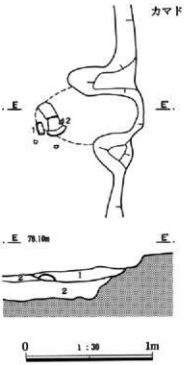
4　黒褐10YR3/1　住居埋没土と同じ土内に、焼土・炭化物・粘土等を不均等にやや多量に含む。

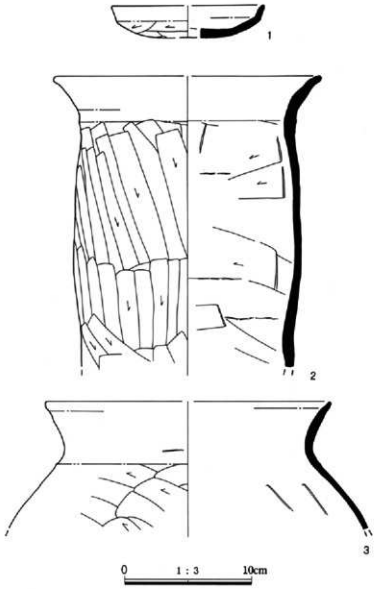
5　明褐灰5YR7/2　粘性土中に焼土や黒色土ブロックを含む。

6　住居掘り方の２層に同じ。

0　1：60　2m

第99図　40号住居





カマド

1　黒 10YR2/1　黄褐色の粘性土ブロック・焼土・黒色灰・炭化物粒などが混じったしまり強い層。

2　黒褐 10YR2/2　住居掘り方埋没土の赤粘性土。しまり強い。2′は床面に相当する特にしまり強い部分。

第100図　40号住居カマドおよび出土遺物

されていない。貯蔵穴・壁溝等の施設は調査範囲には確認できない。

床　ローム面にある踏み固めの強い床で、住居中央が壁際に比べ３cm前後窪んでいる。凹凸が大きく不規則な掘り方がある。住居中央にのみ貼り床が認められる。

出土遺物　土師器３点を図示した。杯１と甕２はカマド前面の床直上出土遺物である。本住居に確実に伴う遺物と考えられる。壺３はＰ１内底面から出土している。

その他の遺物　破片数は70片だが、土師器甕類には接合して大破片となったものが多い。丸胴気味のやや薄手の甕となる。杯類は少ないが模倣杯片が見られる。須恵器は出土しない。

41号住居　（第101図　ＰＬ－13）

位置　910－785G

重複　25・38号住居、４号溝に先出している。

形態　床面調査段階でもカマドのある東隅付近が僅かに残存するだけで全容は不明瞭であった。掘り方の範囲からは北東壁が2.1m以上、南東壁が2.9m以上あることが確認できる。

主軸方向　Ｎ－55°－Ｅ前後か。

面積　3.39㎡

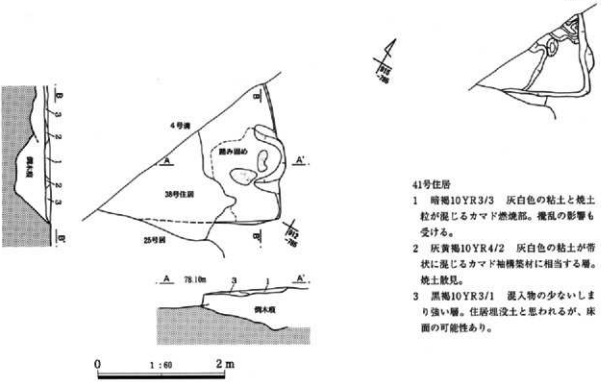
壁　倒木痕の黒色土内にあって不明瞭である。深さ２～３cmの僅かな壁が一部で認められるだけで、大半は残存していない。

カマド　北東壁の南寄りにある。燃焼部は住居内にあり、煙道部分は確認できない。火床付近に白色粘土が若干残っており、構築材に使用したものと思われる。本住居のカマドは倒木痕であるしまりのない黒色土上に築かれているが、カマド基底部に顕著な補強は行っていない。火床は住居床面より若干低い位置にあったと思われるが、しまりのない地山上にあるため、沈降した可能性もあろう。

内部施設　調査範囲には貯蔵穴・壁溝等の施設は確認できない。

床　わずかな残存部分でも、床と埋没土の区別は明瞭ではない。カマド前面で部分的に踏み固めや灰の散布が観察される。カマド周辺には深さ10cm前後の掘り方があるが、埋め戻し土と倒木痕内の土との区別は難しい。部分的に貼り床が認められるが、倒木痕の柔らかな土の上の施設としては、貼り床の厚さは不十分である。南側には深い掘り方があるが、後出住居掘り方との区別は不明瞭である。

出土遺物　図示できる遺物はなかった。土師器の微細片が少量出土する以外、遺物の出土はない。



41号住居
1　暗褐10YR3/3　灰白色の粘土と焼土粒が混じるカマド燃焼部。攪乱の影響も受ける。
2　灰黄褐10YR4/2　灰白色の粘土が帯状に混じるカマド袖構築材に相当する層。焼土散見。
3　黒褐10YR3/1　混入物の少ないしまり強い層。住居埋没土と思われるが、床面の可能性あり。

第101図　41号住居

42号住居　（第102・103図　ＰＬ－14）

位置　900－780G

重複　39号住居・98号土坑に先出している。

主軸方向　N－68°－E

面積　9.0㎡（推）

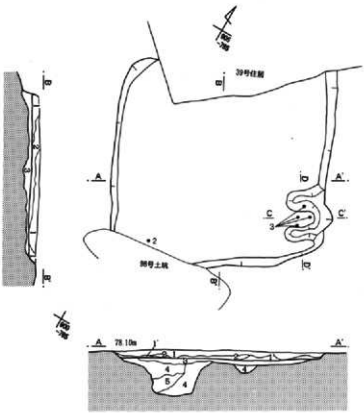
形態　二隅が壊されていて不明瞭だが、一辺３ｍ前後で菱形にやや歪んだ正方形を呈すと思われる。

壁　黒色土およびローム状土内にあり不明瞭で、特に東壁は倒木痕上にあって分かりにくくなっている。残存壁高は最大でも10cm程度で、立ち上がりは緩やかである。

カマド　東壁の南隅にある。燃焼部は住居内にあり煙道の壁外への張り出しは10cmと短い。火床は住居床面と同レベルにあり、煙道に向かって緩やかに立ち上がっている。袖部の残存状態は悪いが、部分的に灰白色粘土の構築材が観察される。カマド周辺は倒木痕上の黒色土上にあるが、基底部に顕著な補強は見られない。

内部施設　床面確認では柱穴や壁溝等の施設は確認されない。掘り方精査時に貼り床下の柱穴状のピット２基を調査しているが、主柱穴配置上に並ぶ施設ではない。西壁下のピットは入り口施設であった可能性もあろう。

床　ほぼ水平な床面で、住居中央が壁際に比べて中央がわずかに低くなる傾向がある。貼り床が住居中央に施されているが、踏み固めはあまり強くない。全体に浅い掘り方がある。西寄りにある土坑状の掘り込みは確認面での規模が110×82cm、深さ50cmあるが、ピット状の２基は深さ20cm以内の不明瞭な施設である。



掘り方

42号住居

1　黒褐10YR2/2　基本土層の第層に近い。しまり弱い微粘性土で、炭化物粒を散見する。1′にはローム小ブロックやや多い。

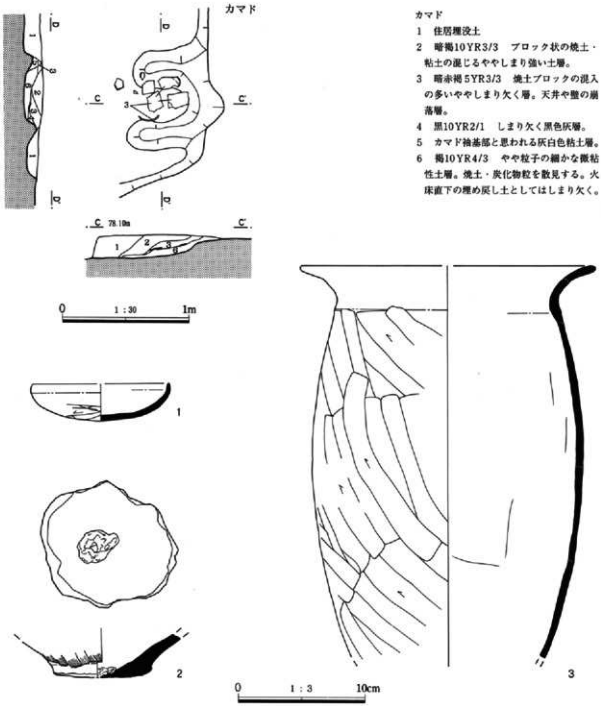
2　黒10YR1.7/1　黒色灰を多量に含むしまり弱い非粘性土層。

3　黒褐10YR3/2　不揃いのロームブロックを不均等に含む弱粘性土。焼土・灰を散見する。貼り床に相当するが、踏み固めは弱い。

4　暗褐10YR3/3　３層土に比べてロームブロックが大粒で、焼土等を含まない。4′には黒色灰がやや多い。

5　にぶい黄褐10YR5/3　ローム土主体で黒色土がブロック状に混じる。

第102図　42号住居



第103図　42号住居カマドおよび出土遺物

出土遺物　土師器3点を図示した。甕3はカマド火床上に散らばっていたものが接合したもので、本住居に確実に伴う遺物である。底部に穿孔された壺2は南隅の床直上出土遺物ではあるが、出土位置は重複土坑に接している。

その他の遺物　破片数は90片しかなく、ほとんどが小破片でボリュームもごく少ない。刷毛目のある甕類から平安時代の須恵器杯まで雑多な時期の遺物が混じるが、模倣杯以降の小型杯類がやや目立つ。掘り方埋め戻し土内からの遺物も20%以上混じっている。床面からは拳大の礫5点の出土もある。

43号住居　（第104～107図　ＰＬ－14）

位置　855－795・800Ｇ　東壁は遺構確認段階で明瞭に把握できたが、南側・西側は本遺跡内で最も重複が激しい上に、工事で上面からの強い填圧を受けている一画にあたる。

重複　18号住居・14号溝・114・134号土坑に先出している。45号住居にも先出すると思われる。

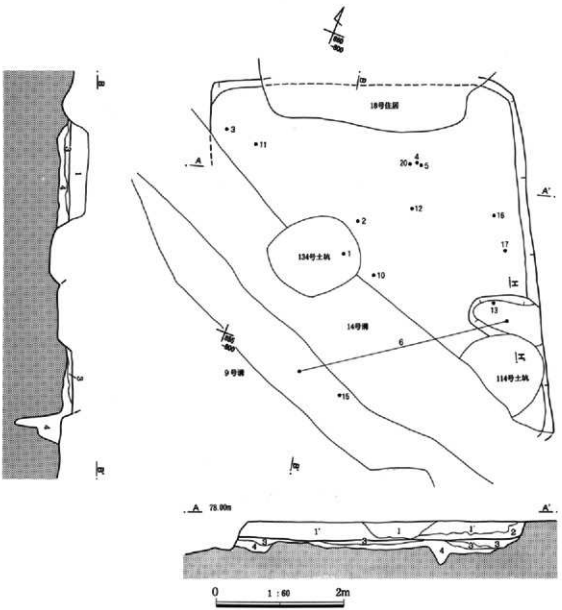
主軸方向　Ｎ－20°－Ｅ前後か。

面積　15.60㎡

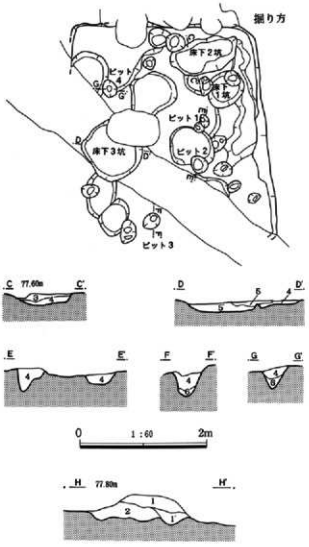
形態　東辺は約5.5mの長さが確認でき、大型の住居になると思われる。北辺は掘り方の痕跡などを含めて4.5mまで確認できるが、北西隅は不明瞭となる。西辺・南辺は床下精査を行った段階でも、壁の立ち上がりや掘り方さえ把握できなかった。残存する範囲からは各辺は直線的で、隅も直角に近い整った方形住居が想定できる。

壁　残存する部分ではローム土内にあり、東壁では高さ20～24cmの垂直に近い立ち上がりの良好な壁が観察される。

カマド　遺構確認段階から東壁の南隅に焼土の多い



第104図　43号住居



第105図　43号住居掘り方およびカマド断面

43号住居

1　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土層で基本土層のⅥ層に近い。ローム粒や焼土粒を不均等に含む。1′では炭化物粒の混入が増え、やや砂質になる。

2　灰黄褐10YR4/2　粒子の細かな粘性土層で、やや大粒のローム粒を霜降り状に含む。焼土の混入もやや多い。

3　暗褐10YR3/3　やや粒子の粗い微粘性土。貼り床に相当するが、踏み固めは強くない。不揃いのロームブロックや焼土・炭化物粒が混じる。3′には黒色灰が混じる。

4　にぶい黄褐10YR4/3　ローム小ブロックを多量に含むしまり強い層。掘り方埋め戻し土層。粘土粒が少量混じる。

床下の遺構

5　暗褐10YR3/3　やや砂質土でローム粒の混入やや多く、焼土・炭化物粒を不均等に含む。住居に後出する遺構の可能性あり。5′ではローム小ブロックの混入やや多い。

6　暗灰黄7.5YR4/2　白色味をおびるローム状土の混入多い、ややしまり強い層。焼土等の混入物を含まない。

カマド袖

1　暗灰黄7.5YR4/2　ローム粒・ローム状土小ブロック主体の土。焼土散見。1′には焼土やや多く、黒色灰も混じる。

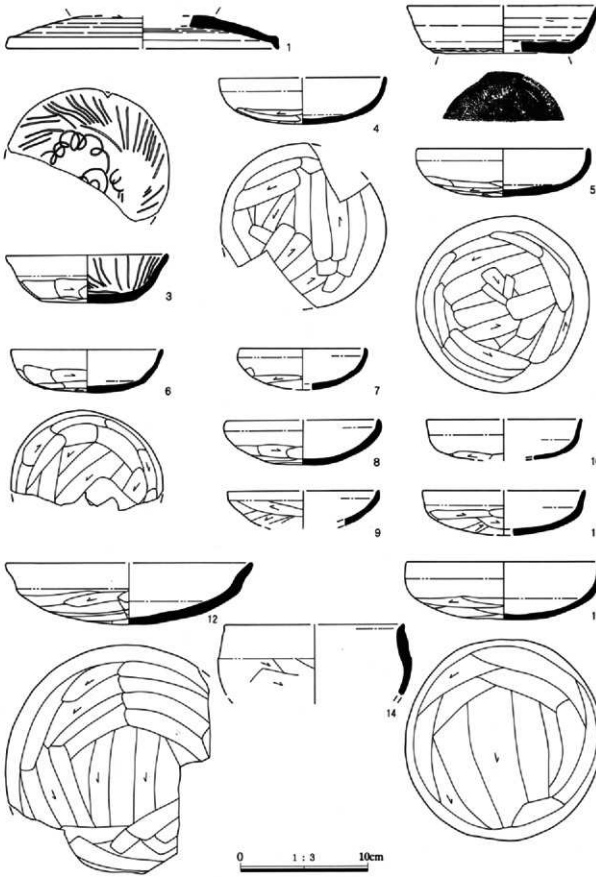
2　暗褐10YR3/3　1層土中に小ブロック状の黒色土の混入が多くなる。

地点が把握され、カマド確認のための調査をおこなったが、大半を後出する土坑に壊されている上、煙道・火床などの施設は明らかにできなかった。ローム土の多いやや硬化した部分を袖の可能性のあるものとして図示したが、袖とする明確な根拠は持ち得ていない。壁の崩落部分となる可能性もあろう。

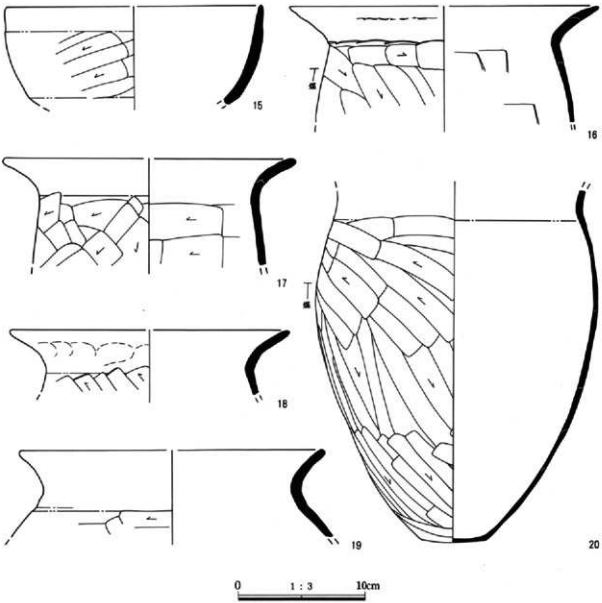
内部施設　床面段階では柱穴等の施設は確認できなかったが、掘り方精査時には多数のピットが確認されている。Ｐ１とＰ４は配置や深さより柱穴になる可能性があろう。Ｐ３は断面に柱痕が確認されているが、本住居に伴うか不明である。

床　ローム土混じりの貼り床が部分的に確認されているが、明瞭なものではない。不規則な掘り方があり、底面は土坑状となる部分が多数あるが、住居南半で確実に本住居に伴う掘り方であるか確認できるものはほとんどない。

出土遺物　住居のほぼ全域に散らばった20点を図示した。土師器鉢13はカマド袖上、甕16・17は東壁下で住居の輪郭・床面とも確実な地点の出土である。杯3・11は西隅と想定される部分、杯2・10・12は住



第106図　43号住居出土遺物（１）



第107図　43号住居出土遺物（２）

居中央からの出土で、いずれも床面より浮いた状態での出土である。杯４・５は甕20の中に入れ子状になって住居中央北東寄りからまとまって出土している。土師器杯６はカマド袖上と不明瞭であった14号溝南側との接合資料である。床下精査時に発見した時期であるが、出土レベルは本住居床面にほぼ等しいことが後に判明している。付近からは鉢15も出土していて同様に本住居の遺物と考えたい。須恵器蓋１は重複土坑内に落ち込んだと判断した土器で、確実な資料ではない。杯７・９は掘り方内の出土で、他は埋没土内の出土である。

その他の遺物　破片総数は1500片以上だが、不明瞭な住居南半分からの出土が特に多い。「コの字」口縁以前の土師器薄手甕破片が主体となる。やや大形破片も多い。甕底部付近の接合資料も２個体分ある。須恵器は５％ほどで、カエリのある蓋口縁片が含まれている。その他の遺物は少ない。床下出土破片は多いが大半が南東側より出土している。床下土坑にともなう別時期の遺物の可能性があるが、時期判別可能な資料から大きな時期差は看取できない。

44号住居　（第108・109図　ＰＬ－14）

焼土粒混じりの住居跡通有の埋没土をもった不明瞭な遺構として掘り下げたが、焼土粒は下層へ向かうほど少なくなり、掘削した土が埋没土か掘り方埋め戻し土であるかさえ確認できなかった。遺物の出土状態から床面は残っているものと推定したが、不明瞭である。

位置　850－795・800Ｇ　中世以降の重複が激しく、工事による著しい影響を受け、遺構確認が最も困難な一画にある。

重複　９号溝・135・138号土坑等に先出している。出土遺物から44号住居にも先出すると思われるが、切り合いは確認されていない。

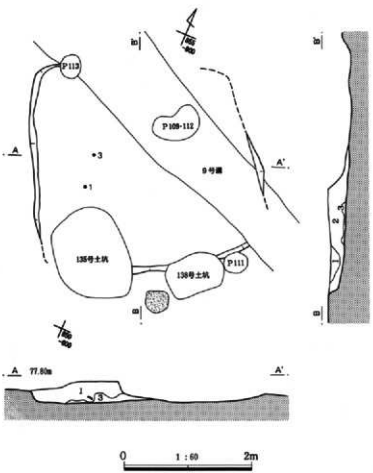
主軸方向　Ｎ－145°－Ｅ

面積　9.9㎡（推）

形態　北側は残存していない。部分的に確認できる壁から南西辺3.0m、南東辺3.2mの方形プランが想定されるが、特に東辺側では不明瞭である。

壁　残存する壁はすべてローム土内にあり、最大10cmの壁高がある。垂直に近い立ち上がり部分が多く、掘り方の立ち上がりより、住居壁の立ち上がりに近いと思われる。

カマド　南東辺の中央やや西寄りの壁外に焼土があり、カマドを想定した調査を行った。この焼土は住居確認面より５cm以上浮いた状態でつながらず、本住居には関連のないものと判断した。南壁にカマドのある住居は本遺跡内には例がないが、上面にあった別住居のカマド基底部が残存していた可能性はあろう。本住居はカマドのある時期の遺構であるが、痕跡は一切確認できない。



44号住居

1　黒褐10YR2/2　やや粒子の細かな微粘性土層。焼土粒やローム粒を不均等に含む。砂質土がブロック状に混入していて、別遺構が重なっている可能性あり。

2　黒褐10YR3/2　基本土層の第Ⅳ層に近い。上層に焼土粒、下層にローム粒がやや多い。

3　黄褐2.5Y5/3　ローム土と黒色土の混合土層。

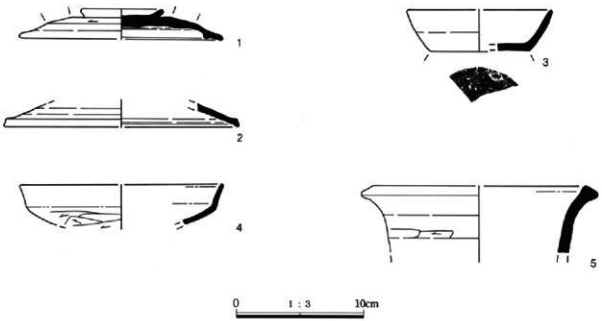
第108図　44号住居

内部施設　柱穴・壁溝等の住居通有の施設も一切確認されていない。

床　ローム掘り下げ面を大部分でそのまま床面としている。壁際がやや高く、中央付近でも緩やかな凹凸が多い。そのため最大で７㎝の比高差を生じている。踏み固めや焼土・灰等による汚れも不明瞭で住居床面らしくない点がある。西壁直下には床面からの深さ15cmほどで底面が土坑状になる掘り方があり床下土坑としたが、床面との先後関係は確認できていない。

出土遺物　５点を図示した。住居中央西寄りの床面から10cm近く浮いた状態で須恵器蓋１が、床面より多少低いレベルでおそらく床下土坑内から杯３が出土している。他は埋没土内の出土遺物であるが蓋２は45号住居埋没土出土破片と接合している。

その他の遺物　古墳時代中期から平安前期ころまでの雑多な破片約600片が出土している。平安前期頃の遺物が多く、上面に他の住居のあった可能性がある。全体に大破片はあまり多くなく、須恵器は３％ほどである。



第109図　44号住居出土遺物

45号住居　（第110図　ＰＬ－14）

44号住居同様で上面から竪穴住居のプラン確認はできない位置にあったが、床面らしい硬化面を確認して範囲を広げた遺構である。

位置　855－800Ｇ

主軸方向　Ｎ－35°－Ｗ前後か。

面積　8.04㎡

重複　９・15号溝、134号土坑に先出している。出土遺物から43・44号住居に後出すると想定され、43号住居に後出することは床面踏み固めの範囲から想定できそうである。

形態　掘り方の範囲からの推定であるが、北辺が2.8ｍ以上確認できる。小型の住居となろう。

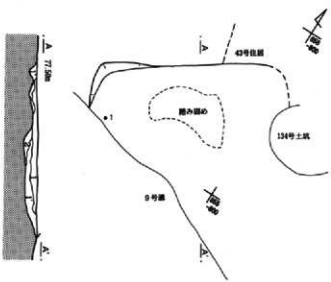
壁　ローム土内にあって残存していた範囲では明瞭な壁が見られる。北西隅付近のみだがやや緩やかな立ち上がりで、残存壁高は８cmある。

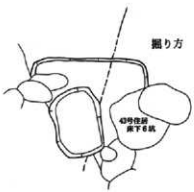
内部施設　カマドの時期の遺構であり、床面にも焼土等がみられたが、カマドの痕跡は確認できない。横長の住居であった場合は９号溝に東壁南隅のカマドを壊されていることも想定される。柱穴や壁溝等の施設も調査範囲からは確認されていない。

床　北壁下に踏み固めが見られたが、それ以外は焼土等の分布や汚れた面を目安に床面を探した。凹凸の多い不明瞭な面となっている。全面に深さ10cm前後の掘り方が見られ、住居中央に床下土坑状の施設がある。その他の掘り込みに関しては、住居との先後関係は把握できていない。

出土遺物　２点を図示した。須恵器杯１は西壁下の床直上遺物で本住居の時期決定できる土器と判断した。土師器甕２は南側の掘り方埋め戻し土内出土で44号住居との帰属が不明瞭な地点の遺物であるが、１と時期的齟齬のない土器である。

その他の遺物　土師器薄手甕破片を主体とする奈良から平安時代前期にかけての遺物を中心に、約400片が出土している。

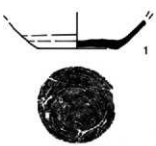


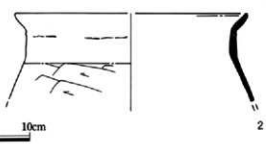


45号住居

1　黒褐10YR3/2　やや粒子の細かな弱粘性土で、しまりの強い掘り方埋め戻し土層。焼土・炭化物粒を含む。1′ではロームブロックの混入増える。

2　灰黄褐10YR4/2　灰色味をおびたローム状土と黒色土の混合土。





0　1:3　10cm

第110図　45号住居および出土遺物

A２区の竪穴住居

A１区同様に竪穴住居が密集して確認された地点である。ここで古墳時代初頭から平安時代前期までの32軒の住居を調査している（24号住居が欠番）。竪穴住居間の重複が多いのが特徴で、重複のない住居は７軒のみである。集落が営まれていた間に１・13号溝などの古墳時代の遺構が作られている。調査区の南側から中央はA１区から続く平坦面だが、北側に向かって低く傾斜している。北隅では住居は確認されていない。

１号住居　（第111・112図　ＰＬ－15）

位置　985－775G

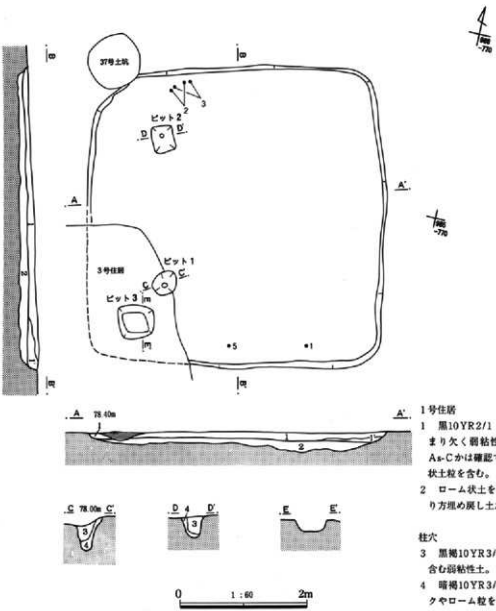
重複　３号住居・37号土坑に先出している。

主軸方向　N－13°－W

面積　17.46m² (残)

形態　北辺約４ｍ、他辺約4.4ｍのやや台形気味に歪んだ正方形を呈している。

壁　ローム状土上の黒色土内にあり、不明瞭なものである。残存壁高は最大で南壁の12cm、西壁では３cm程しかない。



第111図　１号住居

１号住居

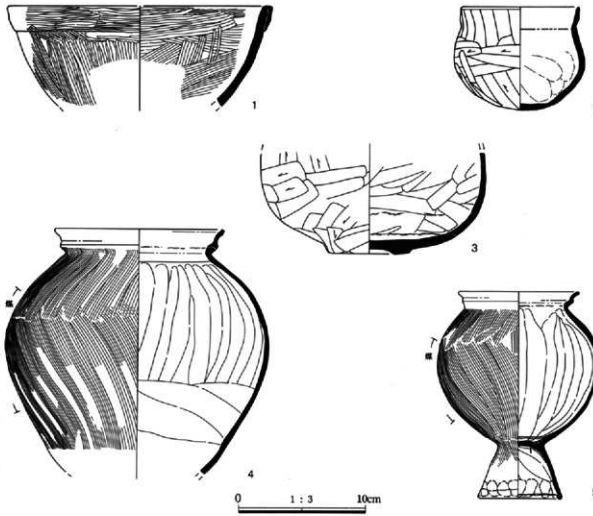
1　黒10YR2/1　混入物少なく、ややしまり欠く側粘性土。パミス散見するがA₂-Cかは確認できない。1'にはローム状土粒を含む。

2　ローム状土を不均等に含む粘性土。掘り方埋め戻し土だが、ややしまり欠く。

柱穴

3　黒褐10YR3/1　不揃いのローム粒を含む弱粘性土。

4　暗褐10YR3/3　ローム状土小ブロックやローム粒を不均等に含むしまり強い弱粘性土層。



第112図　1号住居出土遺物

内部施設　炉の時期の遺構であるが、痕跡は認められない。柱穴状の２本のピットを確認している。どちらにも断面に柱痕が確認できる。床面での規模はピット１が42×35cm・深さ49cm、ピット２が43×33cm、深さ40cmである。４主柱穴状の配置上にあるが、西側のみの確認である。底面が平坦で貯蔵穴と思われる掘り込みを南西隅から確認している。床面での規模は60×53cm、深さ22cmで埋没土には焼土粒が混じっている。

床　凹凸のある、踏み固めはあまり強くない床である。北西側に低く傾斜していて、南壁下床面と10cmの比高差を生じている。焼土や灰はあまり見られない。全面に浅く、比較的平坦な掘り方があるが、貼り床は施していないようである。

出土遺物　土師器５点を図示した。**鉢１**は南壁直下の床直上、**壺２・３**は北壁際の床面ほぼ直上で本住居に伴う遺物である。台付甕**５**は南壁際出土の完形品だが、床面から大きく浮いた状態の出土である。

その他の遺物　約530片の土器が出土している。須恵器細片２片の混入があるが、全体に混入遺物は少ない。20％以上が床下遺物として取り上げられ、床面把握を誤った可能性もあろう。ほとんどが古式土師器で大破片はあまり多くない。刷毛目のある甕類が50％以上を占めている。赤彩土器が若干混じっている。杯類や小型の壺等の出土量は少ない。

２号住居　（第113・114図　ＰＬ－15）

位置　985－765G

主軸方向　N－35°－E

面積　12.85m²（残）

形態　北東隅を近年の攪乱によって大きく壊されているが、長辺4.2m、短辺3.4mの隅の丸い不整長方形を呈すと思われる。

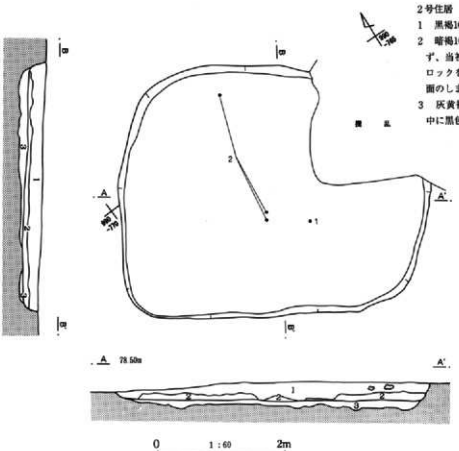
壁　20cm前後の残存壁高がある。直線的な立ち上がりの箇所もあり、掘り方を想定するよりは、住居的な壁と言えるであろう。

内部施設　柱穴・壁溝等は確認されていない。炉の時期の住居であるが、焼土等の痕跡も認められない。

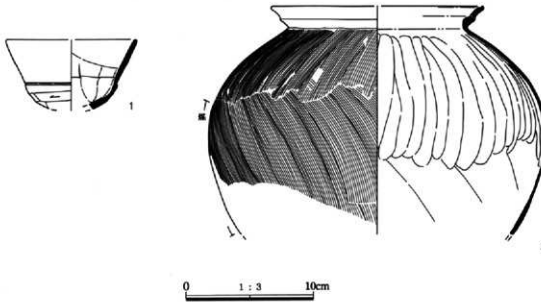
床　東側へ低く緩やかに傾斜している。踏み固めや汚れの見られる明瞭な床面は確認されていない。遺物がいずれも想定した床面より浮いた状態で出土しており、掘り過ぎている可能性もある。全体に浅い掘り方がある。

出土遺物　出土破片は多かったが、接合して図示できたのは土師器２点のみである。壺１は住居中央、台付甕２は北隅付近の破片を中心に中央の小破片が接合した資料である。どちらも床面から10cm以上浮いた状態での出土である。

その他の遺物　住居のほぼ全域に散らばるようにして、土師器のみ約880片出土している。古式土師器がほとんどで、古墳時代後期の杯や甕が若干混入している。薄手の壺類に大破片があるが、大半は小破片である。刷毛目のある甕類は30％ほどを占めている。赤彩土器の細片の出土がやや目立つ。



第113図　２号住居



第114図　２号住居出土遺物

３号住居　（第115・116図　ＰＬ－15）

位置　980－775G

重複　１号住居に後出している。

主軸方向　Ｎ－62°－Ｅ

面積　16.27㎡

形態　南辺のみ4.3m、他辺は3.9mの台形気味に歪んだ正方形状を呈している。

壁　残存壁高は15～25㎝で垂直に近い立ち上がりをしている部分が多い。

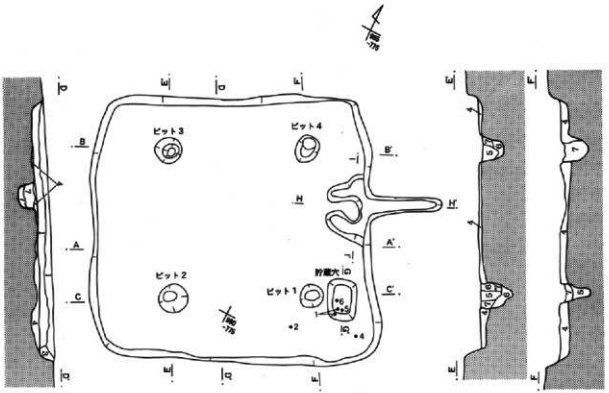
カマド　東壁中央やや北寄りにある。燃焼部は住居内から壁際にかけての位置にあり、煙道は長く壁外へ1.2m張り出している。火床は住居床面より２～３㎝高い位置にあり、さらに煙道方向へ向かって高く緩やかに傾斜している。火床から８㎝浮いた状態で円礫が出土しているが、支脚とは異なるようである。袖はローム土で築かれていて残存状態は良い。カマド前面の床には多量の焼土や灰が散っている。

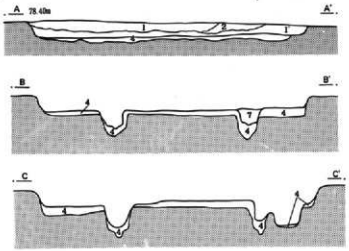
内部施設　貯蔵穴と４本の主柱穴が確認されている。柱穴には柱痕が確認できる。規模（長軸×短軸×深さ㎝）はピット１→40×36×40、ピット２→45×45×39、ピット３→43×38×37、ピット４→45×36×38で近似している。貯蔵穴は平面長方形で、規模は床面で68×48㎝、深さ38㎝ある。底面は比較的平坦である。上層にカマド崩落土が混入しており、住居廃絶時に開口していたことが分かる。

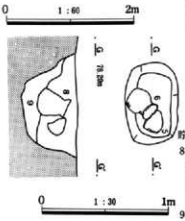
床　ほぼ水平な床だが、西壁際から中央にかけてやや高く、他の壁際と３㎝ほど比高差を生じている。顕著な踏み固めが見られる。５～10㎝の掘り方があるが、ローム掘り込み面をそのまま床面としている部分もある。発掘調査段階で床下ピットとした落ち込みが、後に１号掘立柱建物の柱穴であることが確認されている。本住居が建物に後出すると考えられるが、重複の詳しい観察はできなかった。住居中央に部分的に貼り床が施されている。

出土遺物　貯蔵穴と南壁際出土遺物を中心に土師器６点を図示した。貯蔵穴からは上面出土の杯１と、中層出土の甕５・６がある。この２点は接合できなかったが同一個体の可能性がある。南壁際からはピット１南際の杯２と住居東隅の器台４が床直上で出土している。杯３は埋没土中の破片である。

その他の遺物　土師器のみ約330片出土している。カマド周辺と南壁際からの出土が多い。厚手長胴甕の胴部大破片がある。模倣杯が目立ち、底部大破片も３個体分以上ある。古式土師器の混入が多く、全体の20％以上を占めている。







第115図　3号住居

3号住居

1　暗褐10YR3/3　砂質土と基本土層Ⅵ層土の混合土。しまり弱い。1′は同質の土だが、しまり強い。

2　暗褐10YR3/3　焼土粒・炭化物粒を霜降り状に含む。

3　黒褐10YR3/2　黒色土の混入がやや多く、極めてしまり強い部分がある。

4　暗褐10YR3/4　ローム状土ブロックの混じる掘り方埋め戻し土。上面に貼り床が見られ、強く踏み固められている。

5　暗褐10YR3/4　柱痕と思われる部分。ローム土を少量含む。

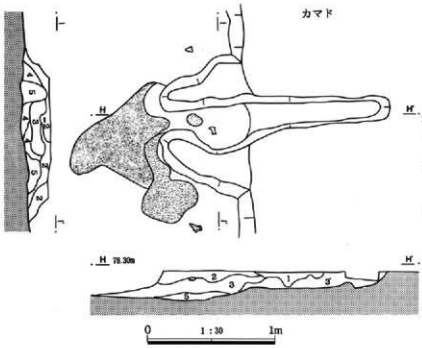
6　黄褐10YR5/6　ローム土中に暗褐色土をブロック状に含む層。

7　暗褐10YR3/4　暗褐色土中にローム土や黒色土を不揃いのブロック状に含む。7′では混入物はローム粒中心となる。

貯蔵穴

8　黒褐10YR2/3　基本土層Ⅵ層に近い住居埋没土にローム粒や焼土粒をやや多く混入する。カマド方向から流れ込んでいる。

9　黒褐10YR2/2　弱粘性土中にローム粒が少量混じる。



カマド

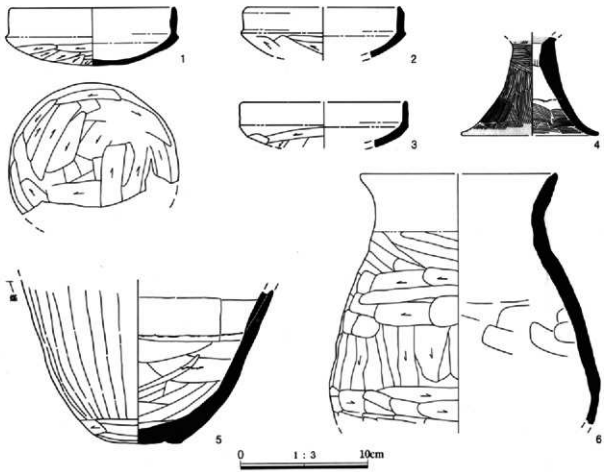
1　暗褐10YR3/4　基本土層Ⅵ層土に焼土粒・炭化物粒を霜降り状に少量含む。

2　にぶい黄褐10YR4/3　ローム小ブロック・焼土・炭化物の混入の多いしまり強い層。2′では焼土がブロック状になる。

3　暗褐7.5YR3/4　焼土の他に、炭化物や黒色灰の混入の目立つ層。3′にはローム小ブロックが混じる。

4　暗褐10YR3/4　暗褐色土中にローム状土やロームブロックが混じるカマド袖崩落土層。4′には焼土等の混入多い。

5　明黄褐10YR6/6　ローム土主体のカマド構築材。焼土等の混入少ない。



４号住居　（第117～120図　ＰＬ－15）

位置　970－770Ｇ　プランの類似した３号住居の南側４ｍの位置にある。

重複　20号住居と西隅が接している。

主軸方向　Ｎ－55°－Ｅ

面積　14.82㎡（推）

形態　一辺約3.8ｍで、各辺・隅とも比較的整った正方形を呈している。

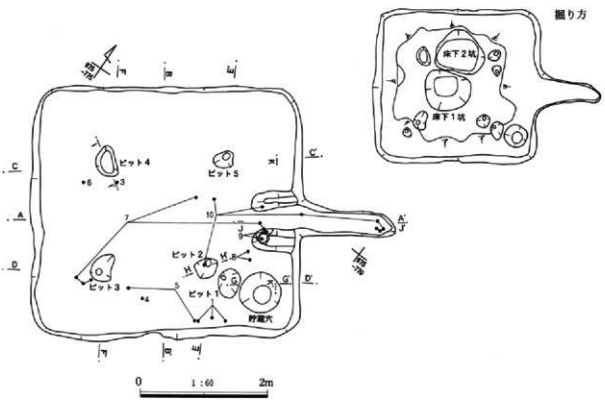
壁　ローム土の壁で垂直に近い立ち上がりがあり、30cm以上の残存壁高がある。

カマド　北東壁の中央にある。カマド部分は倒木痕の黒色土上に築かれているが、底面に特別な処理は施していない。燃焼部は壁際にある。火床は住居床面よりやや高い位置にあり、煙道方向へ向かって高く緩やかに傾斜している。煙道は壁外へ長く1.6ｍ張り出している。袖部は潰れたようになっている。

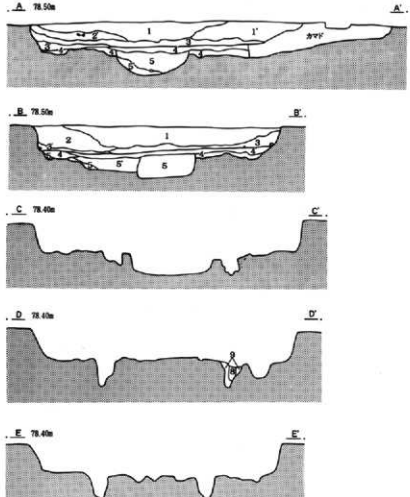
内部施設　東隅にある貯蔵穴はカマド崩落土の混入が見られ、住居廃絶時に開口していたことが分かる。規模は床面で径65cm、深さ38cmである。柱穴は５本で、規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→45×31×40、ピット２→36×28×44、ピット３→45×30×48、ピット４→48×32×17、ピット５→32×25×35である。ピット１とピット２が規則的配置から外れていて、ピット３は他の柱穴に比べて浅い。なお、ピット４は１号掘立柱建物の柱穴と重複しているが、新旧関係は把握できなかった。

床　ほぼ水平な床である。広い範囲に貼床を施し、全体に強く踏み固められている。全面に掘り方があり、壁際がやや深くなっている。また、土坑状の窪みが２箇所見られる。

出土遺物　土師器10点と玉類３点を図示した。広範囲に散らばるものがあり、鉢７はカマド内からピット３脇まで、甕10はカマド煙道先端から住居床面に散らばる破片が接合している。杯１・４・５、甕８など床面直上の遺物である。甕９はカマド南袖の構築材に使用している。また、臼玉２点がカマド脇から出土している。管玉未製品13が埋没土内から出土している。



第117図　４号住居



第118図　4号住居断面

4号住居

1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅦ層に近い。ローム粒や焼土粒を少量霜降り状に含む。1′には焼土や炭化物粒の混入多い。

2　極暗褐7.5YR2/3　弱粘性土で混入物は1層に近い。2′には焼土粒の混入やや多い。

3　黒褐7.5YR2/2　ややしまりある弱粘性土。壁際にはローム状土のブロックが混じる。3′にはローム土が縞状に混じる。

4　暗褐10YR3/4　ローム粒の多いしまり強い掘り方埋め戻し土層。4′ではローム小ブロックが多くなり、強く踏み固められている。貼り床部分。東側では焼土混じる。

5　黒褐10YR3/2　黒色土とロームブロックの混合土。4層に比べしまり欠く。5′ではローム粒が多い。

貯蔵穴

6　黒褐10YR2/3　焼土の混入の多いややしまり欠く層。6′では焼土少なく、ローム粒が増える。

7　黒褐2.5Y3/2　小礫の混入のやや多い砂質土。

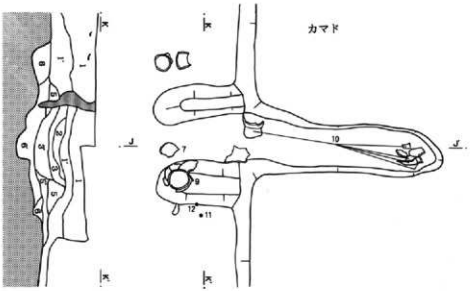
柱穴

8　暗褐10YR3/4　柱痕と想定した部分だが、掘り方埋め戻し土との差は明瞭ではない。ローム小ブロックを少量含む。

9　黄褐10YR5/6　ロームブロックやローム状土を多量に含むしまりやや強い層。9′は明瞭なローム土は少ない。

その他の遺物　土師器のみ約1120片出土している。住居東側半分からの出土量が多い。やや厚手の長胴甕に大破片が多く2個体分以上認められる。杯類は少なく、模倣杯が少量見られる程度である。古式土師器の混入が多く、全体の20%以上を占めている。高杯・器台や台付甕の口縁部・台部など大破片も混じっている。

管玉未製品の出土があるが、玉類工房跡を想定させる砥石・原石や剥片類などの遺物の出土はない。



カマド

1　暗褐10YR3/3　住居埋没土の１層土に焼土粒・炭化物粒が少量混じる。1′は粘性があり、焼土の量が多い。

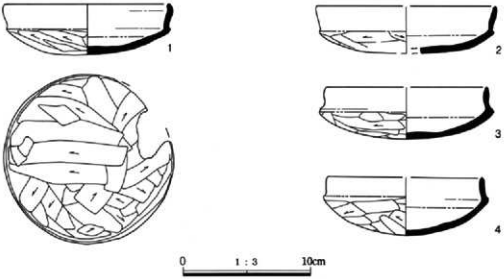
2　明褐7.5YR5/6　被熱したローム状土のようだが赤色味には乏しい。

3　にぶい赤褐５YR4/3　焼土ブロック主体のパサパサした層。3′は焼土と褐色粘性土ブロックの混合土。

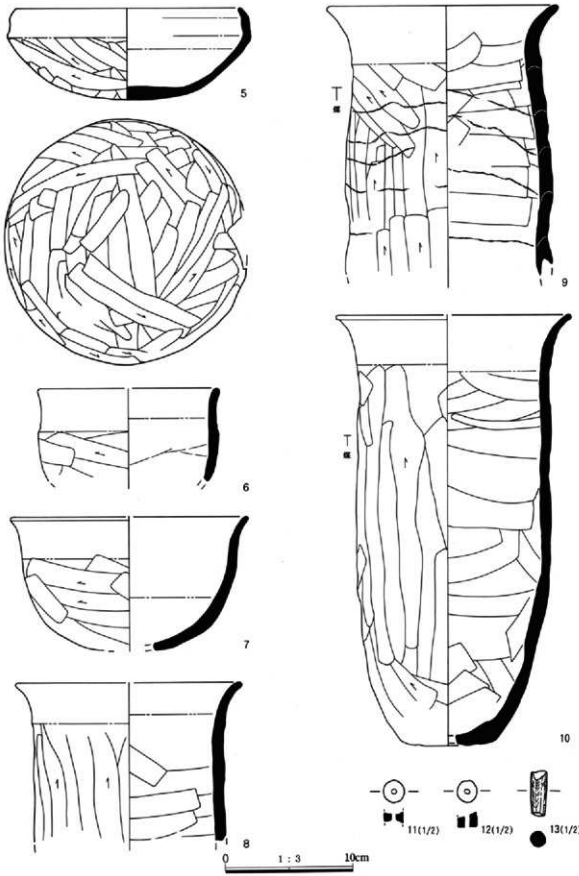
4　黒10YR2/1　混入物の少ない弱粘性土。

5　黒褐10YR2/3　褐色粘性土主体の袖基部構築材。粘土ブロック混じる。5′では混入物少ない。

6　暗赤褐５YR3/3　不揃いの焼土ブロックを不均等に含む弱粘性土。6′には５層土がブロック状に混じる。



第119図　４号住居カマドおよび出土遺物（１）



第120図　4号住居出土遺物（2）

５号住居　（第121図　ＰＬ－16）

位置　942－768G

重複　６号住居・１号溝に先出しているようである。

主軸方向　Ｎ－30°－Ｗ

面積　25m²前後か（推）

形態　西側は１号溝に壊されて東側は調査区域外となる。壁は全く確認できず、床面らしい硬化面や焼土の散布、および柱穴らしいピットの配置から竪穴住居と想定した遺構である。柱穴の間隔や床面の残存範囲から、一辺５ｍ前後の大型住居になるものと思われる。

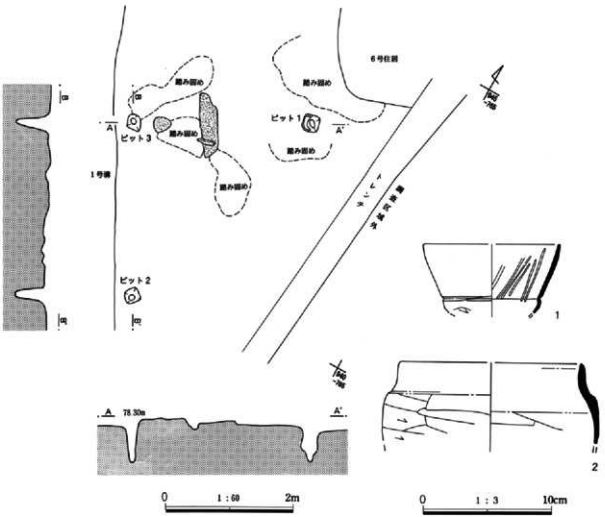
炉　ピット２とピット３の中央西寄りに被熱した床面と炉石らしい自然石が見られる。ピット２東脇にも焼土があるが、炉の設けられる位置ではない。

内部施設　３本のピットを調査した。４主柱穴を構成すると思われる。残る東側の柱穴位置は排水を兼ねたトレンチで失っている。ただし浅いトレンチ底面でもこのピットは確認されないので、他の３本のピットより浅いものと想定される。

床　炉と推定される焼土を中心に床面らしい踏み固めが観察されているが、不明瞭な部分が多い。掘り方は認められない。

出土遺物　土師器２点を図示した。どちらも床面レベルの破片を接合した土器であるが遺物の年代に齟齬を生じている。

その他の遺物　土師器のみ約100片出土している。厚手の甕胴部にやや大型の破片が混じる以外は小破片が中心である。ほとんどが古式土師器で、30％近くが刷毛目のある甕類である。



第121図　５号住居および出土遺物

６号住居　（第122図　ＰＬ－16）

位置　945－765G

重複　５号住居に後出し、24・33号土坑に先出している。

主軸方向　N－26°－W

面積　6.45㎡（残）

形態　東隅が調査区域外となる。北辺が2.5m、西辺が2.9mある。西隅が鈍角に開き気味で、北東辺が広くて台形状に歪む小型の長方形住居になろう。

壁　ローム土上の黒色土壁で不明瞭である。残存壁高は５cm前後しかない。西壁南側の平面の膨らみは崩れの痕跡である。

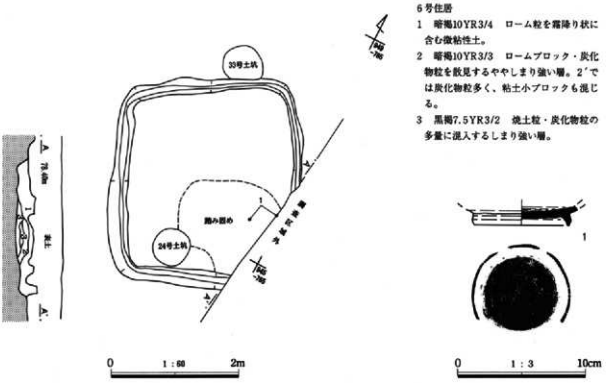
カマド　東側の床面には焼土や灰が多く、調査区域外の東隅付近にカマドがあったものと思われる。

内部施設　調査範囲内には壁溝が巡っている。南側では床面からの深さ１～２cmの不明瞭なもので幅も一定でないが、北側では６cm前後の深さがある。柱穴は確認されていない。

床　ローム上面を床面としている。住居中央から南東隅方向へ向かうカマド前と想定される位置に顕著な踏み固め部分が認められる。全面に細かな凹凸が多い。東側へ低くわずかに傾斜していて、西壁際と５cm前後の比高差がある。住居掘り下げ時の窪みを埋め戻す程度の、部分的で浅い掘り方がある。

出土遺物　図示できたのは東壁寄りの掘り方内から出土した灰釉陶器椀底部１点のみである。

その他の遺物　出土した破片は総数40片しかない。土釜状になると思われる厚手の甕胴部に大型破片が２片混じるが、他は古式土師器主体の土師器小片や細片である。



第122図　６号住居および出土遺物

７号住居　（第123・124図　ＰＬ－16）

位置　955－765G

重複　２号溝に先出している。

主軸方向　N－24°－W

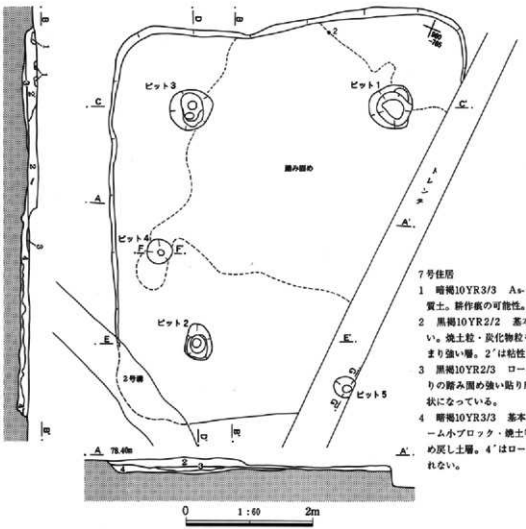
面積　25.50㎡（残）

形態　東隅が調査区域外となり完掘できなかったが、北壁5.2m、西壁推定5.8mあり、比較的整った長方形を呈すと思われる。

壁　ローム土の壁である。状態の最も良い北壁で15cm前後の残存壁高があるが、状態の悪い南壁は住居確認面ですでに床面に達している。

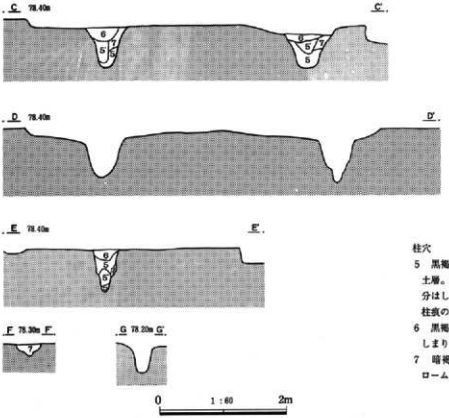
炉　出土遺物より炉の時期の遺構である。本遺跡の他遺構の例からピット１・ピット３間に炉が想定されるが、痕跡は確認できなかった。

内部施設　４主柱穴を構成する柱穴の内の３本と、性格不明の柱穴を調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→70×70×55、ピット２→70×40×69、ピット３→70×61×64、ピット４→40×40×17である。主柱穴は柱痕と思われる部分が断面で観察できる。ピット５は排水溝を兼ねたトレンチ底面での確認で、本住居に伴う施設であるかは確



７号住居
1　暗褐10YR3/3　A+C混じりのやや砂質土。耕作痕の可能性。
2　黒褐10YR2/2　基本土層のⅥ層に近い。焼土粒・炭化物粒を散見するややしまり強い層。2′は粘性あり。
3　黒褐10YR2/3　ローム小ブロック混じりの踏み固め強い貼り床層。部分的に縞状になっている。
4　暗褐10YR3/3　基本土層のⅥ層土にローム小ブロック・焼土等を含む掘り方埋め戻し土層。4′はローム多く焼土は含まれない。

第123図　７号住居

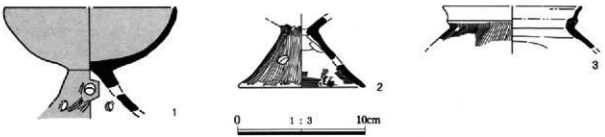


柱穴

5　黒褐10YR2/3　ややしまりある弱粘性土層。ロームブロックを少量含む。5'部分はしまり欠きローム土の混入も少ない。柱痕の可能性あり。

6　黒褐10YR3/2　住居埋没土に近いややしまりある層。

7　暗褐10YR3/4　ローム小ブロック、ローム粒の多い層。



第124図　７号住居出土遺物

認できていない。配置からは貯蔵穴の可能性があるが、深さに比べ開口部は狭く、柱穴状である。壁溝は確認されていない。

床　凹凸の少ない床面であるが、住居中央が壁際より２～５cmほど高くなっている。住居中央から北壁側に向かって踏み固めが強い。全面に浅い掘り方があり、住居中央を中心に貼床が施されている。

出土遺物　土師器３点を図示した。器台２は床面から10cm以上浮いた状態だが北壁中央直下の出土で、本住居に伴う遺物と言えよう。１・３は埋没土出土の破片であるが、他の遺物と時期的な齟齬はない。

その他の遺物　270片の土器を出土しているが、２片の須恵器細片以外は土師器である。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類が半数以上を占めている。大破片が多く、破片数に比してボリュームがある。台付甕台部が５個体分以上確認できる。甕類以外には薄手の高杯口縁部破片がやや目立つが、他の器種は少ない。

８号住居　（第125図　ＰＬ－16）

遺構確認段階では明瞭にプランを確認できたが、床面は不明瞭で、焼土等も浮いた状態であり、竪穴住居とするには疑問のある遺構である。

位置　960－775G

重複　９・13号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－27°－Ｗ

面積　9.08㎡（残）

形態　東西の二隅が後出の遺構に壊されているが、一辺３ｍ前後で東辺のやや長く台形気味で、隅も丸い不整正方形になる。

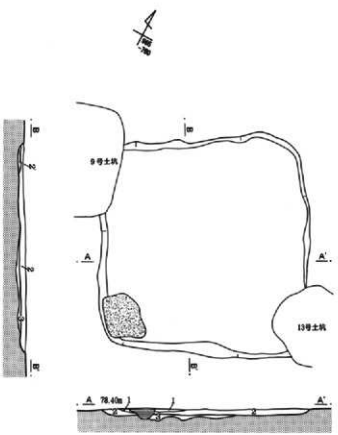
壁　ローム状土の漸移的な面にあり、明瞭な壁ではない。残存壁高は10cm前後と低く、立ち上がりも緩やかである。

内部施設　柱穴や壁溝およびカマドや炉等の施設は一切確認できない。南隅に焼土がまとまって確認されているが、床面から５cm以上浮いた状態で、しまりもなく、住居埋没途中での流れ込みと思われる状態である。カマドに関連するものではない。

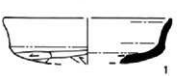
床　ローム面を水平な床としている。住居中央がわずかに低く、壁際と２～３cmの比高差がある。ほぼ全面に浅い掘り方がある。埋め戻し土はしまり強いが、床面と埋没土の境には、踏み固めや床面過有の汚れが見えず不明瞭なものである。

出土遺物　図示できたのは南寄りの埋没土から出土した土師器杯１点のみである。

その他の遺物　約290片の土器を出土しているが小破片が中心である。須恵器細片が１片見られるが、他はすべて土師器で、古式土師器が目立つ。刷毛目のある甕類が半数以上を占めていて、台付甕台部は３個体分以上確認できる。高杯・器台・赤彩小型壺など器種は豊富である。



８号住居
1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅢ層に近い。
2　暗褐10YR3/3　基本土層のⅣ層に近い。ローム小ブロック・焼土粒を散見する。2′はローム土の量が多く、黄色味が強い。
3　床下埋め戻し土。暗褐色土とローム土の混合土でしまり強い。



0　1:3　10cm

第125図　８号住居および出土遺物

９号住居　（第126・127図　ＰＬ－16・17）

位置　955－775G

重複　１号井戸・１号溝等に先出している。

主軸方向　N－33°－W

面積　13.26㎡（推）

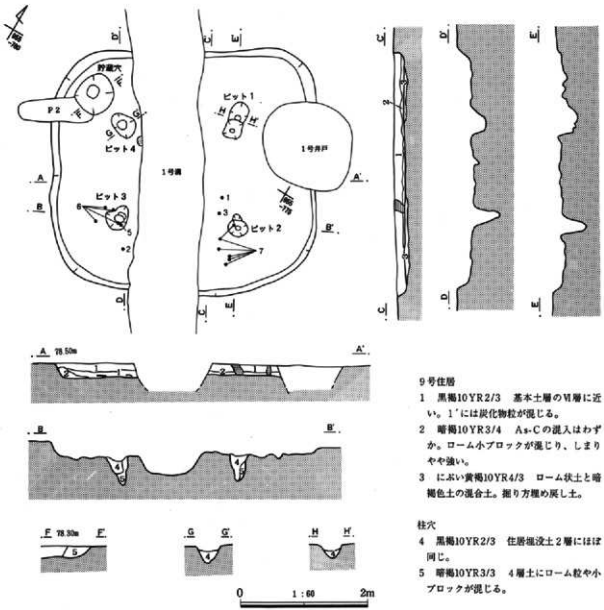
形態　長辺4.2m、短辺3.3mで、隅の丸みの強い長方形を呈している。

壁　東側では７cm前後だが、西側では20cmを越える残存壁高がある。全体に緩やかな立ち上がりで、旧状を留めているか不明である。

炉　ピット４東脇に炉の痕跡と思われる焼土が見られる。柱穴に近すぎていて不自然だが、大半は１号溝に壊されたものと思われる。

内部施設　４主柱穴を構成する４本のピットが調査された。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→58×27×35、ピット２→32×26×39、ピット３→42×36×45、ピット４→43×32×26である。東隅に貯蔵穴の可能性のある掘り込みがあるが、不明瞭なものである。

床　不規則な凹凸の多い床面である。掘り方は部分



９号住居

1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅦ層に近い。1'には炭化物粒が混じる。

2　暗褐10YR3/4　As-Cの混入はわずか。ローム小ブロックが混じり、しまりやや強い。

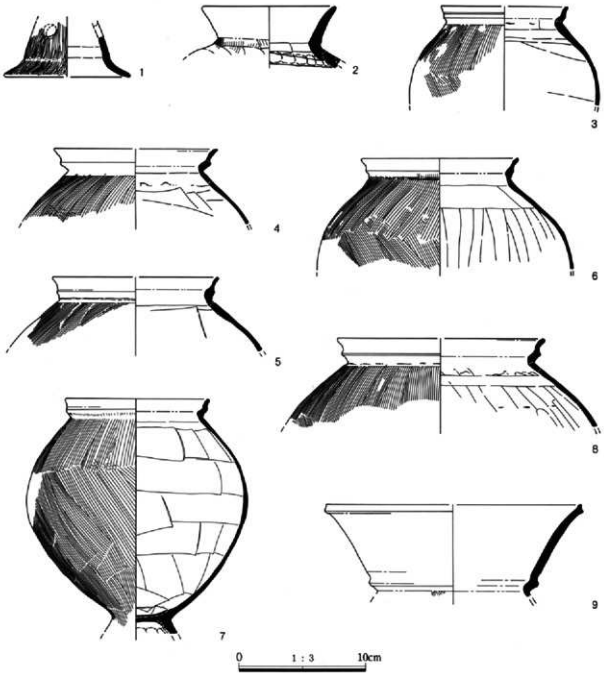
3　にぶい黄褐10YR4/3　ローム状土と暗褐色土の混合土。掘り方埋め戻し土。

柱穴

4　黒褐10YR2/3　住居埋没土２層にほぼ同じ。

5　暗褐10YR3/3　４層土にローム粒や小ブロックが混じる。

第126図　９号住居



第127図　９号住居出土遺物

的に認められるが、大半は地山のローム状土をそのまま踏み固めている。

出土遺物　台付甕を中心に土師器のみ９点を図示した。出土位置は住居東半に集中し、柱穴周辺の出土が目立っている。台付甕３・７はピット２周辺、壺２と台付甕６はピット３周辺の出土で、台付甕５はピット内の出土である。９は口縁端部が著しく長い特殊なＳ字状口縁の甕破片で１号溝出土破片と接合している。４・８は埋没土内の出土遺物である。

その他の遺物　土師器のみ約220片出土している。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類は半数を超えている。台付甕下半に大破片があり、図示した土器と同一個体の可能性があるものが含まれる。壺類胴部にも大破片がある。小型品と思われる破片は少ない。他に円形扁平な自然石が住居全域に散らばるようにして出土している。

10号住居　（第128～130図　ＰＬ－17）

位置　955－770G

重複　２号溝、１号井戸、10・11・14号土坑に先出している。

主軸方向　N－26°－E

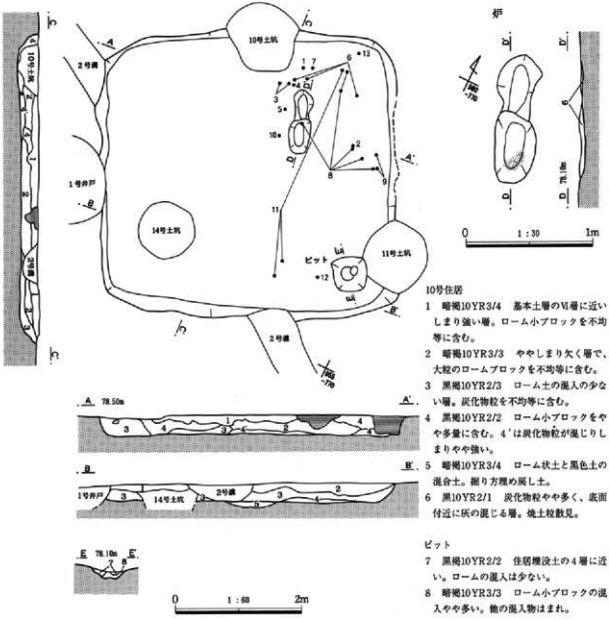
面積　17.95㎡（推）

埋没土　ブロック状に堆積する部分があり、人為的に埋め戻されたような状態が看取される。

形態　各辺の長さがまちまちで、南辺が4.6mで最も長い。西壁が東壁より40cmほど短い、台形気味にやや歪んだ長方形を呈している。

壁　大半がローム土内にあり、明瞭な壁である。25～30cm前後の残存壁高のある部分が多い。垂直に近い立ち上がりの部分もある。

炉　住居中央から北隅側に逸れた位置に炉の可能性のある細長い窪みを床下精査段階で確認している。底面は被熱している部分があり、上面に炭化物粒や灰が少量残っている。炉の特徴を備えた施設だが、北側に偏っており、不自然なものである。軸方向を揃えた２基の炉の可能性もあろう。



10号住居

1　暗褐10YR3/4　基本土層の Ⅵ層に近いしまり強い層。ローム小ブロックを不均等に含む。

2　暗褐10YR3/3　ややしまり欠く層で、大粒のロームブロックを不均等に含む。

3　黒褐10YR2/3　ローム土の混入の少ない層。炭化物粒を不均等に含む。

4　黒褐10YR2/2　ローム小ブロックをやや多量に含む。4′は炭化物粒が混じりしまりやや強い。

5　暗褐10YR3/4　ローム状土と黒色土の混合土。掘り方埋め戻し土。

6　黒10YR2/1　炭化物粒やや多く、底面付近に灰の混じる層。焼土粒散見。

ピット

7　黒褐10YR2/2　住居埋没土の４層に近い。ロームの混入は少ない。

8　暗褐10YR3/3　ローム小ブロックの混入やや多い。他の混入物はまれ。

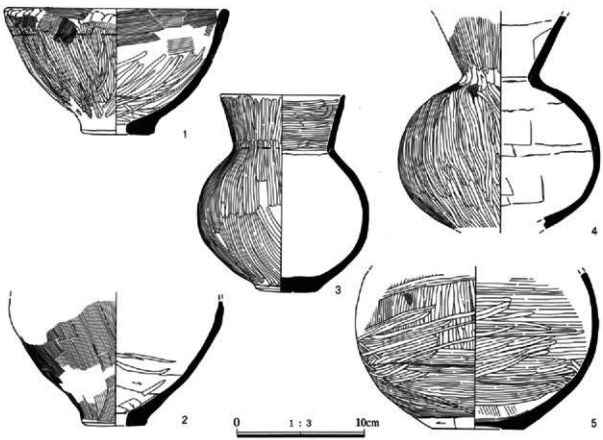
第128図　10号住居

内部施設　南東隅に浅い窪みがありピットとして扱った。位置から貯蔵穴が推定されるが、底面が狭いうえに浅く不明瞭なものである。

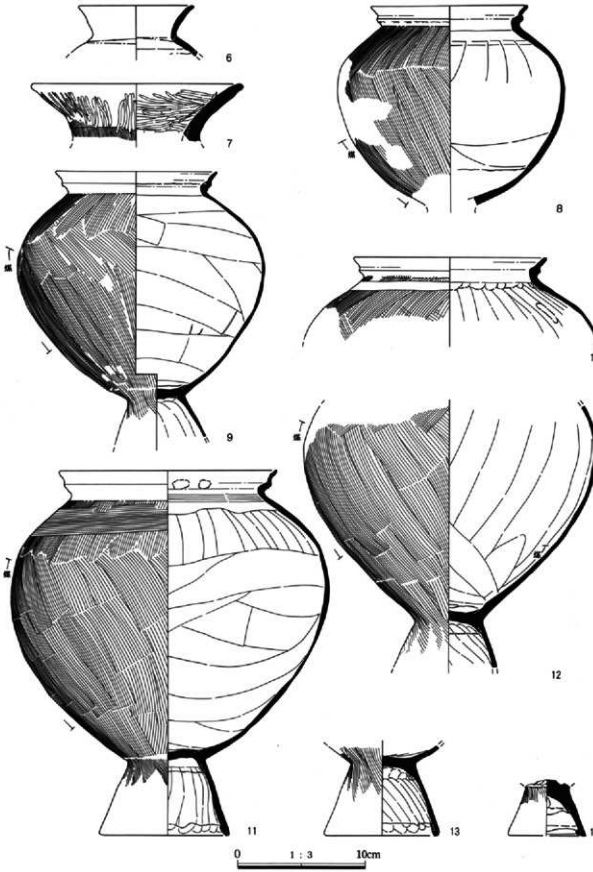
床　ローム土を踏み固めた明瞭な床面が確認できる。細かな凹凸がある。住居南東寄りが低くなっていて、他の地点と８㎝前後の比高差がある。掘り方は住居掘り下げ時の小さな窪みを埋め戻す程度で、大半は掘り下げ面をそのまま床面としている。

出土遺物　壺・甕類を中心に器種に偏りがあるが土師器14点を図示した。出土位置は住居東半に偏り、特に推定炉跡付近を含んだ北側に集中している。壺３～７がすべて炉北脇から北壁際にかけての床面直上の出土である。台付甕８・11は住居東側床直上に広く散っていたものが接合した資料である。壁直下の土器も目立ち、台付甕９は東壁中央、13は北東隅の出土である。台付甕12はピット周辺で他の遺物から離れて出土している。その他の土器でも椀１・２は床直上、台付甕10も床面近くの、住居北側出土である。

その他の遺物　土師器のみ約200片出土している。図示個体に比べ破片数は少ない。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類胴部片は25％以上含まれている。壺類胴部に大破片があり接合資料も多く、図示した以外にも２個体分以上確認できる。杯類が少ないのは図示した土器同様である。



第129図　10号住居出土遺物（１）



第130図　10号住居出土遺物（２）

11号住居　（第131図　ＰＬ－17）

位置　985－780Ｇ

重複　３号住居に先出している。

主軸方向　Ｎ－12°－Ｗ

面積　12.38㎡（残）

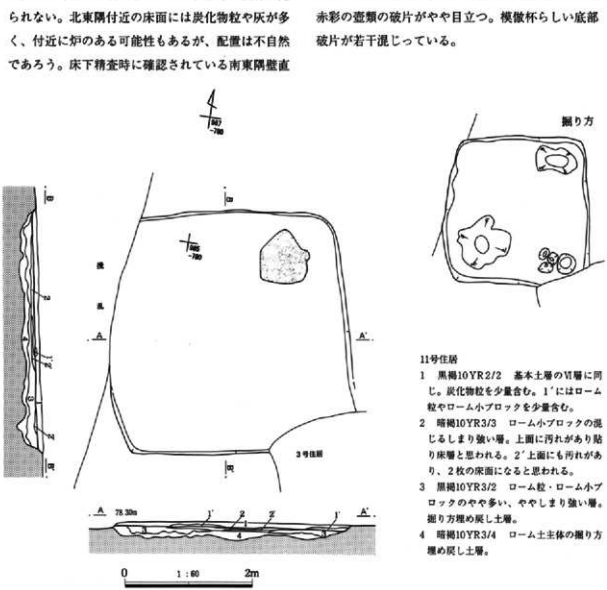
形態　北壁は3.1m、他は3.5mのやや台形に近い歪んだ方形プランを呈している。

壁　ローム状土の壁で明瞭なものではない。北・東側で６cm前後、南・西側で９cm前後の残存壁高がある。垂直に近い立ち上がりをしている部分が多い。

内部施設　柱穴や貯蔵穴等の施設は確認されていない。炉の時期の住居と思われるが、炉等の痕跡は見られない。北東隅付近の床面には炭化物粒や灰が多く、付近に炉のある可能性もあるが、配置は不自然であろう。床下精査時に確認されている南東隅壁直下の掘り込みは、床面からの深さが40cmあるもので、位置から貯蔵穴も想定されよう。

床　ローム土直上を床面としているが、踏み固めや汚れなどがあり明瞭であった。北側に低く傾斜していて、南壁際と８cm前後の比高差がある。硬化面が２面あり、貼床ではなく２枚の床と考えた。全体に厚い掘り方埋め戻し土が見られ、底面は細かな凹凸が多い。一部に土坑状の窪みになっている。

出土遺物　図示できる遺物はなかった。破片は約140片の土器が出土している。時期不明の３片の須恵器細片以外は土師器である。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類が半数近くを占めている。赤彩の壺類の破片がやや目立つ。模倣杯らしい底部破片が若干混じっている。



11号住居

1　黒褐10YR2/2　基本土層のⅦ層に同じ。炭化物粒を少量含む。1′にはローム粒やローム小ブロックを少量含む。

2　暗褐10YR3/3　ローム小ブロックの混じるしまり強い層。上面に汚れがあり貼り床層と思われる。2′上面にも汚れがあり、２枚の床面になると思われる。

3　黒褐10YR3/2　ローム粒・ローム小ブロックのやや多い、ややしまり強い層。掘り方埋め戻し土層。

4　暗褐10YR3/4　ローム土主体の掘り方埋め戻し土層。

第131図　11号住居

12号住居　（第132～135図　ＰＬ－17・18）

位置　995－785G

重複　15・22号住居に後出している。

主軸方向　N－64°－E

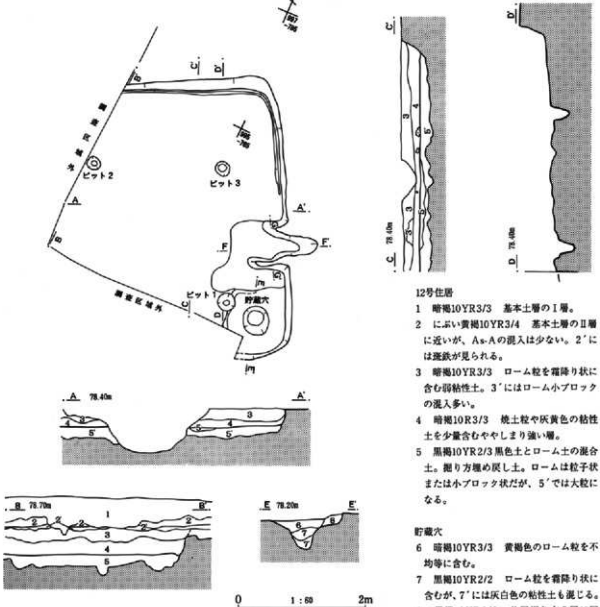
面積　10.61㎡（残）

形態　西側半分が調査区域外となり、東壁の長さ4.1m以外計測できない。南北の辺は3.8m以上になる。隅の整った正方形に近いプランが想定される。

壁　30cm前後の残存壁高がある。垂直に近い立ち上がりで、旧状を比較的留めているようである。

カマド　東壁の南寄りにある。燃焼部は壁際にあり、火床は住居床面と同じ高さにあり、煙道方向へ向かって緩やかに立ち上がっている。長胴甕底部を倒置した転用支脚が据えられている。煙道は壁外へ50cm張り出している。構築材には灰色味をおびた粘性土が使われていて、袖部の残存状態は良好である。

内部施設　３本の柱穴が調査されている。深さはピット１が42cm、ピット３が48cmあるが開口部が狭い。



第132図　12号住居

12号住居

1　暗褐10YR3/3　基本土層のⅠ層。

2　にぶい黄褐10YR3/4　基本土層のⅡ層に近いが、As-Aの混入は少ない。2′には遊鉄が見られる。

3　暗褐10YR3/3　ローム粒を霜降り状に含む弱粘性土。3′にはローム小ブロックの混入多い。

4　暗褐10R3/3　焼土粒や灰黄色の粘性土を少量含むややしまり強い層。

5　黒褐10YR2/3黒色土とローム土の混合土。掘り方埋め戻し土。ロームは粒子状または小ブロック状だが、5′では大粒になる。

貯蔵穴

6　暗褐10YR3/3　黄褐色のローム粒を不均等に含む。

7　黒褐10YR2/2　ローム粒を霜降り状に含むが、7′には灰白色の粘性土も混じる。

8　黒褐10YR3/2　住居掘り方５層に同じ。

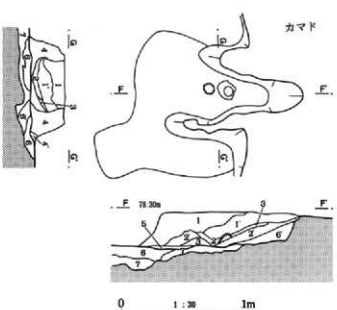
配置より、４主柱穴を構成するものであろう。南東隅には長径45cm・短径40cm・深さ36cmの貯蔵穴がある。

壁溝はカマドより北側で確認されている。床面からの深さ２～５cmの浅いものである。

床　ほぼ水平だが細かな凹凸のある床面で、踏み固めはカマド周辺のみに観察される。貯蔵穴周辺が他の床面より15cm近く低くなり、段差を生じている。全面に掘り方があり、壁際が深い傾向がある。顕著な貼床は見られない。遺物がいずれも床面より数cm浮いた状態で出土しているが、床面の把握には問題ないと思われる。

出土遺物　住居中央を中心に散乱するようにして出土した16点を図示した。器種による出土位置の差異は見られない。床面直上の出土は土師器杯３、完形出土したのは杯５のみである。杯２～４が完形近くまで復元されている。甑14・15は同一個体と思われるが接合していない。

その他の遺物　土師器のみ約400片出土している。図示した土器と比べると厚手の長胴甕に大破片が多く、模倣杯は少ない。小破片だが古式土師器の混入が目立ち、刷毛目のある甕類も10%近く見られる。



カマド

1　暗黄褐色土層　焼土粒や粘土粒を不均等に含む弱粘性土層。1'には灰が混じり、ややしまり欠く。

2　黒褐色土層　ロームブロック、焼土、黒色灰などの混じる層。2'は焼土粒、灰などの混入少ない。

3　赤褐色土層　焼土粒主体の天井や壁の崩落土層。

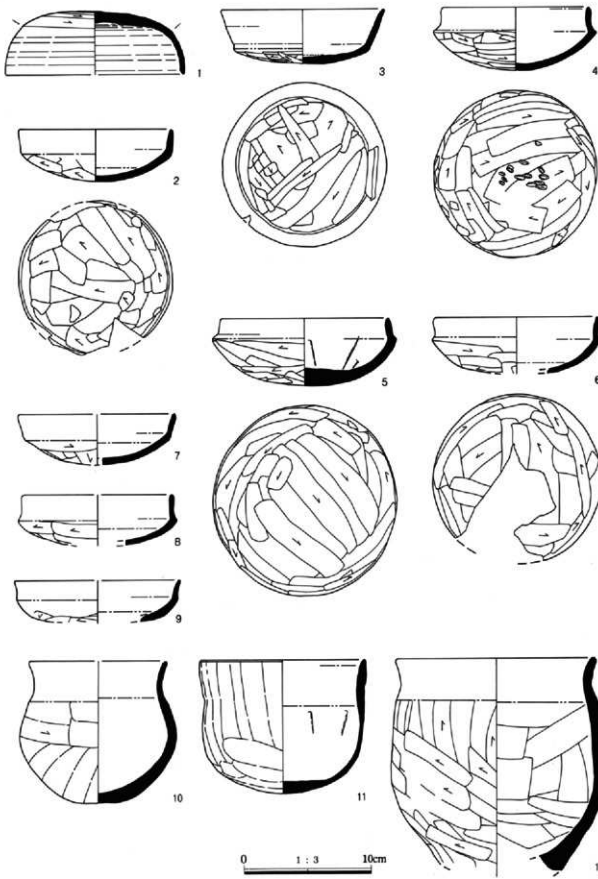
4　淡黄色粘性土層　粘土やローム状土による袖構築材。4'は粘土ブロック。

5　赤褐色土層　焼土と灰を中心とする層。しまりあり火床部分と思われる。

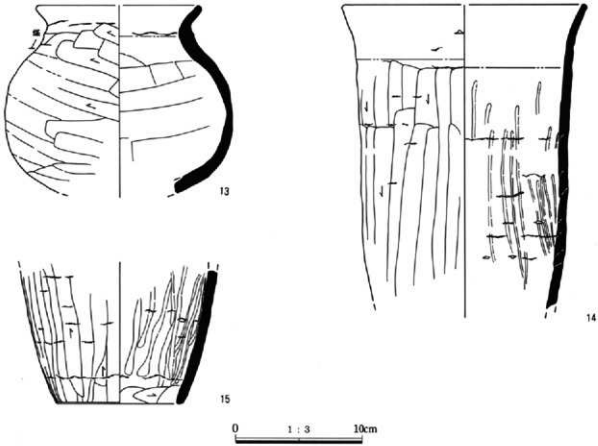
6　黒褐色土層　掘り方埋め戻し土層で、ロームの混入は少ない。6'は焼土粒の混入やや多い。

7　暗黄褐色土層　掘り方埋め戻し土層で、ロームブロックの混入多い。

第133図　12号住居カマド



第134図　12号住居出土遺物（１）



第135図　12号住居出土遺物（２）

13号住居　（第136図　ＰＬ－18）

位置　995－780Ｇ

重複　22号住居に後出している。14号住居にも後出か。27・30・31・55号ピットに先出している。

主軸方向　Ｎ－20°－Ｗ

面積　14.18㎡（残）

形態　東・西壁約3.0ｍ、南・北壁約4.8ｍで、比較的整った長方形を呈している。

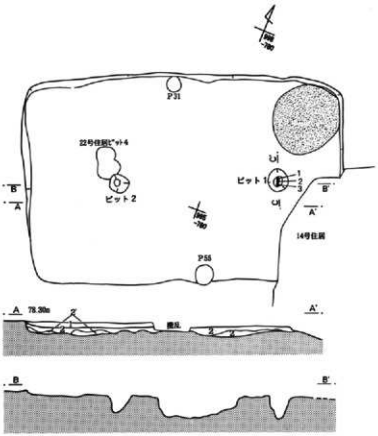
壁　北側で２～３㎝の残存壁高が確認されたのみである。

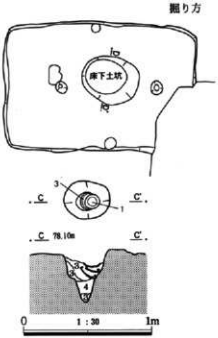
内部施設　住居中央の長軸ライン上に重なるように２本のピットが確認されている。規模（長軸×短軸×深さ㎝）はピット１→36×30×75、ピット２→34×30×27で深さが大きく異なる。また、古代の竪穴住居の柱穴としては変則的な位置にあり、柱痕も見られない。北東隅付近には焼土や灰が多く見られ、カマドを想定した精査を行ったが、明瞭な痕跡は確認されていない。壁溝も見つかっていない。

床　北側半分では踏み固められて凹凸の多い床が確認されているが、南側半分では不明瞭である。この部分では床面は遺構確認段階ですでに失われていたと思われる。全面に掘り方があるが、住居中央には掘り方埋め戻し土を切った円形の掘り込みが認められ、床下土坑とした。掘り方面からの深さは35㎝で、底面は不整である。

出土遺物　ピット１の中ほどから、上向きで重なるようにして出土した３点の土師器杯を図示した。いずれも完形で、上から１→３の順で出土している。

その他の遺物　土師器小破片のみ約30片出土している。薄手甕や模倣杯になりそうな底部片と、古式土師器類が概ね等量見られる。





13号住居

1　黒褐色土層　淡褐色を斑状に含む弱粘性土層。住居埋没土。

2　暗褐色土層　ローム状土を多量に含む掘り方埋め戻し土層。2′では黒色土が小ブロック状に混じる。

ピット

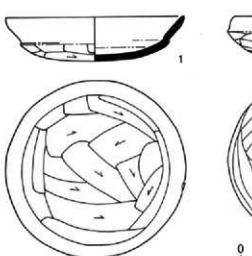
3　暗褐10YR3/3　ややしまり欠く弱粘性土層。ローム粒を霧降り状に含み、3′ではローム ブロックの混入やや多い。

4　褐10YR4/4　ローム粒の混入やや多く、しまりも強い。

貯蔵穴

5　にぶい黄褐 10YR4/3　褐色土ブロック・黒色土・ローム ブロックの混合土。しまり弱い。5′にはローム土の量が多い。

6　黒褐 10YR2/2　上面に黒色灰が厚く堆積する。ローム ブロックが少量混じるややしまり欠く層。



第136図　13号住居および出土遺物

14号住居　（第137・138図　ＰＬ－18）

掘り方面のみの調査となった住居である。

位置　995－775G

重複　13号住居に先出か。５号井戸に先出している。

主軸方向　N－19°－W

面積　32.37㎡（推）

形態　東・西壁約5.5m、南・北壁約5.2mの隅の丸い正方形に近いプランを呈すと思われる。

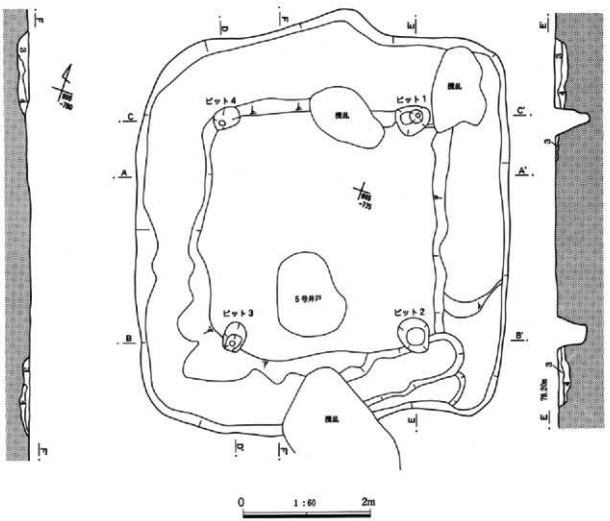
壁　残存していない。

内部施設　４主柱穴配置に沿った４本の柱穴があるが、柱痕は不明瞭である。カマドや炉および貯蔵穴の痕跡は確認できない。

床　遺構確認段階ですでに床面は消失していた。床下の全面に掘り方が見られる。壁際が低くなっているが、柱穴を境にした企画性が看取できる。埋め戻し土中に焼土や灰等の混入が極めて少ない。

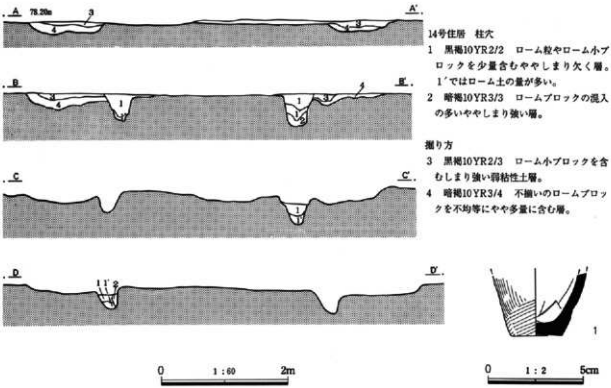
出土遺物　細片４片が接合したミニチュア土器が１点図示できたのみである。

その他の遺物　土師器のみ約160片出土している。床下遺物のみとしては多量と言えよう。大破片は含まれない。古式土師器がほとんどで、やや小振りの壺類と刷毛目のある甕類が中心となっている。模倣杯となりそうな杯底部が若干混入している。



第137図　14号住居

A２区の竪穴住居



第138図　14号住居断面および出土遺物

15号住居　（第139図　ＰＬ－18）

位置　990－780G

重複　12号住居に先出している。

主軸方向　N－25°－E

面積　8.42㎡（残）

形態　西側半分は調査区域外となり全容は不明である。東辺は4.5mある。著しく隅の丸い歪んだ方形を呈すようである。

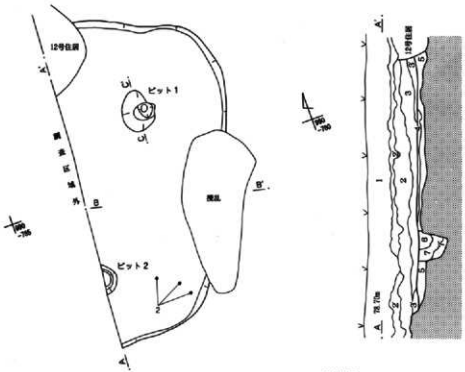
壁　ローム上の漸移層内にあり明瞭な壁ではない。北側で約10cm、南側で４cm前後の残存壁高がある。垂直に近い立ち上がりの部分もある。

内部施設　柱穴状のピット２基を調査した。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→65×53×62、ピット２→30以上×20以上×41である。断面に柱痕が認められるが、４主柱穴を想定するには配置が不規則である。調査範囲にカマドや炉および貯蔵穴・壁溝の痕跡は確認されていない。

床　ローム土表面に相当する高さに位置する。ほぼ水平な床で、細かな凹凸がある。踏み固めはやや弱く明瞭な床ではない。全体に浅い掘り方があり、底面が土坑状になる部分がある。また、薄い貼り床が部分的に認められる。

出土遺物　時期の異なる２点の土師器を図示した。台付甕２は南東隅付近の床面直上出土で、本住居の時期を推定する資料とし、杯１は埋没土中の出土で後世の混入品と考えた。

その他の遺物　土器は約250片出土したが、須恵器は古墳時代の杯小片１片のみで、他は土師器である。丸胴でやや薄手の甕に大破片があるが、ほとんどが小片である。刷毛目のある甕類は30%ほどを占めているが、模倣杯や長胴甕も多数混入している。



15号住居

1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅠ層。

2　暗褐10YR3/4　基本土層のⅡ層に近い。しまりやや欠く。2′では軽石の混入が少なく、基本土層のⅢ層と区別難しい。

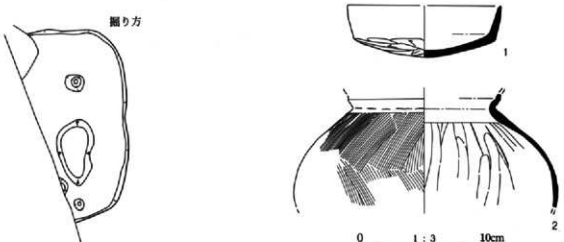
3　黒褐10YR2/2　ローム状土粒を含む弱粘性土層。住居埋没土。3′ではローム状土の混入やや多い。

4　暗灰黄2.5Y4/2　ローム状土を主体とする貼り床層。顕著な踏み固めは認められない。

5　暗褐10YR3/3　多量のロームブロックを含む掘り方埋め戻し土層。

6　黒褐10YR2/2　ややしまり欠く弱粘性土層。柱痕に相当すると思われる。6′はやや砂質でしまりもある。

7　暗褐10YR3/3　ローム小ブロックを含むややしまり強い層。7′のロームは粒子状。



第139図　15号住居および出土遺物

16・17号住居　（第140・141図　ＰＬ－18）

遺構確認段階では２軒の住居であることに気付かず、掘り下げ中に複数の床面のあることを確認した。

位置　005－785Ｇ

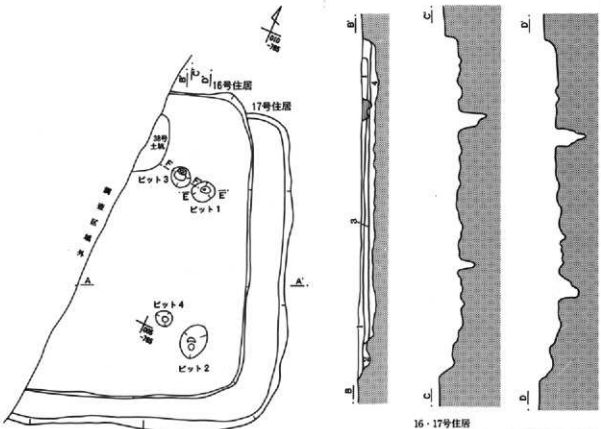
重複　16号住居（古）→17号住居（新）。両住居とも38号土坑に先出している。

主軸方向　Ｎ－21°－Ｗ（16・17号住居とも）

面積　16号住居　10.84㎡（残）

17号住居　14.47㎡（残）

形態　16号住居・17号住居とも東壁が約4.5mある。形状・軸方向とも調査範囲内では極めて共通点が多い。16号住居を南側へ40cm、東へ60cm移動すると17号住居の位置に合致する。反面、壁や柱穴など共有する部分が無いので１軒の住居の作り替えとは考え



16・17号住居

1　暗褐10YR3/3　基本土層の皆層に近く、As-Cの混入やや多い。17号住居埋没土。

2　にぶい黄褐10YR5/3　ロームブロックを中心とする17号住居掘り方埋め戻し土層。ローム地山部分のみに見られる。

3　黒褐10YR2/2　ローム粒を霜降り状に含む16号住居埋没土。3′はローム粒の少ない、17号住居の掘り方に相当すると思われる部分。

4　暗褐10YR3/3　ローム状土を不均等に含む16号住居掘り方埋め戻し土。しまりやや強い弱粘性土層。

ピット

5　黒褐10YR2/3　ローム小ブロックを少量含むややしまり欠く層。柱痕に相当する部分である。

6　灰黄褐10YR5/2　ロームブロック中心の層。埋め戻し土と壁の崩落土の混土。

第140図　16・17号住居

にくい。近接した時期に建て替えられた２軒の住居と判断した。なお、17号住居の南壁は3.7m分が確認できるが、柱穴の位置から東壁以上の長さのあることも想定できる。

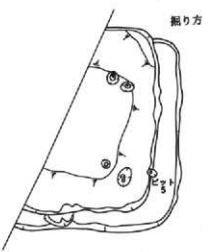
壁　16号住居は最大13cm、17号住居は５～８cm前後の壁高で、残存状態はよくない。

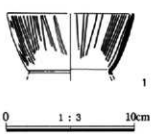
内部施設　４本の柱穴状ピットを調査している。４主柱穴を想定した場合、ピット１・２は17号住居に伴うものと思われるが、床面確認段階では不明瞭であった。ピット３・４は16号住居に伴うものと思われる。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→33×25×45、ピット２→50×35×32、ピット３→30×30×40、ピット４→22×22×23である。炉やカマドの痕跡および貯蔵穴は調査範囲では確認されていない。

床　踏み固められた明瞭な床は両住居とも確認されていないが、上面にある17号住居床面は調査時に失った部分もありそうである。17号住居床面は16号住居床上８cmほどの高さに作られているが、掘り方は16号住居の床面をあまり壊していない。掘り方は浅いものであったと思われる。16号住居には壁際が深くなる明瞭な掘り方がある。

出土遺物　17号住居埋没土出土の土師器壺が１点図示できたのみである。

その他の遺物　16号住居からの遺物出土はない。17号住居からは小破片中心の土師器のみ約60片出土している。ほとんど古式土師器と思われ、刷毛目のある甕類が半数近くを占めている。丁寧な磨きのある壺の他、赤彩のある細片もやや目立つ。





第141図　16・17号住居掘り方および出土遺物

18号住居　（第142～145図　ＰＬ－19）

位置　975－780G

重複　20号住居に後出している。

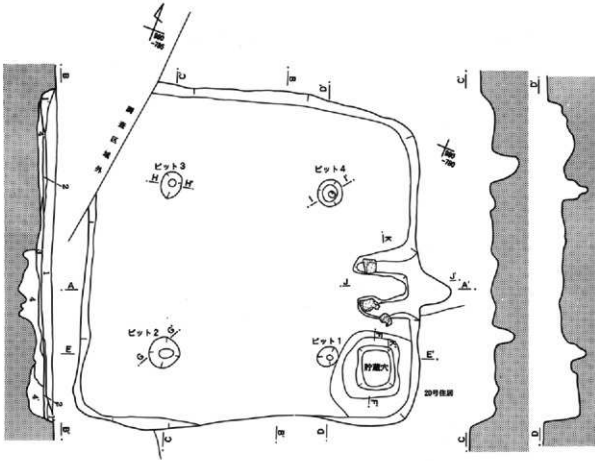
主軸方向　N－70°－E

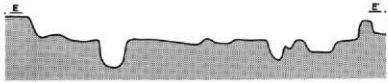
面積　23.87㎡（残）

形態　北西隅付近は調査区域外になるが全容の推測には問題ない。東壁が約4.5mで、他辺より70cmほど短い台形気味のプランを呈している。

壁　20号住居と重複する南壁は明確にできなかった部分がある。他の壁は20～30cmの残存壁高があり垂直に近い旧状を残している部分も多い。

カマド　東壁の中央やや南寄りにある。燃焼部は住居内にある。火床は住居床面よりやや高いレベルにあって煙道方向へ緩やかに立ち上がっている。煙道は壁外に約50cm張り出している。カマド掘り方内にも焼土や灰が混入しており、数次の作り直しも考えられる。袖先端部には川原石を使って焚き口の芯材としている。





18号住居

1　暗褐10YR3/3　基本土層の1層にほぼ同じ。ローム粒を霜降り状に含む。1′ではA₃-Cの混入少ない。

2　黒褐7.5YR2/2　炭化物粒や焼土粒・ローム小ブロック等の混入物の多い層。

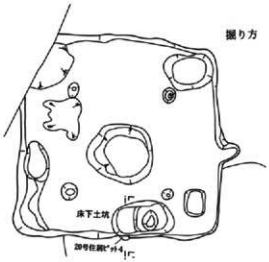
3　黒褐10YR2/2　ややしまりのある弱粘性土層で、貼り床に相当する。ローム粒を不均等に含むが、他の混入物少ない。

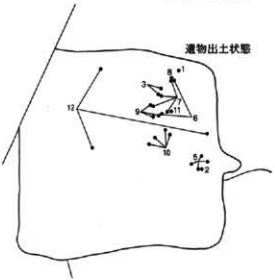
4　暗褐10YR3/3　不揃いのロームブロック混じりの掘り方埋め戻し土層。しまりあり。4′はロームの量が多く、主に床下土坑内に見られる土層。

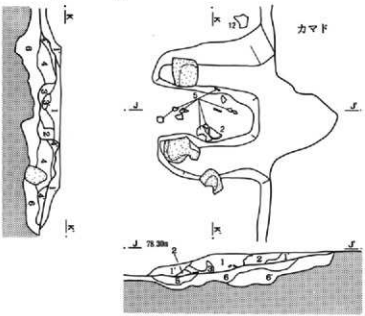
5　黒褐 10YR2/3　灰白色粘土や褐色土ブロックを含む弱粘性土。ややしまりあるピット等の堆没土。5′では混入物少ない。

6　暗褐 10YR3/3　1層に近いが焼土粒や不明瞭なローム状土を不均等に含む。

第142図　18号住居







カマド

1　暗褐10YR3/3　住居堆没土の１層に焼土粒・粘土粒を多量に含む。1′では混入物少なくやや砂質。

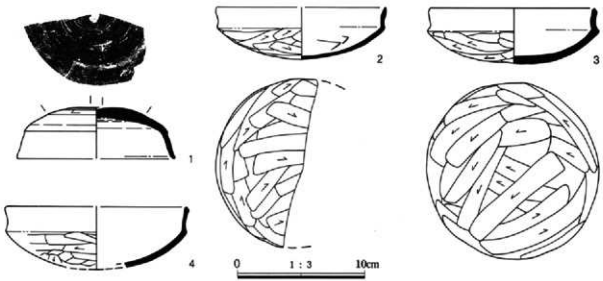
2　暗赤褐5YR3/3　焼土が小ブロック状にやや多量に混入する層。

3　褐10YR4/6　崩落天井と思われる粘土質の土層。不均等に焼土が混じり、3′では焼土が特に多い。

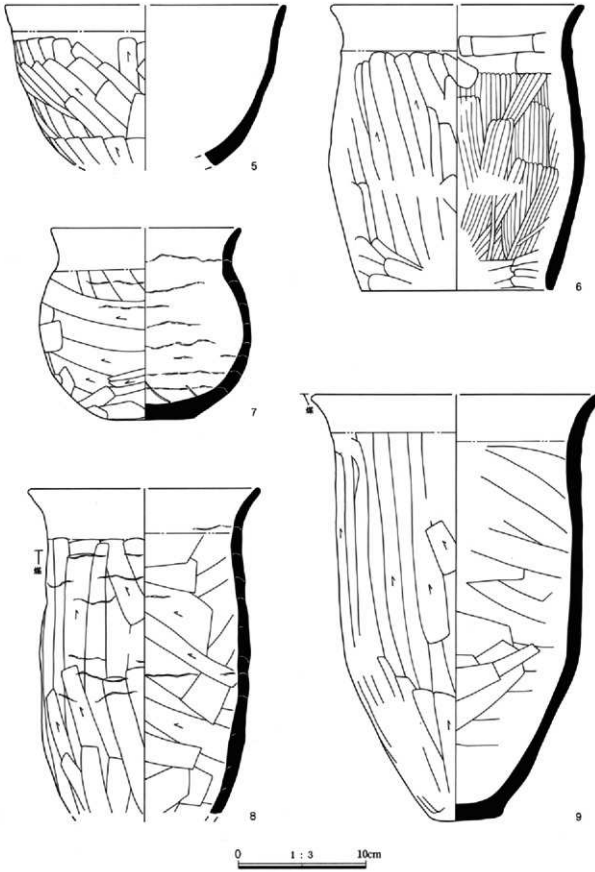
4　褐10YR4/4　粘性土を主体とする袖構築材。岩片や焼土粒を不均等に含む。4′はやや風化したように断移的に層没土に近づく部分。

5　褐10YR4/4　燃焼部下の埋め戻し土。焼土や灰の混入やや多い。

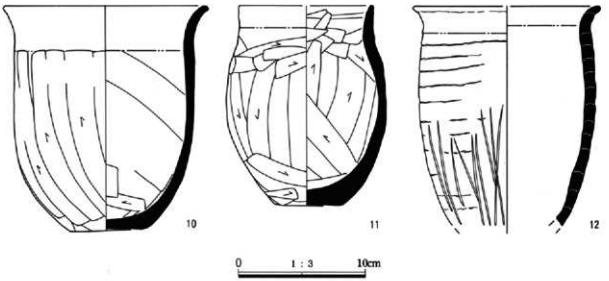
6　黒褐10YR2/2　掘り方埋め戻し土層。焼土や炭化物粒を少量含むが、6′では混入物は少ない。



第143図　18号住居カマドおよび出土遺物（１）



第144図　18号住居出土遺物（２）



第145図　18号住居出土遺物（３）

内部施設　南東隅に平面68×64cmの長方形、床面からの深さ38cmの貯蔵穴がある。貯蔵穴周辺の住居中央寄り床面では、環状に硬化面が確認される。また、４主柱穴の配置となる４本のピットを調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→31×26×32、ピット２→46×42×43、ピット３→40×28×37、ピット４→40×35×38である。

床　ローム面直上にあって緩やかな凹凸のある床面である。また南西側が低く傾斜していて、北東隅とは最大15cmもの比高差を生じている。ほぼ全面に浅い掘り方があり、部分的に土坑状の窪みがある。またほぼ全面に不明瞭な貼り床が設けられている。

出土遺物　住居東側半分から出土した遺物を中心に12点を図示した。土師器杯２と鉢５がカマド内の出土である。甕類の出土が多いが10が北袖前の床直上で出土している以外はカマドから離れている。６～９がピット４を中心に住居北東部分の床面直上や床面に近い高さで散乱するようにして出土し、11はピット４内の破片とも接合している。須恵器蓋１と土師器杯３も住居北東隅の出土で３は床直上の完形品である。甕12は住居北半に広く散った床面直上近くの破片が接合している。その他は埋没土中の出土である。

その他の遺物　土師器のみ約530片が出土している。厚手の丸胴甕・高杯などに大破片がある。模倣杯もやや目立つ。古式土師器の混入も多く器台や台付甕なども数個体分あり、刷毛目のある甕類は総量の10％近くを占めている。貯蔵穴内から約30片、カマド内から約20片いずれも小破片が出土しているが、住居埋没土中の遺物と傾向は変わらない。掘り方内の出土遺物は極めて少ない。なお床面レベルでの川原石の出土も多かった。直径15cm前後の円礫が中心で、鷹編み石ではない。

19号住居　（第146・147図　ＰＬ－19）

位置　970－780Ｇ

重複　21号住居・１号溝に先出している。20号住居とも重複しているが新旧は不明である。

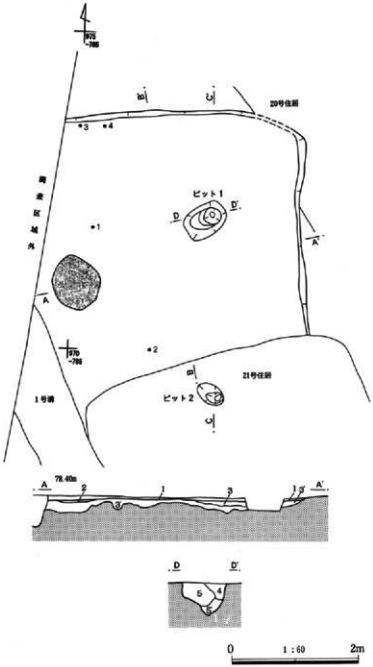
主軸方向　Ｎ－７°－Ｗ

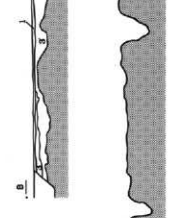
面積　13.94㎡（残）

形態　南側を21号住居に壊されているうえ、西側は調査区域外であり、不明な部分が多い。柱穴の位置から類推すると、一辺６ｍ近い大型住居になると思われる。

壁　北壁が緩やかに高さ８㎝前後残存している他は、ほとんど残っていない。

炉　炉の痕跡と思われる焼土等が集中的に見られる箇所が住居中央やや西寄りと想定される位置にある。付近は埋没土にも焼土が混入しているが、炉の痕跡らしい掘り込みは確認されていない。





19号住居

1　黒褐10YR3/1　ローム小ブロックやローム粒を少量含む埋没土。

2　黒10YR2/2　焼土粒や炭化物粒をやや多量に含む炉上面部分。

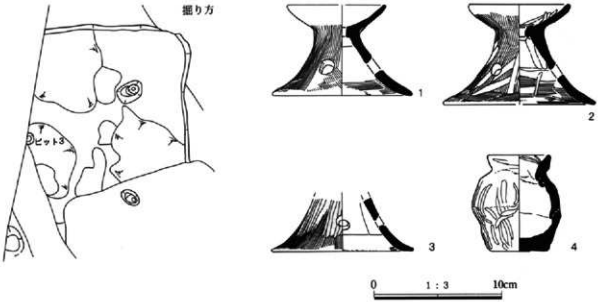
3　黒褐10YR3/2　ローム粒やローム小ブロックのやや多い掘り方埋め戻し土層。しまりはあまり強くない。3'は大粒のロームブロックの混入多い。

ピット

4　黒褐10YR3/2　ローム粒をやや多量に含む層。

5　黄褐10YR5/6　ローム小ブロックを多量に含むややしまり強い層。5'はローム土中心となる。

第146図　19号住居



第147図　19号住居出土遺物

内部施設　４主柱穴の東側を構成すると思われる２本のピットを調査している。規模（長軸×短軸×深さ㎝）はピット１→70×47×43、ピット２→50×30×38で、ピット１は柱痕が断面に観察できる。ピット２は21号住居床下精査時に確認できたピットである。調査区境で見つかった深さ27㎝のピット３は用途不明である。壁溝や貯蔵穴は調査範囲からは見つかっていない。

床　踏み固めの弱い分かりにくい床面である。ほぼ平坦だが壁際が僅かに深くなっていて、住居中央と２～３㎝の比高差を生じている。全面に不規則な掘り方があり、凹凸の激しい底面になっている。

出土遺物　本住居に確実に伴うと思われる小型の土師器４点を図示した。器台１が住居中央北寄り推定炉の近くから、２が中央東寄り床直上から出土している。器台３と甕４は北壁直下の出土である。

その他の遺物　土師器のみ約60片が出土している。いずれも小破片で古式土師器中心だが、平安時代の杯や６世紀頃の甕がわずかに混じっている。刷毛目のある甕類が30％近く見られる。

20号住居　（第148～150図　ＰＬ－19）

位置　975―780Ｇ

重複　18号住居・１号掘立柱建物に先出している。19号住居とも重複するが新旧不明である。

主軸方向　Ｎ－31°－Ｗ

面積　23.39㎡（残）

形態　西隅を欠いているが、長辺約5.6ｍ、短辺約5.0ｍの比較的整った横長長方形を呈している。

壁　ローム土上の漸移層内にあり、全体に15㎝以上の残存壁高がある。垂直に近い立ち上がりの部分も多く、比較的旧状を留めているようである。

炉　ピット４の東脇に炉穴と思われる深さ５㎝の窪みがある。中に土壌化した炭化物が見られるが被熱の痕跡や焼土の痕跡は不明瞭である。西側に逸れていてやや不規則な配置である。

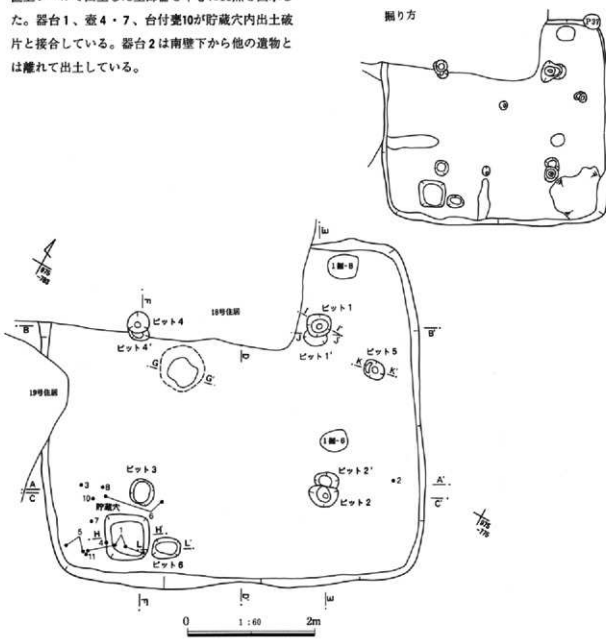
内部施設　４主柱穴と用途不明の２本のピットが調査されている。規模（長軸×短軸×深さ・重複部分深さ㎝）はピット１→38×33×48・30、ピット２→47×34×50・30、ピット３→40×36×32、ピット４→37×34×28・35、ピット５→37×27×34、ピット６→48×32×33である。主柱穴は３本が掘り直されていて、住居の建て替えが想定される。南隅付近

に平面長方形の貯蔵穴がある。床面での規模が74×68cm、深さ43cmで底面が平坦な施設である。炉や貯蔵穴の位置から南側に入り口のある住居と思われる。

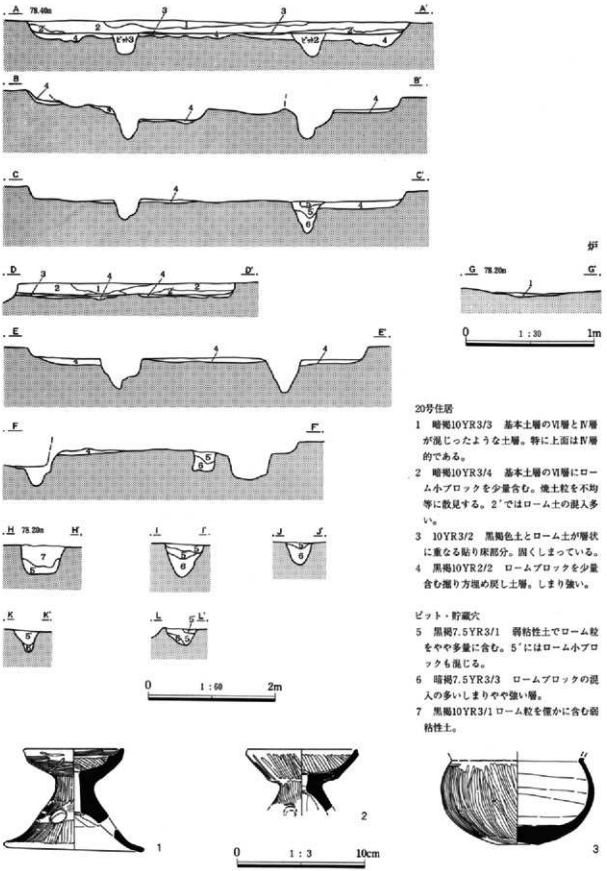
床　東側へ低く傾斜していて、8cm近い勾配がある。全面に掘り方があり、壁際がやや深くなっている。薄い貼り床が部分的に見られる。南側に間仕切り状の、深さ3～5cmほどの窪みがある。

出土遺物　南西隅と貯蔵穴周辺の床直上およびほぼ直上レベルで出土した土師器を中心に11点を図示した。器台1、壺4・7、台付甕10が貯蔵穴内出土破片と接合している。器台2は南壁下から他の遺物とは離れて出土している。

その他の遺物　土師器のみ約480片が出土している。ほとんどが古式土師器である。大型壺類胴部に大破片が見られるが、他は小破片中心となる。刷毛目のある甕類が目立ち50%以上を占めている。台付甕台部は4個体以上ある。高杯、小型壺などは多くないが、赤彩の破片がやや目立つ。



第148図　20号住居



20号住居

1　暗褐10YR3/3　基本土層のⅥ層とⅣ層が混じったような土層。特に上面はⅣ層的である。

2　暗褐10YR3/4　基本土層のⅥ層にローム小ブロックを少量含む。焼土粒を不均等に散見する。2′ではローム土の混入多い。

3　10YR3/2　黒褐色土とローム土が層状に重なる貼り床部分。固くしまっている。

4　黒褐10YR2/2　ロームブロックを少量含む掘り方埋め戻し土層。しまり強い。

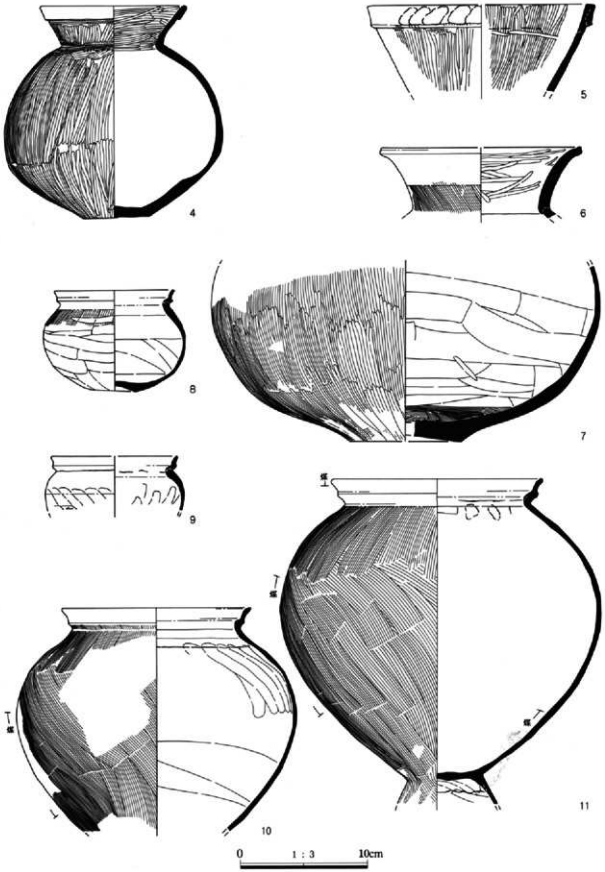
ピット・貯蔵穴

5　黒褐7.5YR3/1　弱粘性土でローム粒をやや多量に含む。5′にはローム小ブロックも混じる。

6　暗褐7.5YR3/3　ロームブロックの混入の多いしまりやや強い層。

7　黒褐10YR3/1 ローム粒を微かに含む弱粘性土。

第149図　20号住居断面および出土遺物（１）



第150図　20号住居出土遺物（2）

21号住居　（第151・152図　ＰＬ－20）

位置　965－780G

重複　19号住居に後出し、１号溝に先出している。

主軸方向　N－19°－E

面積　17.87㎡（残）

形態　西壁は１号溝に壊されている。東壁約4.3m、北壁約4.0mで、南西隅が鈍角に開き気味と想定される。歪んだ方形になるようである。

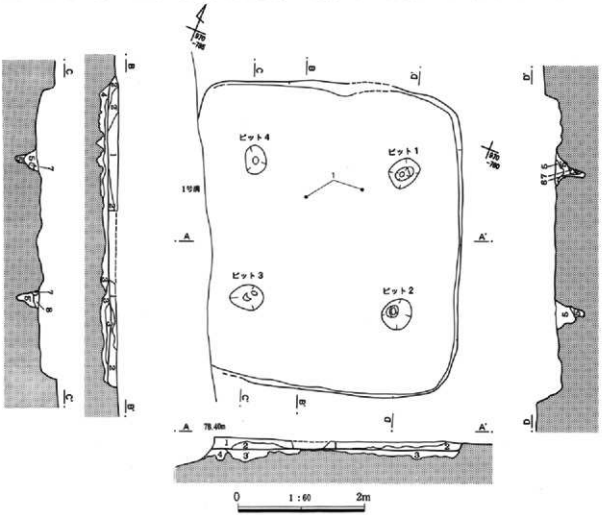
壁　10～20cmの残存壁高がある。垂直に近い立ち上がりの部分も多く、旧状を留めているようである。

内部施設　４主柱穴と床下精査時に用途不明の２柱穴を調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→45×36×43、ピット２→46×38×45、ピット３→48×34×36、ピット４→42×28×38、ピット５→47×50×29、ピット６→64×35×34である。住居平面の歪みに沿って、主柱穴の構成する区画もやや歪んでいる。整溝や貯蔵穴は確認できない。炉の時期の遺構であるが痕跡も確認されていない。

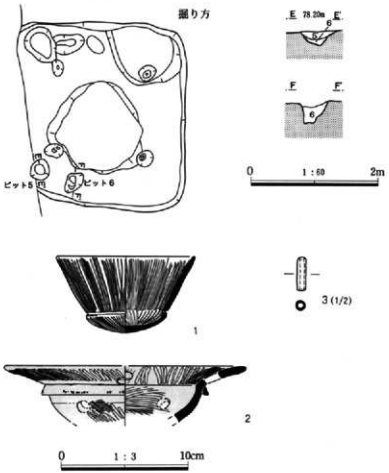
床　踏み固めの強い床面である。南西側に向かってやや低くなり、東壁際と５cm前後の比高差を生じている。掘り方は浅く、壁側がやや低くなっている。

出土遺物　３点を図示した。土師器坩１が住居中央床上10cm以上のレベルで、管玉３は埋没土中の出土である。特殊器台２は埋没土の破片が１号溝出土片とも接合している。

その他の遺物　住居の全域からほぼ均等に、土師器のみ約270片が出土している。ピット内から数片出土しているが、床下からの出土はない。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類は40%を占め、台付甕台部は４個体分以上ある。壺類も目立つ。



第151図　21号住居



21号住居

1　黒褐10YR2/3　基本土層のⅥ層に近い。ローム粒の混入多い。

2　黒褐10YR2/2　基本土層のⅥ層に近い。ローム粒の混入は少ないが、ローム小ブロックを散見する。2′ではローム土をほとんど含まない。

3　暗褐10YR3/3　しまりの強い貼り床相当部分。不揃いのロームブロックを不均等に含む弱粘性土層。3′はローム土の混入多く、しまりはやや弱くなる。

4　黒10YR2/1　ローム小ブロックを散見するしまり欠く土層。

ピット

5　暗褐色土層　ローム小ブロックを少量含む、しまり欠く弱粘性土層。5′では褐色粘性土の混入が多い。

6　黒色土層　やや壊土に近い、しまり強い層。ローム小ブロックを含む。

7　灰褐色土層　ブロック状の粘土やローム土を主体とする層。壁の崩落土の混入か。

8　褐色土層　ロームブロックの混入の多い粘性土層。しまり強い。

第152図　21号住居掘り方および出土遺物

22号住居　(第153図　P L－20)

位置　995－783G

重複　12・13号住居に先出している。

主軸方向　N－11°－E

面積　7.67㎡（残）

形態　両端まで計測できる壁がないが、主柱穴の配置から一辺4m前後の方形を呈すと思われる。

壁　残存壁高は9～14㎝で、垂直に近い立ち上がりの部分もある。

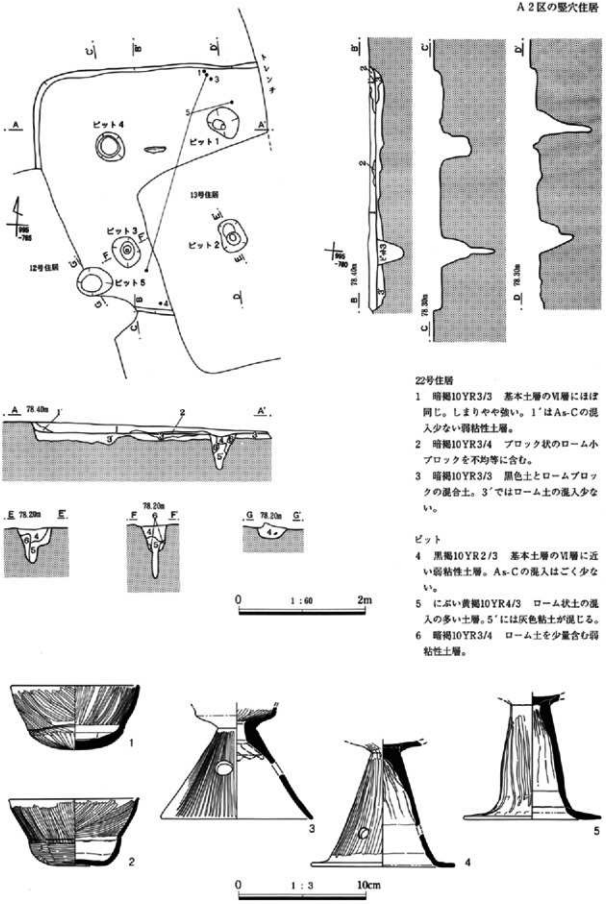
炉　ピット4東脇に炉石の可能性のある自然石が床面直上に据えてあった。焼土・炭化物等の敷布や被熱面および炉本体の掘り込みは認められない。

内部施設　4主柱穴と性格不明のピット1基を調査している。規模（長軸×短軸×深さ㎝）はピット1→54×40×89、ピット2→52×37×59、ピット3→50×40×85、ピット4→52×43×45、ピット5→56×43×22である。主柱穴は本遺跡の中でも際だって深く、柱痕も観察できる。ピット5は貯蔵穴の可能性のある位置に穿たれていて底面も平坦である。

床　ローム直上面にあり、不規則な凹凸の見られる床面である。全面にやや浅めの掘り方がある。

出土遺物　供献土器類の土師器のみ5点を図示した。壁際からの出土が多く、坩1・器台3が北壁中央際のほぼ床直上、高杯4が南壁際の床直上から出土している。高杯5は住居内の床直上レベル付近で広く散っていた破片が接合したものである。

その他の遺物　土師器のみ約70片が出土している。ほとんどが古式土師器と思われ、刷毛目のある甕類は半数近くを占めている。台付甕台部が5個体分以上確認できる。この他に丸胴の厚手甕胴部に大破片があるが、それ以外はいずれも小破片である。



22号住居

1　暗褐10YR3/3　基本土層のⅦ層にほぼ同じ。しまりやや強い。1′はAs-Cの混入少ない弱粘性土層。

2　暗褐10YR3/4　ブロック状のローム小ブロックを不均等に含む。

3　暗褐10YR3/3　黒色土とロームブロックの混合土。3′ではローム土の混入少ない。

ピット

4　黒褐10YR2/3　基本土層のⅦ層に近い弱粘性土層。As-Cの混入はごく少ない。

5　にぶい黄褐10YR4/3　ローム状土の混入の多い土層。5′には灰色粘土が混じる。

6　暗褐10YR3/4　ローム土を少量含む弱粘性土層。

第153図　22号住居および出土遺物

23号住居　（第154図　ＰＬ－20）

Ａ２区では最も北側に位置する住居である。３号溝が開削される段階ではすでに床面が失われているようである。掘り方面と柱穴の調査となった。柱穴がなければ住居とする根拠に欠ける遺構である。

位置　015－785G

重複　３号溝・２号土坑に先出している。

主軸方向　N－27°－W

面積　10.58㎡（残）

形態　掘り方の範囲からの推定になる。西側は調査区域外になる。東辺は４ｍ以上ある。主柱穴の位置から正方形に近い平面形を呈すと思われる。

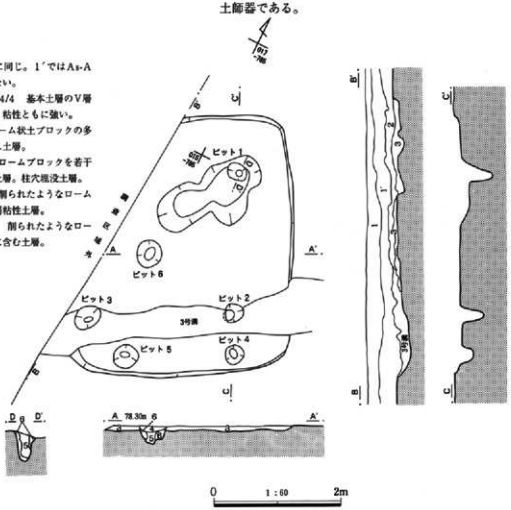
壁　残存していない。

内部施設　ピット６本を調査した。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→33×25×33、ピット２→29×25×35、ピット３→45×34×26、ピット４→32×28×24、ピット５→40×36×43、ピット６→44×39×24である。ピット１～ピット３は４主柱穴を構成すると思われる３本のピットを想定したが、ピット３は壁に近すぎる。床面段階の壁はさらに西側にあった可能性がある。ピット１には柱痕が観察できる。その他に用途不明の３本のピットを調査している。ピット４・ピット５は南壁際に対になるように穿たれている。炉やカマドの痕跡は確認されていない。

床　ローム面直上にあったと思われるが残存していない。凹凸の少ない掘り方が認められ、南壁際は浅くなるようである。

出土遺物　図示に耐えられる遺物はなかった。土師器小破片が５片出土したのみである。いずれも古式土師器である。

23号住居
1　基本土層のⅡ層に同じ。1′ではA₁₋₂Aの混入がかなり少ない。
2　にぶい黄褐10YR4/4　基本土層のⅤ層に近いか。しまり・粘性ともに強い。
3　褐10YR6/4　ローム状土ブロックの多い、掘り方埋め戻し土層。
4　黒褐10YR2/3　ロームブロックを若干含む、しまり強い土層。柱穴埋没土層。
5　暗褐10YR3/4　削られたようなローム小ブロックを含む弱粘性土層。
6　灰黄褐10YR5/2　削られたようなロームブロックを多量に含む土層。



第154図　23号住居

25号住居　（第155～157図　ＰＬ－20）

位置　955－785Ｇ

重複　２号溝・42号土坑に先出している。29号住居にも先出すると思われる。

主軸方向　Ｎ－25°－Ｅ

面積　39.16m²（残）

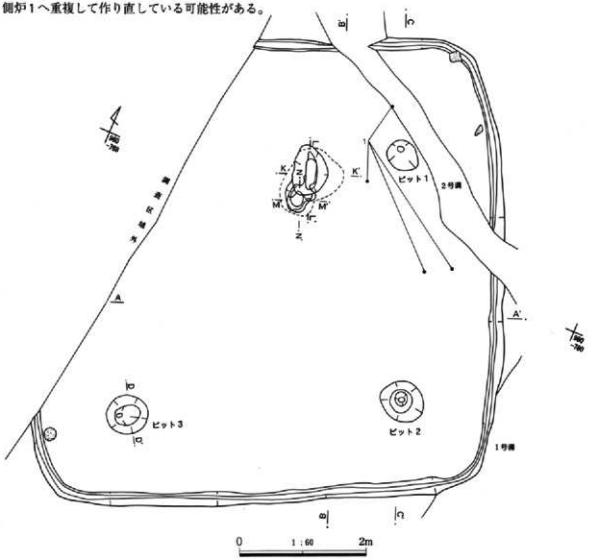
形態　西隅は調査区域外になる。完存している東壁・南壁は6.5m以上ある。隅のやや丸い正方形気味のプランを呈したＡ２区中最大規模の住居である。

炉　ピット１の西脇に炉状の窪みがある。ピット１と想定されるピット４との中央から大きくピット１側に偏っているが、底面には被熱痕跡が顕著で、本住居の炉と確定できると考えた。南側の炉２から北側炉１へ重複して作り直している可能性がある。

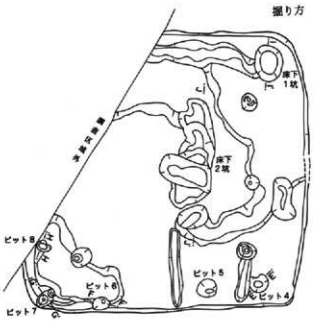
壁　ローム層上の漸移層内にある、やや開き気味の壁である。残存壁高は15～20cmほどで、住居の規模に比べて浅い。

内部施設　４主柱穴を構成する３本のピットを調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→53×43×63、ピット２→72×63×66、ピット３→65×60×70である。床面からの深さが７cm前後で細い壁溝が調査範囲内では全周している。貯蔵穴は確認できない。

床　ローム面直上にあって、ほぼ水平だが３cm前後の凹凸のある床面で、壁際には焼土が部分的に確認できる。深さのあまりない、凹凸の多い掘り方がほぼ全面に見られる。床下精査時に南壁際から用途不



第155図　25号住居



25号住居

1　暗褐色土層　ローム小ブロックをわずかに含む砂質土層。粘性なく、しまりやや弱い。1′では黒色味強く、A_0-Cらしいパミスの混入が多い。

2　黒褐色土層　主体となる土は黒色味強いが、ロームブロックの混入多い。粘性、しまりとも強くなる。

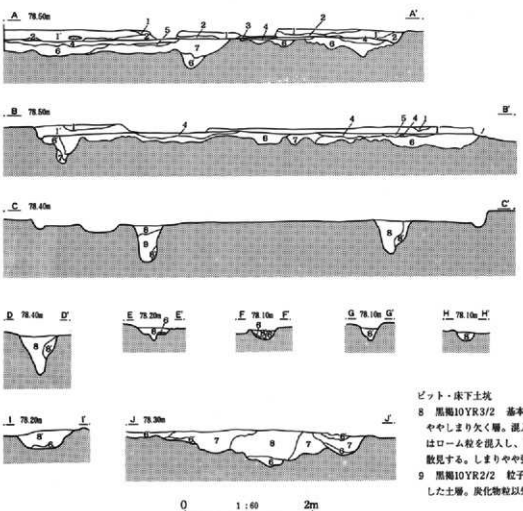
3　黒色土層　黒色灰を多量に含んだ非粘性土層。焼土粒を散見している。

4　黒褐色土層　ローム粒をやや多量に含む固く踏み固められた土層。貼り床。

5　黒色土層　黒色灰を含むしまり欠く土層。掘り方埋め戻し土中に小ブロック状に見られる。

6　褐色土層　不揃いのロームブロックを多量に含む掘り方埋め戻し土層。しまり強い。6′ではローム土やや少ない。

7　黒褐色土層　混入物の少ない、やや砂質な土層。しまり欠く。

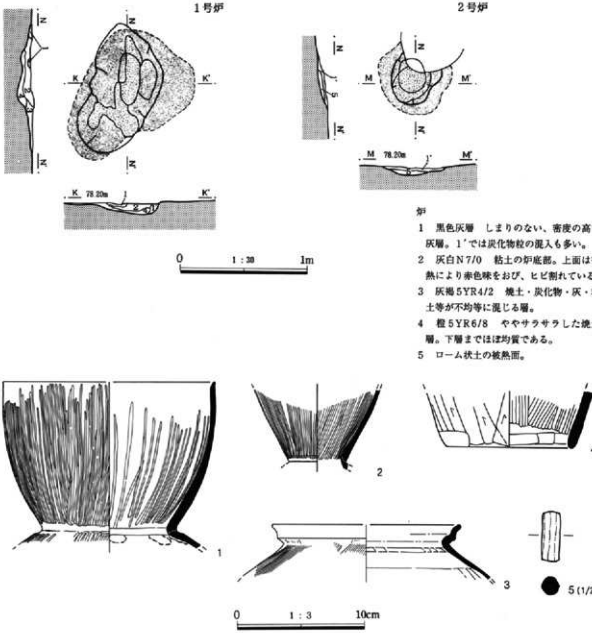


ピット・床下土坑

8　黒褐10YR3/2　基本土層のⅥ層に近いややしまり欠く層。混入物少ない。8′ではローム粒を混入し、ロームブロックを散見する。しまりやや強い。

9　黒褐10YR2/2　粒子の細かなねっとりした土層。炭化物粒以外の混入物少ない。

第156図　25号住居掘り方および断面



第157図　25号住居炉および出土遺物

明のピットが４本見つかっている。また南壁下東側には間仕切り状の溝が２本見られる。

出土遺物　土師器４点と石製品１点を図示した。壺１は住居北側で床面から数cm浮いた状態で散乱していた破片が接合したもので、さらに26号住居出土の破片が１点接合している。その他の土器は埋没土中の出土である。５は埋没土出土の管玉だが周辺の研磨が未完で孔が穿たれていない。同様の未製品はＡ２区４号住居に出土例がある。そして４号住居同様に原石・剥片や砥石など工房跡につながるような遺物は確認されていない。

その他の遺物　土師器のみ約640片出土している。小破片が中心で、点数に比してボリュームは少ない。住居西側からやや多く出土している。床下からの出土はない。ほとんど古式土師器である。器台や小型壺など器種は豊富で赤彩土器も目立つ。刷毛目のある甕類は30％近く混じっている。径３～15cmの川原石状の自然石が埋没土中から多数出土している。

26号住居　（第158～161図　ＰＬ－20）

位置　950－785G

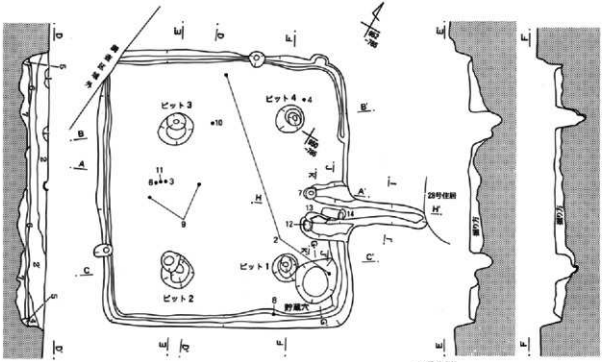
重複　28号住居に後出している。16号溝とは１ｍ弱の間隔で、同時存在は不可能と思われる。

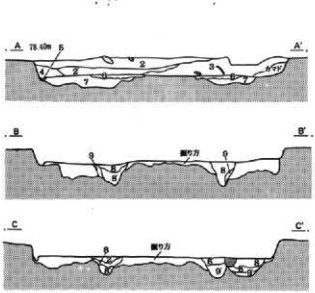
主軸方向　Ｎ－61°－Ｅ

面積　13.78㎡（残）

形態　西隅は調査区域外となるが、全容の把握に問題はない。カマドのある北東壁が長辺となり約4.0ｍ、短辺が約3.7ｍである。各隅が直角に近く、各辺も直線的で整った横長長方形を呈している。

壁　残存壁高は20～28cmあり、垂直に近い立ち上がりをしている部分が多い。





0　1：60　2m

第158図　26号住居

26号住居

1　暗褐色土層　基本土層のⅡ層。

2　暗褐色土層　基本土層のⅥ層に近い。ややしまり欠く非粘性土で、混入物少ない。2′ではロームブロックを少量含み、しまり・粘性ともに強くなる。

3　褐色土層　焼土粒を混入する弱粘性土層。カマドの崩落土の混じる土層。

4　黒褐色土層　ロームブロックの混入のやや多い、弱粘性土層。

5　黒褐色土層　壁溝下に見られるしまり欠く層。ローム粒以外の混入物少ない。

6　黒褐色土層　不揃いのロームブロックを不均等に含むしまり強い層。貼り床。

7　暗褐色土層　不揃いのロームブロックの混入多いややしまり欠く層。掘り方埋め戻し土層。

ピット・貯蔵穴

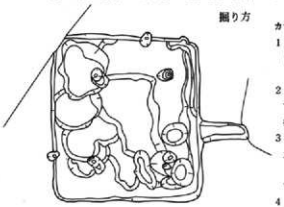
8　黒褐色土層　粒子の細かなややしまり弱い層。混入物は少ない。8′ではローム小ブロックを少量含む。

9　黒色土層　ローム粒やパミスを霜降り状に含むしまりやや強い層。9′には灰白色の粘土ブロックが混じる。

カマド　北東壁のやや南寄りにある。燃焼部は住居内にあり、煙道は壁外へ2.4m張り出している。袖部はローム土を主体とする構築材で築かれている。袖の下にも灰層が見られ、作り直しをしていると思われる。また、火床面も複数確認できる。

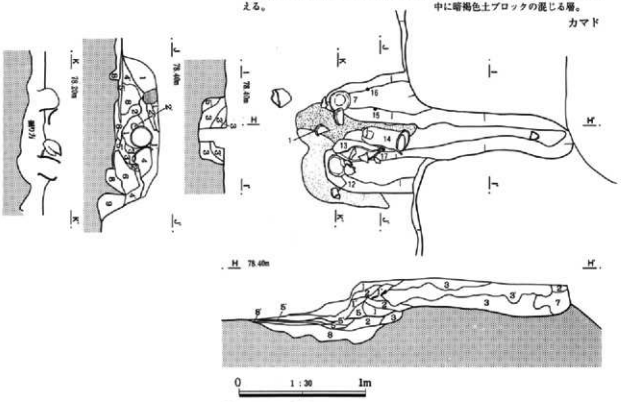
内部施設　４主柱穴と貯蔵穴を調査している。貯蔵穴は東隅にあり、楕円形の平面形で78×66cmの規模、床面からの深さは34cmである。柱穴の規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→45×42×36、ピット２→63×49×35、ピット３→58×48×37、ピット４→46×41×48である。ピット４が規則的な配置からはやや外側に逸れている。また、ピット１は上隅で貯蔵穴と重複している。カマド北隅付近を除いた壁下に、深さ10cm前後の壁溝が巡っている。また、北東と南西の壁上壁溝底面とほぼ同じ深さのピットが３基確認されているが、本住居に伴う壁柱穴か、重複する他のピットかは確認できなかった。

床　南側が深くわずかに傾斜している。掘り方は住居中央では浅く、壁際が深くなっている。住居中央を中心に貼り床が認められる。



カマド

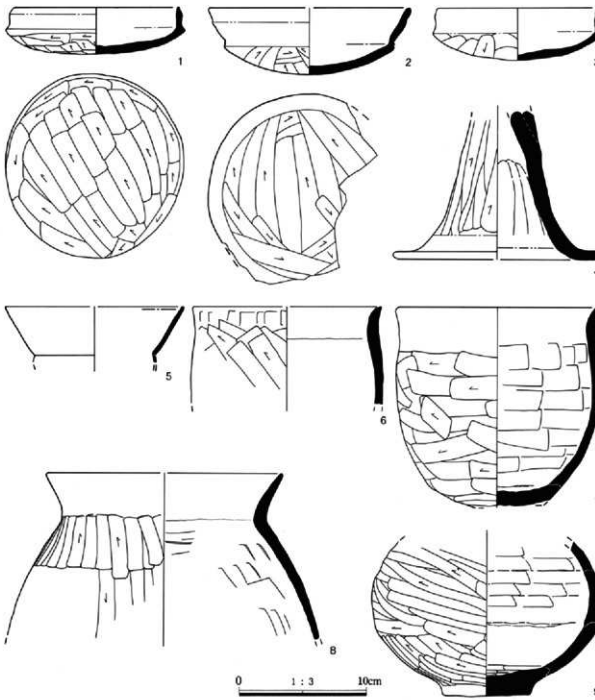
1　灰黄褐10YR4/2　粒子の細かな粘性土に、焼土・ローム粒等を霜降り状に含む。1′は混入物やや少ない。
2　にぶい橙　7.5YR7/4　ローム土主体で、焼土が不均等に混じる。2′には被熱痕が顕著な部分がある。
3　暗褐10YR3/3　ローム小ブロックと焼土の混入の多いザラザラした土層。しまりやや欠く。3′では焼土の混入きらに多い。
4　黒褐10YR3/2　小ブロック状の暗褐色土中に、焼土・ローム粒・黒色灰等雑多な混入物含む。4′はローム土の混入が増える。
5　黒褐10YR3/1　黒色灰にローム土や粘土の小ブロックを含む。焼土の混入もやや多い。5′は純層に近い灰の層。
6　褐10YR6/4　ローム土主体の袖部構築材。焼土粒を不均等に含んでいる。
7　黒褐7.5YR3/1　粒子の細かな非粘性土でしまりやや欠く。煙道部からの流れ込み土か。黒色灰の混入多く焼土粒を少量含む。
8　黒褐10YR2/2　カマド掘り方埋め戻し土。ローム粒やローム小ブロックを含み、焼土も少量混じる。8′は特にしまり強い。
9　灰白10YR8/2　灰白色の粘土ブロック中に暗褐色土ブロックの混じる層。



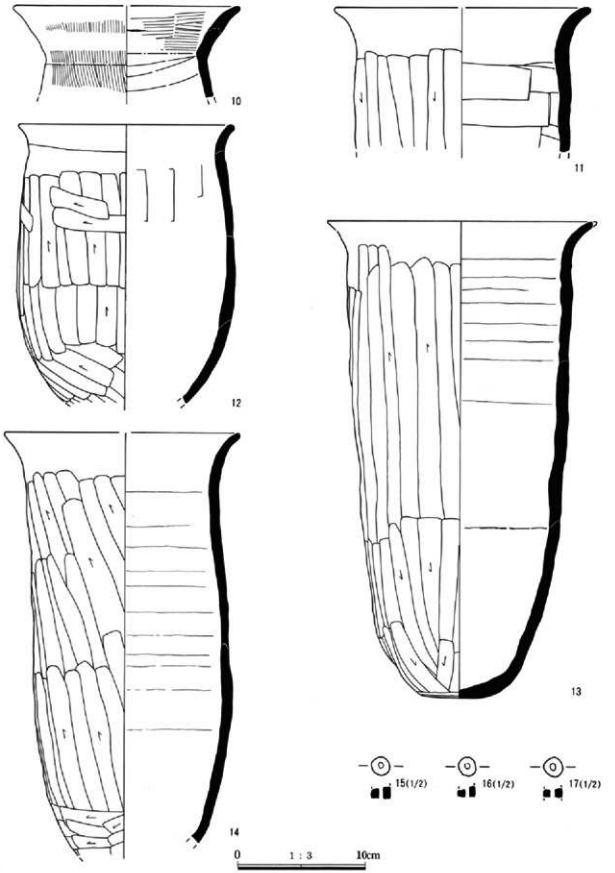
第159図　26号住居カマド

出土遺物　土師器14点と白玉３点を図示した。甕13・14はカマド燃焼部内の出土で、甕７は北袖、12は南袖先端に構築材として倒置して据えられていた。杯１もカマド内の遺物である。中央西側に遺物が集中するが、床面から若干浮いた状態である。甕８と高杯４は北隅で他の遺物から離れて出土している。白玉３点がカマド内や袖上から出土している。

その他の遺物　土師器のみ約630片が出土している。住居のほぼ全域から出土していて、カマドから離れた位置からの出土が多い。貯蔵穴から約10片出土する以外、床下からの出土はない。長胴気味の厚手の甕底部・胴部に大破片が多く、５個体分以上ある。杯類は極めて少ない。古式土師器の混入がやや多く、刷毛目のある甕類だけでも全体の５％近くある。



第160図　26号住居出土遺物（１）



第161図　26号住居出土遺物(２)

27号住居　(第162図　P L－21)

埋没土や床面・内部施設など、竪穴住居とするには問題点の多い遺構である。出土遺物から古代の遺構であることに間違いなさそうで、発掘調査時の住居番号をそのまま使用して、この項で扱った。

位置　954－783G

重複　28号住居に後出している。

主軸方向　N－30°－W

面積　6.30㎡

形態　一辺約2.4mの歪んだ正方形を呈している。

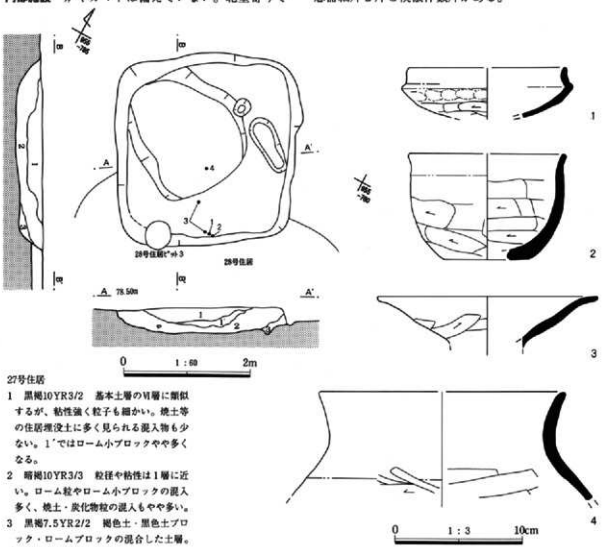
壁　底面から連続するように緩やかに立ち上がっていて、壁と床の境を明瞭に区別できない部分もある。残存状態の良い位置で25cm前後の壁高がある。

内部施設　炉やカマドは備えていない。北壁寄りでピットを1基調査しているが、深さ8cmの不明瞭なものである。壁溝や貯蔵穴も確認できない。

床　皿底状に窪むローム地山面まで掘り下げたが、途中に床面らしい硬化面や貼り床は確認できない。

出土遺物　28号住居と重複する東壁際を中心に出土した土師器4点を図示した。1～3は南壁際出土で、3のみ床直上付近の出土である。4は住居中央の床面より5cm浮いた状態の出土である。

その他の遺物　約250片が出土している。古式土師器が目立ち、28号住居からの流れ込みが多そうである。刷毛目のある甕類は20%ほどである。台付甕台部が3個体分確認できる。厚手丸胴甕類の胴部・頸部大破片が目立つ。図示した土器と同時期の遺物には須恵器細片2片と模倣杯数片がある。



27号住居

1　黒褐10YR3/2　基本土層の1層に類似するが、粘性強く粒子も細かい。焼土等の住居埋没土に多く見られる混入物も少ない。1′ではローム小ブロックやや多くなる。

2　暗褐10YR3/3　粒径や粘性は1層に近い。ローム粒やローム小ブロックの混入多く、焼土・炭化物粒の混入もやや多い。

3　黒褐7.5YR2/2　褐色土・黒色土ブロック・ロームブロックの混合した土層。焼土等の混入物は少ない。

第162図　27号住居および出土遺物

28号住居　(第163・164図　ＰＬ－21)

試掘調査時のトレンチによって炉を含んだ住居中央部分を失っている。

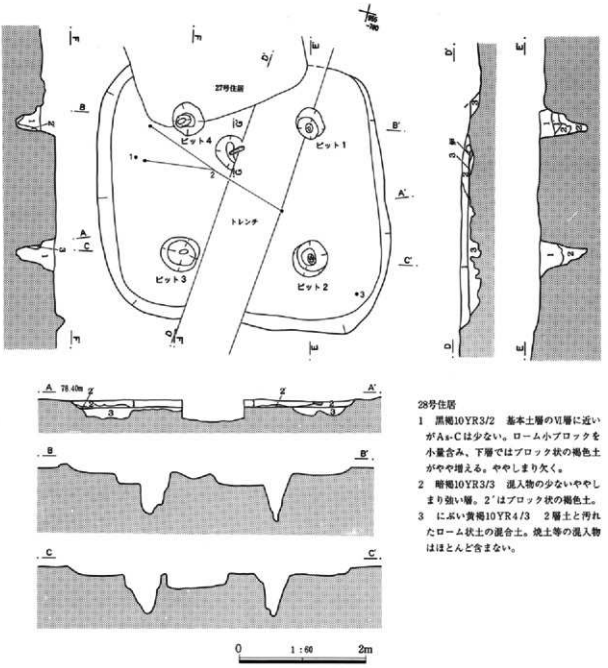
位置　950－780Ｇ

重複　27号住居およびピットに先出している。

主軸方向　Ｎ－14°－Ｗ

面積　13.47㎡（残）

形態　一辺約3.6ｍ程で、北東・南西の両辺が鈍角に開き、菱形に近い歪みを生じている。隅も丸味が強く、歪んだ印象を強くしている。



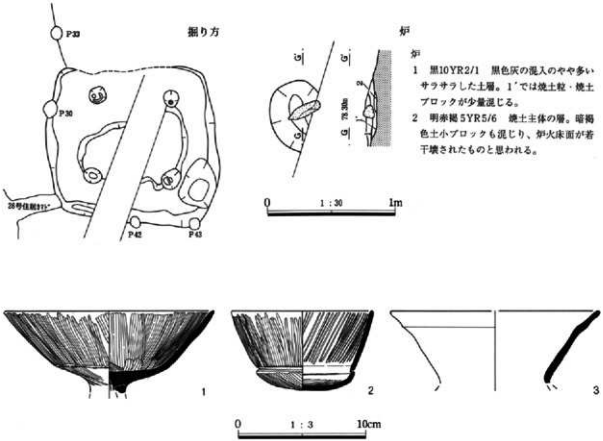
第163図　28号住居

28号住居

1　黒褐10YR3/2　基本土層のⅥ層に近いがA₀-Cは少ない。ローム小ブロックを小量含み、下層ではブロック状の褐色土がやや増える。ややしまり欠く。

2　暗褐10YR3/3　混入物の少ないややしまり強い層。2'はブロック状の褐色土。

3　にぶい黄褐10YR4/3　2層土と汚れたローム状土の混合土。焼土等の混入物はほとんど含まない。



第164図　28号住居炉および出土遺物

壁　ローム層上の漸移層内にあって緩やかに立ち上がる壁で、旧状はあまり留めていないようである。残存壁高は最大でも15cm前後である。

炉　住居中央でややピット４寄りにある。床面から深さ10cmの掘り方があり、焼土や灰の混入が多い。長い自然石使った炉石が残存しているが、使用時の位置からは動いているようである。

内部施設　４本の主柱穴を調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット１→48×42×74、ピット２→59×54×76、ピット３→60×53×62、ピット４→52×47×64で住居の規模に比べて極めて深い柱穴である。各柱穴は確認面の開口が広く、底面には柱痕状の窪みがある。住居平面の歪みに沿って柱穴の配置もやや歪んでいる。壁溝は確認できない。掘り方調査時に見つかった東壁直下南隅の土坑状の落ち込みは、歪んだ形状で深さも20cmしかないが、配置より貯蔵穴となる可能性もあろう。

床　比較的平坦な床面である。部分的に踏み固めの強い箇所がある。住居中央付近ではローム層上面の掘り下げ面をそのまま床面としているところがあるが、壁側では全域に深さ５cmほどの掘り方がある。明瞭な貼り床は認められない。

出土遺物　土師器３点を図示した。高杯１は西壁下の床直上、壺３は南東壁直下の出土である。坩２は住居中央から西壁際に散乱する破片を接合した遺物で、床直上破片も含まれている。

その他の遺物　土師器のみ約150片が出土している。ほとんどが古式土師器で、刷毛目のある甕類が30%ほどを占めている。大破片は少ない。薄手の壺類口縁がやや目立つ。床下出土は１片のみである。

29号住居　（第165図　ＰＬ－21）

25号住居の中にあり、同住居の床面確認時に気付いた遺構である。同住居の間仕切り状の掘り方が本住居を切っていると考え、発掘調査段階で先後関係を類推したが、出土遺物に齟齬を生じている。また竪穴住居とすることにも問題点は多い。

位置　958－785G

重複　25号住居に重複するが新旧は不明瞭である。

主軸方向　N－30°－W

面積　7.36m²（推）

形態　南東・北西の両辺が約2.8m、他の辺が約2.5mで、長方形気味の平面形を呈している。

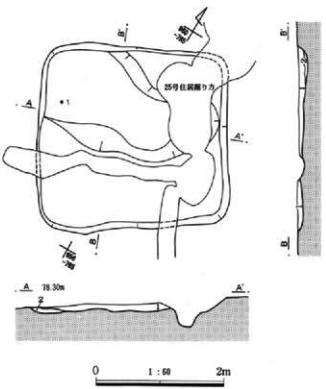
壁　25号住居の掘り方との区別がむずかしく、不明瞭であった。遺構確認面から掘り方までの高さは5～18cmある。

内部施設　カマドや炉の他、柱穴・貯蔵穴等の施設は一切確認されていない。

床　遺構確認段階からローム地山の掘り方確認まで、明瞭な床面は認められていない。掘り方部分しか残存していなかった可能性がある。25号住居の調査時に確認した間仕切り溝が本遺構を切っているように見えたが、掘り方土を大きく動かさなかったことで、先出施設の痕跡が残存することもありうるのではなかろうか。

出土遺物　杯１は西壁際から出土した破片が完形近くまで復元できた。本住居に確実に伴う遺物であれば、25号住居に後出する証左となる。

その他の遺物　土師器のみ約50片が出土している。古式土師器のみで、刷毛目が半数を占めている。大破片はない。

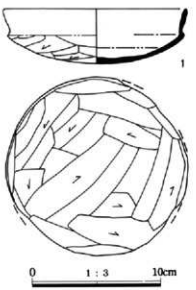


29号住居

1　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土層。ローム粒・褐色土小ブロックを不均等に含む。

2　暗褐10YR3/3　褐色土主体にロームブロックが混じる層。

※　どちらの層にも焼土・炭化物粒等の混入物をほとんど含まない。



第165図　29号住居および出土遺物

30号住居　（第166・167図）

位置　943－788G

重複　16号溝・８号井戸に先出している。

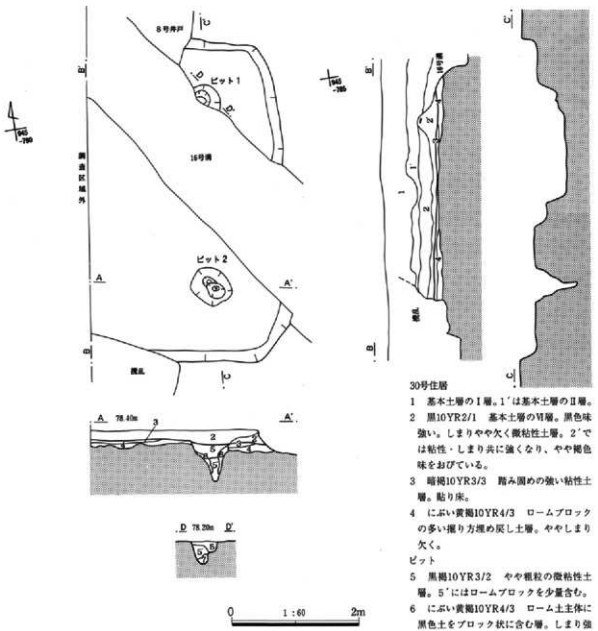
主軸方向　N－6°－E

面積　13.49㎡（残）

形態　西側が調査区域外となり、東壁の残存状態も極めて悪い。東辺が約4.8mあり、比較的大型の住居になる。

壁　残存壁高は20cm前後ある。緩やかに立ち上がっている部分が多い。

内部施設　４主柱穴を構成すると思われる２本の柱穴を調査している。ピット１は深さ31cmであまり明瞭な施設ではないが、ピット２は規模が67×54cm、深さが約71cmあり、断面に柱痕が表れている。その他の施設は確認されていない。炉の時期の住居と思われるが、調査範囲に焼土・被熱面や掘り込みなど



30号住居

1　基本土層のⅠ層。1′は基本土層のⅡ層。

2　黒10YR2/1　基本土層の切層。黒色味強い。しまりやや欠く微粘性土層。2′では粘性・しまり共に強くなり、やや褐色味をおびている。

3　暗褐10YR3/3　踏み固めの強い粘性土層。貼り床。

4　にぶい黄褐10YR4/3　ロームブロックの多い掘り方埋め戻し土層。ややしまり欠く。

ピット

5　黒褐10YR3/2　やや粗粒の微粘性土層。5′にはロームブロックを少量含む。

6　にぶい黄褐10YR4/3　ローム土主体に黒色土をブロック状に含む層。しまり強い。

7　暗褐10YR3/3　粒子の細かな微粘性土。ローム粒小ブロックを少量含む。

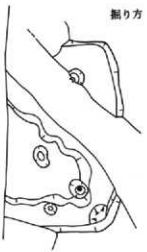
第166図　30号住居

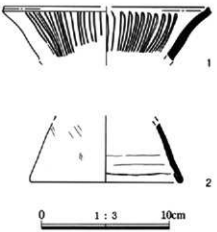
の痕跡は確認されていない。

床　東壁際が高くて他の床と５㎝前後の比高差があるが、他はほぼ平坦な床面になっている。住居中心付近には比較的明瞭な貼り床が見られる。床下には壁際がやや深くなる掘り方がある。16号溝に沿って掘り方が深くなってしまったのは、縁んだ床面を掘り過ぎたものである。なお、底面がピット状になる窪みが不規則に穿たれている。

出土遺物　図示できたのは土師器２点だけで、いずれも埋没土内の出土である。

その他の遺物　破片総数は土師器のみ約130片ある。刷毛目のある甕類等の古式土師器の小破片が中心となる。特に床下土坑出土の約10片や大きめの破片はすべて古式土師器である。





第167図　30号住居掘り方および出土遺物

31号住居　（第168図　ＰＬ－21）

位置　930－780Ｇ　遺跡下から確認された遺構で、重複や撹乱が激しく、埋没土の硬化も著しかった。

重複　44・53号土坑およびＡ１区４号溝に先出している。33号住居と重複しているが新旧不明である。

主軸方向　Ｎ－32°－Ｗ

面積　3.33㎡（残）

形態　住居の大半をＡ１区４号溝に、西隅も53号土坑に壊されていて、北辺が3.8ｍ以上あることが判明したのみである。比較的隅の整った大型の住居となる可能性がある。

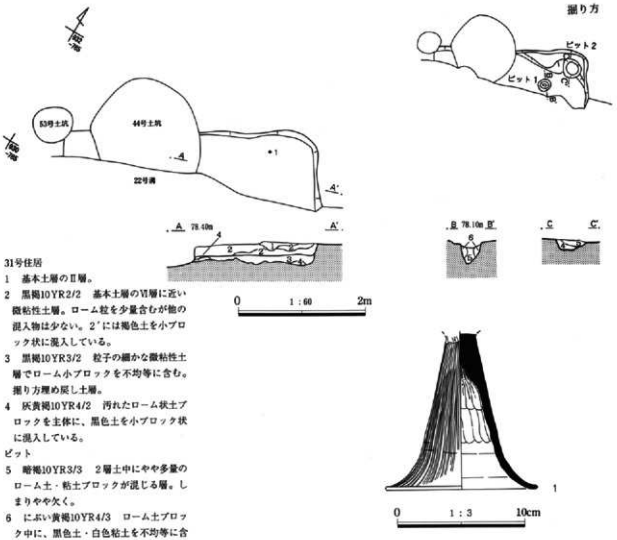
壁　ローム土内にある明瞭な壁である。東隅付近で20㎝前後の残存壁高を測る部分があり垂直に近い立ち上がりであるが、他は数㎝しか残っていない。

内部施設　床下精査時に２基のピットを確認した。床面の状態が悪くて床下段階まで明瞭にできなかったが、床面上で確認されるべき施設の可能性がある。規模（長軸×短軸×深さ㎝）はピット１→35×31×38、ピット２→55×43×21である。ピット１には柱痕状の断面が観察され、主柱穴配置に齟齬のない位置にある。ピット２は底径が30㎝と小型だが、貯蔵穴に適した位置にある。炉の時期の住居と思われるが痕跡は確認されていない。壁溝等の施設も認められない。

床　埋没土から全体が硬化していて、本来の硬化面を把握するのは難しかった。細かく波打つような凹凸があり３㎝前後の比高差を生じている。ほぼ全面に掘り方があり、壁際が深くなるようである。貼り床は観察されない。

出土遺物　北壁東寄りの壁直下のほぼ床直上レベルから出土した土師器高杯脚部片が１点図示できたのみである。

その他の遺物　土師器の小破片が12片出土したのみである。いずれも古式土師器である。



31号住居
1　基本土層のⅡ層。
2　黒褐10YR2/2　基本土層の切層に近い微粘性土層。ローム粒を少量含むが他の混入物は少ない。2'には褐色土を小ブロック状に混入している。
3　黒褐10YR3/2　粒子の細かな微粘性土層でローム小ブロックを不均等に含む。掘り方埋め戻し土層。
4　灰黄褐10YR4/2　汚れたローム状土ブロックを主体に、黒色土を小ブロック状に混入している。
ピット
5　暗褐10YR3/3　2層土中にやや多量のローム土・粘土ブロックが混じる層。しまりやや欠く。
6　にぶい黄褐10YR4/3　ローム土ブロック中に、黒色土・白色粘土を不均等に含む。

第168図　31号住居および出土遺物

32号住居　（第169図　ＰＬ－21）

位置　940－785G

重複　16号溝に先出している。

主軸方向　N－37°－E

面積　13.44m²（推）

形態　重複遺構や試掘時のトレンチが縦横に走り壊された部分が多いが、四隅がすべて残存していてプランをほぼ復元できる。北西辺が3.9m、南西辺が3.6mある。各辺が直線的で隅も直角に近い、整った長方形を呈している。

壁　ローム面上の漸移層内にあり、残存壁高は10～18cm前後ある。やや開き気味の形状は全体に共通して見られ、残存状態は比較的良いようである。

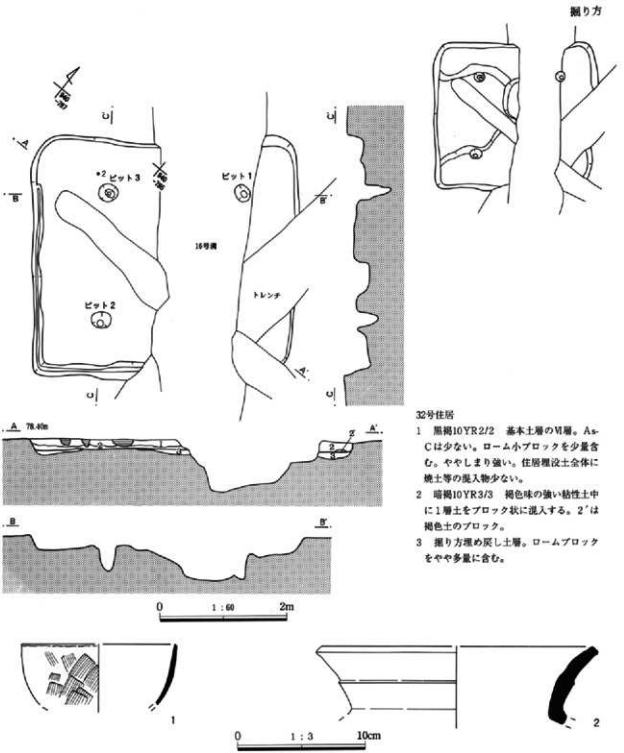
内部施設　重複遺構や攪乱で壊されている部分が広いが、4主柱穴を構成する3本のピットを調査している。規模（長軸×短軸×深さcm）はピット1→26×23×39、ピット2→30×23×47、ピット3→28×24×40である。南側にのみ深さ2～4cmの浅い壁溝が見られる。

床　比較的平坦な床面だが、顕著な踏み固めや焼土等による汚れの少ない不明瞭なものである。掘り方は変則的で、南西壁下が住居中央にかけて掘り残して他の部分で15cm前後掘り下げている。また、炉の存在が想定されるピット1とピット3の間には土坑状の窪みがあり、周辺の掘り方底面より10cm前後低くなっている。炉の想定される地点だが、焼土・被

熱等の痕跡は認められない。

出土遺物　図示できたのは土師器破片2点のみである。鉢1は埋没土内、壺2はピット3北西脇の床上10cm前後浮いた状態で出土している。

その他の遺物　小破片中心だが総数約170片の遺物があり、ほとんどが古式土師器と思われる。床下出土の12片はすべて古式土師器である。刷毛目のある甕類が20%ほどを占めている。須恵器1片と7世紀頃の土師器杯数片が混じっている。



32号住居

1　黒褐10YR2/2　基本土層の切層。A・Cは少ない。ローム小ブロックを少量含む。ややしまり強い。住居埋没土全体に焼土等の混入物少ない。

2　暗褐10YR3/3　褐色味の強い粘性土中に1層土をブロック状に混入する。2′は褐色土のブロック。

3　掘り方埋め戻し土層。ロームブロックをやや多量に含む。

第169図　32号住居および出土遺物

33号住居　（第170図　ＰＬ－21）

位置　930－785Ｇ　Ａ１区とＡ２区を分けた道路下から見つかった遺構である。撹乱や上面からの踏み固めが著しい地点である。

重複　13号溝、44・53号土坑およびＡ１区４号溝に先出している。31号住居とも重複するが、新旧は不明である。

主軸方向　Ｎ－17°－Ｗ

面積　5.77㎡（残）

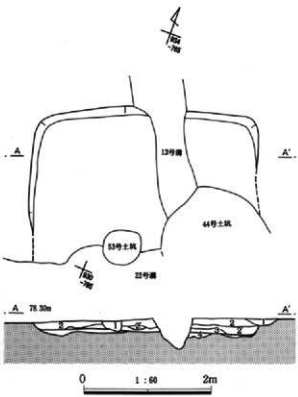
形態　南半分は残存していない。北辺が約3.3ｍで、隅は整っている。小型の住居である。

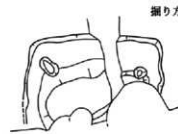
壁　下端のみローム土内にある。北辺では15cm前後の残存整高がある。緩やかに立ち上がっていて旧状は留めていないようである。

内部施設　柱穴・壁溝等の施設は確認されていない。床下精査時に２本の柱穴状ピットを調査している。床面が不明瞭なため、床面段階で確認されるべき施設であった可能性もある。床面からの深さが東側28cm、西側21cmでやや浅いが掘り込みのしっかりしたものである。配置がやや歪み、柱穴とは断定しきれない。壁溝・貯蔵穴の他、炉やカマドの痕跡も確認できない。

床　ローム層表面に築かれているが、埋没土が著しく硬く、床面との区別の難しいものだった。床面は住居中央が高くなる傾向があり、壁際と５cm以上の比高差を生じている。壁際に床面からの深さ３～20cmの掘り方がある。

出土遺物　総数で約20片しか出土しておらず、図示できる遺物はなかった。すべて古式土師器で刷毛目のある甕類が半分以上を占めている。小破片がほとんどである。





33号住居
1　基本土層のⅡ層。
2　黒褐10YR3/2　基本土層のⅦ層に近い。やや細粒の微粘性土層。2′には褐色土をブロック状に含む。
3　褐10YR3/3　地山のローム状土中に、黒色土をブロック状に含む。
4　黒褐10YR3/2　2層土に近い掘り方埋め戻し土層。混入物少ない。

第170図　33号住居

Ｂ区の竪穴住居

Ｂ区で調査された竪穴住居はＢ１区の石田川期１号住居１軒のみである。Ａ２区最北に位置する23号住居から北へ40m近く離れて独立している。この間には洪水層があり、本来は集落があったものが削り取られている可能性もある。また、１号住居の南西側に隣接する050－780グリッド付近に石田川期の遺物の散布が極めて多かった。その他の竪穴住居があることを想定して付近を精査したが、確認できなかった。

１号住居　（第171～174図　ＰＬ－22）

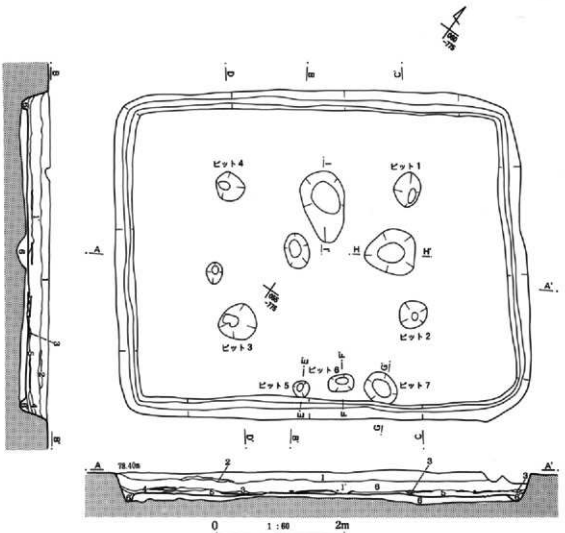
黒色土中にＡs－Ｃや炭化物粒の混入の見られる遺構として基本土層第Ⅵ層下から確認されている。焼失家屋と思われ、多量の炭化物と焼土が堆積土中に含まれている。特に焼土は壁寄りに多く見られるが、被熱した崩落壁と考えられる土量をはるかに超えている。焼け落ちた屋根の上に土をかぶせるような行為があったか、あるいは屋根の下半が“土屋根”状であったことが想定されよう。

位置　055－775Ｇ

重複　7・13・14号溝に先出している。

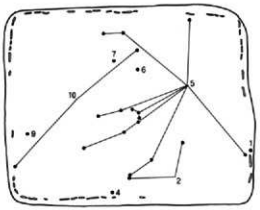
主軸方向　Ｎ－58°－Ｅ

面積　26.55m²

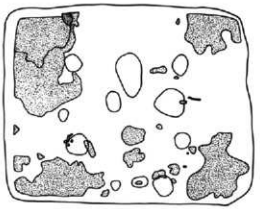


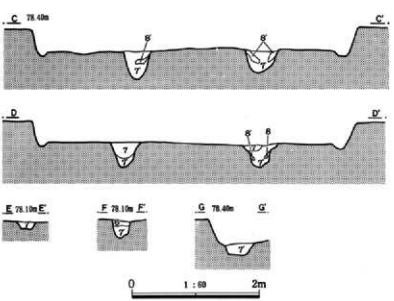
第171図　１号住居

遺物出土状態



焼土等確認状態





1号住居

1　黒褐5YR3/1　基本土層のⅥ層に近い。炭化物粒の混入やや多い、しまり強い層。1′ではローム粒の混入やや多く焼土も少量含む。粘性が強くなる。

2　にぶい橙7.5YR7/4　焼土主体に炭化物粒の混入も多い層。

3　炭化物粒を中心に炭化材の混じる層。

4　橙5YR7/6　鮮やかな色調の焼土を主体とする層。粘性強い。

5　黒褐5YR2/1　ローム小ブロックを多量に含む弱粘性土層。

6　黒褐7.5YR2/1　1～5cm大のロームブロックを不均等に含む撹り方埋め戻し土層。6′ではローム土をほとんど含まず、矢板部分以外では炭化物も少ない。

ピット

7　黒褐10YR2/2　しまりのない腐植土質の非粘性土層。炭化物粒を少量含む以外に混入物は少ない。7′ではローム粒を霜降り状に含んでいる。

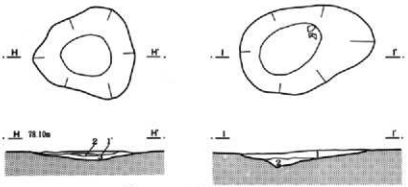
8　暗褐10YR3/3　土質は1層に類似した弱粘性土層。不揃いのロームや焼土を小ブロック状に含む。8′には微細な焼土粒や灰の混入が多い。

炉

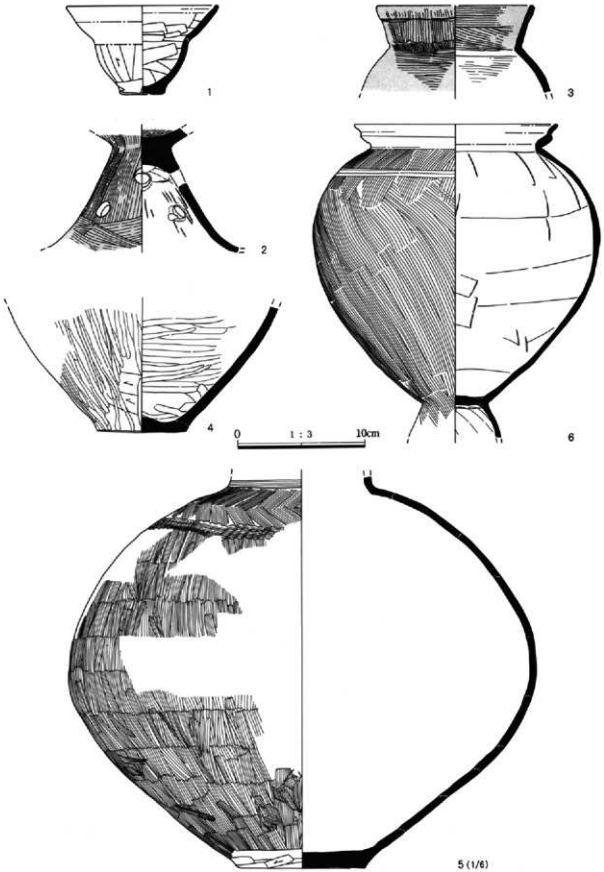
1　黒10YR2/1　黒色灰が混じり黒色味が強い。1′には焼土が混じる。

2　橙5YR7/6　焼土主体の層。下面には炭化物粒が混じる。

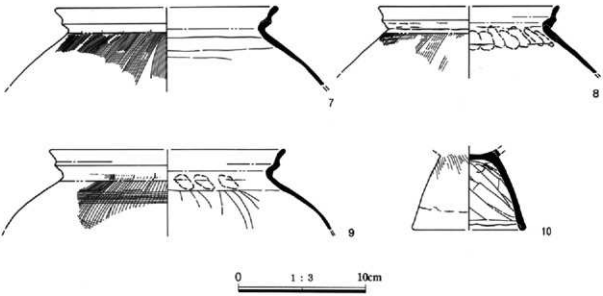
3　黒褐7.5YR3/1　ローム小ブロックを多量に含む弱粘性土層。住居床撹り方埋め戻し土との区別難しい。



第172図　1号住居遺物と出土状態および炉



第173図　１号住居出土遺物（１）



第174図　１号住居出土遺物（２）

形態　北西辺が6.1ｍなのに対し、南東辺が20cmほど長く、わずかに台形状気味に歪んだ長方形を呈している。短辺は4.6ｍ前後である。各辺は直線的だが、各隅はやや丸みがある。

壁　壁高は35cm前後である。やや開き気味であるが全体に同様な傾向にあり、著しい崩落箇所は認められない。被熱部分も認められる。

炉　ピット１とピット２の間にある１号炉、ピット４とピット１の間にある２号炉の２基の炉跡を確認している。２号炉上に台付甕が出土していることから、住居廃絶時に使用されていたのは２号炉と想定できる。

内部施設　４主柱穴が住居四隅を結ぶ対角線上に規則的に配置されている。その他に３本のピットが南東壁下に集中して見られる。入り口施設となるものがあると思われる。壁溝が全周している。壁溝埋め戻し土内には不明瞭だが厚さ２cm前後の矢板痕状の炭化物層が見られる。

床　ローム状土を掘り込んだ面にあり、踏み固めの強い、炭化物等の散った明瞭な床である。住居中央が高く、壁際と最大８cmの比高差を生じている。ほぼ全面に浅い掘り方があるが、床面同様に壁際が若干深くなっている。

出土遺物　土師器のみ10点を図示した。床上10cmほど浮いた状態の坩１は北東壁・床直上の壺４は南東壁直下の出土である。台付甕６・７は２号炉周辺の出土である。また、離れた地点の接合資料が多い。大型壺５は住居中央付近の床直上に潰れた状態でまとまって出土したが、住居東側に散乱している破片とも多数接合している。床直上の高杯２、床から20cm前後浮いた状態の台付甕10も離れた破片が接合している。

その他の遺物　総数で1500片近い土師器片を出土しているが、混入品はない。大型の壺胴部（接合できなかった６と同一個体）破片に大破片が多い。刷毛目のある甕類は図示した以外にもあり、台部だけでも４個体確認できる。壺・台付甕以外の破片は少なく、赤彩の器台や高杯類がやや目立つ程度である。住居内では南東側でやや遺物が少ないが、ほぼ全域から均等に破片類が出土している。

C区の竪穴住居

A２区北隅の33号住居から北へ約120m離れた地点に６軒の竪穴住居が見つかっている。（４号住居は欠番で、住居番号は７までとなっている）

付近は古墳時代の水田が広がっていたが、集落が立地する地山はA２区より20～40cmほど高くなっている。集落の時期は８世紀を中心とする時期に限られているようで、古墳時代初頭から平安時代まで続くA区とは様相を異にしている。

またC区では天仁元年（1108年）の浅間山火山灰（As－B）下にも水田が見つかっていて、現代まで水田地帯となっている。付近が基本土層の、Ⅳ層とⅤ層の間の限られた時期にのみ集落が展開する一画であったことが分かる。

１号住居　（第175図　ＰＬ－22）

位置　133－752G

主軸方向　N－38°－W

面積　1.16m²（残）

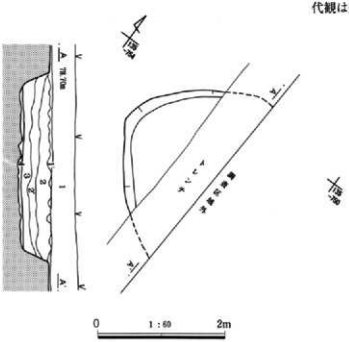
形態　西隅が確認できただけで、大半は調査区域外となり旧状は不明である。調査範囲東限にある壁面から確認できた部分から復元すると、遺構の壁は直線的には伸びないようで、小型の住居、あるいは土坑状の施設となる可能性もある。

壁　断面では45cm前後の壁があるが、調査範囲内で把握できたのは30cm前後である。垂直に近い良好な壁が残存している。

内部施設　カマドや炉の他、柱穴・壁溝等の施設は調査範囲内では一切確認できない。

床　踏み固めは弱く、明瞭な床面ではない。浅い掘り方のある凹凸の多い床面と思われ、調査範囲では壁際がやや深くなっている。

出土遺物　図示できる遺物はなかった。破片総数が３片のみで、いずれも埋没土内の土師器である。模倣杯となりそうな杯の口縁部、コの字以前と思われる薄手の甕口縁、薄手の甕胴部細片で、時期決定を行える資料ではないが、A２区の他の住居に近い年代観は想定できよう。



第175図　１号住居

１号住居
1　基本土層のⅠ層1′は同Ⅱ層。
2　暗褐色土層　基本土層のⅣ層土に近いシルト質土だが、黒色土の混入も多い再堆積土層である。ＦＰ粒を確認できる。2′ではシルトの比率が高く、黄色味をおびている。
3　黄褐色土層　シルト質土ブロックを主体とする層。住居埋没土下層土であるが、焼土・炭化物粒等の混入はほとんどない。
4　暗灰褐色土層　掘り方埋め戻し土層。地山の砂質土や基本土層の切層土がブロック状に混合している。

２号住居　（第176～179図　ＰＬ－22）

二つのカマドを備えているが、堆没土の観察から単独の住居であることを確認した。

位置　130－760G

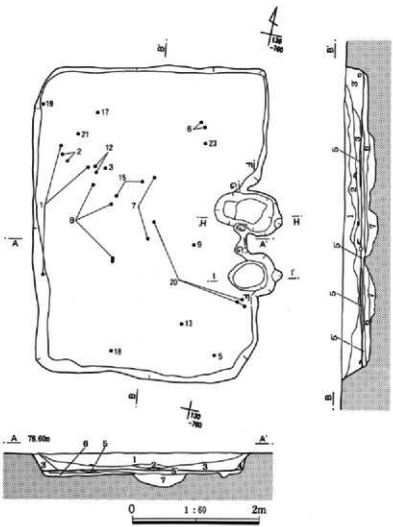
主軸方向　N－78°－E

面積　15.54㎡

形態　隅の整った横長長方形を呈しているが北壁3.4m、南壁3.1mと逆台形状に歪み、東壁はカマドを挟んで若干食い違っている。

壁　基本土層の・層土内にあるが、比較的残存状態は良いようで、25～30cmの壁高がある。全体にやや緩やかに立ち上がっているが崩落は少ない。

カマド　東壁の中央やや南寄りに２号カマドがあり、カマド中央で計測して約１m北側に隣接して１号カマドがある。１号カマドは両袖が残存しているが、２号カマドは袖が明瞭でない。また、遺遺物の出土も１号カマドの方が多いことから２号→１号という作り替えが考えられる。ただし２号カマドに埋め戻しの痕跡のないことや両カマド間で接合する土器のあることから、両カマド同時存在の可能性も充分考えられる。２基のカマドとも燃焼部は壁際にあり、火床は床面レベルにある。煙道の張り出しは１号カマドが35cm、２号カマドが約50cmである。１号カマドには袖石と考えられる礫が両袖芯部の位置に



第176図　２号住居

２号住居

1　暗褐10YR3/3　黒色土やシルト質土がブロック状に混合する層。ＦＰ粒を散見する。

2　黒10YR2/1　多量の炭化物・黒色灰の混じる北側からの流れ込み土層。

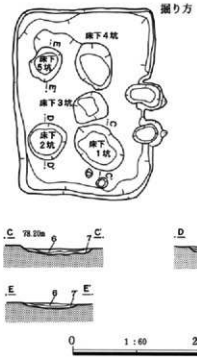
3　暗褐10YR3/4　黒色土と黄褐色ローム状土の混合土層。3′にはシルト質土が混じり、ＦＰ粒を散見する。

4　崩壊したカマド袖構築材の黄褐色土層。

5　貼り床　強い踏み固めがある粘性土層。斑鉄見られる。5′も貼り床に相当する黄褐色土層で、２面以上の床が確認される。

6　暗褐色土層　黒色土と黄褐色ローム状土が混合する掘り方埋め戻し土層。

7　暗褐色土層　床下土坑内に見られる土層で黒色土主体にローム状土が少量混じる。



カマド

1　暗褐色土層　住居埋没土に焼土粒を少量含む。1′では焼土やや多く、焼土ブロックも散見する。

2　暗赤褐色土層　天井部や壁の崩落土を含む層で、焼土の混入多い。

3　暗褐色土層　カマド内の堆積土層で、焼土・灰・粘土粒等が混在する。3′では灰の量が多い。

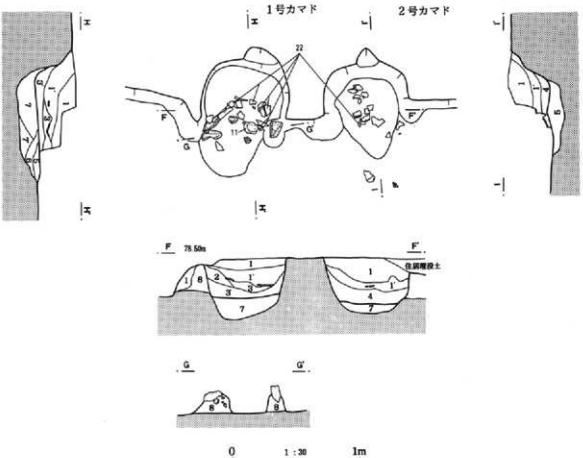
4　暗褐色土層　粘土を主体とし、焼土ブロックや炭化物粒を多量に含む層。

5　火床部分で貼り床が被熱している。

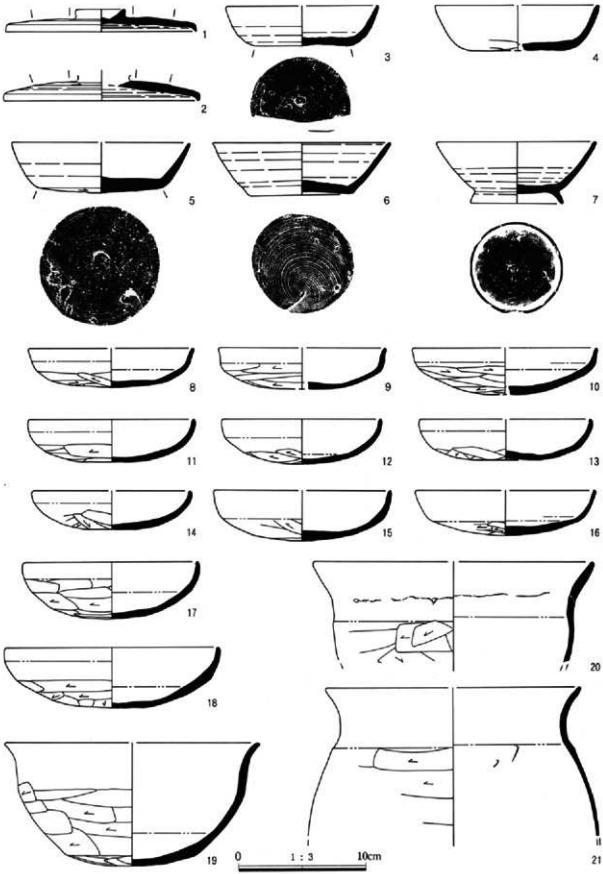
6　黒色灰層

7　黒色土層　黒色灰を主体とし、焼土や炭化物粒を不均等に含む。7′では地山黒褐色土が混合する。

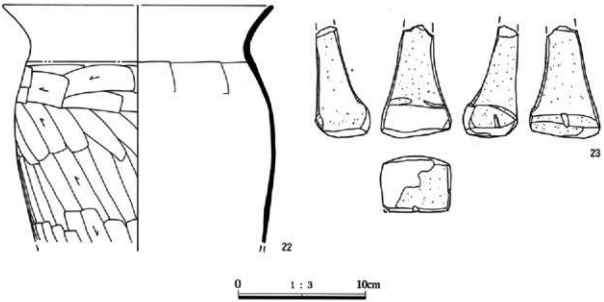
8　袖構築材　前橋泥流に相当する礫混じり土を多量に含む。



第177図　2号住居カマド



第178図　2号住居出土遺物(1)



第179図　2号住居出土遺物(2)

横倒し状態で見つかっているが、床面より浮いた状態で不確実である。

内部施設　柱穴や壁溝等の施設は確認されない。

床　基本土層第Ⅵ層内にあり、掘り方は第Ⅶ層を掘り込んでいる。中央に明瞭な踏み固め面があってわずかに高くなり、壁際に比べて1～3㎝ほどの比高差を生じている。貼り床があるが、断面観察から複数面の床面があることが確認できる。全体に平坦な掘り方があり、土坑状に窪んだ底面を呈している部分やピット状の窪みが不規則にある。

出土遺物　住居の全域に散乱するようにして多数の遺物が出土し、杯類を中心に23点を図示した。土師器甕22が1号カマド内から出土しているが、2号カマド出土破片に接合するものがあった。土師器杯11も1号カマド内の出土で埋没土内の破片と接合してほぼ完形まで接合している。土師器鉢20は2号カマド南脇を中心に住居中央床直上に散った破片が接合したものである。南壁直下では須恵器杯5・土師器杯18が床直上で出土し、西壁直下では須恵器蓋1が床直上から床上12㎝・土師器鉢19が床上9㎝の高さで出土している。北西寄りから中央にかけての床面出土遺物が多く、須恵器蓋2・杯3・7、土師器杯8・15～17などの杯類が目立ち、土師器甕21の出土があるが床直上出土の遺物は8と16・17のみである。なお21は30号土坑の出土破片と接合している。その他に南東寄りの土師器杯13が床直上の遺物で、北東寄りの須恵器杯6・カマド前の土師器鉢19は床上10㎝前後の出土である。

その他の遺物　土師器約850片と須恵器20片が出土している。やや大型の破片が多い。図示した以外にも土師器杯類の出土が目立ち、1／6個体以上にまで復元できた破片は20個体分近くある。大型の杯が大半である。甕類はほとんどが薄手で胴部破片がほとんどであるが、丸胴気味の甕底部2個体、長胴気味の甕底部2個体以上が確認できる。須恵器は杯類のみで、高台部小破片が2個体分ある。扁平な川原石が少量出土しているが、土器同様床面から浮いた状態のものがほとんどである。

3・5号住居　(第180～182図　PL－23)

C区で唯一の重複住居である。

位置　125－765G

重複　3号住居は5号住居に後出している。

3号住居

主軸方向　N－78°－E

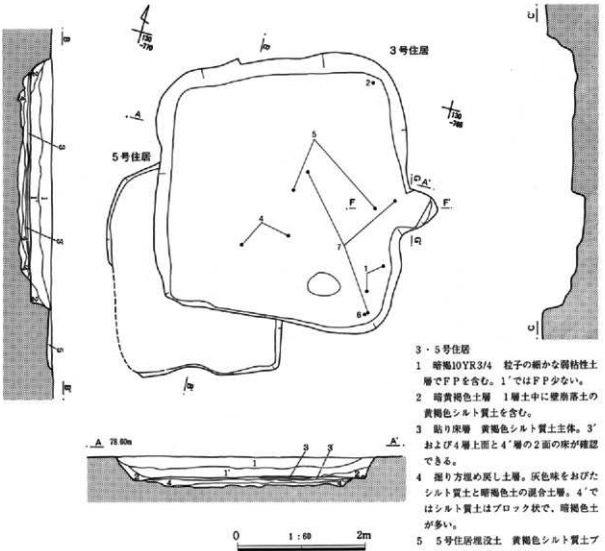
面積　13.09㎡（推）

形態　一辺3.3m前後だが、カマドのある東辺のみ約4.2mある。全体が不整な台形状を呈し、東辺は弧状に膨らんでいる。

壁　基本土層V層を掘り込んでいる。緩やかに立ち上がる部分が多い。住居埋没土にもV層土のシルト質土ブロックが多量に混入しており、崩落のすすんだ壁のようである。

カマド　東壁のほぼ中央にある。燃焼部は壁際にあり、煙道は壁外へ50cm張り出している。火床は住居床面と同レベルにある。袖部分は確認できなかった。カマド断面を見ても、明瞭なカマド構築材は観察されていない。

内部施設　南東隅付近に床面からの深さ7cmの不明瞭な窪みがあるが、本住居に確実に伴うものかは判断できなかった。また、掘り方断面では壁直下にあるわずかな窪みが観察されており、不明瞭な壁溝が



3・5号住居

1　暗褐10YR3/4　粒子の細かな弱粘性土層でFPを含む。1′ではFP少ない。

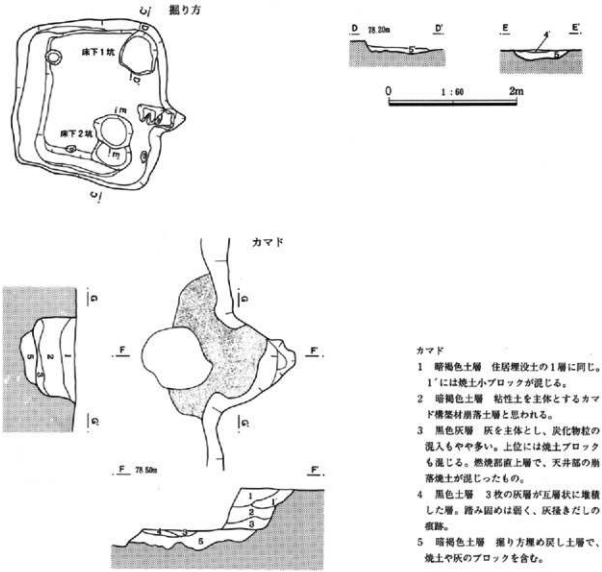
2　暗黄褐色土層　1層土中に壁崩落土の黄褐色シルト質土を含む。

3　貼り床層　黄褐色シルト質土主体。3′および4層上面と4′層の2面の床が確認できる。

4　掘り方埋め戻し土層。灰色味をおびたシルト質土と暗褐色土の混合土層。4′ではシルト質土はブロック状で、暗褐色土が多い。

5　5号住居埋没土　黄褐色シルト質土ブロックの混じる粘性土層。

第180図　3・5号住居



カマド
1 暗褐色土層　住居埋没土の1層に同じ。1″には焼土小ブロックが混じる。
2 暗褐色土層　粘性土を主体とするカマド構築材崩落土層と思われる。
3 黒色灰層　灰を主体とし、炭化物粒の混入もやや多い。上位には焼土ブロックも混じる。焼焼部直上層で、天井部の崩落焼土が混じったもの。
4 黒色土層　3枚の灰層が瓦層状に堆積した層。踏み固めは弱く、灰掻きだしの痕跡。
5 暗褐色土層　掘り方埋め戻し土層で、焼土や灰のブロックを含む。

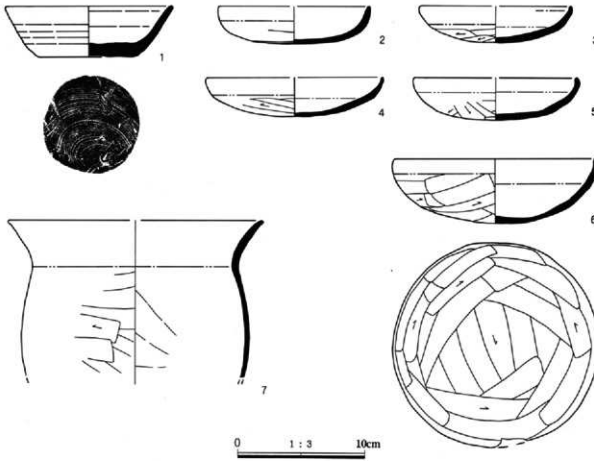
第181図　3号住居カマド

部分的に巡っていた可能性がある。柱穴や貯蔵穴は確認されていない。

床　基本土層Ⅵ層土内の凹凸のある床面である。住居中央がわずかに高くなる傾向があり、壁際より最大5㎝の比高差を生じている。掘り方は壁際を掘り残しているため二段底状になっている。踏み固めは顕著ではないが2面の貼り床が断面から確認できる。西壁を広げる作業を中心に住居の拡張を行っている可能性があろう。底面付近には土坑状・ピット状の不明確な窪みも見られる。

出土遺物　杯類を中心に6点を図示した。土師器杯3以外は床直上から出土である。須恵器杯1と土師器鉢6は南東隅付近、土師器杯2は北東隅の出土である。土師器杯4・5は住居中央付近に散っていた破片が接合したもので、甕7はカマド前面にもひろがっていた。

その他の遺物　総数で約270片の土器があり、そのうち7片が須恵器、あとは土師器である。土師器は薄手の甕胴部が大半で、コの字口縁の古い段階に該当しよう。杯類は平底気味と丸底の2種がある。10個体近くありそうである。須恵器は杯類の口縁細片で、平底になりそうである。



第182図　3号住居出土遺物

5号住居

3号住居の南西隅に先出する方形の遺構として確認されたが、竪穴住居とする根拠を欠いている。床面も不明瞭で、掘り下げた部分も埋没土か掘り方埋め戻し土であるか判断できない。

主軸方向　N－17°－W

面積　3.75㎡（残）

形態　南辺2.3m、西辺約3.0mが確認される。隅の形状も一様ではないが、竪穴住居としてはかなり小型の長方形プランを呈すと思われる。

壁　基本土層のⅣ層土内にあり極めて不明瞭である。残存壁高は3～7㎝ほどしかない。

内部施設　カマドや炉・柱穴や壁溝などの施設は一切確認されていない。

床　ラハール層である基本土層のⅣ層土内にあり、床面としては不安定な土壌中に築かれている。凹凸はあるが、ほぼ水平な床面が調査されている。踏み固めや床面通有の汚れは見られない。この面が床面であるなら、掘り方は認められない。

出土遺物　遺物は19片の土師器細片のみで、図示できる遺物はなかった。薄手の甕胴部片中心に杯底部の可能性のある破片が少量混じる。時期決定の根拠になりえる資料はない。

6号住居　（第183図　ＰＬ－23）

竪穴住居とする模拠の曖昧な遺構である。明瞭な床面は確認できず、掘り方部分のみ確認できた住居となる可能性もあろう。

位置　132－772G

重複　1号掘立柱建物に先出している。

主軸方向　N－8°－W

面積　7.12㎡（残）

形態　把握できた範囲では長辺3ｍ前後、短辺2.3ｍ前後で、竪穴住居としては小型な、隅丸長方形に近いプランであるが、各隅・各辺とも歪みが大きく、不整である。

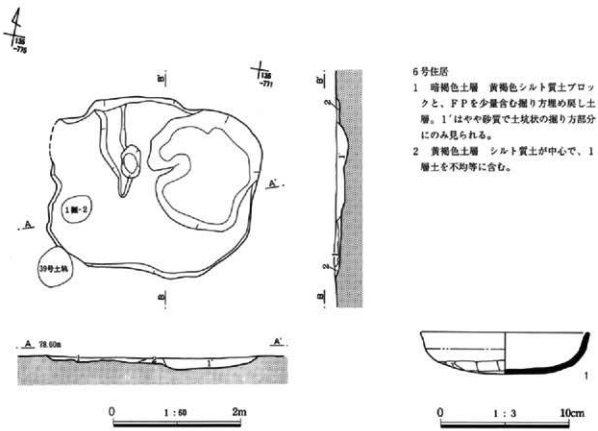
壁　残存壁高は5～10cm前後で、きわめて緩やかな立ち上がりになっている。

内部施設　カマドや炉の痕跡、柱穴や整溝等の施設は一切確認されていない。

床　基本土層のⅥ層土中にある。踏み固めや汚れのある明瞭な床面は見つかっていない。最終面は凹凸があり、北西側は円形の土坑状に窪んでいて中央にピット状の深さ14cmの窪みがある。埋没土に焼土・灰等の混入物は見られない。住居床面とは考えにくく、掘り方底面に近い形状である。

出土遺物　出土状況は不明だが、土師器杯を1点図示している。

その他の遺物　土師器杯になりそうな細片が3片出土しただけであり、時期決定の補強を行う資料は得られていない。



6号住居
1　暗褐色土層　黄褐色シルト質土ブロックと、ＦＰを少量含む掘り方埋め戻し土層。1′はやや砂質で土坑状の掘り方部分にのみ見られる。
2　黄褐色土層　シルト質土が中心で、1層土を不均等に含む。

第183図　6号住居および出土遺物

7号住居　（第184図　PL－23）

C区に散在する集落から北へ50m以上離れた位置に孤立して見つかった住居である。付近は古墳時代以降頻繁に掘り直されている水路があり、他に住居があった可能性もあろう。

位置　190－760G

重複　48号溝に先出している。

主軸方向　N－42°－W

面積　4.02㎡（残）

形態　浅い住居で、遺構確認段階で床面まで達している。北西側の大半は48号溝に壊されている。南東壁は約4.8mある。残存する二隅は直角に近く、整った形状を呈す住居になると思われる。

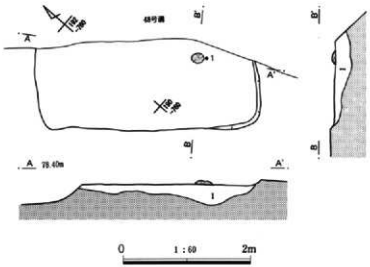
壁　基本土層のV層と思われるラハール層内にある。残存状態は悪く立ち上がりは緩やかで不均一となっている。状態の良い南東壁直下でも壁高は4～7㎝しかない。旧状は不明である。

内部施設　カマドや炉、柱穴や壁溝等の施設は調査範囲では一切確認できない。

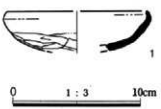
床　壁同様にラハール層内にあり、住居床面としては条件の悪い地山である。西半は掘り過ぎた部分がある。踏み固めは弱いが、床表面に見られる汚れや炭化物粒等の散布を目安に床面を確定した。南側に向かって緩やかに低くなる掘り方が全面にある。貼り床は観察されない。

出土遺物　図示できたのは掘り方内出土の土師器杯1点のみである。

その他の遺物　図示とは別個体の土師器杯がある。また、周辺の遺構外からも残存状態の良い同時期の杯類の出土は多い。



7号住居
1　掘り方埋め戻し土　暗褐色の弱粘性土層。シルト質土ブロックを含む。踏み固めはあまり強くない。



第184図　7号住居および出土遺物

取り付け道F区の竪穴住居

3軒の古墳時代後期竪穴住居を調査している。本線部分以外では、唯一竪穴住居が見つかった地点である。A1区の集落から約50m西側に離れているが、立地的に集落を隔てるものはなく、A1区と本調査区の間には集落が連続しているはずである。ただし、本調査区には古墳時代前期の方形周溝墓があり、A区で集落が出現する時期には墓域であった。

1号住居　(第185図　PL−23)

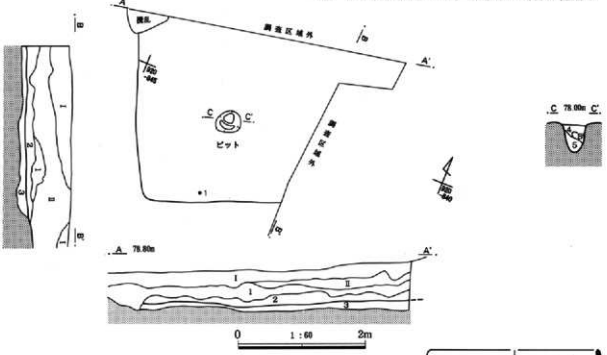
位置　920−845G　北側は調査区域外で、東側は現道にかかる。現道部分は一部を遮断してトレンチ状に拡張し、東側壁立ち上がり部分の把握に努めたが、確認できなかった。

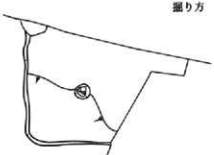
重複　2号住居とは30cmほどしかはなれておらず、同時存在は不可能である。

主軸方向　N−22°−W

面積　8.26m²（残）

形態　南西隅と南辺2.1m、西辺2.9m部分が把握さ





1号住居

1　暗褐10YR3/3　ローム粒を霜降り状に含むしまりやや欠く層。As-A以前の耕作土層。

2　褐10YR4/4　ローム小ブロックを不均等に含む住居埋没土層。焼土・炭化物粒等の混入物少ない。

3　褐10YR4/4　不揃いのロームブロックを不均等に含む掘り方埋め戻し土層。床下の土層としてはしまり欠く。

ピット

4　黒褐色土層　ローム小ブロックを散見するややしまり欠く層。

5　黄褐色土層　4層土中に多量のロームブロックの混じる層。5′はロームブロック。

第185図　1号住居および出土遺物

れている。拡張部分から南辺は4.2m以上になることが想定され、大型の住居になりそうである。

壁　ローム上面漸移層内にあるが、ほとんど残存していないことが断面からも確認できる。ただし、床面が地山と比べ若干下がっていることや壁際に施設が見られないことも土層断面から確認でき、平地式の住居にはならないと思われる。

カマド　調査範囲内にカマドの痕跡は認められない。

内部施設　柱穴と思われるピットが1基調査されている。床面での規模は42×35cm・深さ47cmである。配置から4主柱穴を構成する可能性があり、底面は二段底状だが、断面に柱痕は観察できない。

床　ほぼ水平だが、住居中央が低くなる傾向があり、壁際に比べて3～4cmの比高差を生じている。全面に掘り方があり、南西隅付近が深くなっている。明瞭な貼り床は確認できない。

出土遺物　破片を含め唯一の遺物が土師器杯1である。南西隅付近の壁際床面直上の遺物である。

2号住居　（第186・187図　PL－23）

位置　920－846G

重複　2号方形周溝墓に後出している。

主軸方向　N－17°－W

面積　8.58m²（推）

形態　一辺2.8m前後で、南東と北西の両隅が鈍角気味に開き、菱形状にやや歪んでいる。

壁　大半がローム土内にあり、明瞭な壁である。残存壁高は5～14cmで、垂直に近い立ち上がりをしている。

2号住居
1　灰褐色土層　上面遺跡の硬化面。
2　黒褐色土層　ローム粒を霧降り状に含む層。大粒ロームブロックも散見する。しまり強いのは上面遺跡の影響と思われる。2'では混入物少ない。
3　暗褐色土層　ロームブロックや灰褐色シルト質土をブロック状に含む層。
4　暗灰褐色土層　ロームブロックとシルト質土主体の掘り方埋め戻し土層。
5　暗褐色土層　多量のローム粒を不均等に含む弱粘性土層。柱穴や床下土坑内の堆積土。5'ではロームの混入少ない。
6　ロームブロック主体の層。
7　暗褐色土層　ローム小ブロックやローム粒を多量に含む土層。

第186図　2号住居

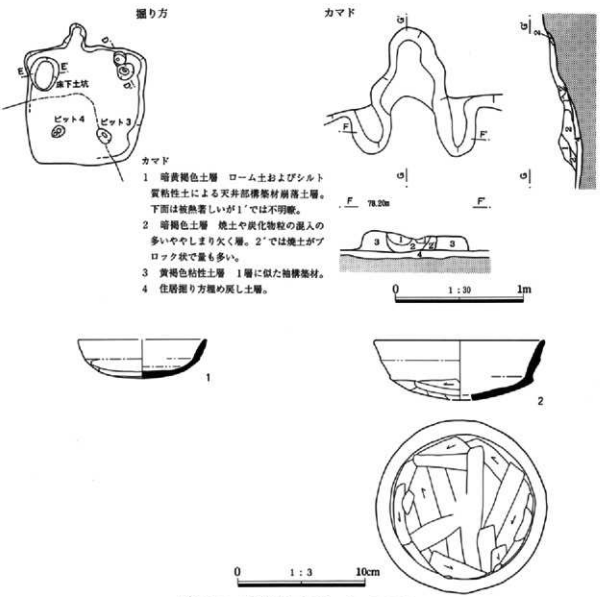
カマド　北壁の中央やや西寄りにある。燃焼部は壁際で煙道は壁外へ60cm張り出している。火床は煙道部へ向かって緩やかに上っている。ローム土を主体とする構築材で築かれた明瞭な袖が残存している。カマド前面の床には焼土が広く見られる。

内部施設　北東隅にローム土で盛り上げた周堤状の施設があり、貯蔵穴の区画ができている。しかし、内部には柱穴状のピットが2基並列して穿たれていて、用途は不明である。周堤は一部でピットの上端を覆っており、ピットに後出していることが判る。床下精査時に南壁下から2基のピットを確認している。柱穴になる可能性がある。

床　ローム土内にある。西側に低く傾斜していて、壁際の東西で6cm前後の比高差がある。踏み固めはあまり強くない。全面に掘り方があるが、明瞭な貼り床は確認できない。

出土遺物　土師器杯2点を図示した。1は中央床上8cm、2は東壁際26cmの高さからの出土である。

その他の遺物　総数25点の土師器小破片が出土したのみである。模倣杯の3片、刷毛目のある甕破片の3片以外は薄手の甕胴部片である。



第187図　2号住居およびカマド・出土遺物

3号住居　(第188図　PL－23)

位置　919－850G　北側の大半が調査区域外で全容は不明瞭である。焼土粒混じりの住居的な埋没土が見られるが、竪穴住居と断定するには問題点の多い遺構である。

重複　2号住居との間隔は20cm以下で、同時存在は不可能である。

主軸方向　N－22°－W

面積　2.7㎡（残）

形態　南壁の長さが3.8mある。隅が極めて丸く、方形を呈すとは限らないであろう。

壁　ローム土の中にあるのだが、崩落がすすみ不明瞭である。残存壁高は15cm前後である。

内部施設　調査範囲内ではカマドや炉、柱穴や壁溝等の痕跡は確認されていない。

床　ローム土内にあるが、踏み固めの弱い不明瞭な床である。凹凸が多く、調査時に一部掘り過ぎている。住居西側に偏っているが、深さ15cmほどの浅い掘り方がある。南壁直下には掘り方底面からさらに20cmほど低くピット状に窪んだ凹凸の多い底面が観察できる。貼り床は認められない。

出土遺物　図示できる遺物はなかった。出土した破片は総数でも土師器小片6点しかない。模倣杯が1点あり、他はやや薄手の甕胴部片である。これら遺物から本住居が1・2号住居とほぼ同時期の遺構と推測する資料とするのは多少無理があろうか。

3号住居

1　灰褐色土層　不明瞭なローム状土が小ブロック状に混入するややしまり欠く土層。1′ではローム粒や焼土粒が混じる。

2　暗褐色土層　黒色土中に褐色土やローム状土が不均等に混じる土層。2′では焼土粒が混じる。

3　黒褐色土層　黒色土中にやや多量のローム粒が混じる土層。

4　暗黄褐色土層　ローム土主体の掘り方埋め戻し土層。黒色土を小ブロック状に混入している。しまりやや弱い。

0　1：60　2m

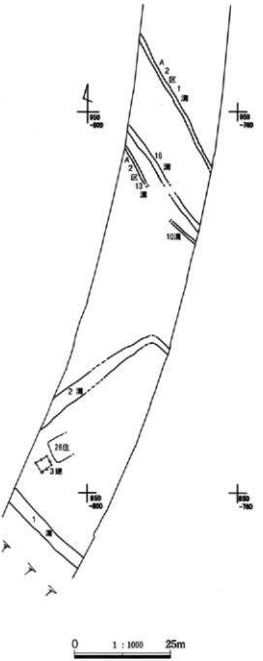
第188図　3号住居

4　古墳時代の方形区画と溝

Ａ１区では溝で囲まれて方形の区画になると思われる施設の一部が調査されている。１号溝が南西側区画溝、２号溝が北西側区画溝と北隅および北東側区画溝北隅にあたる。北西側区画溝の外側規模は58m前後と想定され、この方形区画の規模を示唆するものと思われる。１号溝と２号溝が交差すると思われる西隅部分は80°前後の鋭角になり、区画は台形気味になるものと思われる。２条の溝は埋没土が基本土層のⅥ層でAs-Cの混じる層（基本土層Ⅵ層）であり、底面が平坦で断面は逆台形状になるという共通点があるが、規模はやや異なり、北東側北隅は細く浅くなっている。また２号溝の北西側区画部分のみに掘り直しがあるという差がある。遺物の出土量は両者ともきわめて多い。

１号溝・２号溝同様の埋没土（基本土層Ⅵ層）で底面が平坦なＡ１区10・16号溝やＡ２区１・16号溝は走行方向が大きく西側に傾き、方形区画の南西側・北東側軸方向と共通している。また、出土遺物の時期も古墳時代後期までに限られている。これらの溝のほか、形状はことなるが、出土遺物や埋没土の共通する111号土坑を併せて本項で扱う。

１号溝の軸方向は井野川の現流路に沿っており、発掘調査当初、自然地形に合せて開削されたものと想定していた。西に向かって大きく開くこの軸方向はＡ区全体の古墳時代以降の竪穴住居にも影響をあたえていて、カマドのある住居の軸方向は１号溝に対し、ほぼ直交している。このことが方形区画に伴う内部施設の確認を困難にしているようである。さらに軸方向の共通性はＡ２区北隅の流路や北方へ300m以上離れたＣ区の大溝までつながる広範囲に見られるものである。そしてＣ区やＤ区のＦＡ下水田畦畔の方向にも同じ傾向があり、古墳時代の遺構に共通して見られる特徴のようである。自然地形から割り与えられた方向性が、広範囲に共通して活かされたものであろう。



第189図　方形区画と溝の配置

1号溝　(第190～195図　PL－24)

位置　830－805Gから850－820Gにかけて。南側にある井野川へ向かって下がる傾斜変換点のやや北側にあるが、地山はわずかに井野川へ向かって南側に低く傾斜している。集落の密集区域からは南に外れていて、本溝の南にある1号住居と本溝に後出して重複する2号溝は奈良時代以降の竪穴住居である。古墳時代には本溝に近接する住居もない。

形状　ほぼ直線的に延びている。調査範囲内では、屈曲の兆しも確認できない。断面は逆台形状で底面は広く平坦であるが、踏み固めや住居床面に見られるような汚れは確認できない。底面の凹凸は2区の一部で周辺より5cm前後深くなる程度で、全体では地山の傾斜に沿って南東方向へ向かって低く傾斜し、北西側に比べて10cm低くなっている。

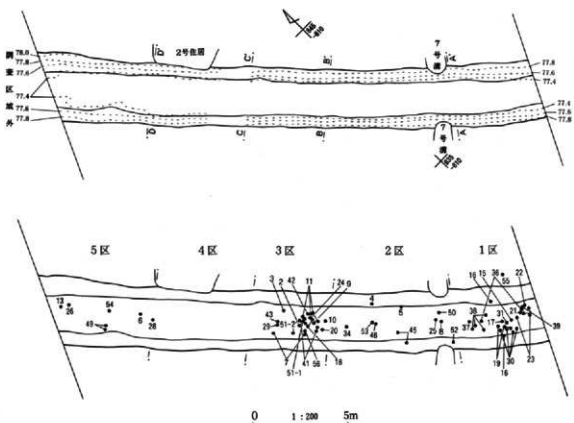
規模　調査範囲での長さは26.5mになる。上幅は3.2m前後となる。下幅は1.7m前後で、4区周辺のみ1.9m前後とやや幅広になる。深さは60cm前後でほぼ一定している。底面の窪みはほぼ全域が中央で壁際より2cm前後低くなる程度で、きわめて平坦であるといえよう。

重複　2号住居・7号溝に先出している。

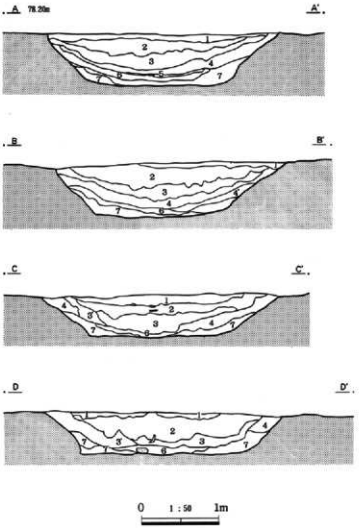
軸方向　N－43°－W

備考　本溝付近は覆土が浅く、地山ローム土上に直接耕作土が乗る状態であった。溝の脇に土塁を伴うかを確認するため、現地表土からの堆積状態を確認できる調査区周脇の土層については入念な観察を繰り返したが、土塁の痕跡は確認できなかった。溝埋没土にはローム土の混入は多いが、溝掘削時に排土されなかったようなブロック状の混入ではなかった。溝底面付近は掘削時に丁寧にさらわれたようである。

底面付近は壁の崩落土と思われる粒状のローム土が多く見られるが、一方向から流れ込んだ形跡は見



第190図　A1区1号溝



1号溝

1　黒褐2.5Y3/2　基本土層の「層土中にA₀-Aが混じる上面から填圧された土層で、硬化が著しい。

2　黒褐10YR3/2　粒子の細かな弱粘性土層。浅間山を給源とするパミスが混じる。ローム粒・焼土粒・炭化物粒が不均等に少量混じる。ややしまり欠く。2′では焼土等の混入物少ない。

3　灰黄褐10YR4/2　やや粒子の細かな弱粘性土層。ローム粒や黒色土ブロックが混じる。褐色味の強い土をベースとし、この土層から上層土と明確に区別できる。3′では黒色土の混入が多い。

4　にぶい黄褐10YR4/3　粒径1～2㎜のローム粒と3層土の混合土層。含まれるローム土は4層で50%以上、4′層で30%前後の比率になる。

5　黒褐10YR2/2　下層の6層土に多量の黒色灰・炭化物粒の混じる層。焼土粒も散見するが、カマドや炉内の灰層に見られるほど多くない。しまり欠く。Bセクション周辺のみに見られる。

6　黄灰2.5Y4/1　きわめて粒子の細かな粘性土層。鉄鉄が見られる。ローム粒が少量、不均等に混じる。

7　にぶい黄褐10YR4/3　4層土に類似する。ローム小ブロックの混入やや多い。7′ではローム土の混入がより多く、半分以上を占めている。

第191図　A1区1号溝断面

られず、土塁については存在しなかったものと想定している。そして、底面付近のローム土内には遺物の出土は少なく、溝の埋没過程を併せて推測すると、遺物の廃棄は溝開削段階から一段階を経て、溝内に壁の崩落土が堆積した後に開始されたと考えたい。

土層断面には人為的に溝を埋め戻した痕跡や掘り直しの痕跡は認められない。また、底面付近にやや砂粒の痕跡は多いが、水が流れたり溜まった痕跡は認められず、空堀であったことがわかる。なお、A断面の底面上10～20㎝付近に見られる焼土や黒色灰・炭化物粒の多い層は2区側に広がっていたが、他の地点では確認できない。

出土遺物　発掘調査時のセクションベルトを基準に、溝全体を東側から1～5区にわけて遺物を取り上げた。ほぼ全域から多量の遺物を出土しているが、1区と3区に遺物集中出土地点がある。全体でも南西側に遺物出土の偏りが見られる。土器54点と石製品2点を図示した。表層および底面直上の遺物は少なく、底面からやや浮いた状態から中層にかけての出土遺物が大半である。出土位置も溝中央付近が多く、どちらかの壁際に偏るような傾向は認められない。

臼玉等の小型石製品検出のため、下層の埋没土は篩いかけて再精査しているが成果はなかった。

底面直上および床上10㎝以内の底面付近から出土したのは高杯**7**・**13**、坩**20**・**23**・**24**・**31**、小型甕**46**・台

付甕53の８点のみで、器種では高杯や壷に集中しているが出土地点では偏りは見られない。模倣杯の３～６はすべて底面から40cm以上浮いた状態で出土している。

特に注目されるのが３区遺物集中地点の下層から出土した完形の剣形石製品56で、威信財として、１号溝と２号溝が作る方形区画を豪族居館と類推する根拠となる遺物である。臼玉55は１区の北脇から出土した周辺遺物である。

その他の遺物　圧倒的に４・５世紀代の土師器が多く、竪穴住居の出土遺物に比べれば煮沸形態の土器は少ない。古墳時代後期の土器の他、江戸時代の陶磁器片も僅かに見られるのは後世の混入によるものである。

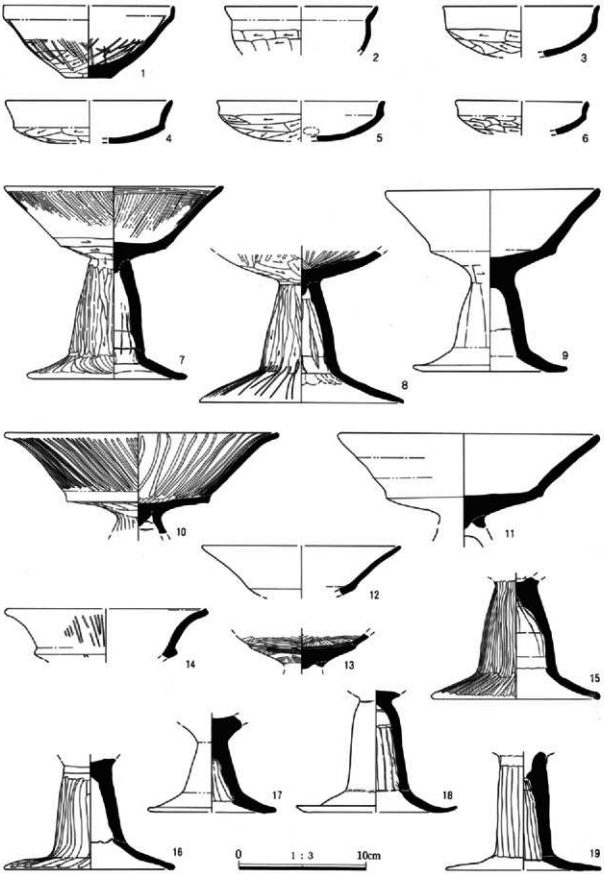
１区　土師器約900片が出土している。分層して取り上げた遺物は１・２層土に相当する上層８％、５層以下に相当する下層20％ほどの比率である。高杯脚部大破片が２個体分ある。刷毛目のある甕胴部破片が多く、10％以上混じっている。口縁部や台部の大破片が含まれ、上層からの出土も見られる。須恵器は２％ほどあるが小破片のみである。

２区　土師器片約300片が出土している。上層７％、下層45％ほどの比率である。高杯の大破片が５個体分含まれている。刷毛目のある甕類は５％ほどで下層出土が中心だが、細片のみである。須恵器は７点だが、叩きのある胴部大破片２片見られる。

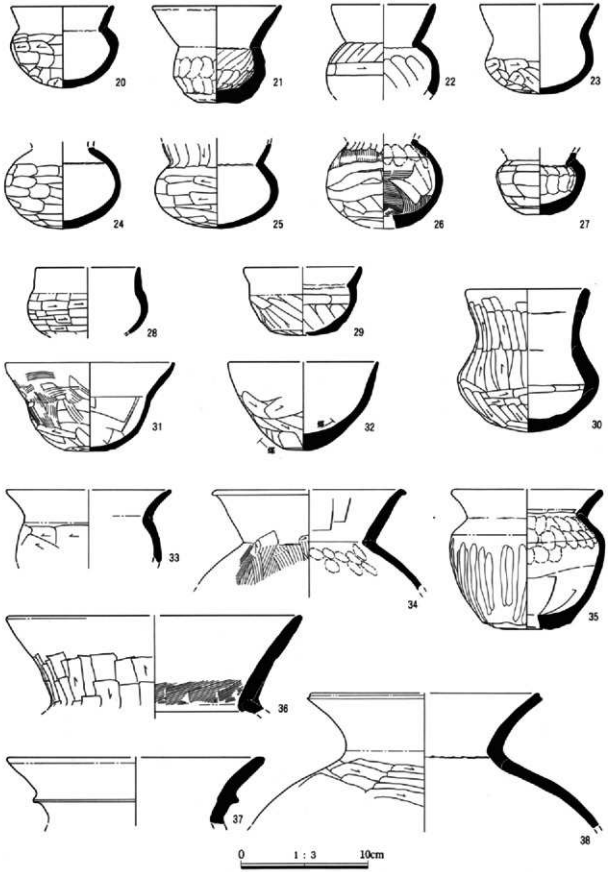
３区　土師器片約650片が出土している。下層出土は30％である。小破片が半数近いが大破片も多い。高杯脚部大破片が３個体分ある。刷毛目のある甕類は８％ほどで、口縁部、台部の大破片が混じっている。下層からの出土が多い。須恵器は小破片９片で、下層からの出土はない。またモモと思われる炭化果核半欠品を下層から出土している。本遺跡出土の唯一の果核である。

４区　遺物量は最も少ない。土師器片約150片のうち上層は10％、下層は45％ほどになる。古墳時代中期の高杯脚部大破片が２点あり、刷毛目のある甕類胴部片は５％ほどで、上層・下層とも出土している。須恵器は４片でいずれも細片で下層からの出土はない。

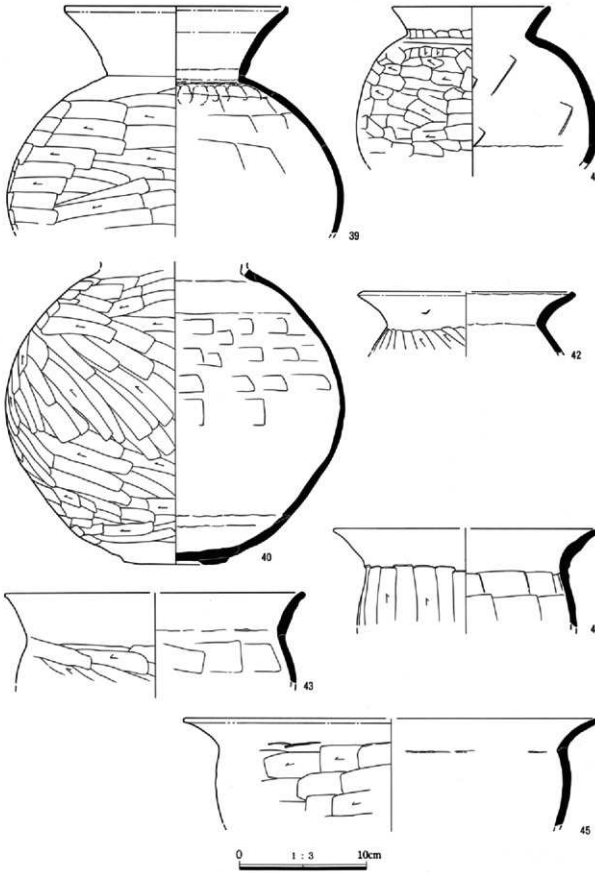
５区　土師器片約1000片と多いが、微細片が半分を占めている。上層10％、下層40％の比率である。高杯脚部大破片が１片ある。刷毛目のある甕類は10％以上あり、下層からが大半で、口縁や台部の大破片が混じっている。須恵器は４％ほどで上層からの出土が目立つ。長頸壺底部の大破片など、混入品が中心となる。



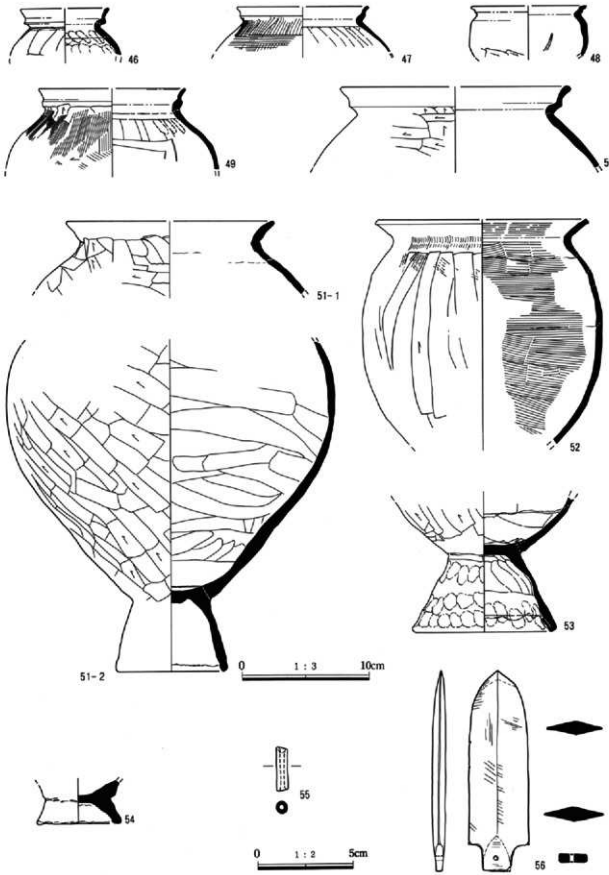
第192図　A１区１号溝出土遺物（１）



第193図　A１区１号溝出土遺物(２)



第194図　Ａ１区１号溝出土遺物（３）



第195図　A 1 区 1 号溝出土遺物（4）

2号溝　(第196～205図　PL－25)

重複遺構が多く、本溝の確認段階では1本の溝としか把握できなかった。1・2区の掘り下げ途中で二重の底面があり、掘り直しが行なわれたことがわかり、北側にある先行する溝を2A号溝、掘り直し部分を2B号溝とした。

位置　865－810Gから890－775Gにかけて。住居の密集区域内にあり、中世館区画内に入っている。西側は土坑が集中している地点にあたる。

形状　直角に曲がると思われるが、北隅部を5号溝に壊されている。A溝は断面逆台形状で底面が平坦な、直線的に延びる溝であり、1号溝と同一の形状である。底面レベルは1号溝に比べてやや凹凸があり10cm近い比高差がある。底面中央付近は壁直下から10cm前後深くなり、やや皿底状に近くなっている。全体ではほぼ同レベルで、どちらか一方へ傾斜することはないようである。

B溝は東側でやや蛇行気味になり、底面は狭く断面がV字状になっている部分もある。底面レベルは3区付近で1号溝より15cm前後深くなっているが、それ以外では10cm以上深くはない。底面レベルも一定せず10cm近い比高差がある。4区では東側へ向って高くなり、1号溝より浅くなっている。5区ではA溝とほぼ同規模の掘り込みとなり、断面で観察してもA溝と区別がつきにくくなっている。

規模　全長は北西側35m以上、北東側4.6m以上あるが、B溝として確認できるのは北西側部分のみである。

A溝では上幅が1区で2.4m、4区で2.6m、5区で1.5m前後になる。下幅は2区・4区で1.8m、5区で0.9m前後である。確認面からの深さは1・2区で65cm前後、3・4区で40～50cm、5区で30cm前後となる。

B溝では上幅が残存状態の良い1区で1.1m前後になる。下幅は30～50cmで一定していない。

軸方向　N－56°－Eで東隅はN－42°－Wになる。B溝はN－52°－E前後で東隅はA溝と同一になるようである。

重複　中央付近で4号溝、北東隅で5号溝に後出している。西側では15・79号土坑等の土坑群に先出している。B溝は35号住居に後出している。

備考　A溝は1号溝から続く方形区画をつくる溝であることは、底面の形状や規模および埋没土の状態も1号溝に類似していることより推定できる。ただし、A溝東側で幅・深さとも小規模になり、四面すべて同規模の溝とならないこともわかる。土塁の痕跡については1号溝同様に精査したが、確認されていない。

B溝はA溝が埋没してから開削されていることが断面から確認できる。1号溝では掘り直しの痕跡は認められないことから、B溝は方形区画を構成するとは別目的の溝となろう。

出土遺物　1号溝以上に出土遺物が多いが様相は異にする部分がある。

手捏ね土器など1号溝にない器種の出土が目立ち**96**～**100**の5点を図示した。底面直上の出土遺物は**48**の高杯や**50**・**51**・**54**坩などで少ないが前述の手捏ねのうち**96**～**98**が底面直上の出土で、他の遺物と比較して下層から出土する傾向が強い。

模倣杯の出土が目立つが、**2**・**3**・**6**・**10**などB溝部分の出土が主体である。**1**と**7**がA溝部分の出土であるが、この2点が出土した1・2区からは須恵器揺鉢**32**や鼎**56**なども出土している。1・2区は後世の土坑の重複が多い部分で、混入した可能性もあろう。

1号溝に比べて模倣杯や須恵器が多いのは後出するB溝の時期の遺物混入が多いためであろう。須恵器鼎**57**もB溝内出土である。

刷毛目のある甕類の出土は少なく**81**・**82**・**84**の破片が図示できたのみである。ただし、丸胴気味の土師器の出土は1号溝に比べてはるかに多い。

特筆される遺物に破片であるが1号溝出土の剣形石製品に類似した**101**の出土がある。

その他の遺物　1号溝同様にセクションベルトで区切った区画を、西側から1～5区に分けて遺物を取り上げた。またA溝とB溝に分けて取り上げできた遺物は溝と区を合わせて、A溝1区・B溝2区のように区分けした。

1区　約1300片が出土しており、中破片サイズ以上のものが多くボリュームがある。供膳・貯蔵・煮沸器のすべての形態に大破片があるが、甕類がやや多いようである。刷毛目のある甕類は5％近くあり、台部の破片も数個体分ある。重複する住居からの混入もあるようだ。模倣杯や赤彩の破片がわずかに混じっている。

A溝1区　土師器のみで小破片中心の約280片が出土している。大破片はほとんど混じらない。刷毛目のある甕類は3％ほど。長胴気味の甕の胴部破片・模倣杯らしい杯底部小破片もわずかに混じっている。

B溝1区　小破片中心の土師器約770片・須恵器8片が出土している。模倣杯も数片混じっている。長胴気味の甕胴部はあまりない。刷毛目のある甕類は3％ほどで、S字口縁や台部片もある。

2区　細～小破片中心の約3100片が出土している。須恵器も30片ほど混じっている。中破片サイズ以上の破片は少ないが、高杯脚部8個体以上、小型丸底壺、丸胴甕胴部などに大破片がある。刷毛目のある甕類は2％ほどだが、台部片が数個体分ある。明らかな模倣杯は見られない。

A溝2区　約230片で傾向は2区に同じである。

B溝2区　土師器のみ約270片で、中片サイズが多い。高杯口縁部が多く、脚部も3個体以上ある。模倣杯は数片だが、中片サイズが見られる。刷毛目のある甕類は1％ほどしかない。

3区　土師器ばかり約480片で小片・細片が大半である。高杯・壺・鉢などに大破片約40点がある。壺胴部片に接合できた大型胴部片が多い。煮沸形態の土器が少なめである。刷毛目のある甕類は2％ほどで、いずれも細片のみである。大きめのS字口縁片は刷毛目が消えた時期のものが主体である。暗文状のヘラ磨きのある鉢類がやや目立つ。明らかな模倣杯は1点も見えない。

A溝3区　土師器のみ。小片中心に約160片出土している。中片サイズが若干混じる程度である。器種の傾向は3区に同じである。

B溝3区　土師器のみの出土である。小片中心に約230片で中片サイズが僅かに混じる程度である。刷毛目のある甕類が若干多いようだ。模倣杯がないなど他の傾向は3区に同じ。

4区　約180片で須恵器もわずかに混じっている。中片サイズの破片が中心となる。大破片は少ないが、細片も少ない。刷毛目のある甕類は10％以上混じり、中片サイズの破片もある。明らかな模倣杯や長胴甕片は見られない。高杯は脚部2点で、他の区に比べて口縁片もやや少ない。丸胴甕または壺に大破片が混じっている。

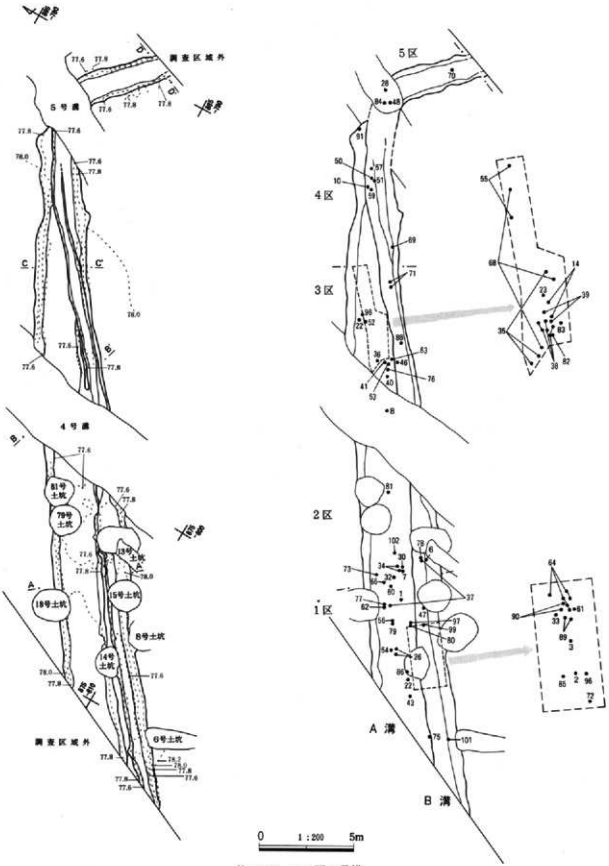
A溝4区　約330片出土で傾向は4区に同じである。

B溝4区　約140片出土で傾向は4区にほぼ同じだが、高杯片は少なくない。

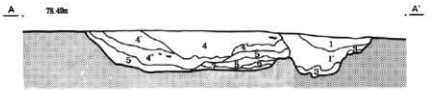
5区　約140片出土で大破片は少ない。高杯がやや多い。模倣杯や長胴甕片を定量含む。刷毛目のある甕類は5％ほどだが、台部やS字口縁が見られる。

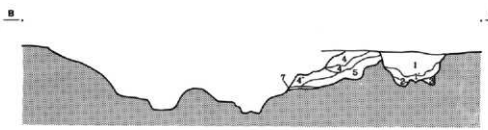
B溝　約90片。丸味のある甕・壺類の中破片主体。刷毛目も混じる。

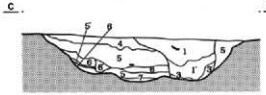
表層採取その他　西側を主体とするその他の破片で、土師器約1890片、須恵器約20片がある。表面の剥離や風化がすすんだものが多い。細片から中片まで雑多だが、大破片はわずかである。刷毛目のある甕類は2％ほどで、模倣杯がわずかに混じっている。赤彩の破片が他の区より多く見られる。平安時代の破片もまれに混じっている。供膳・貯蔵・煮沸のそれぞれの形態の土器が一通り混じっている。

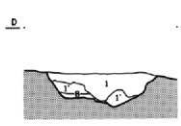


第196図　A 2区2号溝









0　1:80　1m

2号溝

A溝

1　黒褐 10YR3/2　粒子の細かな微粘性土層で、A_B-Cを少量含む。やや砂質の土層。基本土層の切層に近いがA_B-Cの混入量は少ない。焼土粒を散見する。ローム粒を少量、不均等に含み下層ほど多くなる。1′ではローム小ブロックがごく少量混じる。

2　暗褐 10YR2/2　黒色味の強い弱粘性土層で混入物少ない。

3　褐 10YR4/4　ブロック状の2層土と、5～20mm大のロームブロックの混合土で、3′ではローム土が主体となる。

B溝

4　黒褐 10YR2/2　1層土と類似し、遺構確認段階では区別できなかった。1層土より粘性少なくボソボソしており、A_B-Cの混入少ない。ローム粒を少量含み、4′→4″と量が増える。

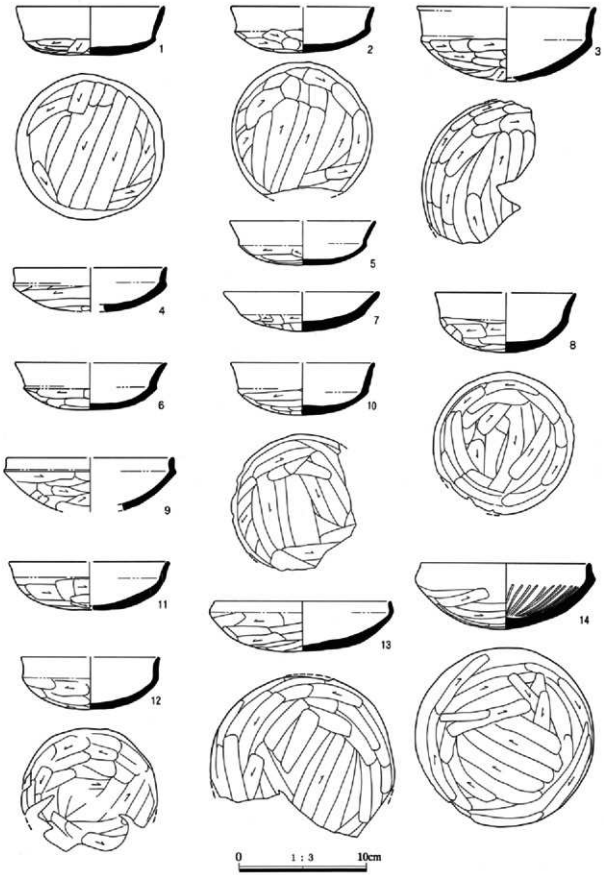
5　暗灰黄 2.5Y 4/2　やや粒子の細かな粘性土中に、ブロック状の4層土やYP混じりのローム小ブロックを不均等に含む。5′はやや砂質土の混入が多い。

6　灰黄褐 10YR4/2　粘性の強い黒色土と砂質土の混合土層で、部分的にラミナ状に近い堆積状態になっている。水成堆積的ではない。6′は撹拌された6層土。

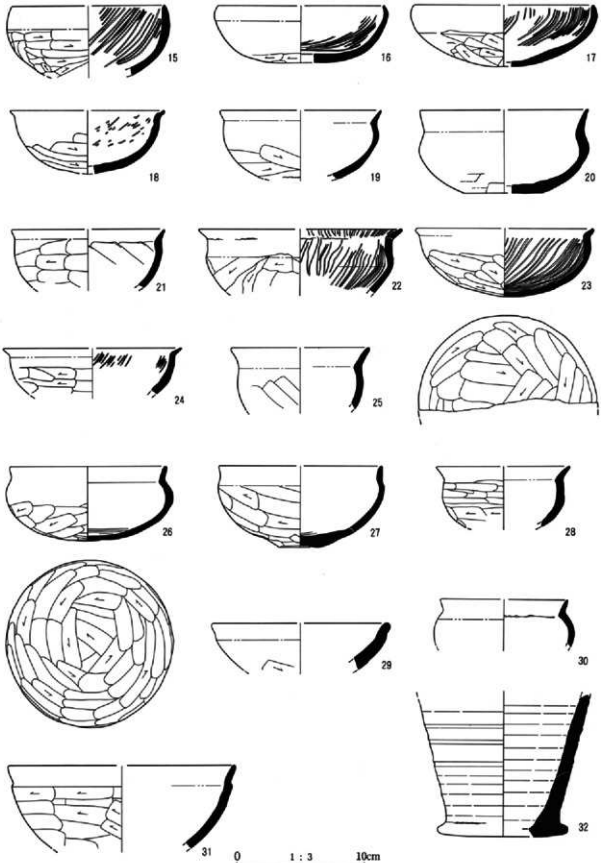
7　黄褐 2.5Y5/2　ローム土主体に黒色土小ブロックを混入する。

8　灰黄褐 10YR4/2　調査区東側に見られる灰色味の強い粘性土中に黒色土小ブロックを少量含む層。

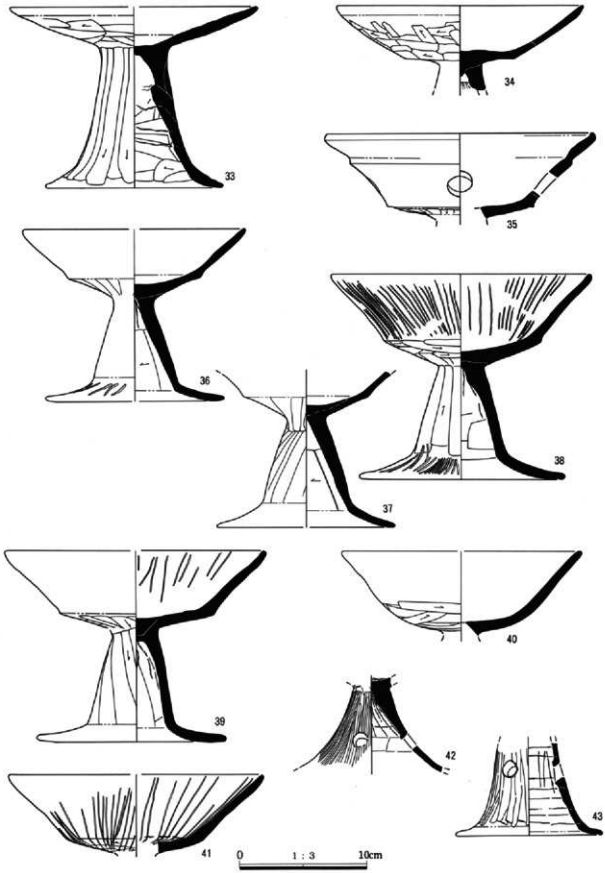
第197図　A 2区2号溝断面



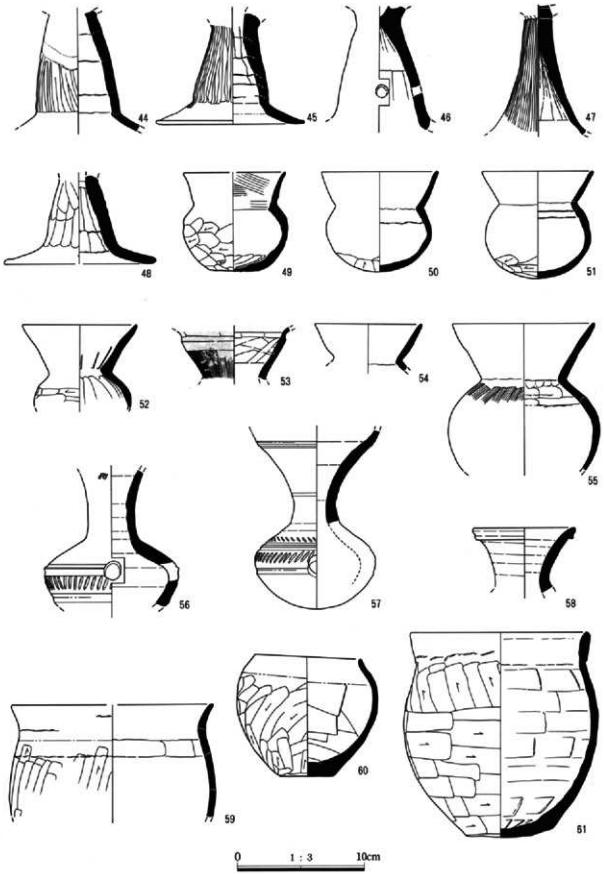
第198図　A２区２号溝出土遺物(１)



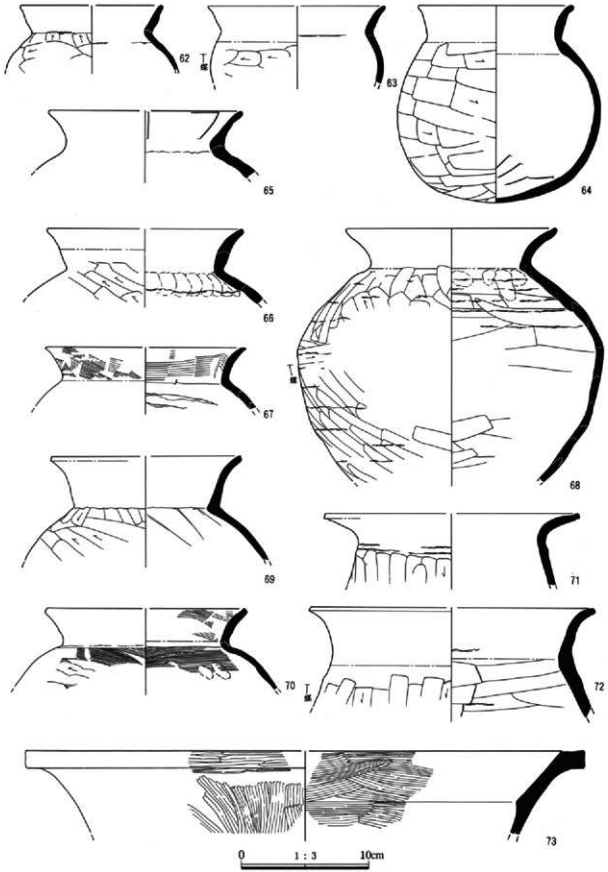
第199図　Ａ２区２号溝出土遺物（２）



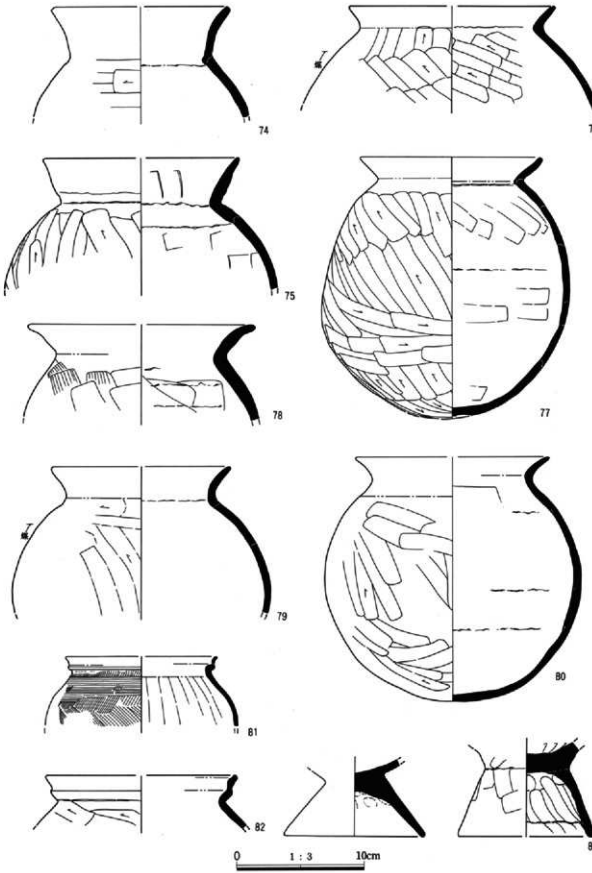
第200図　A２区２号溝出土遺物（３）



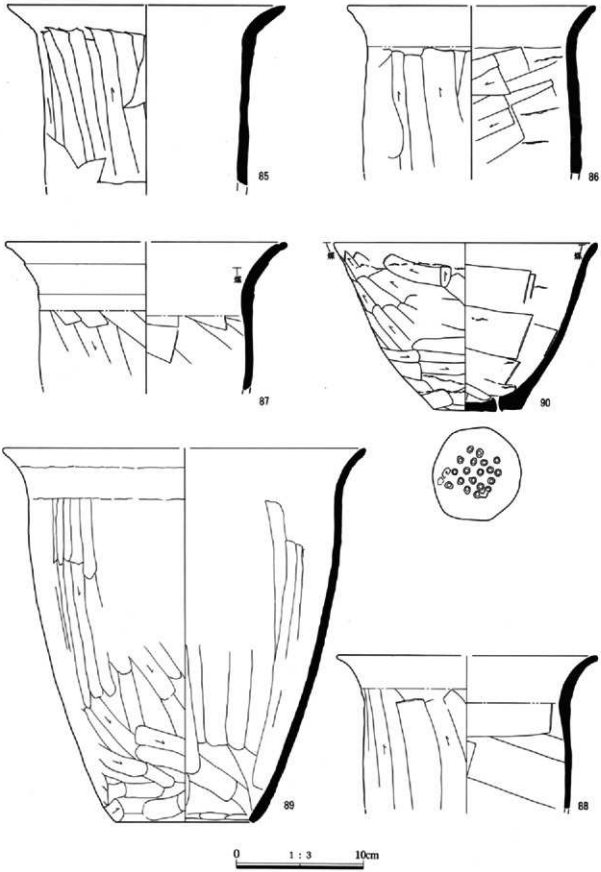
第201図　A２区２号溝出土遺物（４）



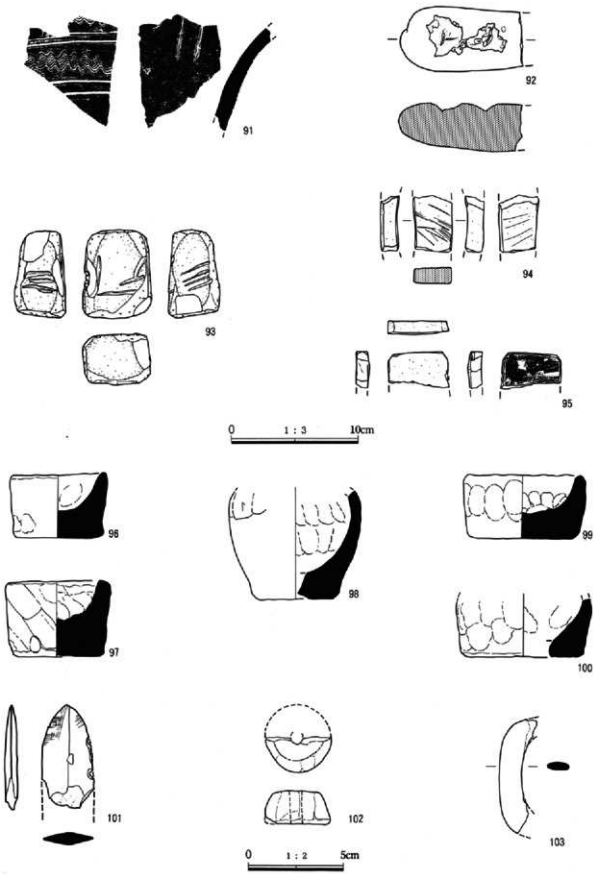
第202図　A２区２号溝出土遺物(５)



第203図　A２区２号溝出土遺物（６）



第204図　A２区２号溝出土遺物（７）



第205図　A２区２号溝出土遺物（８）

A１区10号溝・A２区13号溝

（第206～208図　ＰＬ－26）

A１区部分は黒色土上の黒色土の落ち込みとして捉えられた遺構で、確認段階では不明瞭なものであった。A１区21号溝南東側で確認できなかった部分があるが、A２区13号溝の調査段階で連続する同一の溝として把握している。

位置　915－770Ｇから940－785Ｇにかけて。南東、北西の両側とも調査区域外に達している。

規模　全長で30.5m以上になる。上幅70cm・下幅30cm前後である。深さは25～45cmで一様でない。

形状　A２区ではほぼ直線的に伸びている。A１区はやや蛇行気味で底面が丸底状になっている。

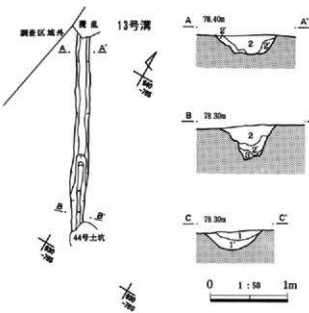
重複　A２区の30・32号住居に後出か。A１区４号溝・A２区57号土坑などに先出している。

軸方向　A２区N－28°－W、A１区N－44°－W

出土遺物　14点を図示した。いずれもA２区出土の遺物である。南側で集中的に出土しているが、甕類には多量の小破片が接合したものが多い。

その他の遺物　A１区では約190片出土し、すべて土師器である。S字口縁や器台・壺など、特徴的な遺物は古式土師器が中心である。

A２区は約630片出土している。厚手の甕胴部や高杯に大破片が多い。刷毛目のある甕類胴部片も点数は多いが小片・細片が中心である。

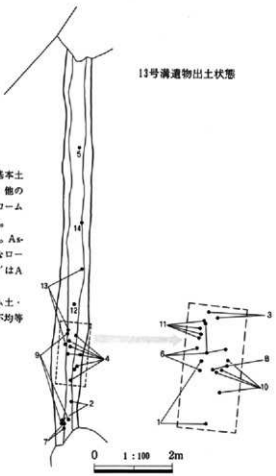


10号溝・A２区13号溝

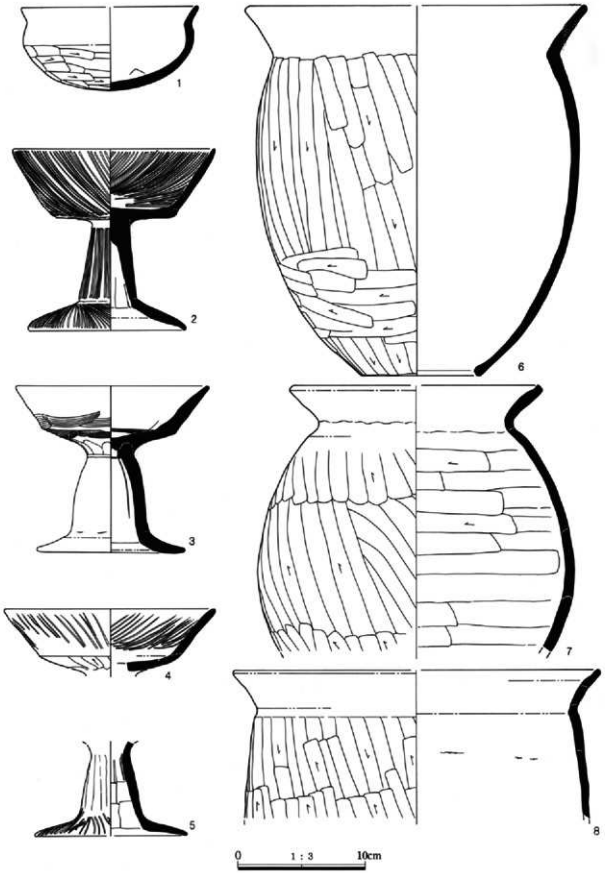
1　黒 10YR2/1　やや埴土化した基本土層の切層。As-Cの混入は少なく、他の混入物も少ない。1'では不明瞭なローム状土粒が下層ほど多く混入している。

2　黒褐 10YR2/2　基本土層の切層。As-Cは霜降り状で量も多い。不明瞭なローム状土粒以外の混入物は少ない。2'はAs-Cの混入がきわめて少ない。

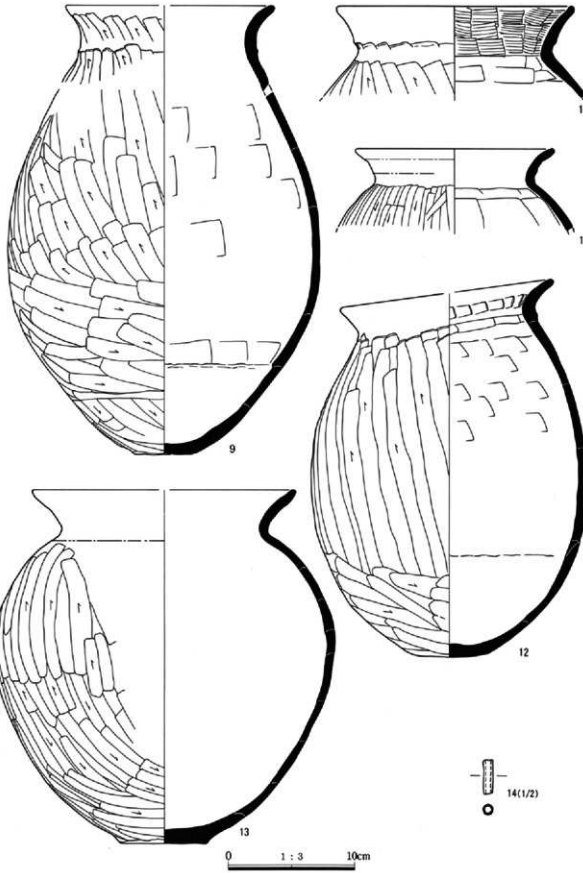
3　灰黄褐 10YR4/2　汚れたローム土・白色粘土・2層土がブロック状に不均等に混合するしまり強い層。



第206図　A１区10号溝・A２区13号溝



第207図　A 2 区13号溝出土遺物(1)



第208図　A２区13号溝出土遺物（２）

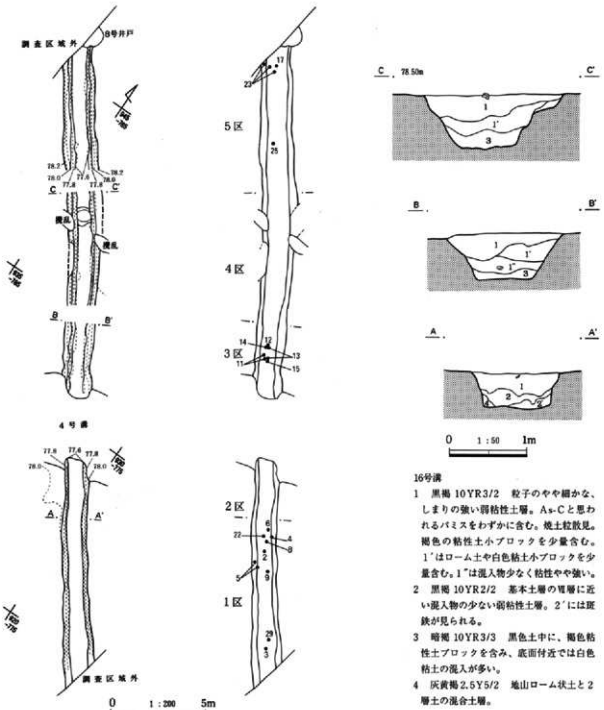
Ａ１区16号溝・Ａ２区16号溝

（第209～212図　ＰＬ－26）

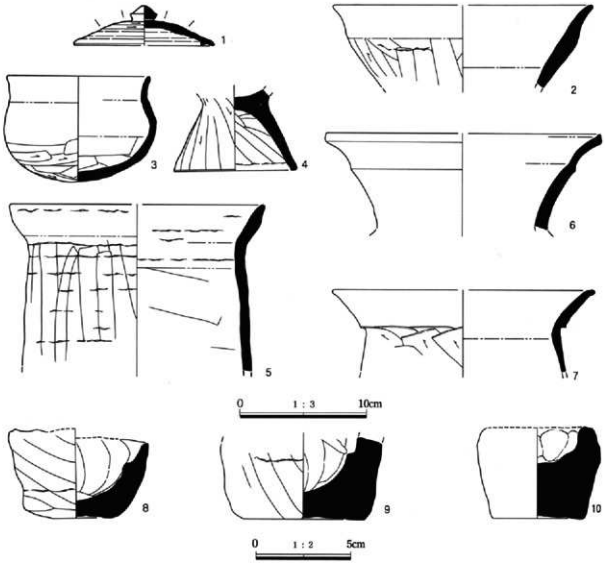
Ａ２区の遺構確認段階でＡ１区16号溝から連続する溝であることが把握でき、Ａ２区部分にも同じ16号溝の番号を付けた。出土遺物も通し番号で掲載した。

位置　915－770Ｇから945－785Ｇにかけて。両隅とも調査区域外となっている。

形状　直線的な溝であり、平坦な底部の形状はほぼ一定している。壁の立ち上がりは部分的に異なり、北側ほど上方に向って開き気味になっている。



第209図　Ａ１区16号溝・Ａ２区16号溝



第210図　Ａ１区16号溝出土遺物

規模　調査範囲内で全長34mある。上幅は1.9～1.4mで、北側ほど広くなっている。下幅は70～80cmでほぼ一定している。壁高は北側ほど高いが、底面レベルはほぼ同一である。

重複　Ａ１区４号溝に先出している。Ａ２区30・32号住居に後出している。

軸方向　Ｎ－32°－Ｗ

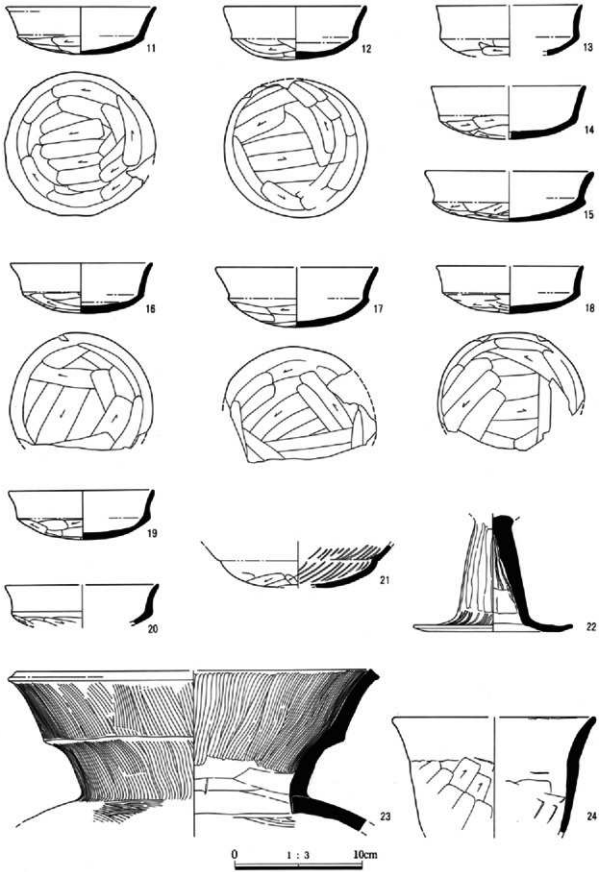
備考　古墳時代前期の住居２軒に後出しており、Ａ１区１号溝などより後出する遺構となりそうである。埋没土に水の流れた痕跡は観察できないが、Ａ２区部分の下層には斑鉄があり、水が溜まっていた可能性もある。

出土遺物　同一の溝としたが、４号溝を挟んで出土遺物には大きな差が生じている。

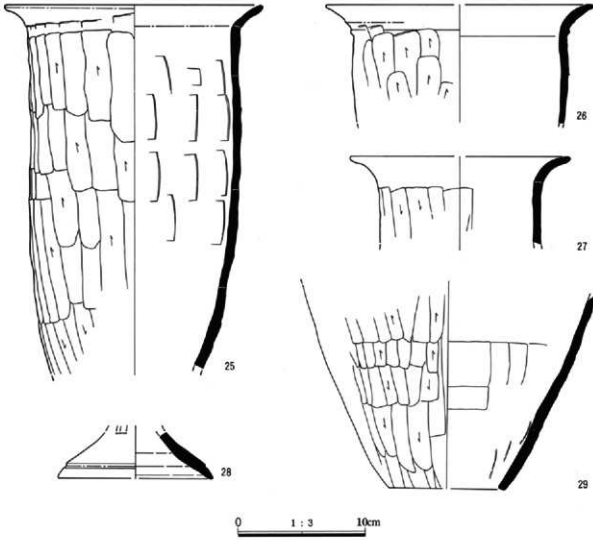
Ａ１区からは手捏ね土器**8**～**10**があり、Ａ１区２号溝と類似しているが、杯や坩などの出土がほとんどない。甕類は長胴で、古墳時代後期の遺物である。

Ａ２区からは模倣杯の出土が顕著で、**11**～**20**を図示した。３区から集中して出土している。甕類は長胴が主体となっている。坩**21**や壺**23**のような古式の様相を示す遺物も少量出土している。

（22と29はＡ１区出土であるがＡ２区の挿図に加えてしまった。訂正させて頂きたい。）



第211図　A２区16号溝出土遺物（１）



第212図　Ａ２区16号溝出土遺物（２）

その他の遺物　Ａ２区では総数約900片の土器が出土している。須恵器は１％で他は土師器である。いずれも古墳時代の遺物であるが、古式土師器が目立ち、図示できた遺物とは様相が異なっている。遺物出土状態には偏りがあり、全体の60％が４区からの出土である。また、３区からは模倣杯など古墳時代後期の遺物が目立つ。Ａ１区の遺物はＡ２区の四半分以下である。

Ａ２区　１号溝（第213・214図　ＰＬ－26）

位置　935－765Ｇから970－780Ｇにかけて。16号溝の北東側13mの位置に、同溝にほぼ並行して並んでいる。両隅は調査区域外である。

形状　ほぼ直線的に伸びている。断面は逆台形状を呈し、底面はおおむね平坦である。平行する16号溝よりは小規模で、形状は整っていない。

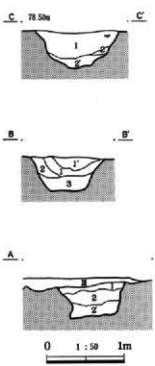
規模　確認できた長さは39.5mある。上幅は60～140cmで北側ほど広くなっている。

重複　9・19・21号住居に後出している。

軸方向　Ｎ－29°－Ｗ前後である。

遺物　9点を図示した。底面直上出土の遺物はなく、古墳時代前期から後期まで混在している。8は平安時代の混入品の可能性と思われる。

その他の遺物　総数は890片だが大破片が多くボリュームがある。厚手の土師器丸胴甕や小型甕の破片が目立ち、50%を占めている。刷毛目のある甕類小片も多く、15%近くを占めている。台部は７個体分が確認できる。全体でも古墳時代前期・中期の遺物が中心で、古墳時代後期の土器は少なく、須恵器は１片もない。

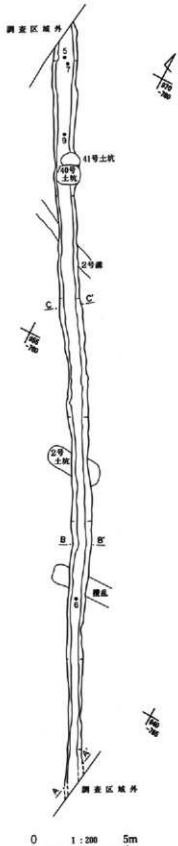


Ａ２区１号溝

1　黒褐 10YR3/2　基本土層のⅥ層に同じ。Ａ２区の遺構中ではAs-Cの混入多い。1'には炭化物粒の混入やや多い。

2　黒褐 10YR2/2　基本土層のⅥ層に近い。As-Cの量はＡ２区では平均的で少ない。2'にはローム小ブロックが小量混じる。

3　暗褐 10YR3/3　２層土とロームブロックの混合土層。



第213図　Ａ２区１号溝